

て見えたまはず客僧縁にあがりて茶堂のきはに居す  
 客殿には僧衆れきくとして齋の最中なり客僧にも  
 おなじく膳を供て喫せしむ客僧遙に佛壇を見れば喝  
 食壇の上に靈供に向て居す是は喝食の御影なりよく  
 さきの喝食に似たり座敷中酒の時分になりて給仕人  
 銚子を持来りて座敷にいれば喝食の御影青き火に全  
 體もゆるなり怪てつくく見れば僧衆みな酒をうけ  
 て呑とき火炎あかくなりて甚もゆるなり茶堂の僧に  
 佛壇のうちを見たまへといへば見ておどろき立て行  
 て消さんとおもへば火すなほ消て跡なしその目に  
 は喝食見え客僧の目にも火消て喝食の御影なしと  
 いへば茶堂の僧のいはくなんぞ喝食の御影あるべき  
 や喝食は年十三なるが此はごやみたまひて死去有て  
 今日初七日の作善なりいまに御影のよういなしとい  
 ふ客僧すなほち心得たりさきに道にて我をよびしは  
 喝食の魂魄なり今の御影と見えしもこんはく也作善  
 に飲酒破戒のとが忽に火えんとなりてもえたり奇異  
 の事なりこれを院主に告かたらんとおもひて齋をば  
 るをまちてゐたり僧衆かへり散じて後院主茶堂にき  
 たりて客僧はいづかたよりぞとへば客僧のいはく

諸國一見の修行者にて候が奇異なる事有てまゐり  
 囉齋を申候といへば院主何事ぞとふ客僧今朝道に  
 て喝食の我をよびしより此かたの事をつぶさに語れ  
 ば院主は不審のけしきあり客僧又いはく喝食さうり  
 をぬいで縁にあがり給ひしそのさうりありやいなや  
 といへば院主立て見るにまことにそのさうりあり見  
 れば喝食のさうり焼繪紋紛れざる也此城履は病中よ  
 りくつたなによりつるに今朝誰が取出すぞとへば  
 誰もとり出すものさらになしこれにて院主すこし信  
 ず茶堂の僧も又いはく佛壇のうちやくるを見て立て  
 消さんと思ひつれば火消て跡なしといへば院主さて  
 は疑ひなしといへり客僧は下戸か上戸かと問給へば  
 客僧のいはく一盃は呑候といへども今の儀に盃もと  
 らざるなりといふ院主のいはく所詮中陰の間酒を禁  
 断すべしといへり客僧はしんくの道人大修行底の  
 僧なりとて嚙金を施しあたふ客僧拜受してさると云  
 云按に文中喝食は年十三とあり○鎌倉年中行事詳番  
 本上巻 正月二日條に練貫之廣小袖公方様御女房様可  
 四丁左 被召童體又兒喝食之外ハ依爲御法不著云々按  
 に廣小袖一本には黄小袖に作り同書三丁左 正月十

六日條に十刹ニハ御坐ノ内ニテ御禮アリ諸山ヨリ單  
 寮同後堂首坐書記藏主侍者喝食東班ハ提點都寺以下  
 無御禮云々按に鎌倉公方様ニテ諸山ノ住持及單寮  
 以下喝食まで御禮なく東班は提點以下御禮なきよし  
 也こゝに禪家僧職の名目をならべ擧たる中に喝食あ  
 り○庭訓往來十月三日狀に此外者舊之諸僧塔頭坊主  
 且過之僧山主在沙彌喝食行者參頭副參望參供頭堂  
 司庫子炭頭調菜人工者兄弟部出納山守木守門守火鈴振  
 等也云々按にこゝは禪家の職名を擧たる條也諸抄大  
 成四卷三に喝食舊抄云佛在世の七家の一也七家トハ  
 刹利波羅門毘沙須陀斷見外道常見喝食也云々此説い  
 かにぞや可考 ○異制庭訓往來十一月三日條に沙彌  
 喝食行者人工等隨其階級可致供養候也云々按  
 に京鎌倉の五山の事をいへる條也○尺素往來群書類從  
 右近日於私宅云々條に在京諸庄主及至沙彌喝食  
 可有來臨也云々 ○滑稽詩文寄喝食詩に昨日應  
 情年少叢髮裝相忘待紅顏淡粧只以掛肩髮引  
 傳雨中衰老翁按に掛肩髮といへるにて垂髮の兒  
 の貌想像へし又喝食之投身名白詩に嶮涯嶮處弄生  
 涯二十有餘霜在刹那花質紅顏碎名白岩石娥眉翠黛雜

塵沙按に此外四首白菊が倭歌二首あり其歌は「白菊  
 トシノブノ里ノ人トハハ思ヒイリ江ノ島トコタヘ  
 ヲ」ウキコトヲ思ヒイリ江ノ島ナラバヌツル吾身ハ  
 浪ノ下草新編鎌倉志六卷三左 兒淵條に此事を載て建  
 長寺の僧自休藏主雪下相承院の兒白菊といへり詩も  
 七律一首にて下に衣襟只濕千行淚扇子空留二首歌相  
 對無言愁思切暮鐘爲孰促歸家の四句あり又自休  
 が歌に「白菊ノ花ノナサケノ深キ海ニ共ニ入江ノ島  
 ン嬉シキ」ト詠テ其マ、海ニ沈ムト云々又喝食永贊  
 に丁角群兒不レ解愁海堂庭院事嬉遊從師只合  
 攤書卷花過綠陰人白頭按に丁角群兒とは了は字  
 書に物之岐頭と注して髮を分て結たる貌也或は垂髮  
 にし或は了頭にも結が兒の髮の形也此外滑稽詩文中  
 喝食の詩いとおほく見えたれご今は考證に便あるの  
 みを引出たり○若氣勸進狀に文明壬寅之冬抄平朝臣  
 井尻又九郎忠勤謹白小僧喝食若衆言云々按に平朝  
 臣に平座よしをよせ井尻にオキドといふよしをよせ  
 又九郎に股谷をよせ忠勤に只好をよせたり若氣は今  
 世ニヤケ者などいふ出處にて艶色の少を指ていへる  
 なり○自然居士謠詞に爰に自然居士と申喝食の御座



候が一七日説法を御宣候云々按法音抄三卷二にむかし僧にもあらぬ人が寺院に立入りて佛道を修行し齋非時に食物をよびつぎけるより此名おこれり喝食は食を喝と讀也今は兒などを云也云々諸曲拾葉抄二下に喝食とは食を喝とよめり僧にはあらず本如三寒山拾得形寺院に入て齋非時に食物等をよびつく役也今其形及衣をかざるは五山より始る也云々〇下學集上卷九人倫門に喝食カツシキ云々〇節用集加部人倫門に喝食カツシキ云々〇逆歩色葉集加部に喝食カツシキ云々〇節用集加部人倫門に喝食かつしき昔僧ニモアラズ俗ニモアラヌ人ガ寺院ニ立入テ佛道ヲ修行シ齋非時ニ食物ヲヨビツギケルヨリ此名オコレリ喝食ハ食ヲ喝ルト讀也今ハ兒ノ名也云々按に節用集大全ハ法音抄とおなじく洛東正立寺の天台宗沙門惠空が作也〇和語連珠集二卷下喝食爲山門之佛事一條に二人玄水を引て云松花山人ハ東福寺ノ信仲ナリ諱ハ明篤小喝食ノ時入院山門ノ佛事ヲ勤ラレタリ同列ノ小喝食ニ會テ吾ハ山門ノ佛事ヲナシタリ其方ハイカニト問玉ヘバ答テ云其方ハ山門ノ佛事ハセラレタリトモ鹿苑ニナル事ハ成マイガ我

ハ鹿苑ニナラントイヘリシガ果シテカノ喝食鹿苑院ニ居レリ上古ハ鹿苑院ハ五山ヨリ持タリ信仲モ言葉ノゴトク東福へ入寺セラレタリ入門一句天下定ト云語ハ此事ナリトゾ云々〇類聚名物考稱號部十卷に喝食かつしき是は五山などに有寺内にて給仕する有髮の兒也云々〇與清曰喝食は禪家の兒の事にてそは住寺の僧に給仕し飲食の配膳手長などの役にあづかれば喝食の名ありすなはち食をよぶといふ義也い少きほどは小喝食といへり禪僧おほくは美麗の小童をめしおきて密道をもはらとせる事は滑稽詩文若氣勸進狀などを見て知べし髮の貌は垂髮にもし又は兒まげとて了頭にもせし也了頭はまげを二ツにわけてからこに結事也然て喝食後には入道して僧にもなり元服して冠者にもなれる事常也惠空が節用集大法音抄の説はいまだいひつくさず山岡侯明が類聚名物考の說中々いうにきこゆ自然居士は喝食のまゝ僧にもならず還俗もせずして然ながら居士のありさまにて寺内などに住ける者なるべし

(十八)名紙刺手札 吳曾能改齋漫錄一卷名紙條に名紙之始高承事物紀原云釋名曰書名字于奏上曰刺後

漢稱衡初遊許下一刺一既無所之適至于刺字漫滅蓋今名紙之制也則名紙起于漢刺也以上皆高說予以爲不然蓋稱衡傳只言刺不言名紙雖名紙刺之變然高說無據予按梁何思澄終日造謁每宿昔作名紙一束曉來使命駕朝賢無不悉狎蓋名紙始見於此云々魏志九下夏侯和傳注に人一奏刺悉書其郡邑名氏世所謂爵里刺也云々按爵里刺は今の所書役名書をしたる手札也

(十九)起復之禮忌服御免 今の世忌服御免といふは起復の事也能改齋漫錄卷一起復之禮條に高承事物紀原云起復本禮記曾子問云子夏問曰三年之喪金革之事無避也者非與孔子曰吾聞諸老聃曰昔者魯公伯禽有爲爲之也注云魯徐戎作難有喪卒哭而征之急王事也故春秋亦紀普襲公墨縵之事漢唐以來遂有起復之禮蓋自白禽始也以上皆高說予按前漢翟方進在喪既葬二十六日除服起視事後漢桓焉爲太子太傅以母憂自乞聽以大夫行喪踰年詔使者賜牛酒春服夫謂之起復者就喪起之復令視事耳高承無所據但泛言漢唐而已故予疏一條以見其始云々制度通六下に復ト云ハ其身ノ役ヲ

ユルスコト也云々

(廿)大番役 一判問答詳書類從四百七に大番役右何御代被始之又何比中絶候哉武家番役大略自鎌倉右大將如此事始歟云々〇洞院家部類記二卷日吉行幸供奉雜事部に大番一人事云々〇侍所沙汰篇從本文曆二年正月廿七日沙汰に大番衆令逃失召人事右召人出來之時令預大番衆又在京輩處令逃失畢然而其科愈輕重依難定申候于今不致沙汰候之間或強盜或殺害人大略十之七八令逃失候也爲自今以後尤可被定下候歟押紙云可令修造清水寺橋也同仁治二年六月十日沙汰に所召置京都犯人事付大番衆并下向人之使宜可被下進關東也また大番衆令逃失召人罪科事右隨召人輕重可被行罪科之由式目先日被定置畢然以<sub>其趣</sub>令加下知事關東御家人等不叙用哉可計行其科也若又不承引之輩可被注進交名也同弘安九年三月二日沙汰に侍所京都大番役事雖未役國未役人有其沙汰可被結延年限〇吾妻鏡四下右文治三年八月十九日頼朝卿消息に洛中群盜蜂起并散在武士狼藉事度々被仰下候之趣殊驚歎思給候時政下



向之時東國武士少々差置候訖其外も或爲兵糧米沙  
 汰或爲大番勤仕武士等在京事多候歟彼輩不鎮  
 狼藉還疲計略若如此事をもや企候覽人口難塞  
 候然者偏可爲頼朝耻辱候云々○同九丁左建久三年  
 六月廿日前右大將家政所下美濃國家人等一狀に近日  
 洛中強賊之犯有共聞爲禁退彼輩類各企上洛  
 可勤仕大番役云々○同脱漏十五嘉祿元年十二月廿  
 一口條に東西侍御簡衆事有共沙汰若君御幼稚之  
 間就御所近々東小侍可著到之由御下向之始被  
 定上者不及子細但西侍無人之條似背古例乎仍  
 相州以下可然人々著進名代門々如警固之事  
 連日夙夜可令致其勤也遠江已下十五ヶ國御家人  
 等十二ヶ月依彼分限多少而可著宛雖爲自身出  
 仕之日可進名代於西侍大番之由議定畢是右大將  
 軍之御時稱當番或亘兩月限一月長日毎夜令  
 伺候之也次同所始被置定番人云々按にこゝ  
 に大番といへるは京都の大番にはあらで鎌倉に始て  
 大番役を置れたる也○平家物語四卷十四信連合戰條  
 に先年所ニ在シ時大番衆ノ者共ノ留兼タリシ強盜六  
 人ニ只一人追懸り二條堀川ナル所ニテ四人切伏セ二

人生捕テ其時被成タリシ左兵衛尉ゾカシ云々按に  
 所ニ在シ時とは武者所に在し時といへる事也同五卷  
 十一朝敵捕の條に島山庄司重能小山田別當有重宇都  
 宮左衛門朝綱是等ハ大番役ニテ折節在京シタリケル  
 ガ云々同七卷十二篠原合戰條に平家ノ方ニハ島山庄  
 司重能小山田別當有重宇都宮左衛門朝綱是等ハ大番  
 役ニテ折節在京シタリケルヲ大臣殿汝等ハ故者也軍  
 ノ様ヲモ掟テヨトテ今度北國へ被向タリ云々同十  
 二卷十一土佐房被斬條に大番衆ノ者共催シ聚メテ  
 其夜廳テ寄ントス云々按に關東よりのばせ置れたる  
 大番役の武士を土佐房がたたらひ集たるなるべし○  
 源平盛衰記十三卷廿一高倉宮信連戰事條に大炊御門  
 京極ナル常葉殿ノ御所へ大和強盜ガ打入テ家内ノ資  
 財ヲヌスミトリ多ノ人ヲ切殺シテ出ケルヲ家主聲ヲ  
 立テ盜ヨトト叫ケレドモ音ヲ合スル者ナシ大番衆  
 モ追ザリケルニ信連左右ノ小手ニ腹卷著テ太刀ヲ拔  
 京極大路ニ出合ツ、散々ニ戰ケルガ強盜四人切留一  
 人ニハ寄合テ組テ搦メントセシ程ニ頬ヲツキ貫レナ  
 ガラ搦留タリケリ云々同十八卷右一文覺頼朝勅進謀  
 叛事條に伊豆國住人伊東入道祐親法師云々第三ノ

女未ダ男モ無リケレバ兵衛佐忍テ通ケル程ニ男子一  
 人出來ニケリ兵衛佐殊ニ悦テ寵愛ス字ヲ千鶴トゾ  
 申ケル三歳ト申ケル年ノ春少キ者共アマタ引具シテ  
 乳母ニ被懷テ前栽ノ花ヲ折テ遊ケルヲ祐親法師大  
 番ハテ、國ニ下リタリケル折節見付テ云々同十九卷  
 廿丁兵衛佐催家人事條に武藏國住人島山庄司重能  
 小山田別當有重平家ノ大番勤テ侍ナレバ重能ガ男重  
 忠有重ガ男重成同可奉背云々同四十六卷右頼朝  
 義經中違事條に昌俊ヲ召捕テ大番衆土肥次郎實平ニ  
 被預ケリ○長門本平家物語一卷に抑彼昌春南都を  
 うかれける事は興福寺領針庄と云所あり去仁安の比  
 衆徒代官を入たりけるを西金堂の御衆の代官とし  
 て小河四郎遠忠と云者せひなく庄務を打とむる間  
 衆徒の中より侍清五郎快尊を遣して遠忠が亂妨を押  
 させ其時西金堂衆土佐房昌春數輩の惡徒を結て遠忠  
 を夜打にして則彼庄を横領せんと結構する間衆徒昌  
 春を追入て子細を奏聞のために御衆を先にたて奉り  
 て上洛するよし聞えければ昌春多勢を率して彼御衆  
 をさんく切捨奉てけり之によりて衆徒いよく  
 憤りをなして昌春を召捕て禁獄せらるべきよし訴申

間長者より時の別當けんちゆう僧正に仰て召れけれ  
 ば昌春あへて事どもせず然間是をこしらへて昌春が  
 申所其いはれあるかくはしくきこしめして御成敗有  
 べきよし重て仰下さるゝ間昌春おめくゝと上洛した  
 りけるを寺家に仰付て昌春を召取て大番衆土肥次郎  
 實平にあづけられぬ云々同廿卷越中次郎兵衛盛次事  
 條に男悦て女によく尋とひて鎌倉殿に此由を申  
 すやがて氣比の權頭入道道廣に仰てからめてまゐら  
 すべきよし建久五年の比被仰けり道廣良大番に  
 て在京したりけり云々○曾我物語一卷四十一おくの  
 の相摸の事の條に股野はすまふの大ばんつとめに都  
 へのぼり三年の間都にてすまふになれ一度もふかく  
 をとらぬもの也云々○同二卷七丁若君の御事の條に  
 佐殿わか君いできたまひし事なのめならずよろこび  
 おぼしめして御名をば千鶴とせんとぞつけたまひけ  
 る云々かくて年月をふるほどにわか君三さいになり  
 給ふ春のころ伊東京より大番つとめてくだりしがし  
 ばしはしらざりけりある夕ぐれに花ぞの山を見いり  
 ければをりふしわか君めのとにいだかれせんざいに  
 あそび給ふ祐親これを見てかれはたぞととひけれど



も返事にもおよばずけにけり云々○保曆間記群書  
本下卷廿五丁左に仁治三年正月九日主上ニハカニ崩御成賜フ  
 僅御年十二歳ニ成給ケル皇胤既ニ絶サセ給ヒケレ  
 バ土御門院阿波院宮承久ノ胤ノ時ニ歳ニ成セ賜ケリ  
 三條坊門大納言ニ御讓也ケレバ奉レ養奉レ置淺猿キ御  
 有様ニテ御座ケルヲ尋出シ奉テ御位ニ付奉ルベキ由  
 泰時計申テ關東ノ使者秋田城介義景安達義景九郎盛長孫  
 并出羽前司義行秋田城介盛長孫村守彼等兩使トシテ上洛ス京中ヲ  
 尋奉ルニ人不知或古御所ニ宮渡セ給フト體ニ聞テ  
 義景參テ阿波院ノ宮ノ御所ニ爲レ渡給フト申セバ實  
 カト問ケレバ老尼一人出テ是ニ御座候ト申ケレバ亦  
 可ニ申上二人モナカリケル程ニ義景草深キ庭中ニ畏テ  
 破タル御簾ノ内ヲ守テ御位ヲ讓セ給候御使參テ候ト  
 三度直奏ス是ヲ聞食ケル宮ノ御心地イカ計也ケン頓  
 テ義景大番ナリケレバ扉倒タル門ノ脇ニ唐笠張立テ  
 陣屋ニシテ奉ニ守護ニ云々○承久記上卷七丁に平九郎  
 判官胤義大番ノ次デ在京シテ候ケレバ云々又十九丁  
 位殿妻戸ノ間へ出給ヒ御簾半計上サセ御覽ジ出シテ  
 宣ヒケルハ云々日本國ノ侍共昔ハ三年ノ大番トテ一  
 期ノ大事ト出立テ郎徒眷屬ニ至迄是ヲ晴トテ上リシ

カ共力盡テ下シ時手ヅカラミヅカラ裝笠ヲ首ニ掛カ  
 チハダシニテ下リシヲ故殿ノアハレマセ給テ三年ヲ  
 六月ニツツノ分々ニ隨テ支配セラレ諸人タスカル様  
 ニ御計ヒ有テ云々○伯耆卷群書類從本二丁右に四月廿一日出雲  
 國自ニ尾關ニ被レ召ニ御船ニ隱岐國へ成ニ遷幸ニ國分寺  
 へ入進ラする隱岐出雲兩國之以ニ軍勢ニ警固稠しか  
 りけり其年も既に暮ぬ翌年二月始比にや自ニ京都ニ供  
 奉仕ける成田入道を召て被レ仰下レけるは思召立るノ  
 事あり此番衆の中に誰をか可有御頼ト勅定有け  
 れば土屋又四郎ニ申者を召て參る以ニ六條少將殿ニ汝  
 を頼被レ思召ニ由被レ仰下レければ小分限者にて難レ叶  
 候但伯耆國奈和庄地頭に村上又太郎長高ニ申者こそ  
 弓箭を取ては焚燬張良にも劣らじと思ふ仁にて候其  
 上家富一族も多く手柄の者共に候是を可有御頼  
 候近國には自是外には候はずと申て御前を罷立ぬ  
 大番勤て候ける地頭御家人等の中に御志有者多かり  
 ければ彼等に如レ前有ニ御尋レければ廿四人まで如ニ土  
 屋ニぞ申ける云々○菊地武朝申狀群書類從三百九  
 鳥羽院御代承久合戦之時先祖能隆爲ニ大番役ニ依レ進ニ  
 置叔父兩人ニ隨ニ院宣ニ進戰畢云々○關東評定傳群書類從本下

卷廿三 建治元年條に四月十五日蒙古改ニ大元ニ使杜世  
丁左忠副使何文若都魯丁等著ニ長門國室津ニ八月伴牒使五  
 人被レ召ニ關東ニ九月七日斬首是則永爲レ絶ニ和親ニ不  
 通問ニ之策今度所ニ貢來ニ牒狀如レ前可ニ願伏ニ之趣也其  
 後警固事有ニ沙汰ニ鎮西撰補被入器用之證發ニ遣海邊  
 國々ニ止ニ京都大番役ニ被レ差ニ置在京人ニ公家將軍家  
 戚ニ省公事ニ行ニ儉約ニ被レ休ニ民庶ニ皆是爲ニ軍旅用意  
 也云々○明月記嘉祿元年十月十七日條に實清朝臣來  
 以レ人間今日東方有ニ音信事ニ云々無ニ殊事ニ歎武士多  
 入洛云々或云例大番替料云々○有誠小説下卷十七  
 大番往古諸國ノ武士交代ニ在京シテ王城ノ警衛ヲ勤  
 シヲ云太平記ニ在京ノ籌ナドアルモ此武士ノ警固ノ  
 義也ト云々○樋口秘記五十二に殿上ハ昔雲客ノツ  
 メ所也是ヲ大番ト云臺盤所ヘツムルヲ小番ト云今ノ  
 外様ノツメ所小番乎云々按此大番小番といへるは武  
 家の番役とは別也○興清曰大番の名は武家の番役を  
 勤仕するにいふも諸國の侍京都に上りて三年ツ、  
 警固の役をつとめしに鎌倉の右幕下頼朝卿の時より  
 六月ツ、に定められし也そは禁中の瀧口院の武者所  
 東宮の帶刀などにも候したりけんは工藤一蒲木曾先

生などいふ名あるにて知べしこれ古代の衛士舎人の  
 遺風也然て禁裏仙洞にも限らず宮の御所にもあれさ  
 らぬ所にもあれ武士の番替して警固するをみな大番  
 といへりといふ鎌倉營中に大番勤仕のはじまれるは  
 嘉祿元年のよし吾妻鏡脱漏にいへり大番とはむねと  
 ある番役なれば常の細々の小番役に對てさいへるな  
 るべし樋口秘記に見えたる殿上の大番臺番所の小番  
 といふは武家番役とは別事也  
 (廿一)湯餅 能改齋漫錄十五の卷に湯餅の事をいへ  
 る條二所あり今のツミイレの類也藝苑口涉十の卷に  
 いへる説考合すべし名物六帖にも見ゆ  
 (廿二)トントト云詞 『俗言にトントトと忘れたト  
 トしらぬなごいふは一休のめなし草に「トット」とあ  
 ると同語也とつとは「イト」を訛れる詞イト昔なごい  
 ふべきを「トットマヘカク」などいへる也此「トツ  
 ト」を亦訛て「トント」といひそのつかひ所さへも誤  
 れるものと見ゆ又ツット先の方なごいふ「ツット」も  
 「ツト」といへる詞の轉也ツト來りなど古くいへり』  
 (廿三)丸 宗固隨筆に丸と云事人丸猿丸仲丸田村丸  
 虫丸の類皆其身を卑下して付たる事也能物を知たる



人をば角といひ物をしらぬ人を丸といふ心にて丸と付はひげの詞也昔は皆かやうに卑下して「ソク」とも付たり夫ゆゑ不淨をとる物をおまるといふは今の「カハ」の事也但万葉集には麻呂と假名書也此假名を一ツにして古今集以來磨と書事也昔は麻呂と假名書にしたる事也夫故磨とも丸とも書昔田村丸は此比の將軍の如き人也云々 爾石集七ノ卅三丁ウ斐丸云々三國志身此張登也 南史廿ノ九丁ウ謝安傳に淪謂曰身家太博得六人云々同十三ノ十一丁ウ彭城王劉義康傳に義康素無學術待文義者甚薄資淑嘗詣義康義康問其年答曰郭仲華拜表之歲義康曰身不識也淑又曰陸機入洛之年義康曰身不識也淑曰身不識也淑又曰陸機入洛之年

(廿四)小町が歌といへどたしかならぬ歌小大君集の事小町が事・同書に小野小町が事徒然草にも傳記つまびらかならずとあり七小町といふ事は偽也然ども雨乞の事小町が家集に見えたり歌は世中にていふ歌にあらず「ことわりや日の本ならばてりもせめさりとては又あめか下とは」草紙洗に「まかなくになにをたねとてうき草の波のうねく生しけるらん」此二首の歌曾て無事也但小町が家集に小大井君の歌を多く入たり小大井君の集にも小町の歌を入られたり合點ゆかぬと百花申されたり新古今集に「あるはなく

なきは數そふ世の中にあはれいつれの日こそまつらめ」此歌榮花物語にも入りて小大井君の歌なるにかなる撰者の誤にや新古今には小町が歌とあり不思議の事也但小町は上古の人也其上神慮に多くあづかりし人也小町死五百年程過順德院歌合を撰み給ふにかなる間遠にや小町を右にして伊勢を左にせんと宣ふ此時は伊勢も古人なり或夜の御夢に小町ま見え給ひて右に置たるを恨み申たり夫より心づき給ひて左にせんとて撰み給ふ歌合の本を御覽あるに小町が歌残らず左に成て居たり是不思議也とて天子ながらも此奇妙に恐れ給ひて此歌合焼捨給ふ夫ゆゑ世に傳はらず小町は六義六人の内の一人にして難なき歌よみ也といへり云々

(廿五)ありのすさびの歌二道かけし人はの歌「ある時はありのすさびにくかりしなくてそ人は戀しかりけり」蜘蛛のいに荒たる駒はつなくとも二道かけし人はたのまし」此二首は古くより世にいひ傳へたる歌なれども出處もしれず集には入ぬ歌もある時は蟻のすさみの歌源氏物語にもいりその外の本にあまた入たり云々宗固隨筆に見えたり

(廿六)なに事のおはしますかはしらねとも歌 宗固隨筆に伊勢國二見浦は伊勢大神宮のヨリ場也西行法師の歌「何事のおはしますかはしらねともありかたさにそ涙こほる」此心をとりに芭蕉翁發句「うたかふなうしほの花も浦の春」此句意しれず西行の右歌取りといへり二見瀉の文臺に此發句を書也云々按右の西行の歌は謠曲に下句かたしけなさに涙こほるとして□□が歌とせり可考

(廿七)和歌三神井聖廟の稱 又云住吉大明神は和歌を守り給ふ御神也御詠歌は少けれども和歌を守給ふ御神とする事也「夜やさむき衣や薄きかたそきの行あひのまより霜そおくらん」此御歌を本にする事也海上を守り給ふ御神にて上古の御神也一旦隠れ給ひて神功皇后三韓退治の時海上あれ船くつかへらんとせし時に又出現し給ひしと也高砂の諷にも此事あり憶が原の波間より顯れ出し住吉の神とは此御事也但憶が原の波間より顯れ出し住吉の神とよみしは後に神主のよみたる歌也此住吉大明神の末社に上筒男中筒男底筒男といふあり此皆船を守りの御神也此三社の内に玉津島明神もおはします事也此玉津島明神よ

り取ちがへて和歌を守りの神といひたる事成べし又田安の岡部衛士が注には五百年以來住吉大明神を和歌の守り神とすること也とかけり此説いかゞ也北野天神の社地に末社多く有て中に孔子を祭りし御社あり此御社を天神と心得しより人誤て天神の御事を聖廟とは申ならはしたり初に誤たるが後には實になりて今の世にては天神を聖廟と申事也住吉玉津島もかやうの事にや云々

(廿八)様 又云様といふ事東山義滿公大上皇帝になり給ふ故仙洞公方の様といふ事より始りたり様といふ文字を色々書わけたるは世の末になりての事也宗祇時分には殿様と書て人のもとへ遣したり貴様と書始たる事は京都の遊女の書始しこと也貴殿とは此比もかきたれども貴様とは遊女ばかり書たり云々與清曰さまは方の義也東さまへ行西さまへゆく或は何處さまなど舊本今昔物語語宇治拾遺など物におほく見ゆ公方といへばオホヤケザマ也様の字はアリサマの義なるをやがて方の事にも用て相通はせし也

(廿九)くしかしく 又云くしかしくは小野お通が書始たり小野お通は信長卿の右筆にて有しが信長の病氣



保養の爲に御曹子の十二段を作り出したりとぞ又かしくといふ事は穴賢といふ詞にて後にはめで度かしくと女中の文に書事に成たり云々

(卅)わざのわぬしわごせわごれよなどの吾の字義又云和殿といふ事吾殿吾主吾御前の類也「そなた」と云に同じ唐にて人の事をいふ時はこの吾といふ字を書く手前の事を云時は我といふ字をかく事也是にてよくわかる吾子未<sup>レ</sup>知哉など書く吾といふ事也歌にわれからねをやといひしも人の事にて吾といふ吾の字也云々按に諸詞にわごりよと有わ御料也假名もわごれよと書べし

(卅一)夕がほだなの下すゞみ 又云万葉集に「たのしみは夕がほだなの下すゞみ夫はてゝれ妻は二布して」てゝれとは下帯の事也此歌古よりいひ傳へたれども万葉集に見えず又「誠とは汁かけめしを喰さして萩ばしをへて出すをぞいふ」此歌も万葉には無<sup>レ</sup>之御水尾院御歌「立さらて心のうちを住かへよ里のいほりも山のかくれ家」小隠は山にかくれ大隠は市に隠るといふ心也云々

(卅二)道のぬかりの馬ざくり 又云東路はむかしも

所也此所に十六の井と云あり鎌倉志に見えず云々按にちよのをは「しづのを」歟しづのめの書損なるべし

(卅四)歌合禁止の事 又云今は歌合といふ事是なし論合ゆゑ法度に成たり堂上にも是なし俗人も此格にて判はことわる事也自計の歌合も判は断る事也云々

(卅五)しら萩 又云万葉集にしら萩とあるは白き萩の事也もとあらの小萩といふは木の木に葉のなきあらしくしき萩の事也云々興清曰しら萩とも眞萩ともいひて白と眞は常に通ふ詞也しら萩も萩をほめていへる也

(卅六)ヤタラと云詞メツタ又ベタと云詞 俗に「ヤタラ」と云詞あり「メツタヤタラ」などいへり「メツタ」は「ベタ」ともいひ「ベタ」は「メツタ」なども通語也物の定りもなくヤバリヌル、貞などにいへり「ヤタラ」は八タラ拍子トテ樂家、只拍子ヲ早クスルヲ云これらも定りなきよしの名にてもとヤタラ拍子より俗語といひ出たるなるべし妹源抄十一末卷同書一<sup>丁</sup>七<sup>七</sup>八多羅拍子

(卅七)當官の大臣の諱を呼ばず 宗國隨筆に當官の

道のあしき事と見えたり古歌に「東路の道のぬかりの馬ざくりうたての月のやとり所や西行歌うとくなる人を何とてうらむらんしられすしらぬをりも有しに」云々興清曰道のぬかりと云詞爲尹千首路苗代歌に「あせをこす苗代水のほと見えて道のぬかりのかはく間もなし」契沖雜記<sup>十</sup>丁に文集に塗の字をぬかりとよめり雨などふりて道のあしきをいへば云々陸奥白河郡と常陸久慈郡の境に大垣あり大垣の宿も常陸の方にあり垣の字をヌカリとよめり馬ざくりと云詞別所長治記<sup>廿四</sup>に見え太平記<sup>卷六</sup>十<sup>丁</sup>には馬ザクリノ水ヲ蹴カケラレテと有又西行のうとくなる人を云々の歌山家集にも夫木抄その外撰集などにも見えず

(卅三)ちよのをがいたく桶 又云鎌倉開藏寺名所底貫ノ井歌「ちよのをがいたく桶の底ぬけてくまなき月のかけもやとらし」又「とにかくにたくみし桶のそこぬけて水たゝへねは月もやとらし」此二首いづれにてもよかるべし是は悟り也たくみしは木をけづりたがをかける事人間の身にたとへ水のこぼれたるは死してもとの土くれになりし心也鎌倉第一の名

衆をば左大臣右大臣とばかりいふ事也二人となき御人達故尤の事也夫故撰集にも當官の衆をば左大臣右大臣とばかり書て歌有り夫故テヨツト見てはしれぬ事也尤官を辭退して死後の人達をばたとへば後徳大寺左大臣殿など、稱號を書載る事也但當官の衆を左大臣右大臣とばかり書入たるを見わくるには作者部類といふ書有是にて見わくるによくしるゝ事也某集の左大臣とあるは誰殿の事某集の右大臣とあるは誰殿の事と銘々にわかる事也云々

(卅八)都ぞ春の錦 又云洛陽三月春如錦と唐人の詠置し此詩の詞也唐の都の事を作りたる詩の心をとりて「見わたせは柳櫻をこきませて都ぞ春のにしき也ける」

(卅九)朱の玉垣 又云慈鎮和尚歌「君か代をいのる心を人とはさしてこたへん朱の玉垣」惣て神社を赤くぬるは丹は人の心の正直の事也心のまことを移すといふ心にて赤くする事也朱の玉籬鳥居も赤く丹誠丹心皆正直の詞也

(四十)又六が門 又云一休和尚の歌「極樂はいづくのはてと思ひしに杉の葉たてる又六が門」此又六と



いふは一休時分の酒屋也一杯呑たる所が極樂也といふ事也今の世に又六が門といへは酒屋の事になるなり近き發句「又六が門でまたやむ寒念佛」此心は寒念佛の酒を呑たる心なるべしおもしろき句也云々

(四十一)名簿の書法 比叡山延曆寺護國縁起略録下巻弘法大師順傳教大師一習學傳法事條に弘法大師獻傳教大師二字一文一通ありその書法

僧空海

大同四年己二月三日

右爲天台傳燈奉向比叡大禪師謹捧名書敬白と見ゆ又寫本與書云此文御自筆正文北谷有八部尾御經藏云々とあり國圖名紙事物紀原二ノ八丁ガ盛衰記四ノ十ノ廿一丁ウ字拾遺九ノ十七丁ガ同三ノ十六丁ガ

(四十二)字の反切古にあらず 寄園寄所寄四の卷に古者字未レ有反切故訓釋者但曰讀如其字而已至魏孫炎始作反切其實出於西域梵學也自從聲韻日盛宋周頤始作四聲切韻一行於時梁沈約又撰四聲譜以爲在昔詞人累千載而不悟而獨得胸襟窮其妙旨自謂入神之作繼是若夏侯該四聲

韻略之類紛然各自名家矣至唐孫愐始集爲唐韻諸書遂爲之廢本朝眞宗時陳彭年典晁迥咸綸條貫事取字林韻集韻略字統及三蒼爾雅爲禮部韻凡科場儀範悉著爲格又景祐四年詔國子監以翰林學士丁度之禮部韻略頒行初崇政殿說書賈昌朝言舊韻略多無訓釋又疑單聲與重疊字不諧義理致舉人詩賦或誤用之遂詔度等以唐諸家韻本刊定其韻者凡三十處許令附近通用疑單聲及疊出字皆於字下注解之此蓋今所行禮部韻也吳曾漫錄嘗論景祐修韻略事既不其始徒拘於張希文鄭天撫聲韻之本末講論於此庶覽者得以故云東坡云按寄園寄所寄十二卷清人漸岸趙吉士恒夫が輯也(四十三)山市海市 寄園寄所寄五卷山市條に泰山之市因霧而成或月一見嘗於霧中見城闕旌旗聞絃吹聲最奇張瑤星曰登州鎮城署後太平樓其下即海也樓前對數島海市之起必由於此每春秋之際天色微陰則見頃刻變幻島下先湧白氣狀如奔潮河亭水樹應目而具可百餘間文應雕闌無相類者文中島化爲蓮座左島立竿懸幡右島化爲平臺稍焉三島

連爲城堞而幡爲赤幟唯陽袁可立爲撫軍時飲樓上忽艘艘數十揚幡來各立介士甲光曜目朱旗蔽天相顧錯愕急罷酒料理城守而船將抵岸忽然不見乃知是海市遞齋聞覽曰湘潭方廣寺四月朔日在東壁則照見維揚官府樓堞民物影著壁上林景熙展說曰漢志載海傍蜃氣象樓臺初未信也避寇海濱僅報海中忽湧數山登聚遠樓見奇峰疊嶂城郭臺榭中有浮圖老子宮詭異千狀近哺而滅筆談所記往々類此物理小識國圖海市ノ瀝流水稿五ノ卅六丁ッ

(四十四)佛狼機 寄園寄所寄八卷佛狼機條に今之砲名曰佛狼機人多不解其義近閱籌海圖編始知佛狼機國名非器名也明正德間顧僉憲應祥署海道有大船二直至廣城懷邑稱佛狼機國入貢使者名加必丹時武宗南巡使使會同館一年後遣去因遣此製遂以地名器如驢稱術龜名僕句也雲谷臥餘

(四十五)天主教 聖朝破邪集一卷に南宮署版南京禮部侍郎沈灌云不謂近年以來突有狡夷自遠而至在京師則有龐迪峨熊三拔等在南京則有王豐蕭陽瑪諾等其各省會各郡在々有之自稱其國曰大西洋自名其教曰天主教夫普天之下薄海內外惟皇上爲覆載

昭臨之主是以國號曰大明何彼夷亦曰大西且既稱歸化豈可爲兩大之辭以相抗乎三代之隆也臨諸侯曰天王君天下曰天子本朝稽古定制每詔誥之下皆曰奉天而彼夷詭稱天主若將駕軼其上者然使愚民眩惑何所適從臣初至南京聞其聚有徒衆營有室廬即欲修明本部職掌擒治驅逐而說者或謂其類實繁其說浸淫人心即士君子亦有信向之者況于閩左民驟難家喻戶曉臣不覺喟然長嘆云々臣又聞其誑惑小民輒曰祖宗不祀但尊奉天主可以昇天堂免地獄夫天堂地獄之說釋道二氏皆有之然以之勸人孝弟而示懲夫不孝不弟造惡業者故亦有功于儒術爾今彼直勸人不祭祀祖先是教之不孝也絲前言之是率天下而無父子何物醜類造此矯誣蓋儒術之大賊而聖世所必誅尙可也然驅天而從其說乎然閩左小民每々愛其鼓樂其教者聞其廣有財量人而與且曰天主之教如此濟人是以此貪愚之徒有所利而信之此其胸懷巨測尤可惡云々伏乞勅下禮兵二部會同覆議如果臣言不謬合將爲首者依律究遣其餘立限驅逐仍復申明律令云々萬



曆四十四年五月日按聖朝破邪集八卷ありて鹽官居士徐昌治が當時の諸子が破邪文章を編纂せし書也徐昌治が崇禎十二年季冬の自序あり同書三卷の破邪集の蔣德璟が序に向與西士遊第知其曆法與地球日非星主諸器以爲工不知其有天主之教也此讀其書第知其竊吾儒事天之旨以爲天主即吾中國所奉上帝不知其以漢哀帝時耶穌爲天主也其書可百餘種顯與佛抗云々按破邪集は黃貞が撰にて崇禎戊寅歲晉江八公蔣德璟が序ありそれを聖朝破邪集三卷に載たる也黃貞字天香閩霞漳人也同書四卷許大受が聖朝佐闢の三圖裂性篇に余曰儒言聖人有不能天地有憾故可屬之氣化若爾教言天主無不能天地皆絲彼造而氣化復爲隔是天主無全能矣艾乃嘆曰子問甚深不得不言其實天主始生一男曰亞當一女曰厄穢爲一切人類之始祖舉天地間之物悉其受用而獨留一菓樹勸二人不得垂涎厄穢聽一魔鬼與亞當私嘗之天主怒甚乃著令曰自今以後凡從二人所生人類皆有原罪以有原罪故勸後世子孫男必曝日裂背粒食乃成女必拆腹剝腸生育乃就余曰易稱一陰

一陽之謂道故乾成男而坤成女即竺典小教中稱劫初光音天爲造世主猶吾儒稱盤古爲三才首君之意並言肇人之形不言造人之性也云々又問艾曰所謂魔鬼安防耶艾曰天主初成世界隨造三十六神第一鉅神曰略齊弗兒是爲佛氏之祖自謂其智與天主等天主怒而貶入地獄亦即是今之閻羅王也云々余とは許大受也艾とは艾儒略也同書八卷羅川釋如純が天教云天主者乃全能全智造成天地萬物爲之主宰者也厥初生亞當厄穢此爲人類之祖其靈性其形體本極備美備福後一犯違聖命恩澤悉墮病患隨至情欲錯出天路隔焉此祖宗之罪汚又遞傳於人類故人從受孕來即皆體是汚染而凡後來罪惡無不緣此根芽云々○五雜俎四卷に國朝西蕃天方默德那最遠蓋玄奘取經之地相傳佛國也其經有三十六藏三千六百餘卷其書有篆草楷三法今西洋諸國多用之又有天主國更在佛國之西其人通文理儒雅與中國無別有利瑪竇者自其國來經佛國而東四年方至廣東界其教崇奉天主又猶儒之孔子釋之釋迦也其書有天主實義往々與儒教互相發而於佛老一切虛無苦空之說皆深詆之是亦逃揚之類

耳喇瑪竇嘗言彼佛教者竊吾天主之教而加以輪廻報應之說以惑世者也吾教一無所事只是欲人爲善而已善即登天堂惡則墮地獄永無懺度永無輪廻亦不須而壁苦行離人出家日月所行莫非修善也余甚喜其說爲近於儒而勸世較爲親切不似釋氏動以恍惚支離之語愚駭庸俗也其天主像乃一女身形狀甚異若古所稱人首龍身者與人言恂々有禮詞辯扣之不竭異域中亦可謂有人也已後竟卒於京師其徒曰龐迪峨○神仙通鑑四載廿二册清江夏明陽宣史徐衡述後漢光武丙申云々是冬羌人入寇馬援大破之遠西國人云去中國九萬七千里經三載始抵西羌界彼國初有童貞瑪利亞於辛酉歲元始年天神嘉俾爾爾恭奉天主特選爾爲母已而果孕降生母極喜敬養以常衣置於馬槽群天神奏樂於空得後四十日母抱獻於聖師罷德助取名耶穌方十二齡隨母往謁聖殿歸時相失母心痛苦三日夜後竟至殿中見耶穌上座與者年博學之士講論天主事理見母忻喜同歸孝敬事奉至三十歲辭母師遊行如德亞傳教淑人所以行聖蹟甚多其國中巨家及在位者極傲惡嫉其衆歸附謀欲殺之耶穌十二徒

中名茄答斯者素有貪行揣知本國衆意因以擗利夜深引衆捕縛送於惡納斯在比刺多衙內褫衣繫石柱便五千四百有奇全體剝傷默不置辨如羔羊惡黨以棘刺冠繩於其額以絳做袍披其身僞拜如王造一重大十字架逼令負荷一路屢跌難堪被釘手足於架上渴以醋膽終命時天昏地震石相觸碎時年三十三死後三日復活身極光美先見母以下訓誨與領聖水洗罪入教諭畢古聖群從隨躋天國後十日天神降臨迎母升舉立於九品之上爲天地之母皇世人之主保徒衆分巡化教由西洋古里北至歐德那國祖國國王謨罕壽德生而神靈有藏經凡三十藏共三千六百卷悉言天象宗徒訪之其風土與所教小異俗重殺非同類殺者不飲不食犬豕徒衆復往叩馬援乞挈入中土援曰爾教惟言天道乃可餘不足法且留於此衆遂至天方國一名西域四時皆春居民樂業馬乳拌飯用回曆與中國(四十六)風流剪燈新話の丹杜燈記に世上民間作千萬人風流話本注風流風聲品流能植一世謂之風流話本猶話柄也言說話之本也云々剪燈新話は山



陽聖佑宗吉が著也永樂年間刊行せり

(四十七)線香并孔雀羽立机上 同書の涓塘奇遇記に籠内畜一線鸚鵡見人能言軒下垂小木鶴二隻脚線香焚之線香如絲案上立一古銅瓶插孔雀尾數莖其傍設筆硯之類皆極濟楚架上橫一碧玉簫女所吹也壁上貼金花牋四幅題詩于上云々これ文房陳布の形容也

(四十八)申上 同書に富貴發跡司志云々蒙活者甚衆昨縣神申上於本司申下司行呈於府君云々俗書に申上といふによく似たる字面也

(四十九)白榆 同書に鑑湖夜泛記云鳥鵲群鳴白榆亂植注古樂府天上何所有歷々種白榆注白榆星也

(五十)日本人三眼并自鳴鐘遠鏡 『聖朝破邪集』三卷霞澤蘇及高號活が邪毒實據に艾儒略等夷人也自萬曆間入我中國有識者窺其立心詭異行事變詐已疏其不軌而驅之矣今也胡爲乎復來哉其故可思矣復來而天下不惟莫能詳察其奸併且前驅諸疏亦幾不得見夷輩喜而相告曰我西士有四眼日本人有三眼兩到日本開教後中國人有兩眼呂宋人無一眼於是多籍技藝希投我聖天子之器使胡公卿士大夫

相率詩詠之文讚之疏薦之至於禮樂兵刑錢穀營建諸大權皆讓能於夷欲夷司其事絲是夷毒日醜於其中而不可言夫復來而若此之久也天下竟無一人愛而維其變將奈何夫中邦而若此又安得謂有兩眼耶所賴端志士端人聞之心傷見之痛哭設破關之計起豪傑之章賢士大夫有與之關焉嗟々中邦人士今也可有兩眼矣云々今姑舉邪毒異慘一二親見聞者實而據之一此夷詐言九萬里夫詐遠者令人信其無異志而不虞彼之我吞耳不知此番機深謀巧到一國必壞一國皆即其國以攻其國歷吞已有三十餘有據說云彼西洋隣近三十餘國奉行此教是也遠者難稽其踪最近呂宋而米索果而三寶顏而鷄籠淡水俱皆殺其主奪其民只須數人便壓一國此其實實可據者歟此一此夷藏奸爲市忠助銑令人喜其有微功祈雨令人疑其有神術自鳴鐘自鳴琴遠鏡等物令人眩其奇巧且也金多善結禮深善誘惑一人轉得數人惑數人轉々數萬云々此又其實實可據者歟云々教中默置淫樂以婦女入教爲取信以點乳按秘爲飯依以互相換淫爲了姻緣示之邪術以信其心使死而不悔要之發誓以緘其口使密而

不露至於擦孩童之口藥能制其必從令其見怪

云々聞夷輩蓋嘗謂中邦之大器可窺矣其妄擬官民之毒法也數十里爲一保保外不計相通人授里票爲準票誌姓名形貌有越保而行者有行無里票者皆斬無赦里中設邪寺妻女騙入姪又嘗抽子以別母抽夫以離妻或抽本鄉倏居別國或抽此土倏往他邦東西變換南北移易蓋皆所以熟者生弱者弱者不得相通智者不得相謀是奸夷所以御呂宋三寶顏米索果等之毒法也此又其實實可據者歟夫既有實實三可據吾不知幾時後如何增毒如何愚弄嘗聞之友人曰彼夷凡所吞之國所統之人皆欲斷滅其智慧不許其學習必使人爲木偶然後快於心彼種則學習機巧無所不至此奸夷不易世而王之毒計也故嘗嘆胡元無智術不百年而亡今入中華實欲滅儒道釋而焚盡文字典籍以木偶萬世特其謀未遂耳何時而無是念乎聞此令人心寒云々堂々中國大權交相口揚筆舉欲委狡番乘令是中邦人士不惟無兩眼而深愧日本也實且喪寸心而漸同呂宋歟念及此能不傷心痛哭嗚鼓合攻尙且高枕而臥是耶非耶哀哉云々按邪毒實據

は著作の年月を記さず

(五十一)曆法論 聖朝破邪集六卷に曆法論國芝城謝宮花个臣前著云今西夷所發動中國驕語公卿者惟是曆法然中國之曆法自有一定之論不待西夷言之也我太祖詔劉國師上觀天文下察地理鑄量天尺制定天球星宿分野銅壺滴漏晷夜時刻消息度數分毫若天現在京都衆目可觀至于曆法考諸前代國史如漢武帝太初元年鄧平所造太初曆後劉歆衍之爲三統曆東漢章帝元和二年造四分曆獻帝建安十一年劉洪造乾象曆魏明帝景初元年楊偉造景初曆東晉孝武帝太元九年姜岌造太元曆劉宋文帝元嘉二十年何承天造元嘉曆孝武帝大明七年祖冲之造大明曆魏孝明正光二年李業興造正光曆東魏孝靜帝興和二年李業興造興和曆北齊文宣帝天保元年宋景業造天保曆後周武帝天和元年甄鸞造天和曆靜帝大象元年馮巖造大象曆隋高祖開皇四年張賓造開皇曆仁壽四年劉焯造皇極曆煬帝大業四年張胄元造大業曆唐高祖武德九年道士傅仁均以元起戊寅造戊寅曆高宗麟德元年李淳風以元起甲子造麟德曆中宗神龍元年南宮說造乙巳曆元宗開元十二年僧一行







せり此欲心一切に變じて萬般の禍と成る也是天下の大病にあらずや是を療せんと思ひ給はゞ先此欲心を失ひ給へ天下おのづから勞せずして治るべしと云々  
 (五十九)願望成不成は徳不徳による 澁柿の文覺上人消息に徳を行ひ善を好む人にとりて祈はかなふ事にて候不義に振舞家にはいかなる祈も不叶也不義とは無道に物の命を斷酒にめで財にふけり歡樂して明しくらすほどに人のなげきもしらず國の安からぬをかへりみざるを申事にて候徳とも善とも申候は佛法をあがめ王法を重し世をすくひたすけはぐむ心也あやしの賤男賤女百姓萬民にいたるまで萬のものに父母のごとくに頼まるゝ心ばへをもちたるを申候也かやうの心づかひはなくして放逸不思議なるがさすが我身をたもたばやとおもふ人僧侶にあつらへ諸道に仰て祈禱するを僧侶も可然仰蒙たりとて祈申すまして外法の諸道は云に不及たのもしげに申て祈たれども其旦那よからざればあへて感應なくかへて悪く候也さ候へば僧もおんやうしもしつらひたる心なくて色代せずありのまゝにさばく候はん者に御祈を仰付て御身のとがをも聞召ておしなほしく

てぞよく候べき云々  
 (六十)弓取筆取 澁柿の頼朝佐々木被下狀にすべて筆とりもまして弓取もむかひたる目計かゝりて故實なからん事は世にもはかなかるべき事也云々  
 (六十一)一人當千 澁柿の頼朝佐々木被下狀に一人當千と云事は一人して千人にはいかでか向べきなれどもはかりごとをよくし居ながら多勢をほろぼす事を名付たる也云々按一人當千の字面皇極紀二年に見ゆ北齊書唐逸傳李陵答蘇武書涅槃經杯に出たり  
源平盛衰記廿四ノ廿五下  
 (六十二)やりくはんばう 澁柿の頼朝佐々木被下狀にやり観法にてむねと大事にすべき道をばさし置て無益に多の御領をふさげてはなにかせん云々按にやりくわんばうは今俗にやりばなしといふにおなじ遺觀放などの字義にや  
 (六十三)他人のよきまねより親のわろきまね 竹馬抄に他人のよきまねをせんよりはわろきおやのまねをすべき也さてこそ家の風をもつたへその人の跡ともいはるべけれ云々  
 (六十四)正直のかうべに神やどる 竹馬抄に伊勢

大神宮八幡大井北野天神も心すなほにいさぎよき人のかうべにやどらせ給ふなるべし云々八幡託宣にも見ゆ

(六十五)じんじやうなる人 今俗やさしくさゝやかなる人をじんじやうものといへりこれは大ならず常躰の人といふより訛りたる詞也竹馬抄に尋常しくなりて人なみに立まじはるまでを詮とすべしと見ゆ  
 (六十六)人はその得手を知てつかふべし 竹馬抄に智恵も侍り心も賢き人は人をつかふに見え侍る也人ごとのならひにてわが心によしとおもふ人を萬の事に用て文道に矢取をつかひ言葉たらぬ人を使節にし侍り心とるべき所に鈍なる人を用なごするほどに其ちがひぬる時なかゝ人の一期をうしなふことこの侍る也その道にしたしからんを見て用べき也曲れるは輪につくり直なるは轍にせんに徒なる人は侍まじき也たとひわが心にちがふ人なりとも物によりて必用べきか人をにくしとて我身の爲に用をかき侍りては何のどくかあらん云々按に垂拱して天下治るも人をしりてつかふによれり楠が哭男の類古きためしとおほかり

(六十七)無能人の年寄 竹馬抄に無能ならん人のこのよるやうを思ひやるにたゞ狐狸の年經ぬるにてこそあらんすれ云々  
 (六十八)結構人物の用に立す 今世心のよきはたらしきなき人を結構人といへり結構とは「よき」といふ心也これは自身の爲に結構なるにはあらず他人の爲に結構なるよしにて他よりいひ出し詞也古物語にうるはしき人といへるこれ竹馬抄によきといはるゝはたゞおだしくて三歳の子のやうなるをいふとてはらのたつをもたてすうらむべき事なげくべき事又人にも必おもひしらするふしなどを過しなごして此人はともかくも人のまゝなるよと人にしられたるは中々人の爲もわろくわが爲も失の侍べき也心をば閑にもちてしかもとがむべきふし云べき事をばいひて無明無心の人と思はれぬはよき也たかき世には人ごとによかりければさ様の人をよしともあしとも申べし此比は或はめたれを見或はわく心のみ侍る程に一すぢにやはらかにうるはしき人をば人の賤むる也無心の道人などて佛法者杯の目も心もなきやうに見えて三歳の孫の如くなど云は別の事也又愚癡の人はも



の、悪もわきまへず只黙々としたるはよき人と云べきにあらず是程の事はよく思ひわくべき也云々  
 (六十九)目たれを見并わく心 竹馬抄に或は目たれを見或はわく心のみ侍る程に一すちにやはらかにうるはしき人をば人のいやしむる也云々按に目たれを見とは人の目つきを見て心を用るよし也わく心は今俗にいふワウチャク心也またワヤク者などもいへり狂惑の義なるべし爾書明惠傳記下打向フマニ賞罰ニナリ行ヒ給ハハ彌人ノ心ヲナクテ云々

(七十)ふせてと云詞 竹馬抄に初一念をば心をしづめて理非をわきまへふせて我道理ならん事ははらもたつべき也云々按にわきまへふせてはわきまへつめてといふにおなじいひふせる攻ふせるなど同言にて伏さしむる心より轉じたる詞也

(七十一)ぬけ足 安元御賀記群書類従五百廿九卷十一丁左に我もとへ鞠くればぬけあしをふみてにげられき云々今俗ぬき足といへり加賀見山といへる浮瑠璃本にぬきあしとし足とありおとせぬやうに脱足する也

(七十二)瓜蔓に茄子はならず 『佐渡奇談中巻總源寺の住僧道明が事の條に總源寺の道明和尚は道徳堅

固の沙門也其行狀實に禪家の真面目を得たりともいふべし或士來りて物語の序に因果報應の事を尋しに必其事ありといふ彼士問けるは往日安岡成政に語られしは因果報應なしとのたまへりときく今我に向てありとの給ふはいかにぞや道明笑て曰成政にはなし和殿にはあり彼士訝りて其故を再問に和殿は血氣の勇を頼て罪人の首を斬事を好むいかで因果報應なからん彼士いよ疑惑して問らく罪科を決断するは其職あり我は好て首を斬るのみなれば其報應の事にあづからんや道明一拂して曰和殿大悟の時いたれり試にあの庭上の竹を振動し見よ彼士板縁より飛下りて兩三竿の竹をふりうごがすに折ふし雨後にて末葉の露ばらりと惣身にかゝりぬ道明再拂して曰呵々彼士復座して事由を問に道明曰竹を動せといひしは貧道也其露貧道にかゝらずして和殿が衣にかかれるはいかに彼士頓悟してそれより首斬わざをふつにやめたりとぞ又其比留守居職辻八郎左衛門守遊といふもの數百言の書をよせて交を結ばん事をこへるに道明いか思ひけんかへりごに「瓜づるになすびはならず人は人牛は牛づれ馬は馬づれ」とよ

みてとり合ざりしとなん云々佐渡奇談三卷天保中の撰也按に伊達日記群書類従本上卷二丁左に大内長門ト申者備前好身候節ニ米澤へ使ニ參御父子共ニ御存知之者ニ候後加齋申候此者休雪意休ニ會中瓜ノツルニハ瓜ガナリ夕顔ノツルニハ夕顔ガナリ申候間深事ハ有間敷候政宗大内ヲ御退治ハ成間敷候山中候云々とも見ゆ

(七十三)おくに歌舞伎 出雲みこ國といへる姪婦が都にて舞はじめておくにかぶきといふよしは羅山文集近世世談綺などをはじめ所見おほかり佐渡奇談上巻國女ガ事條に慶長の初京伏見の間にお國といふ歌舞妓あり佐渡の生れにて父は本間山城守の一族十郎といふもの也母遠藤氏は繼母にて十郎が死後お國八九歳の時上方の人買に此子をぞ賣たりける此子の父十郎牢浪の後に生れ貧しき中にそだちけれど眉目容貌清らかに才智秀ければ人買が手より立去て伏見の里に住居し古の白拍子の流を汲て或はうたひ或はまひ弟子數多引つれて後には高貴の後家にも召れけるとなん越前黃門秀康卿伏見の御館にて御見物あり彼舞の中に水品の念珠を襟にかけ舞たるを御覽じていかおほしけん御具足の箱より珊瑚の念珠を取出

給ひ仰ありけるは天下に幾千万の女かあらん中に一人の女と呼るゝは汝一人也威稱の餘りに是をとらする也我は天下に一人の男となる事叶はず彼女にさへ劣りたるは無念也とて御落涙有しとぞ云々  
 (七十四)えりさす井ふしづけ 曾丹集に「さゝきつにすかさほせり年ごとにえりさす民かしわさなるらん」○言塵集○倭漢三才圖會廿三卷漁獵具部に罽音摺同澤同和名布之都介音俗云惠利云々ふしづけは古歌におほくよみたり曾我物語にも見ゆ尙閱て知べし

(七十五)魚毒の解藥 河豚毒の解藥 魚毒にあたり又は河豚の毒にあたれるなど黒砂糖を多く服すれば愈白砂糖にては功なし黒砂糖を白湯にて多く服すればいかなる魚毒にても解さるはなし薩摩國にては此方ありて更に河豚を恐るゝ事なしといへり○醫藥雜記六卷廿丁に食河豚中レ毒者陶九成錄方或龍腦浸水或至寶丹或橄欖皆可解又槐花炒微黃與乾胭脂各等分搗粉水調灌即效云々  
 (七十六)霧に酔るを治方 毒虫の瘞たるを治方 丹波わたりにては霧にあたりて死するものおほしそれに



は藥燕脂カスリニとてべにの小品なるを多くのめば解すといへり平常のべににてもおなじ事なり又古生姜キウシヤウカウの汁を白木綿カクシヤウにいく度もしめし乾付て貯持毒虫の蝨たるをそれにて拭へば忽に毒解して憂なし

松屋筆記卷之八十六

華頂殿侍倭學士平與清稿

(一)延寄 清人趙翼が簞曝雜記一卷三丁 延寄條に軍機處有延寄一論旨凡機事慮漏泄不便發抄者則軍機大臣面承後撰擬進呈發出即封入紙函用辯理軍機處銀印鈐之交兵部加封發驛馳遞其遲速皆由軍機司員判明於函外曰馬上飛遞者不過日行三百里有緊急則另判日行里數或四五百里或六百里并有六百里加快者即此一事已爲前代所未有機事必須發而後由部行文則已傳播人口且驛遞遲緩探事者可催捷足先驛遞而到自有延寄之例始密且速矣此例自雍正年間始其格式乃張文和所奏定也云々按此法實に機密を告るに便也簞曝雜記六卷陽湖趙翼字雲松が作也歐北全集中に收む

(二)曲馬井燈火を數百人にもたしめて字形の觀をなす 同書一卷烟火條に上元夕西廠舞燈放烟火最盛清晨先於圓明園宮門列烟火數十架藥線徐引燃成界畫欄杆五色每架將完中復燒出寶塔樓閣之類并有

籠鶴及喜鵲數十在盆中乘火飛出者未中之交烈至西廠先有八旗驅馬諸戲或一足立鞍轡而馳者或兩足立馬背而馳者或板馬鞍步行而並馬馳者或兩人對面馳來各有馬上騰身互換者或甲騰出乙有馬上戴甲於首而馳者曲盡馬上之奇日既夕則樓前舞燈者三千人列隊焉口唱太平歌各執綵燈循環進止各依其綴兆一轉旋則三千人排成一太字再轉成平字以次作萬歲字又以次合成太平萬歲字所謂太平萬歲字當中也舞罷則烟火發其聲如雷霆火光燭半空但見千萬紅魚奮迅跳躍於雲海內極天下之奇觀矣按に馬戲は今の曲馬也舞燈者成字形はおのれひとせ箱根宮の下に湯あみせしをり江戸深川の鼈甲屋金六といふもの土人五百人を雇ひおのく松明を持たしめて向の山にのぼり大字の形をなして此方の湯客にはこらんとせし事ありされど山嶮岨にて心のまゝにのぼること能はず金六も計たがひ觀者もほいなくてやみにし事有願曲馬志魏明帝紀廿丁ウ注に魏略を引テ弄馬例騎トアリ

(三)蝦夷錦 同書一卷十四 蒙古詐馬戲條に秋八月萬壽節行宮大戲十日蒙古王公皆入宴兼賜蟒緞諸物

云々この蟒緞は蝦夷錦なるべし

(四)落葉松アカ松 同書一卷十五 木蘭物産條に木蘭有熱河東北二百餘里蒙古地云々有落葉松蓋氣益寒則松葉亦落矣云々按松洛松は日光の赤松といへるものなり一名都賀といふ万葉に櫻木とよめるものにや

(五)喇嘛大和尚 同書一の卷十六 蒙古尊奉喇嘛一條に蒙古俗最重喇嘛也即僧非特近邊諸部落也凡喀爾喀準噶爾及土魯番青海西番西藏等處無不虔奉恐後喇嘛之首號胡土克圖猶內地所稱大和尚也尤以西藏之達賴喇嘛爲大宗謂之活佛相傳即如來後身世々輪廻者將死則自言托生處其弟子如期往奉以歸謂之喇畢勒罕至十六歲始放參則又爲達賴喇嘛其實僞也喇嘛死弟子號諸巴者訪某家生子輒托言喇嘛後身而迎以歸幼即教以經典至放參後有來謁者諸巴先爲述其家世令喇嘛見之

一二語道著輒共驚爲前喇嘛轉世也故崇信尤甚然西藏路遠西北各部不能往參則各有胡土克圖掌佛教於國中者其王亦執禮惟謹小亦各嚴重於一方每胡土克圖出行無不膜拜道旁以金



寶戴於首一獻之但得其一摩頂一便以為有福歡喜無量並不<sub>レ</sub>必胡土克圖<sub>一</sub>也即凡為喇嘛者諸番亦無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>尊奉之所<sub>レ</sub>至讓穹廬<sub>一</sub>與居宰羊馬<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>酬酢<sub>一</sub>夜則妻妾子女惟所欲謂<sub>一</sub>之供養<sub>一</sub>惟恐不<sub>レ</sub>得<sub>一</sub>當其俗然也雖<sub>レ</sub>愚而可<sub>レ</sub>憫然千百年來習尚如是按大和尚を蒙古にては喇嘛といへる也同書六卷<sub>一</sub>大和尚條に石勒稱天王<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>佛圖澄<sub>一</sub>號<sub>一</sub>大和尚<sub>一</sub>今沙門出世領衆者例稱<sub>一</sub>大和尚<sub>一</sub>自澄始云

(六)茶 同書一の卷<sub>一</sub>茶葉大黃條に中國隨<sub>レ</sub>地產<sub>一</sub>茶無<sub>レ</sub>足<sub>一</sub>異也而西北游牧諸部則恃以爲<sub>レ</sub>命其所<sub>レ</sub>食<sub>一</sub>糲酪甚肥膩非<sub>レ</sub>此無<sub>レ</sub>以清<sub>一</sub>榮衛<sub>一</sub>也自<sub>一</sub>前明<sub>一</sub>已設<sub>一</sub>茶馬御史<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>茶易<sub>レ</sub>馬外番多款塞我朝尤<sub>レ</sub>是爲<sub>一</sub>撫馭<sub>一</sub>之資<sub>一</sub>喀爾喀及蒙古回部無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>仰給<sub>一</sub>焉太西洋距<sub>一</sub>中國<sub>一</sub>二十萬里其蕃舶來所<sub>レ</sub>需中國之物亦惟茶是急滿船載<sub>一</sub>歸則其用<sub>一</sub>且極<sub>一</sub>於西海以外<sub>一</sub>矣

(七)繩伎 同書一の卷<sub>一</sub>回人繩伎條に回人有<sub>一</sub>能繩伎<sub>一</sub>者與<sub>一</sub>內地<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>同內地走索之法<sub>一</sub>極<sub>一</sub>兩竿於地<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>索平繫<sub>一</sub>於竿<sub>一</sub>而人往<sub>一</sub>來其上<sub>一</sub>耳回人則立<sub>一</sub>一木高數丈者<sub>一</sub>其顛斜繫<sub>一</sub>長繩<sub>一</sub>屬於地<sub>一</sub>回人手橫<sub>一</sub>一木<sub>一</sub>取其兩頭<sub>一</sub>輕重相等不<sub>レ</sub>致<sub>一</sub>欹<sub>一</sub>側則步<sub>一</sub>繩而上直至<sub>一</sub>木之

顛<sub>一</sub>並蹠<sub>一</sub>一足<sub>一</sub>而僅以<sub>一</sub>一足<sub>一</sub>踏<sub>一</sub>於繩口<sub>一</sub>唱<sub>一</sub>歌良久始<sub>一</sub>下<sub>一</sub>真絕技也上每出<sub>一</sub>行武備院<sub>一</sub>嘗以<sub>一</sub>其人<sub>一</sub>奏伎後偶有<sub>一</sub>一人<sub>一</sub>墜而下者上憫<sub>一</sub>之自<sub>一</sub>此不<sub>レ</sub>得<sub>一</sub>設云々これつなわたりのかるわざ也秋苑日涉に見えれば補べし

(八)自鳴鐘時辰表 同書一の卷<sub>一</sub>鐘表條に自鳴鐘時辰表皆來自<sub>一</sub>西洋<sub>一</sub>鐘能按<sub>一</sub>時自鳴表則有<sub>一</sub>針隨<sub>一</sub>晷刻<sub>一</sub>指<sub>一</sub>十二時<sub>一</sub>皆絕技也今欽天監中占星及定憲書多用<sub>一</sub>西洋人<sub>一</sub>蓋其推算比<sub>一</sub>中國舊法<sub>一</sub>較密云洪荒以來在<sub>一</sub>辨機齊七政<sub>一</sub>幾經神聖始洩<sub>一</sub>天地之秘<sub>一</sub>西洋遠在<sub>一</sub>十萬里外<sub>一</sub>乃其法更勝可<sub>レ</sub>知天地之大到處有<sub>一</sub>開創之<sub>一</sub>聖人<sub>一</sub>固不<sub>レ</sub>僅義軒巢燧已<sub>一</sub>也鐘表亦須<sub>一</sub>常修理<sub>一</sub>否則其中金線或有<sub>一</sub>緩急<sub>一</sub>輒少差故朝臣之有<sub>一</sub>鐘表<sub>一</sub>者轉悞期會而不<sub>レ</sub>悞者皆無<sub>一</sub>鐘表<sub>一</sub>者也傳文忠公家所在有<sub>一</sub>鐘表<sub>一</sub>甚至<sub>一</sub>僂從<sub>一</sub>無<sub>一</sub>不<sub>一</sub>各懸<sub>一</sub>一表於身<sub>一</sub>可<sub>一</sub>互相印證<sub>一</sub>宜其不<sub>レ</sub>爽矣一日御門之期公表尙未<sub>一</sub>及<sub>一</sub>時刻<sub>一</sub>方從容入<sub>一</sub>直而上<sub>一</sub>已久坐乃惶悚無地叩<sub>一</sub>首階下<sub>一</sub>驚懼不<sub>レ</sub>安者累日<sub>一</sub>爾爾<sub>一</sub>桂川市周が魯西亞志分界の條に「ペテルスベルグベイトトルバウリス」といふ寺あり寶塔を建立すこれ意太里亞國の「長匠」テレシニなるもの、造りし也屋瓦は皆金貼なり塔上に自鳴鐘をかけ毎時に自ら鳴て時を報じ又自ら音響を奏す是和蘭の都アムステルダムにて造れる品也云々 櫻耕錄<sub>一</sub>二ノ三丁<sub>一</sub>矣

(九)千里鏡 同書一の卷<sub>一</sub>西洋千里鏡及樂器の條

に天主堂在<sub>一</sub>宣武門内<sub>一</sub>欽天監正西洋人劉松齡高慎思等所<sub>一</sub>居也堂之爲<sub>一</sub>屋圓而穹如<sub>一</sub>城門洞<sub>一</sub>而明爽異常所<sub>一</sub>供天主如<sub>一</sub>美少年<sub>一</sub>名邪酥彼中聖人也像<sub>一</sub>繪於壁<sub>一</sub>而突出似<sub>一</sub>離立不<sub>レ</sub>著<sub>一</sub>壁者<sub>一</sub>堂之旁有<sub>一</sub>觀星臺<sub>一</sub>列<sub>一</sub>架以貯<sub>一</sub>千里鏡<sub>一</sub>鏡以<sub>一</sub>木爲<sub>一</sub>筒長七八尺中空之而嵌以<sub>一</sub>玻璃<sub>一</sub>有<sub>一</sub>一層者<sub>一</sub>兩層者<sub>一</sub>三層者<sub>一</sub>余嘗登<sub>一</sub>其臺<sub>一</sub>以<sub>一</sub>鏡視<sub>一</sub>天亦日中亦見<sub>一</sub>星斗<sub>一</sub>視<sub>一</sub>城外<sub>一</sub>則玉泉山寶塔近在<sub>一</sub>咫尺間<sub>一</sub>磚縫亦歷々可<sub>レ</sub>數而玻璃之單層者所<sub>一</sub>照山河人物皆正兩層者悉倒<sub>一</sub>三層者則又正矣有<sub>一</sub>樓爲<sub>一</sub>作<sub>一</sub>樂之所<sub>一</sub>一<sub>一</sub>此贊者坐而鼓<sub>一</sub>琴則笙簫箏笛鼓鏡鐃之聲無<sub>一</sub>一<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>備其法設<sub>一</sub>木架於樓架之上<sub>一</sub>懸<sub>一</sub>鉛管數十<sub>一</sub>下垂不<sub>レ</sub>及<sub>一</sub>樓板<sub>一</sub>寸許樓板兩層板有<sub>一</sub>縫與<sub>一</sub>各管孔<sub>一</sub>相對一人在<sub>一</sub>東南隅<sub>一</sub>鼓輪以作<sub>一</sub>氣氣在<sub>一</sub>夾板中<sub>一</sub>盡趨<sub>一</sub>於鉛管下之縫<sub>一</sub>由<sub>一</sub>縫直達<sub>一</sub>於管<sub>一</sub>管各有<sub>一</sub>一銅絲<sub>一</sub>繫<sub>一</sub>於琴絃<sub>一</sub>此贊者撥<sub>一</sub>絃則各絲自抽頓<sub>一</sub>其管中之關<sub>一</sub>振而發<sub>一</sub>響矣鉛管大小不同中各有<sub>一</sub>竅竅<sub>一</sub>以象<sub>一</sub>諸樂之聲<sub>一</sub>故一人鼓<sub>一</sub>琴而衆管齊鳴百樂無<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>備<sub>一</sub>真奇巧也又有<sub>一</sub>樂鐘<sub>一</sub>并不<sub>レ</sub>煩<sub>一</sub>人挑撥而按時自鳴亦備<sub>一</sub>諸樂之聲<sub>一</sub>尤爲<sub>一</sub>巧絕<sub>一</sub>云々同書六の卷湯若望南懷仁條に閱<sub>一</sub>蔣良騏東

華錄<sub>一</sub>則湯若望嘗<sub>一</sub>我朝定<sub>一</sub>鼎之初<sub>一</sub>即進<sub>一</sub>所<sub>一</sub>製渾天星

毬一牀地平日晷遠鏡各一具云々

(十)梨園色藝 同書二卷<sub>一</sub>梨園色藝條に京師黎京師黎園中有<sub>一</sub>色藝者<sub>一</sub>士大夫往往<sub>一</sub>與相狎庚午辛未間慶成班有<sub>一</sub>方俊官<sub>一</sub>頗韶靚爲<sub>一</sub>吾鄉莊本淳舍人<sub>一</sub>所<sub>一</sub>昵本淳旋得<sub>一</sub>大魁<sub>一</sub>後寶和班有<sub>一</sub>李桂官者<sub>一</sub>亦波峭可<sub>一</sub>喜畢秋帆舍人狎<sub>一</sub>之亦得<sub>一</sub>修撰<sub>一</sub>故方李皆有<sub>一</sub>狀元夫人之<sub>一</sub>目<sub>一</sub>余皆識<sub>一</sub>之二人故不<sub>レ</sub>俗亦不<sub>レ</sub>徒以<sub>一</sub>色藝<sub>一</sub>稱<sub>一</sub>也本淳歿後方爲<sub>一</sub>之服<sub>一</sub>期年之喪<sub>一</sub>而秋帆未<sub>一</sub>第時頗窘李且時周<sub>一</sub>其乏<sub>一</sub>以<sub>一</sub>是<sub>一</sub>一人皆有<sub>一</sub>聲<sub>一</sub>縉紳間<sub>一</sub>後季來謁<sub>一</sub>余廣州<sub>一</sub>已半老矣余嘗作<sub>一</sub>李郎曲<sub>一</sub>贈<sub>一</sub>之近年聞<sub>一</sub>有<sub>一</sub>蜀人魏三兒者<sub>一</sub>尤擅<sub>一</sub>名所<sub>一</sub>至無<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>爲<sub>一</sub>之靡<sub>一</sub>王公大人俱物色恐後余已出<sub>一</sub>京不<sub>レ</sub>及<sub>一</sub>見歲戊申余至<sub>一</sub>揚州<sub>一</sub>魏三者忽有<sub>一</sub>江鶴亭家<sub>一</sub>酒間呼<sub>一</sub>之登<sub>一</sub>場年已將<sub>一</sub>四十<sub>一</sub>不<sub>一</sub>甚都麗<sub>一</sub>惟演戲能隨<sub>一</sub>事自出<sub>一</sub>新意<sub>一</sub>不<sub>一</sub>專用<sub>一</sub>舊本<sub>一</sub>蓋其靈慧較<sub>一</sub>勝云々按色藝は今の役者かけまの類にて大鼓持をもするもの男藝者といふべきもの也

(十一)偷兒小季 同書一の卷<sub>一</sub>京師偷拐之技條に都門繁會之地偷兒拐子有<sub>一</sub>非<sub>一</sub>意計所<sub>一</sub>及者<sub>一</sub>吾鄉董某偶人戲館占<sub>一</sub>席以待<sub>一</sub>客橫<sub>一</sub>二千錢於案<sub>一</sub>忽衣冠者三人



自外來中一人若與董素相識者。遂向揖蓬答揖揖甫下而錢爲其人同伴者撮去掛於肩。揖畢問姓氏其人故驚愕作誤認狀。深抱不安。董回坐而案上之錢已失。報錢者尙立於旁。反答之曰。戲館中有錢豈可橫於案。如我之掛於肩。斯可耳。實則掛肩之錢即其錢也。董熟視竟不致言。又一少年以銀易錢於市。方諸價忽一老者從後。擊而仆之。且罵曰。父窮至此。兒有銀乃私易。錢不孝孰甚。遂奪銀去。旁觀者謂是父責子也。少年悶絕良久。甦云。吾安得有父也。而銀已去。不可追矣。又有藏利刀雜稠人中。剪取腰間雜佩。或至割衣襟一幅。去混號謂之小季。被剪者覺而獲之。雖加毆辱。弗怨。或旁人指破。則必報矣。有女郎坐香車。一書生行其旁。兩美相顧。頗有情。小季者伺書生後。將下手。書生不知也。方回顧女郎不。便語。但以口頰隱示若有人伺於後者。書生覺而斥之。小季遂去。未幾。幾車轉曲巷。女郎口忽爲小刀劃破。

(十一)孤祟 同書二卷十八。狐祟條。京都多狐祟。每估高樓空屋。然不爲害。故皆稱爲狐仙。余嘗客尹文端第。其廳事後即大樓樓下。眷屬所居樓之上。久爲狐宅。人不處也。嘗與公子慶玉同立院中。日尚未暮。忽

有泥丸如彈者。拋屋而下。十數丸。余拾其一。仰投之。建瓴之屋。宜即拋下矣。乃若有接於空中者。不復下。亦一奇也。余傲屋醋張衙衙。其屋已數月。無人居。初入之夕。睡既熟。忽夢魘若。有物壓於胸腹者。力爭良久始得。脫時月明如晝。見有物如黑犬者。從廳格中。出明日視廳紙。絕無穿破處。先母命。余夕以二雞卵一杯酒。設於案。默祝焉。詰朝卵酒俱如。故而其物不復至。

(十三)權歌之會 万葉集に筑波の權歌會の歌あり。籙曝雜記三の卷七。邊郡風俗條に。粵西土民及滇黔苗。風俗大概皆淳樸。惟男女之事。不甚有別。每春月。趁墟唱歌。男女各坐一邊。其歌皆男女相悅之詞。其不合者。亦有歌拒之。如。倘愛我不愛爾之類。若兩相悅。則歌畢。輒攜手就酒棚。並坐而飲。彼是各贈物以定情。訂期相會。甚有酒後即潛入山洞中。相昵者。其視野田草露之事。不過如內地人看戲賭錢之類。非異事也。當墟場唱歌時。諸婦女雜坐。凡遊客素不相識者。皆可與之嘲弄。甚而相假抱。亦所不禁。并有夫妻同在墟場。夫見其妻爲人所調笑。不嗔而反喜者。謂妻美能使。人悅也。否則或歸而相詬焉。凡男女私相結

謂之拜同年。又謂之做後生。多在未嫁娶以前。謂嫁娶生子。則須作苦成。家不復可爲。此游戲。是以其俗成婚。雖早。然初婚時。夫妻例不同宿。婚夕其女即拜一鄰嫗。爲乾娘。與之同寢三日。內爲翁姑。挑水數擔。即歸母家。其後雖亦時至夫家。仍不同寢。恐生子。則不能做後生也。大抵念四五歲以前。皆係做後生之時。女既出拜。男同年男亦出拜。女同年至念四五以後。則嬉游之性已退。願成家室。於是夫妻始同處。以故恩意多不篤。偶因反目。輒至離異。皆由於年少。不即成婚之故也。余在鎮安。欲革此俗。下令凡婚者。不許異寢。鎮民間之皆笑以爲此事非太守所當與聞也。近城之民。頗有遵者。遠鄉仍復如故去。

(十四)黑坊黑鬼子白鬼子崑崙奴紅毛 寮曝雜記四の卷五。諸番條に。廣東爲海外諸番所聚。有白番黑番。粵人呼爲白鬼子黑鬼子。白者而微紅。而眉髮皆白。雖少年亦皓如霜雪。黑者眉髮既黑。而亦黧。但比眉髮稍淺。如淡墨色。耳白爲主。黑爲奴。生而貴淺。自判黑奴性最惡。且有力能入水。取物其主使之下。海雖蛟蛇弗避也。古所謂摩訶及黑崑崙蓋即此種某家買一

黑奴。配以粵婢。生子矣。或戲之曰。爾黑鬼生兒。當黑。今兒白。非爾生也。黑奴果疑以刀斫兒脛。死而脛骨及純黑於。是大慟。始知骨屬父。而肌肉則母體也。又有紅夷一種。面白而眉髮皆赤。故謂之紅毛夷。其國乃荷蘭云。香山縣之澳門。久爲番夷所僦居。我朝設一同知鎮之。諸番家於澳。而以船販海爲業。女工最精。然不肯出嫁。人惟許作贅婿。香山人類。能番語。有貪其利者。往往入贅焉。

(十五)搨骨聽聲之法 同書二の卷十二。搨骨史瞎子條に。術家又有搨骨聽聲之法。多替者爲之。北史高歡未遇時。與司馬子如等。逐赤兔。遇盲嫗。自言善暗。和因徧捫諸人。言皆貴。而俱由歡齊文宣帝試。皇甫玉相術。以帛巾抹其目。使歷摸諸貴人。無不驗。齊文襄時。有吳士雙盲。妙於聽聲。文襄令劉桃枝趙道德等。列試之言。皆中。五代史李守貞爲河中節度使。有術者善聽人聲。以知吉凶。守貞出其家人。使聽之。術者聞其子婦符氏聲。驚曰。此天下母也。守貞益自負。曰。吾婦猶爲天下母。吾取天下。復何疑哉。遂反。後守貞敗。符氏爲周世宗繼室。果爲皇后。此搨骨聽聲之見於史傳者也。近時亦尙有精其術者。雍正年間。浙東有史



瞎子者遇男子則搦骨女子則聽聲言休咎奇中徐文定公元夢撫浙時其孫符文襄赫德相國方川角而休寧汪文端公由敦以諸生爲之師文定令史相師弟二人史曰皆大位也時符以世家貴公子其顯達固意中事文端則寒諸生念不到此謂史特因弟以及師聊作周旋語耳是夕史獨偃偃到書塾謂文端曰君勉之將來官職聲名在主人之上文端益惶恐不敢當史曰非調語也君寒士諛君何所利正以我之命某年當有厄某年當得脫計君是時已登顯仕我之厄或由君而解故鄭重相托君是時幸勿忘今日言當力爲極之已而或進史於世宗憲皇帝奏對後忽奉旨發遼左爲民至今上御極之十年詔軍流以下皆減等發落時文端公果爲刑部尙書乃檢史舊案則係特旨發往不載犯罪之由同列多難之文端以其罪不過軍流正與恩詔相符乃奏釋焉既入京仍客於文端第則益相晦不肯言禍福矣歲庚午文端長子承流方應舉文端夫人望之甚切請史決之史曰即當得六品官六品者惟翰林修撰及部事主時文端方直禁近弟子若登科第必不至分部其爲狀元官修撰無疑也母夫人方竊喜無何文端爲是科主考官承流廻

避不得試共以史言爲妄矣其冬特旨賜文端蔭一子承流果得主事官正六品其奇中如此余以是歲客文端第故知之甚悉其他奇驗尙多不勝縷述也

(十六) 小憩 齋隱雜記四卷九丁 滇黔民俗條に余自滇歸一日小憩道旁云々この小憩の字面はコヤスミと訓べし

(十七) 薪土すくも 同書四卷十九丁 河底古木灰條に歲丙午江南大旱余鄉河港皆赤裂百餘日居民多赴烟城壕中掘黑泥和糞作餅相傳此城本沈法與聚糧處年久化爲泥也鄉人以各河底皆有黑泥亦掘之至五六尺許輒得泥如石炭者然不可食以作薪火乃終日不熄其質非土非石有大至數圍須用斧劈者有碎疊成塊縫層層可揭者細驗之則大者本巨木層疊者則木葉所積年久爛成塊也江南人惟沿村有樹河港之在野者罕所植間有之亦必取作器小則伐爲薪其孰肯砍而棄諸河意必洪荒以來兩岸本多樹隨山刊木時始伐而投之歷千萬年成此耳是歲數百里內河港俱掘得濁湖大數十里湖底亦有之餘弟汝霖買數百斤猶存云々按に越後に薪土あり富

士山に神代炭あり吉川邊の人とりて炭にかへ大に其利を得といへり 齋隱雜記五卷二丁 武者へ二里半云々 老翁の森は愛智川と武寺山のふもと云々

(十八) 假山 齋隱雜記五卷二丁 古來構園林者多壘石爲嶽空險峭之勢自崇禎時有張南垣創意爲假山以營邱北苑大擬黃鶴畫法爲之峯壑湍瀨曲折平遠巧奪化工南垣死其子然號陶菴者繼之今京師瀛臺玉泉暢春苑皆其所布置也揚惠之變畫而爲塑此更爲平遠山水尤奇矣云々按に假山の名全唐詩衛謙沙門齊己僧正集六に假山の詩及序あり夢溪筆談にも見えて唐宋よりきこえたりこゝに明張南垣が創意のよしいへるは其つくりざまに新意を構出せしなるべし 齋隱雜記六ノ十二丁 木假山の詩あり梅花無 齋隱六ノ十二丁 木假山の詩あり梅花無

(十九) 物各有主 同書五卷二丁 寶誌公擴本在鐘山而今雞鳴山有誌公肉遺像者明太祖將以鍾山爲陵并欲取靈谷寺以擴兆域禱於誌公得籤詩曰世間萬物各有主一釐一毫莫亂取英雄豪傑本天生也須步步尋規矩後終以鍾山爲陵啓誌公瘞用兩大缸合成誌公端坐其中指甲已長繞腰三匝遂遷之於靈谷寺而八功德水竟帶去至今尙在

靈谷寺也後太祖常召太常不至內侍曰遣往靈谷祭誌公去矣乃命即雞鳴山塑像祭之 揚儀明云々按に本朝靈山嶽靈池沼靈淵河の類奴志と稱するものありてこれを犯せば必ず祟あり君子謹て犯すことなかれ

(二十) 豆腐詩 同五卷四丁 豆腐詩傳得淮南術最佳皮膚脫盡見精華一輪磨上流瓊液百沸湯中滾雪花瓦缶浸來蟾有影金刀割處玉無瑕个中滋味誰得知只合僧家與道家 詩云々按豆腐の事魏苑口涉攤書漫筆などに見ゆ

(廿一) 木より火出る 檜相摩而燃よしは淮南子に見ゆ銀杏樹また火を出す事あり齋隱雜記六卷十五丁 銀杏樹條に嘉慶十四年三月初九日常州府學大銀杏樹一株腹中忽發火從隙處迸出青綠色有四五蛇冒火出初十日辰刻方熄樹仍無傷葱鬱如故按李戒菴漫筆明嘉靖元年正月二十一日常州府學銀杏樹西南一枝忽火發竅中饒饒水不能灌至二十二日方止樹亦無害未之知今被火之樹即嘉靖中被火之樹耶或謂此乃文明之兆嘉靖元年府學有華輪中解元今歲非會試之年俟日後驗之



瞎子者遇男子則搦骨女子則聽聲言休咎奇中徐文定公元夢撫浙時其孫舒文襄赫德相國方角而休寧汪文端公由敦以諸生爲之師文定令史相師弟二人史曰皆大位也時舒以世家貴公子其顯達固意中事文端則寒諸生念不到此謂史特因弟以及師聊作周旋語耳是夕史獨偃偃到書塾謂文端曰君勉之將來官職聲名在主人之上文端益惶恐不敢當史曰非調語也君寒士諷君何所利正以我之命某年當有厄某年當得脫計君是時已登顯仕我之厄或由君而解故鄭重相托君是時幸勿忘今日言當力爲極之已而或進史於世宗憲皇帝奏對後忽奉旨發遼左爲民至今上御極之十年詔軍流以下皆減等發落時文端公果爲刑部尙書乃檢史舊案則係特旨發往不載犯罪之由同列多難之文端以其罪不過軍流正與恩詔相符乃奏釋焉既入京仍客於文端第則益益稱晦不肯言禍福矣歲庚午文端長子承流方應舉文端夫人望之甚切請史決之史曰即當得六品官六品者惟翰林修撰及部事主時文端方直禁近弟子若登科第必不至分部其爲狀元官修撰無疑也母夫人方竊喜無何文端爲是科主考官承流勉

避不得試共以史言爲妄矣其冬特旨賜文端蔭一子承流果得主事官正六品其奇中如此余以是歲客文端第故知之甚悉其他奇驗尙多不勝縷述也  
 (十六)小憩 簪曝雜記四卷九丁 滇黔民俗條に余自演歸一日小憩道旁云々この小憩の字面はコヤスミと訓べし  
 (十七)薪土すくも 同書四卷十九 河底古木灰條に歲丙午江南大旱余鄉河港皆赤裂百餘日居民多赴烟城濠中掘黑泥和糞作餅相傳此城本沈法興聚精處年久化爲泥也鄉人以各河底皆有黑泥亦掘之至五六尺許輒得泥如石炭者然不可食以作薪火乃終日不熄其質非土非石有大至數圍須用斧劈者有碎成塊縫層層可揭者細驗之則大者本巨木屑壘者則木葉所積年久爛成塊也江南人惟沿村有樹河港之在野者罕所植間有之亦必取作器小則伐爲薪其孰肯砍而棄諸河一意必洪荒以來兩岸本多樹隨山刊木時始伐而投之歷千萬年成此耳是歲數百里內河港俱掘得瀉湖大數十里湖底亦有之余弟汝霖買數百斤猶存云々按に越後に薪土あり富

士山に神代炭あり吉田邊の人とりて炭にかへ大に其利を得といへり 願書 木曾路記下卷七ノ十八丁左に愛智川より寺山のふもと云々  
 (十八)假山 簪曝雜記五卷二丁 に古來構園林者多墨石爲篋空險峭之勢自崇禎時有張南垣創意爲假山以營邱北苑大擬黃鶴畫法爲之峯壑瀟灑曲折平遠巧奪化工南垣死其子然號陶菴者繼之今京師瀛臺玉泉暢春苑皆其所布置也揚惠之變畫而爲塑此更爲平遠山水尤奇矣云々按に假山の名全唐詩衡嶽沙門齊已僧正集六に假山の詩及序あり夢溪筆談にも見えて唐宋よりきこえたりこゝに明張南垣が創意のよしいへるは其つくりざまに新意を搦出せしなるべし 願書 簪曝雜記四ノ五丁木假山の詩あり梅花無  
 (十九)物各有主 同書五卷二丁 に資誌公撰本在鐘山而今雞鳴山有誌公肉遺像者明太祖將以鐘山爲陵并欲取靈谷寺以擴兆域於誌公得籤詩曰世間萬物各有主一燈一毫莫亂取英雄豪傑本天生也須步步尋規矩後終以鐘山爲陵啓誌公瘞用兩大缸合成誌公端坐其中指甲已長纒腰三匝遂遷之於靈谷寺而八功德水竟帶去至今尙在

靈谷寺也後太祖常召太常不至內侍曰遣往靈谷祭誌公去矣乃命即雞鳴山塑像祭之 揚儀明 云々按に本朝靈山嶽靈池沼靈淵河の類奴志と稱するものありてこれを犯せば必ず祟あり君子謹て犯すことなかれ  
 (二十)豆腐詩 同五卷四丁 豆腐詩「傳得淮南術最佳皮膚脫盡見精華一輪磨上流瓊液一百沸湯中滾雪花瓦缶浸來蟾有影金刀割處玉無瑕个中滋味誰得只合僧家與道家 豆腐詩 云々 按豆腐の事統苑日涉雜書漫筆などに見ゆ  
 (廿一)木より火出る 檜相摩而燃よしは淮南子に見ゆ銀杏樹また火を出す事あり 簪曝雜記六卷十五 樹條に嘉慶十四年三月初九日常州府學大銀杏樹一株腹中忽發火從隙處迸出青綠色有四五蛇冒火出初十日辰刻方熄樹仍無傷葱鬱如故按李戒菴漫筆明嘉靖元年正月二十一日常州府學銀杏樹西南一枝忽火發竅中燄燄水不能灌至二十二日方止樹亦無害未之知今被火之樹即嘉靖中被火之樹耶或謂此乃文明之兆嘉靖元年府學有華輪中解元今歲非會試之年俟日後驗之







野分は秋の草のおとろふる事也此心を考て歌もよみ發句もすべし

(卅二) 蚊柱 又云蚊柱といふは蚊のむれて立事也歌にはこれなく連歌俳諧に遣ふ詞也其角發句「蚊柱に夢のうきはしかりけり」此句名句也定家卿の歌に此句の心によくかなへりと云々「春のよの夢の浮はしとたえして峰にわかるよよこ雲の空」

(卅三) みの虫ちよよとなく 又云枕草紙にみの虫の秋風ふく時ちよよとなくと鳴き書けり古句に「母よとは虫もなかねとぐちをいひ」面白したる句也繼母の事なるべし

(卅四) 一生を空しく過したる人 又云一生をむなしく過たる人に對してよみける歌「あすありと思ふ心にひかされてけふもむなしくくらしけるかな」云々與清曰此歌の心に通ふ語も歌も古今いとおほかり諺にみづくが夜が明たら巢をつくらうとて空しく過すよしいへり「あすまでと思ふ心のあた櫻よ半に嵐のふかぬものかは」此歌出所尋ぬべし古き發句に「來年はくとてくれにけり」慈鎮和尚歌に「みな人のしりかほにしてしらぬかな必死ぬるならひあり

とは「業平」生るれば死ぬるものとはしりなから昨日今日とは思はさりけり」人五十にして死計をなすべしといへる漢土の人の語忘るべからず

(卅五) 産養基手錢攤打 宗固隨筆に産養といふは今の世に産所へ夜食を遣す事也昔は三日め五日め七日めに産の伽をするものへ食事を拵へ遣したる事也産所にて夜伽のもの基双六を打事也此時基手とて錢を下されて官女たち基双六を打事也攤を打といふは双六の事也掛にして打事古き事也徒然草にもだうたん事を思ふと有

(卅六) うはなりはんにや 又云うはなりこなみといふは前の妻の事をうはなりといふ後添の事をこなみといふ夫故前妻の後の妻を恨たる事をうはなり打といへり打は鐵杖の事也人の怨靈をうはなりとは中古よりいふ詞也盤若といふも女の顔の事にあらす祈禱に大盤若經をよむゆゑに盤若面といひて鬼女を畫がく事也云々與清曰前妻後妻の事神武天皇の御歌に見えて厚顔抄古事記傳などに解ありうはなり打は寶物集に見え骨董集に考あり

(卅七) 一休の狂歌はこ 宗固隨筆に一休和尚はいと

やんごとなき御人なり後小松院の御種也御位を譲らんと給ひしをきらひて逃かくれ給ふとなり關地蔵開眼の事などをかき事あり達摩大師の贊に「天竺のムシヤクシヤ達摩此坊主さしたることはあらしとぞ思ふ」惣て禪宗にては佛に乗り祖に乗るとて佛をも祖師をもそしるを貴ぶとたてたる宗旨也又善導大師の贊に「黒からん衣のすその黄になるは善導大士はこやたるらん」又さとの歌「人はさてくふてはこして寝ておきてさてその後は死ぬる也けり」はこといふは不淨の事也云々按に糞をハコといふ事著聞十訓の類古書所見おほし

今昔卅一語に爲入ラム物ハ我等ト同様ニコソ有ラム其ノヲ攝涼ナドシテ見テハ思ヒ被レ疎ナムト思ヒ得テ女童ノ筒洗ヒニ行カムヲ伺テ奪取テ見テシガナト思テ然ル氣光シニテ局ノ邊ニ伺フ程ニ年十七八許ノ姿樣体可吹クテ髮ハ柏長二三寸許不足メ限夢重ノ薄物ノ和濃キ袴四度解テ無氣ニ引上テ香染ノ薄物ニ筒ヲ裝テ云々これ尿を爲入る筒にてこれを洗す女を桶洗といふ也 小夜寝覺八丁ウに蠅といふ虫の塗物などには白くはこをしかけ白きものにはくろくはこをしかけ待るにたとへたるにや

(卅八) 黄村濃紺村濃紫裾濃 宗固隨筆に紋盡の内に黄むらごうといふ事人のしらぬ事也暮を黄に染て所所の黄色の濃を黄むらごうといふ紺むらごうといふも濃こんのむら染ある也一説に暮の筋に黄と紫と紅

とを付るゆゑに黄紫紅といふ説あれども此説はいかが三浦黨の三ツ引は是也といふ説はいかや又紫すそ濃といふ時は草摺の裾へゆくほどこくなるゆゑ也裾紅といひて紅といふ事にあらすそごとは裾濃といふ事也是を以て見れば黄むらごうといふも紅の事にあらす黄村濃なるべしと云々

(卅九) うけ振舞有卦無卦 尤双紙下卷四 目出度物のしかくの段にうけ振舞に鶴龜や云々有卦無卦の事閑田耕筆一三丁に見えたり循環曆二の卷丁四の卷六丁ウ四十にも見ゆ 類聚名物考雜部五 雅鑑辭任集雜部 故二丁ウ 實拾要六三世相 槐記二享保十乙巳九月廿八日ノ條に此夜江戸ヨリ來ル桐草盆ヲ御見セナサル名人ノ細工ト見エテ杉ニテ糸ヨリ細キ彫物ナリイト危キ物也併有氣ノ視ヨリ外ニハ何ノ益ナキ物也ト仰ラレソレニ付キ有氣ノ視ホド爲ベキヤウナキモノハナシ御前ノ五句ノ御有氣一位様ヨリ進セラレシヤウナルハナシト也タトヘバ狭箱ホドノ箱ニツニ巻物ヲ廿五巻ジ、都合五十巻ミナ白地ニシテ繪子紗綾ナリメン純子ヲ始トシ十八講サラシニ至タル不思議ノ思召付ナリト仰ラレ云々

(四十) 逆社號 逆社稽古編四十三 逆社名義の條に通悉錄曰晋宋間有盧山慧遠法師化行潯陽高士逸人幅湊于東林皆願結香火一時雷次宗宋岳張詮劉造民周續之等共結白蓮華社立彌陀像一求願往生安養國謂之逆社社之名始于此也釋氏要覽曰又彌



陀佛國以逆華二分九品次第接人故稱逆社云々  
また五十四 扶桑廬山の條に按泉州志本朝廬山旭逆社  
大阿彌陀經寺依後醍醐天皇勅願澄園上人之所創  
也圓不知何處人初學台教中習諸宗又參禪  
請益虎關終入元傳廬山之宗脈歸朝而創寺于此  
鑿池種蓮以擬慧遠之逆社帝詔賜庄園若干戸吾  
邦淨宗以逆社名寺蓋始於焉云々

(四十一) 竹矢來行馬 今驛宿の人口などに土手を構  
へ上に竹の矢來を作る事あり三才圖會宮室一の卷  
世四 に行馬の圖あり門前の左右に作れる矢來なりそ  
れは木もて作りたれど本朝の竹製のものに形相似た  
り行馬始三代周禮謂之陞柎一木横中兩木互  
穿以成四角施之於門以爲禁約也晉魏以後官  
至貴品其門得施行馬又名欄黨と見ゆ

(四十二) 田廬 『万葉集八卷四十五 大伴坂上郎女竹田  
庄作歌に然不有五百代小田平新田廬爾居者京都所  
念然字は黙字の誤寫なるべし同十六卷十五 河村王誦  
歌に可流羽須波田廬乃毛等爾青兄子者二布夫爾吟而  
立廬爲所見注に田廬者多夫世也云々毛詩小雅信南山

章註本十三之 到中田有廬云々箋云田中中也農人  
作廬焉以便其田事云々疏云正義曰古者宅在都  
邑田於外野農時則出而就田須有廬舍故言中  
田謂農人於田中作廬以便其田事云々集註三卷  
右田中田中也一井之田其中百畝爲公田内以二十  
畝二分八家爲廬以便田事云々三才圖會宮室二卷  
十五 に圖を載て云田廬農書云古者制五畝之宅以  
二畝半在鄰詩云入此室處是也以二畝半在田  
詩云中田有廬是也陸龜蒙田廬賦略曰江上有田田中  
有廬屋以蒲蔭扉以蓮條色雖樛微方資樵蹠簞卑  
歛而立僂僕戶俯側而行趨趨蝸涎隆頂龜壘塹旁塗夕  
吹入面朝陽曝膚左有牛栖右有鷄居將行騰遮  
未起啼驅宜從野逸反若囚拘云々などあるを考わ  
たして田廬のさまおもふべし倭名抄十卷 居宅類部に廬  
毛詩注云農人作廬以便田事力魚反和名伊保とあ  
りて多夫世とはいはざれと全く同物也夫世は廬屋布  
勢伊保など同じくて卑きよし也そは別にいふべし  
た秋田刈借廬はた田廬の類なり万葉集八卷九 忌部  
首黑麻呂歌に秋田刈借廬毛未壞者雁鳴寒霜毛置奴

我二同十卷世四 秋田刈借廬之宿爾穗經及咲有秋芽  
子雖見不飽香聞また 四十三 秋田刈借廬辛作吾居者衣  
手寒露置爾家留また 四十九 秋田刈客乃廬入爾四具禮  
零我袖沾干人無一また 五十一 秋田刈借廬作五百入爲  
而有監君叫將見依毛欲得また 同 鶴鳴之所聞田井爾五  
百入爲而吾客有跡於妹告社などよめるにて知らるま  
た十卷四十三 秋田刈苦手拵奈利白露者置穗田無跡告  
爾來良思といへる苦手も借廬の苦手也後撰中 天智天  
皇御製に「秋の田のかりほの庵の苦をあらみわが衣  
手は露にぬれつ」と有にても思ふべし

(四十三) 守舎いほり 『万葉集十卷五十一 春霞多奈  
引田居爾廬付而秋田刈左右令思良久また 五十一 橋平  
守部乃五十戸之門田早稻刈時過去不來跡爲等霜伊勢  
物語に「名のみたつしてのたをさはけさそなくいほ  
りあまたにうとまれぬれは又いほりおほきしての  
たをさは猶たのむわか住里に聲したえすはこれらの  
いほりも守戸も常に田を守る舎のよしにて三才圖會  
宮室二卷十六 載たる守舎これそは守舎看平禾廬

也架木苦草略成構結兩人可擗禾稼將熟寢處其  
中備防人畜或就勝坎縛草爲之若於山郷及曠  
野之地宜高架牀木免有虎狼之患真西山言農  
事之叙云至其禾道垂顛而堅栗懼人畜之傷殘縛  
草田中以爲守舎數尺容膝僅足蔽雨寒夜無眠  
風霜骨此守禾之苦也と見えて看禾廬ともいふべ  
し倭漢三才圖會八十一卷十八 家宅部に守舎は田中之  
番屋といへり今も山田山島に限らず借廬つくりいほ  
りし居て鳥獸を守るいとおほかりこれ守舎にて和訓  
には母利屋といふべしそは守屋大連といふ名もこれ  
によりてつきためれば也

(四十四) 窟井洞 陸奥にては居河を石屋とも洞とも  
いふよし吾妻鏡伊達日記の類彼處の事記せし書ども  
に見ゆ和名類聚抄十卷七 居宅部に窟説文云窟伊波夜  
土屋也一云堀地爲之云々天文本居宅類 には骨反を  
音骨に作り爲之二字を爲窟也三字に作り今も諸  
國に絶壁などに横穴を掘て人の住たりけん跡と見ゆ  
るが多しこれ上代穴居の遺趾なりと知るべし  
(四十五) 管麴密塗師の止古 天文本和名類聚抄部六  
居宅類に管辨色立成云管於禁切和名地室也一云漆屋云  
二十七



云説文本七下卷穴部に密地室也从穴音聲於禁切云々  
正字通卷下穴部に密以證切音陰説文地室也今俗謂地密  
藏酒爲密云々按以證切は於禁切の誤なるべし今麴  
室といふものこれ深屋也といへるよしは古漆ぬれ  
る物此中に收置て乾したるゆゑと見ゆ今は塗師上古  
といへる箱を作りて其中にて乾す事也

(四十六)穴倉 穴倉に二種あり平地を掘て地底に構  
るを密といふがけなごに横穴に掘て構るを竇といふ  
其製作殊なれど共に土穴なる事は違なし今關東にて  
は地下に掘構たるを穴倉とよびがけに横穴をほりて  
構たるをば洞ともイハヤともいへり又アナグラとよ  
ぶものもありて一樣ならず竇の圖三才圖會宮室二  
卷廿四丁に見ゆ和漢三才圖會一巻家宅類部にも出た  
り

(四十七)社ヤシロ 神社を屋代ヤシロといふよしは倭訓栞廿四卷  
也部にいひたり社の字の義は三才圖會宮室三卷廿二  
にはしく其圖をも載たれば考べし

(四十八)管内管郡 『困學紀聞廿卷二丁 雜識に親王  
初除有布政勝音云應某軍管内尾云某君仍散下管  
内所領節鎮也云々史記李斯傳に趙高以刀筆吏入

秦宮管事二十餘年云々荀子儒效篇に聖人也者道之  
管也注に管樞要也云々字書に總理其事曰管又主  
當也注して管内は俗にいふ支配内の義也和名抄  
に管若干那とあるは國司の支配下の郡司が若干とい  
へるよし也

(四十九)老中といふ職名 老中といふ職名は他より  
指て御老中様などいへるより起れり伊達日記などそ  
の外やふるき書どもに老衆と書たるが自稱の職名  
にはさるべき事也自他相違の稱といふべし

(五十)物具 『物具といへるは軍器武器の事とのみ  
思ふべからず雲井御法本四丁ウにもウぐきたる女房  
だいはん所のみすもてあげていれ奉るとありこは女  
の裝束にいへる也物具裝束抄に劔事平緒事帶事直衣  
事平胡籙事東帶事禮服事布衣事唐鞍具事移具事和鞍  
具事車事車具事小忌青摺挿頭花事隨身舍人等が服の  
事など記したるにても思ふべし

(五十一)散華に金銀瓣を用ひし始 雲井御法十三  
五日けふは結願なり云々大將殿花びらを奉らせ給ふ  
金銀の葩ハナヒラその外繪のはなびら二三枚心もことばも  
及ばぬ事にこそ薄様を敷て打みだれ筥に盛らる昔よ

りいまだかねの葩といふものはさらになきにや應安  
にはしろがねのふくりんなどは見及び侍りし建武に  
はかざり葩とて花ひらにて馬くるまを作りいろく  
のものゝ形し侍りし中宮女御などの方よりまゐらせ  
給ひたりし也さしも一統の時々に侍りしかごもし  
ろがねこがねの花びらはつひに見及び侍らずいと目  
おどろかしたる事也云々

(五十二)除目の除の字義 夢溪筆談四の卷四丁 辨證  
條に除拜官職謂除其舊籍不然而除猶易也  
新易舊曰除如新舊歲之交謂之歲除易除戎  
器戒不虞以新易弊所<sub>レ</sub>以備不虞也皆謂之除  
者自下而上亦更易之義云々

(五十三)錢百の事省百 錢を省百にせしは漢隱帝の  
時に始るよし夢溪筆談四の卷五丁 辨證部に見ゆ制度  
通を可考同四卷一巻ノ六丁ウ

(五十四)大小腰物刀脇指 今世太刀刀を具して大小  
といへり伊達日記中卷廿七 に御腰物大小とあり當時  
よりの稱にや又刀脇差とも見ゆ守武千句八丁ウ東寺  
文書抄三ノ四十九丁

太平記廿五ノ廿丁ウ住吉合殿ノ條ニ和田新發意源秀ト名乗テ洗皮  
ノ鏡ニ太刀小太刀二振テ六尺餘ノ長刀ヲ小脇ニ挾ミ云々同廿九ノ

六丁ウ同廿四ノ四丁ウ山道警上落ノ條ニ或は四尺五尺ノ白太  
刀ニ虎皮ノ尻鞘引籠メ一様ニ二振帶テ百騎ニ百騎打モアリ云々  
(五十五)出馬入馬在馬納馬 出馬入馬在馬納馬など  
いふ名目伊達日記にあまた所見ゆ御出馬御入馬御在  
馬御納馬などいへり發馬後太平記卅  
二ノ十三丁ウ

(五十六)御北様 同書に北方の事を御北様とあまた  
所書たり大方御方などの類也

(五十七)矢來内の矢來一の矢來遠矢來 同書に矢來  
内の矢來一の矢來遠矢來などあり外の矢來二三の矢  
來近矢來などいふ名もありけるにや

(五十八)足輕 足輕といふは歩卒の稱にて馬上に對  
たる名也伊達日記上廿六 を考へて知べし

(五十九)草をいゝ 草とはしのびの事也伊達日記  
に草をいゝなどおほく見ゆ北條五代記のツハの類  
なり

(六十)いのご 俗に股のつけねの邊をいのごといひ  
そこに腫物の根のはれ出たるをイノゴカ根張タなど  
いへり伊達日記上四十九 に上矢ニ打候間鞍ノ後輪ヲ  
打欠犬子所へ打出候と見ゆ犬子所は「イノゴドコロ」  
と訓べし

(六十一)供奉調進 雲井の御法詳書類從四百廿  
九卷十七丁左 に大か



た主上は内膳大炊寮の御はんならではまわらぬ事に  
て待りしにちか比諸門跡などのまわらせられ待りし  
にやそれにならひて今は御はんなどまゐるは別の事  
也わりごはむかしよりまゐることにて侍る也云々按  
樋口秘記に主上の供御の事見ゆ可考

(六十二)なくといふ詞 夫木抄春四花部に花歌中に  
西行上人「ときはなる花もやあるとよしの山奥なく  
いりてなほたつね見ん」按に此おこなくといふ詞限  
もなくの義也万の御法群書類從四百廿九卷廿二丁右に最勝講などい  
ふ事よりはじめてさま／＼の妙なる事ども其數なく  
侍るなれども云々とある類なくのなはた同つかひ  
さま也

(六十三)まゐり下向まゐりまかで 中比の書に神社  
佛閣にまゐり下向とおほく見ゆ下向は還向とも書た  
り万の御法群書類從四百廿九卷廿二丁左に僧俗のまゐりまかでもな  
にさなく心あはたしくやとて云々と有

(六十四)禁中例時作法の始 万の御法群書類從本に禁中  
にて例時の作法おこなはるゝ事は敬信の他にことな  
りしによりて故院のおほん代別勅にて始て行はれ侍  
りけるとかや云々按故院は後花園院也

(六十五)清涼殿懺法の始 同書同廿二に十二月の五  
日より内にて御懺法をはじめおこなはる道場は清涼  
殿なりおほくは議定所などにてありしを應永十三年  
のたびより此御殿にて行はるゝ事に成て侍るにや云  
云

(六十六)桑門くはの門桑の戸さし桑の樞トギ  
「新撰六帖二帖門歌に知家」からくして入しは何ぞ桑の  
門道の心よそのしるしあれ「又光俊」おなしくはとち  
こもれかし桑の門名にのみ立て年のへぬらん」已上  
二首共に夫木抄雜十三門部にも載たり風雅集雜下に  
出家の後述懷歌の中に前中納言有忠「子を思ふやみに  
そまよふ桑の門うき世にかへる道はとちても」漢鹽

草六の卷居所部にくはの門桑門也とちこもれるとい  
へり云々 文選六臣注本二卷 西京賦に展季桑門誰能不  
營注に善曰國語曰臧文仲開柳下惠之言韋昭曰柳下  
展禽之邑季字也家語曰昔有婦人召魯男子不往  
曰子何不若柳下惠一嫗不進門之女也國人不  
稱其亂焉桑門沙門也東觀漢記制楚王曰以助伊蒲  
塞桑門之盛饌一說文曰營惑也良曰展季柳下惠桑門西  
國沙門此二人至貞潔見此美亦經營也云々釋氏要覽

上卷六 稱謂部沙門條に沙門肇師云出家之都名也梵  
丁右 云沙迦彌摩訶之唐言勤息謂此人勤修善品  
息諸惡故又秦譯云勤行謂勤修善法行趣涅槃  
也或云沙門那或云桑門皆譯人楚夏爾云々後漢書  
列傳廿二光 楚王英傳に詔報曰楚王誦黃老之微言尙  
武十五傳 浮屠之仁祠潔齋三月與神爲誓何嫌何疑當有悔  
客其遠賸以助伊蒲塞桑門之盛饌注に伊蒲塞即優  
婆塞也中華翻爲近住言受戒行堪近僧住也桑門即  
沙門也云々これらの桑門の字面によりて歌に「くは  
のかさ」ともよみたるなれど柳營を「やなぎのいとな  
み」龍蹄を「たつのひづめ」などいへる類にて其義は  
いたくたがへり色葉字類抄四卷與部に桑門ヨステビト  
云々節用集與部人に桑門ヨステビト云々連歩色葉集  
與に桑門ヨステビト云々などあるは義訓也漢鹽草  
部十四卷にも世をすて人桑門也の字なくともと見ゆ  
又くはの戸ともいへり八雲御抄三上卷廿六丁右居敷部戸條に  
くはの戸桑門也云々言塵集四卷廿二丁右戸條に桑の戸云々  
なご見ゆ又桑のさぼそともいへり万の御法群書類從四  
卷廿九卷廿七丁に桑のさぼそ若の袂にあまるばかりの御めぐみ  
云々漢鹽草十四卷に桑のさぼそに身をのがれ云々な

ざあり又桑のさざしともいへり夫木抄維十 門部に述  
懷歌中くはの門民部卿爲家「かきこもるくはのさざ  
しのおいらくよこはいかなれやねのみなかる」然  
て桑門をくはのかさともよすて人ともくはのと  
も桑のさぼそとも桑のさざしともいふ事と知べし  
(六十七)表紙のふところ 万の御法群書類從四百廿九  
卷廿八丁左に  
内をはじめまゐらせて宮々男女おの／＼歌ども表紙  
のふところにかきて一品經まゐらす云々按に表紙の  
ふところは經の卷物の表紙の内をいへる也  
(六十八)舞樂の終に千秋樂といふ 「今俗能狂言雜  
劇の終を千秋樂といへりこは法會の樂などの終に千  
秋樂を奏するより轉れりこ見ゆ魚山御法群書類從四百  
廿九卷四十四丁に樂ハ惣禮宗明樂昇樂探桑老樂拍子供養文後萬秋  
樂破敬禮段後蘇合三帖眼耳後同急息舌後白柱向悔後  
輪臺青海波下樂竹林樂廻向了千秋樂とあり廻向了後  
千秋樂を奏し事果れば也」  
(六十九)宿徳平絹宿徳裝束 宿徳平絹とは宿徳氣に  
見ゆるよしの名にや後土御門院十三回聖忌記群書類從  
四卷廿九卷廿七丁左に前内大臣實隆公直衣宿徳白平絹指貫下結著  
云々又同五丁右 伶倫公卿前左大臣政長公直衣指貫許



宿徳平絹下結云々又親長卿記文明十五、十一、十九條宿徳装束の事見えて五十歳以上の宿徳の人の着用する服の義にや速水見聞私記十五の卷安齋後集七、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

(七十) 目路 和泉式部家集四に秋の夜の月いといたうくもりたるに「なかわれとめちにも霧の立ぬれば心やりなる月をたに見す」夫木抄三路部にも載て眼路の歌とす俊頼散木奇歌集九に伊勢に侍りける比たよりにつけて修理大夫のもとにつかはしける「さへかしな玉くしのはにみかくれてもすの草くきめちならずとも」此歌續古今雜顯季集夫木抄三路部にも見ゆ覺性法親王出觀集部に月前眺望山の端をいつとも月の見えぬかなめちにかゝれるくましなければ」後土御門院十三回聖忌記九卷五十四丁右に於「御眼路」跡居云々與清曰めちとは目に見とほしたるほごをいふ也

(七十一) 御禮を申す 後土御門院十三回聖忌記類從四十九丁右に戌刻事訖共行公卿僧衆等各申入御禮云云今俗御禮を申すと云におなじ

(七十二) なじみ 陽祿門院三十三回忌記類從四十九卷六十八

丁にむかしの御なじみ淺からず云々按に今もいふ詞にて馴染の義也

(七十三) 人別帳 今世の人別帳は版とも黄籍とも黄冊ともいふよし制度通八戸口に見ゆ

(七十四) 提封田 不可墾可墾不可墾定墾田墾田 提封田とは天下の土地をすべていふ名目也不可墾とは山林川澤などの田地にならざる所をいふ可墾不可墾とは田島にもならず山林にもならぬ閑地をいふ墾田とも定墾田ともいふは田島の事也制度通八七丁墾田

(七十五) 課役 課役といふは課と役との二ツにて一事にあらす課は丁男とて一人前の男の名也十八歳より六十五歳までの間也委は制度通八の卷に見ゆ

(七十六) 鶴の鳥 木曾路名所圖會三の卷四十三、三浦山條に見ゆまた朝夷義秀此所にのがれ母の巴も共に住たるよしへり

(七十七) 俗別當 類聚符宣抄一の卷四十七 長保五年三月四日の宣に應以正六位上紀朝臣兼任石清水八幡宮神主事右左大臣宣奉勅神主紀兼輔轉任俗別當之替云々又四十八 永觀元年六月五日宣に俗別當從

五位上紀朝臣良常以今年八月二日卒去也云々百練抄五十七 天仁元年十二月廿五日條に石清水權俗別當頼遠配佐渡國云々此外所見おほし

(七十八) 錢龜 遊仙窟抄四卷に舊魚成大劍新龜似小錢云々注に陳云萍初生圓狀如小錢之形也夫蒙云改萍字可爲龜字龜生時大如錢遊於蓮葉之上云々

(七十九) 烏口ヤハズ 今世物などかくる杖をヤハズといへりかゝる舩に作れる也古くは烏口といへり宣命見參などを挿む杖に片烏口杖または烏口仗あり三節次第江家次第などものにおほく見ゆ

(八十) 鳩を鷹の如に使ふ井鴨を使ふ 諏方縁起五の卷に彌津神平東國無双の鷹匠にて今打おろしたる荒鷹はとをも多年使入たるごとくにぞ用けるとあり吾妻鏡十八の卷三 元久三年三月十二日同十三日の條に信濃國住人櫻井五郎以鴨如鷹使ふよしはしく見ゆ

(八十一) 下手人 「台記久安三年六月卅日條に感神院下手人同可被禁歎云々○玉海承安二年八月十三

日條に或云依此事自公家山僧等被召下手云々同書文治二年五月廿三日條に仰云如聞者理非難分別一事歎然而委尋事之濫觴以下手之重者可處科歎且又可奏事由難自由之故也○吾妻鏡十一卷十建久二年四月卅日條に延曆寺所司辨勝義範等參著先律徊橫大路四前申事由仍點基清之家被召入彼二人先賜酒肴次遣後兼盛時等令問答給獻上衆徒狀可給定綱父子身之由所職之也亦彼父子之外稱下手人注進交名是去三月於佐々木庄磯山門使其張本之所岸本十郎遠綱源七真延源太三郎遠定等也云々同書十一卷十建久二年五月八日條に院宣云於定綱者處遠流至下手輩者可禁獄之由欲被宣下之間云々○明月記元久二年六月廿七日條に昨日晝信久向彼宅召下手人章玄迷惑後見法師一人伊輔卿專一侍一人出下手人信久相具退出見者如堵云々同書建曆三年二月五日條に辨語云造宮所闕諍事召仲章朝臣於河陽被勘責被召下手人云云同書貞永二年三月廿日條に下人等說云長清卿次男依假子之闕諍捕近邊地藏堂法師之子而縛其小童依爲山僧弟子山僧成怒亂入家内欲取下手



人依其事三位透電隱居家中無人云々○帝王編年記廿二卷治承元年四月十三日條に後日射神輿下手人禁獄云々○百練抄四卷十七丁長徳元年八月三日條に右大臣隨身爲權中納言隆家所從被殺損後日隆家卿出下手人云々又十九丁同三年四月十七日條に檢非違使等依勅園華山院責申去夕濫行下手人是右衛門督公任宰相中將齊信同車自左府一出之間於路次花山院人數十人致濫行之故也同書五卷廿三丁治五年四月十八日條に停任檢非違使別當俊實是依去三日陵磔檢非違使中原範政也後日付使應於後實宅被召下手人○諏方縁起卷四に義家力及ばず數輩の下手人を誅し彼地を神領に付らる云々○太平記廿七卷師直園尊氏居所事條に故ナク三條殿ヨリ師直ガ一類ヲ亡サントノ御結構ニテ候間其身ノ誤ザル處ヲ申開キ讒者ノ張本ヲ賜テ後人ノ惡習ヲ懲サシ爲ニ候トテ旗ノ手ヲ一同ニ颯ト下サセ楯ヲ一面ニ進テ兩殿ヲ圍ミ奉リ御左右逼シトゾ責タリケル將軍彌腹ヲ居兼テ累代ノ家人ニ圍マレテ下手人コハレ出ス例ヤアルヨシノ天下ノ嘲ニ身ヲ替テ討死セントテ云々○大神宮諸雜事記下卷四十に從者男矢庭死去了

常重父子僅存命セリ件下手人等三重郡宇衣比原御厨住人等也云々○類聚名物考稱號部に下手人げしゆにん案に人を殺せばその相手を官より召て死を給ふ是を下手人といふはその人の手をくだして對手を殺せばいふ也今世俗にその殺されし人のかはりに殺さるるゆる解死人と書は心得たがひなり云々○與清曰下手人とはもと下手人を請また下手人を取といふを省ていへる也聞諺にまづ手を下せる人の事也解死人など書は後世の聞推にて捧腹にたへぬわざ也また左經記長元四年正月廿八日條に住僧道覺之下手といひ砂石集に下手男二上卷藥下手法師二上卷地獄菩薩種々利など書るは下輩の事にて手を下せる人とは義殊なれば思ひまがふべからず

(八十二) 字星慧星 字星慧星の事諸道勘文詳釋類從四廿八丁廿五丁ナなどに載てその圖も見ゆ

(八十三) 押領使 信濃國埴科郡解原庄中條宮辨才天由來記に寛正文明の比より國郡鄉村に大中小の押領使有て政事を失ひ無道にして邪欲盜賊をもて是也とす云々陸奥語記十丁に諸陣押領使云々又十六丁三人押領使攻之云々此押領使は一陣の大將にいへる也後

世に奉行といふがごとし

(八十四) 大佛錢 寛文中京都所司代松平豆州東山の太佛を無用の物とて鑄崩し大佛錢を鑄る幕に文の字を鑄付たるは寛文の年號の一字を取れる也按に梁武帝取襄陽寺銅佛毀爲錢よし南史に見え唐武宗以廢寺銅鐘佛像僧尼瓶碗等所在本道鑄錢よし唐書に見え後周世宗詔毀天下銅佛以鑄錢よし五代史に見えて和漢一轍の談也

(八十五) 水帳 今世水帳といふは古の圖帳の流にてその體裁はやゝかはりたれど名義は御圖帳なるべし明の魚鱗圖冊すなはち本朝の水帳也其說經濟纂要前集六の卷に見ゆ

(八十六) 倉廩の積替 經濟纂要前集四の卷藏穀の條に行厨集云倉廩五間存空一間俟久陰氣濕將殺逐間翻轉自無紅腐之患敦書按今之轉積即是也

(八十七) 國師任限并改國師爲講師 法曹類林百九十三卷寺務執行十七に私記云問延曆十四年八月十二日符備諸國國師任限六年兼預他事煩以解由自今以後宜改國師曰講師每國置一人舉才堪講說爲衆推讓者中官奏聞然後聽補一任之後不得輒替者

云々按此文類聚三代格三の卷政事要略五十九の卷なども出たり

(八十八) 置質 同書同條伊福部眞實間に假令甲置質乙許甲請借之後加一倍利辨備已畢爰乙留置本文書未返行云々

(八十九) 非執政前參議非參議非執事 同書二百卷公務天承元五廿五勘文に式部式云々又條云非執政二位者列中納言之下二位參議之上三位者四位參議之上云々また非執政三位上臈與三位參議下臈署所事條に問云々式部式云非執政二位者列中納言之下三位參議之上三位者四位參議上二者非參議雖爲叙日之上臈可被列參議下之由既見此式云々また答云云又云非執政二位者列中納言之下三位參議之上三位者四位參議之上云云前參議以上被召見及預朝參者致仕者在位見任上以理解者在同位下云云また問云々猶文書之署所須以參議之下臈書非參議上者歟云々また問云々又參議非職事者重案式文以參議稱以理解若無官職者可解何物哉云々また答云々以大納言納言何准參議非參議之論哉云々式云非執政二位者列中納言下又天長



宣旨非參議二位列中納言下云々此外にもおほく見ゆ可考

(九十)一院別當井番頭史生 法曹類林二百の卷公務八十四卷廿四丁右に式部錄正六位上年五十織部佑從七位下年卅爲一院別當誰上座云々また廿五散位伴保正問に宣旨備如舊爲番頭史生聽其本座者云々

(九十一)令義解の朱書 令義解朱書の事法曹類林詳書類從四百六に見ゆ

(九十二)例文 達幸故實抄三卷十二卷十三丁左に長寛二六廿九日上卿大納言殿召外記廿二社奉幣例文一被仰云々これにて例文をレイブミと訓事知べし

(九十三)鉤を懸事 同書同卷丁ウに懸鉤様事永萬元正廿一日功過定予懸鉤於表紙上文

「勘解由大勘文」 資仲抄様如く此也然而鉤按に俗に云かぎてんをかくる事也ふるへたるはあしきよしは以無刻目爲善とあるにて知べし

(九十四)迎歲迎時 迎歲迎春のみにも限らず迎夏迎秋迎冬などもいへり淮南子時則訓六丁に立夏之日天子親率三公九卿大夫以迎歲於南郊注迎歲迎夏也

云々驚懼也云々杜律五言集解丁右 遠遊詩に猿啼失木間云々注に猿失木而悲啼喻己之天涯涕淚云々(九十九)粟降 淮南子八卷五 本經訓に昔蒼頡作書而天雨粟鬼夜哭云々注に天知其將餓故爲雨粟按に後世も五穀の降れる例いとおほかりいづれも飢饉の瑞也竹結實野草生子類はた天飢民を憐ての事と見ゆ

(百)道は貴人に因て行はる 淮南子主術訓二に孔丘墨翟修先聖之術通六藝之論口道其言身行其志慕義從風而爲之服役者不過數十人使居天子之位則天下徧爲儒黑矣云々按に本朝代の天子佛道を尊信し給へるより佛法天下に盛也

(百一)本陣井候館 今世諸侯の旅館を本陣といへりこは漢土にいふ候館也國語丁右 魯語上に僖公使臧文仲往宿於重館云々注に重魯地名館候館也周禮五十里有市市有候館云々按周禮地官の條に見えたり

(百二)怨の府 國語丁右 魯語上に子叔聲伯曰苦成氏有三亡少德多寵位下而欲上政無大功而欲大祿皆怨府也云々注に怨之所聚故曰府云々

(九十五)士卒 士卒は二種也淮南子覽冥訓注に在車曰士卒曰卒云々また脩務訓注に在車曰士卒曰卒云々

(九十六)蟄繪 蟄繪は蟄繪にや淮南子本經訓十二寢咒伏虎蟄龍連組注に蟄龍詰屈相連文錯如織組文也

(九十七)龍舟鷁首 淮南子本經訓十一に龍舟鷁首云云注に龍舟大舟也刻爲龍文以爲飾也鷁大鳥也畫其象着船頭故曰鷁首

(九十八)木をはなれたる猿 源平盛衰記廿四卷十一南都合戰條に恐ラクハ木ヲ離レタル猿ノ迎ヤ儲セヨトテ木津川ニ廣サ一町計ノ浮橋渡シテ左右ニ高欄ヲ立タリケリ云々戰國策丁右 齊閔王篇に魯連謂孟嘗君曰猿獼猴錯木據水則不若魚鼈云々補注に錯舍置也云々淮南子六卷六 覽冥訓に猿獼猴而失木枝云々注に猿獼猴也長尾而昂鼻云々同書九卷廿 訓に猿獼失木而擒於狐狸非其處也云々文選六臣注本一班孟堅西都賦に猿獼失木云々注善曰郭璞卷廿六丁左 班孟堅西都賦に猿獼失木云々注善曰郭璞山海經注云猿似獼猴而大臂長便捷色黑蒼頡篇曰猿似狸云々淮南子曰猿獼顛蹙而失木云々向曰失木

(百三)棟梁之任 また子叔聲伯曰吾聞之不厚其棟不能任重重莫如國棟莫如德云々注に厚大也任勝也言國至重非德不任國棟云々按に職原抄棟梁の注に引べし

(百四)民は勞するを善とし逸するを淫とす 同魯語下五卷十に公父文伯母曰昔聖王之處民也擇瘠土而處之勞其民而用之故長王天下夫民勞則思思則善心生逸則淫淫則忘善忘善則惡心生沃土之民不材淫也瘠土之民莫不嚮義勞也云々注に瘠土利薄又勞而用之使不淫逸不淫逸則向義故長王天下也云々また民勞於事則思儉約故善心生云々また沃肥美也不材器能少也云々また善心生故嚮義也云々

(百五)四民雜處しむべからず 齊語國語六の管子曰四民者勿使雜處雜處則其言訛其事易云々按に孫子にも此說あり十農工商各その業に安處せさせて他を知らざらしむる計也しからざれば民好智に走りて治がたし

(百六)蛙の子は蛙に爲る 又丁管子曰是故士之子恒爲士云々按に俗に蛙の子は蛙になるといふにそ

似狸云々淮南子曰猿獼顛蹙而失木云々向曰失木



のころ相おなじ

(百七)罷士罷女罷馬 罷士は病士也罷女罷馬皆病ある也齊語<sup>十丁</sup>に罷士無<sup>レ</sup>伍罷女無<sup>レ</sup>家また<sup>十七</sup>罷以爲<sup>レ</sup>幣と見ゆ

(百八)出爪を剪を忌 『今俗他行せんとするをり爪を剪を出爪とて忌嫌へりそは金銀にもあれ別の資財雜具にもあれ家より出しつめるといふ事の明證也つめるはついくるなどの心の俗語にてもとは「スキマナキ」よしにいへり淮南子兵略訓<sup>十二</sup>に君若不<sup>レ</sup>許臣不<sup>レ</sup>敢將<sup>レ</sup>君若許<sup>レ</sup>之臣辭而行乃爪鬚設<sup>レ</sup>明衣也鬚凶門<sup>二</sup>而出云々注に鬚爪送終之禮去<sup>レ</sup>手足爪云々と見えたるはよしあるわざといふべし』

(百九)尋常 淮南子汜論訓に舒<sup>レ</sup>之天下<sup>二</sup>而不<sup>レ</sup>窺内<sup>一</sup>之尋常<sup>二</sup>而不<sup>レ</sup>塞注に八尺曰<sup>レ</sup>尋倍尋曰<sup>レ</sup>常云々

(百十)陰徳あれば陽報あり 俗に陰徳あれば陽報ありといふは淮南子人間訓<sup>六丁</sup>に夫有<sup>レ</sup>陰徳<sup>一</sup>者必有<sup>レ</sup>陽報<sup>一</sup>有<sup>レ</sup>陰行<sup>一</sup>者必有<sup>レ</sup>昭名<sup>一</sup>と見えたるが出處なり

(百十一)心如<sup>レ</sup>直木<sup>一</sup>行如<sup>レ</sup>柳條<sup>一</sup> 余常に人に教て云心は直木の如くせよ行は柳條の如くせよ又云心に正直棒<sup>チキ</sup>を貯て曲る事なかれ行に柔和繩<sup>ニウ</sup>を用て強き事な

(百十四)家中に先祖の靈を祭 宅中に先祖の靈を祭るは禮記王制に庶人祭<sup>レ</sup>於寢<sup>一</sup>注に適寢とありて正堂の事也今いふ座敷の類也本朝にては上下おしなべて宅中に佛壇を置先祖の靈を祭る事常也禁中御佛壇の事は遠碧軒記上卷居所部に見ゆ

(百十五)墓相并百皇一姓臣下連綿 墓相は漢土三代の説にて聖人も口には宅兆を卜して安措すといへど實は昭穆の廟を毀ち祭を止る事申々にもものぞこなひといふべしされば天子永世につかす臣數代を重ねず先祖の祭をたち先祖の家を亡すは聖人の言行違へるによりてなり本朝は天皇代々の御陵歴々として存せるに遠陵は多く祭を廢せらるれどなほ伊勢八幡などの類祭祀の盛なるも少からず況や近陵は泉涌寺にて祭らせ給へば微なりといへども百皇一姓の御神統絶ゆることなきをや公家武家庶人の家に及まで又かくのごとしされば萬國にまさりて家々連綿と相續し異寇も犯す事あたはざるは慕祭孝敬の禮備はりて異國の毀廟の禮などいふ不孝不敬の風俗に似ざればなり

(百十六)唐土四百州 圖書編八十三卷に臣博考<sup>二</sup>前

かれと云々俗にも男は爪を圓く剪て心を角にもて女は爪を方に剪て心を圓くもてといへり頃淮南子を讀て相似たる説を得たり人間訓<sup>廿四</sup>に内有<sup>二</sup>一定之操<sup>一</sup>而外能<sup>レ</sup>訓伸<sup>レ</sup>風縮<sup>レ</sup>卷舒<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>物推移<sup>一</sup>とあるは同日の談といふべし禮從<sup>レ</sup>宜<sup>一</sup>と不<sup>レ</sup>凝<sup>一</sup>滯於物<sup>一</sup>而能<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>世推移<sup>一</sup>ともいひ拇尾明惠上人の人はあるべきやうといへるなど共に脩身の長策也願<sup>レ</sup>書<sup>一</sup>忍<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>德<sup>一</sup>惡<sup>レ</sup>戒<sup>一</sup>

(百十二)繁文無益 『俗に下手の長口上といへるごとく繁文にして拙劣なるもおほかり淮南子人間訓<sup>廿八</sup>に繁稱文辭無<sup>レ</sup>益<sup>一</sup>於說<sup>一</sup>審<sup>レ</sup>其所由<sup>一</sup>而已矣と見ゆ余平常所<sup>レ</sup>著の書また此辭ありて劉安がそしりをまぬがるゝことあたはず』

(百十三)無用の器を貯有用の器を缺 劍術をしらずして政宗の太刀を秘藏たる文旨にして倭漢の珍書を積置たる共に無用の器を貯たりといへし劍術者刀劍を帶ざる學者書籍を貯ざる共に有用の器を缺たりといふべし郝隆智藏が腹を日に曝したるは愚人を欺く履行也おのれそのをりに生合すして二老に詰問せざるを恨む淮南子說山訓<sup>十七</sup>に好<sup>レ</sup>弋者先具<sup>一</sup>繳與<sup>レ</sup>矰好<sup>レ</sup>魚者先具<sup>一</sup>罟與<sup>レ</sup>罾未<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>其具<sup>一</sup>而得<sup>レ</sup>其利<sup>一</sup>

古若<sup>二</sup>光武中興<sup>一</sup>與<sup>二</sup>隆熙前世宣元之弊<sup>一</sup>裁<sup>レ</sup>省天下四百州懸官<sup>一</sup>止<sup>レ</sup>七千五百餘員<sup>一</sup>額數極多者也云々願<sup>レ</sup>書<sup>一</sup>錄<sup>下</sup>

(百十七)關内侯并遙授 制度通四卷官品正從之事條に關内侯トハ侯號アリテ居<sup>レ</sup>京畿<sup>一</sup>國邑ナシ漢書ニ具ナリ云々按に遙授の國司の類也

(百十八)功臣號惠美押勝 功臣號の事制度通四の卷にいへり惠美押勝などこれ功臣號也

(百十九)宣底 宣底は文書の草案俗にいふひかへ書なり詔勅の口宣案これ也宣底の事沈存中が夢溪筆談に見ゆ五代史<sup>廿四ノ十</sup>唐臣傳十二論贊に予讀<sup>レ</sup>梁宣底<sup>一</sup>云々

(百廿)花米 花米の歌西行山家集夫木集などに見ゆ熊野權現金剛藏王寶殿造功日記に白河院御出家永長年中也熊野寶殿未<sup>レ</sup>供養<sup>一</sup>自<sup>レ</sup>院奉幣御使僧增譽御幣御花米結<sup>レ</sup>付證誠殿鳥倉<sup>一</sup>御使長圓於<sup>レ</sup>菴室<sup>一</sup>七日病惱云々また二條關白承徳二年熊野奉幣御使東禪房聖實御幣置<sup>レ</sup>證誠殿鳥倉<sup>一</sup>御花米置<sup>レ</sup>南所寶殿鳥倉<sup>一</sup>云々

(百廿一)楚 鞞 『新野問答<sup>卷一</sup>に君美問楚鞞云々同卷定基卿答鞞連著<sup>二</sup>楚鞞<sup>一</sup>云々無<sup>レ</sup>覺悟<sup>一</sup>候云々吾妻鏡<sup>十卷四十</sup>建久元十一七條に黑馬楚鞞云々世俗淺深秘抄<sup>八丁右</sup>



上卷廿八丁右に大嘗會御稷日非參議猶付楚鞅於杏葉云々  
 また丁左に楚鞅尋常依官々用之然而又主人用之上皇之高野詣之時有騎馬用之又有總當代々關白之獻馬車後被引有總鞅用也然而於路頭間々楚鞅被用之關白長谷詣又用之也云々飭抄下卷廿初齋宮入諸司鞅條に仁安二九廿一殿記曰初齋宮入野宮五位已上和鞍黑地楚鞅付杏葉結唐尾云云物具裝束抄鞅事條に連著鞅鞅楚鞅小總連子總云々無名裝束抄に楚鞅杏葉ヲ付ル時用ルト見エタリ又康治元年十月三日知足院關白イハレシハ楚鞅ハ拈タル事也六位用之又戎等ガ拈ナリ云々武器考證十七卷無名裝束抄條に本文に赤滑ノ朱塗トアルハ即楚鞅ノ鉢也飭抄世俗淺深秘抄等ヲ見テ知ベシ滑革ニテ造テ總ヲ付ズ樹木ノ楚ノ枝ナキニタトヘテスワエ鞅ト云ナルベシ云々

(百廿二)遙授 類聚三代格七 承知七年五月二日大政官府應止諸使便附遙授人一事に右檢案内去延曆廿一年八月廿七日格備右大臣宣奉勅諸國調庸專當歷名附大帳使依例申送而使人豫知物龜惡規求遁去遂稱病故便附在京國司等調物濫惡從此

而生即此法令雖有科條所司罕能遵奉今須如是之類及在京司并他使等輒相代奉使者同奪公廩務令懲革者今被右大臣宣備奉勅內官之吏無祿之人夙夜服事身乏衣食因茲或兼收宰猶空本位或拜外吏富身京華皆將潤以俸料令得代耕而諸國皆忘舊貫便附使政公文或於失錯賈物煩於龜惡諸使擁塞職此之由宜下符諸道勿令更然○居家必用十五 辛集吏學指南除授條に遙授不釐公務之官也俗云虛職云々○延喜民部式上丁右に凡遙授國司不給公廩田并事力按に虛職なれば受領の如く公廩田などを置て直に取事能はず受領の處分を受て公廩稻を収のみ也同主稅式上丁に遙授國司公廩田云々并爲輸地子田云々又廿一凡諸國一分已上遙授兼任之輩遷任他國并京官者不得受用公廩若停任官符未到之前處分已畢有妨改帳者便加國儲又廿七 云凡按察使及記事季祿衣服厮丁衣服以陸奧國正稅交易充之自注に遙授之人不在給限○有識問答二の卷右丁に權守事云々遣遙院實隆公答に正守ハ任國ニ赴キテ吏務ヲ沙汰シ候權守ハ多ク在京ノ人任之云々並井義知書入に任國

松屋筆記卷之八十七

華頂殿侍倭學士平小山田與清稿

ノ國司ハ其國ニ赴ク也是ハ正ノ守也遙授國司ハ在京也是權守也身ハ京ニ居テ名ヲ遠ク授ル也云々按に遙授の事職原抄下卷廿五丁右 國司條に見ゆ類聚名物考稱號部十九に遙領遙任遙授の事あり可考

(一)眠藏クツロ 眠藏は塗籠也下學集など古書に見おほかり朝鮮にては今も「クツロ」として毎家にこれを營造し主人の住所とせり四方及天上をかべにぬりこめ前後に口をあげ出入にかゝみて中にいれば立てもかしらつかへざるやうにかまへたるよし對州の門人國分氏が物語也爾爾太平記廿七ノ四ウニ眠藏ニハ波ノ枕(二)み山みよし野みくま野などいふみの字の義 みよし野み熊野みやまみねみそらみたにみさきみたけみさかなごいふみの字は奥深くもあれ高もあれ底深くもあれすべていたり極れる所にいふ詞也ごりかへはや物語によしの、奥のみよし野といふ所とあるをも思ふべし

(三)一生五分 與清曰人間一生五分にて保つべしそは智二德二勤二信二運二なり歌に「生を十ぶんにして智德勤信運二ぶんづゝが安樂」智は智慧也德は仁德也勤は格勤也信は信心敬恭なり運は生得の運命也



(四)銘 國語<sup>七の卷</sup>五丁ワ 晉語一注に刻器曰銘謂鐘鼎之戒也云々

(五)寵賈<sup>怨</sup> 晉語一<sup>國語七卷</sup>六丁左 以寵賈<sup>怨</sup>不可謂<sup>德</sup>云々君寵を蒙るものこれに心すべし

(六)族少して敵多きは天助なし 又云少<sup>族</sup>而多<sup>敵</sup>不可謂<sup>天</sup>云々注に少族族類少也多敵多<sup>怨</sup>也不可謂<sup>有</sup>天助也云々朝鮮人豊大閣を指て親戚なき一夫なるよしいへり

(七)娣<sup>妹</sup>の字義 女子の長を娣といひ次を娣といふ男子の長を兄といひ其次女を妹といふ娣妹ともに「イモウト」とよめど字はおなじからず晉語一<sup>國語七卷</sup>に献公伐<sup>驪戎</sup>之滅<sup>驪子</sup>獲<sup>驪姬</sup>以歸立以爲<sup>夫人</sup>一生<sup>奚齊</sup>其娣生<sup>卓子</sup>云々注に娣大計切女子同生謂<sup>後生</sup>爲<sup>娣</sup>於<sup>男</sup>則言<sup>妹</sup>也云々と見えたるにて知べしまた爾雅<sup>註疏本三</sup>釋親に男子謂<sup>女子</sup>先生爲<sup>娣</sup>後生爲<sup>妹</sup>云々とありて妹は男子の妹にいふなるを倭名抄<sup>二卷十</sup>兄弟類部に爾雅云女子先生爲<sup>娣</sup>音止女兄和名阿爾日本紀讀與<sup>兄</sup>同云々また爾雅云女子後生爲<sup>妹</sup>音昧和名伊毛宇止日本紀私記云<sup>以呂</sup>止云々と記されしは上の男子の二字に心づかずして

誤られたる也喪葬令集解にも娣妹俗云<sup>阿爾於伊毛</sup>と見ゆ

(八)其父を滅して其女を畜<sup>ふ</sup> 晉語一<sup>國語七卷</sup>八丁オ 驪戎を滅して其女の驪姫を納て夫人とし其娣をも妾とせるをり史蘇告<sup>大夫</sup>曰<sup>今</sup>君滅<sup>其父</sup>而畜<sup>其子</sup>禍之基也云々按に武田信玄木曾を滅して其女を妻とし勝頼を生て遂にこれがために國を亡せり倭漢の證例いちじるしといふべし

(九)給料内舉外舉自解狀狀 桂林遺<sup>儒門</sup>繼塵給<sup>學問</sup>料一事條に號<sup>給料</sup>後號<sup>學生</sup>也位署等書<sup>學生</sup>也此事備繼塵之初道也學<sup>費</sup>之燈燭料申賜旨自<sup>穀</sup>倉院<sup>配分</sup>也故云<sup>給料</sup>也今則雖<sup>爲</sup>告朔餼羊<sup>必先</sup>申請也此後當氏并江家學生等者在<sup>文章院</sup>稽古積功也藤氏人者給料之后在<sup>勸學院</sup>成<sup>稽古</sup>也兩院各有<sup>二人</sup>宣旨<sup>必</sup>獻<sup>上</sup>宣旨<sup>每度</sup>之儀也所望之狀狀云<sup>之内</sup>舉<sup>或父</sup>或祖<sup>父</sup>舉<sup>申</sup>也無<sup>父</sup>祖<sup>時</sup>自身<sup>申</sup>賜云<sup>之</sup>自<sup>解</sup>云々儒卿又舉奏古來之義也狀狀文章四六也書調時又別<sup>副</sup>消息<sup>付</sup>職事也上古者年<sup>齡</sup>闕<sup>申</sup>之近代者幼年<sup>二三</sup>歲之時即<sup>申</sup>之<sup>二</sup>歲之時<sup>也</sup>雖<sup>然</sup>七<sup>六</sup>歲許之時申給宜也堅固幼少者無<sup>冥</sup>加<sup>歎</sup>可<sup>得</sup>意事也若又年

齡馳過之人者三年以上付<sup>上</sup>申給也假令十五歲之人者十二歲計書<sup>上</sup>年紀也此事非<sup>會</sup>自由之義<sup>古</sup>來如此故二歲之時號<sup>三</sup>歲<sup>一</sup>歲付<sup>上</sup>也省試獻<sup>詩</sup>計<sup>之</sup>之人二三歲之時又如<sup>此</sup>之例也云々○口傳抄云内舉<sup>ハ</sup>不<sup>隱</sup>子外舉<sup>ニ</sup>ハ不<sup>隱</sup>仇起<sup>自</sup>晉<sup>部</sup>侯之舉<sup>子</sup>見<sup>晉</sup>○無<sup>父</sup>祖之時稱<sup>自</sup>解<sup>自</sup>身<sup>申</sup>云々此事子難<sup>信</sup>用<sup>子</sup>申<sup>學</sup>問料之時依<sup>無</sup>父<sup>祖</sup>故大藏卿顯長入道令<sup>商</sup>量<sup>歎</sup>狀等令<sup>計</sup>會<sup>然</sup>處<sup>自</sup>解<sup>例</sup>舊<sup>草</sup>不<sup>見</sup>及<sup>又</sup>大藏卿入道家傳未練也於<sup>時</sup>了見<sup>之</sup>義歎<sup>不</sup>審也無<sup>舊</sup>例<sup>者</sup>予<sup>一</sup>代之誤<sup>不</sup>可<sup>爲</sup>後<sup>例</sup>也<sup>草</sup>在<sup>下</sup>○瑞雲院贈左

府記云所望ノ狀是ヲ内舉ト云フ或父或祖父舉申卿位ニ昇進兩三人ヲ舉申四品一巡一人ヲ舉五位ハ舉セズ藤家ハ四位以後數輩舉奏ス傍若無人事也云々以<sup>之</sup>思<sup>之</sup>父<sup>五</sup>位時不<sup>舉</sup>儒卿舉之例者應永七年四月散位正五位下菅原爲興息男爲嗣給料父舉申之處歎狀不<sup>被</sup>用<sup>之</sup>同十一年十二月迎陽御舉也<sup>草</sup>在<sup>下</sup>如此之時自解之申狀尙以不<sup>審</sup>次第也舊例可<sup>尋</sup>決<sup>矣</sup>○申<sup>學</sup>問料一事被<sup>尋</sup>儒卿一例擬祖長綱卿請文云  
長勝學問料所望事桃宮<sup>桃宮者後誠粟田</sup>三位歎狀加<sup>一</sup>見<sup>返</sup>上<sup>之</sup>儒卿第二之舉者皇澤無變之恩也所<sup>内</sup>

舉<sup>無</sup>子細<sup>宜</sup>在<sup>時</sup>儀<sup>以</sup>此<sup>趣</sup>可<sup>令</sup>洩<sup>披</sup>露<sup>給</sup>長綱誠恐謹言

十二月十八日

刑部卿長綱

奉行頭左中辨忠光朝臣也

右一紙以<sup>迎</sup>陽<sup>御</sup>筆蹟<sup>注</sup>記<sup>之</sup>畢

長勝者淳嗣朝臣之弟也仍云<sup>第二</sup>之舉<sup>歎</sup>狀<sup>舊</sup>章<sup>卿</sup>位<sup>之</sup>時<sup>者</sup>稱<sup>不</sup>書<sup>位</sup>署<sup>也</sup>靈<sup>者</sup>之<sup>時</sup>端<sup>先</sup>歎<sup>狀</sup>舊<sup>章</sup>卿<sup>位</sup>之<sup>時</sup>者<sup>稱</sup>不<sup>書</sup>位<sup>署</sup>也<sup>靈</sup>者<sup>之</sup>時<sup>端</sup>先

(十)陰子<sup>陰</sup>孫 同書陰子<sup>陰</sup>孫事條に父之位高時者云<sup>陰</sup>子<sup>祖</sup>父之位高時云<sup>陰</sup>孫<sup>以</sup>父<sup>祖</sup>之位<sup>定</sup>學<sup>生</sup>之位<sup>故</sup>也此事朝廷者無<sup>如</sup>爵<sup>是</sup>同<sup>事</sup>也儒門者以<sup>陰</sup>子<sup>陰</sup>孫<sup>爲</sup>初<sup>位</sup>也但於<sup>令</sup>者諸<sup>人</sup>皆以<sup>陰</sup>子<sup>陰</sup>孫<sup>定</sup>也當時者諸家皆以<sup>五</sup>位<sup>爲</sup>初<sup>位</sup>間<sup>不</sup>及<sup>此</sup>義<sup>也</sup>儒門初位者爲<sup>六</sup>位<sup>條</sup>專用<sup>此</sup>義<sup>也</sup>儒者不<sup>越</sup>次<sup>第</sup>之法也云々また陰子<sup>陰</sup>孫<sup>或</sup>記<sup>云</sup>現在<sup>之</sup>父<sup>在</sup>于<sup>時</sup>書<sup>陰</sup>子<sup>現在</sup>之<sup>祖</sup>父<sup>在</sup>于<sup>時</sup>書<sup>陰</sup>孫<sup>云々</sup>細注に慶長十三九十一陰子<sup>陰</sup>孫<sup>之</sup>理<sup>如何</sup>之<sup>由</sup>勅<sup>問</sup>之間<sup>此</sup>說<sup>之</sup>旨<sup>勅</sup>答<sup>申</sup>處<sup>重</sup>而<sup>仰</sup>陰<sup>ノ</sup>字<sup>ハ</sup>若<sup>シ</sup>陰<sup>字</sup>ノ<sup>心</sup>ニ<sup>テ</sup>有<sup>之</sup>哉<sup>陰</sup>ハ<sup>庇</sup>陰<sup>ト</sup>ツ<sup>キ</sup>タル<sup>字</sup>也<sup>オ</sup>ホ<sup>フ</sup>也<sup>陰</sup>字<sup>ノ</sup>心<sup>ハ</sup>先<sup>祖</sup>ノ<sup>位</sup>ヲ<sup>繼</sup>グ<sup>子</sup>孫<sup>ト</sup>云<sup>義</sup>也<sup>然</sup>者<sup>陰</sup>子<sup>陰</sup>孫<sup>其</sup>心<sup>通</sup>ズル<sup>歎</sup>之<sup>由</sup>被<sup>出</sup>宸<sup>筆</sup>已<sup>下</sup>云々

(十一)虛題實題 同書題事條に口傳抄云試詩之時



有<sub>二</sub>虛題實題<sub>一</sub>虛題トハ風月題也實題トハ史書之題也  
試詩實題之時猶本書置之也

(十二) 款狀内舉狀 同書補ニ文章得業生ニ者必中ニ課  
試宣言ノ例條に瑞雲院贈左府記云此事備舉也子細秀  
才ノ款狀如<sub>レ</sub>件款狀ヲ書テ文章博士署ヲ取テ職事ニ  
付ク職事奏聞ノ後先年限并ニ例ヲ勘ベキ由宣下覆奏  
ノ後式部省ノ續文ニ任テ請ニ依由宣下セラル、也近  
年下勘ニ及バズ事限至レバ宣下例アリ是モ款狀ノ與  
ニ外記宣言ノ詞ヲ書載ス秀才ノ宣下カマハズ職事ニ  
付ラル、狀是ヲモ内舉狀ト號ス此宣下ノ後獻策ヲ遂  
ルナリ云々

(十三) 輔宣 同書郡事屋申文事條に家記云郡事中文  
者試衆申ニ大卿之狀也宣<sub>ニ</sub>瑞雲院贈左府記云申文  
ノ袖ニ式部大輔署ヲ加フ是ヲ輔宣下ト號ス高檀紙二  
枚ニ書テ内々狀ヲ副テ遣<sub>レ</sub>之云々又云輔宣ヲ當日  
省家ニ下云々

(十四) 貫首黃丹生練雪下長絹 貫首トハ頭中將頭辨  
ノ兩頭ヲ云兩貫首トモイヘリ染色ノ黃丹ハ「ワウニ」  
ト訓ベシ生ハ生絹也練ハ綾ノ「也雪ノ下ト云ハ紫ノ  
緯白ノ「也長絹ハ古クハ長絹短庵絹ナド云テ長キ絹ノ

「ナレド後ニハ服ノ名トナレリ

(十五) 布袴 布袴ハ鹿苑院參内ニ常ニ召レシトイヘ  
リ差貫束帶ヲ布袴ト云源氏裝束抄ノ頭書ニ布袴トハ  
指貫ノ事也昔ハ布ニテ調シタルユエノ名也云々ホウ  
コト訓ズ

(十六) 本府の隨身 本府ノ隨身トハオホヤケヨリ大  
臣ニタマハリテ召具ス將監將曹ヲイヘリ當時ハサル  
「ナクテ大臣大將カケシ家ニテ關東參向ナドノ時ハ  
自分ノ家司ヲ隨身トスルユエ本府ト云ハ空名也

(十七) 雛頭 雛頭ト云「ハ高倉家ノ四箇ノ秘傳也雛  
頭矢ガラミ關腹續平緒ノ四箇也太刀ノ上ヲ左ヘ越テ  
前ニハサムヲ雛頭ト云又引折ノ仕様ハ右ノ脇ニハサ  
ミ若長クバ前ニモハサム也是ヲ賀茂ノ引折ナド、モ  
云秘事ニシテ家傳トス

(十八) 前張 神樂歌ニサイバリニ衣ハフカク染テキ  
ントイヘルハ古親王ノ前張ノ著衣前ハ大精好後ハ小  
精好也上ハ半尻下ハ前張ヲメサル、也今ノ能ノ大口  
ヲマヘウシロニシタルヤウナル物也

(十九) 軍團の兵士衛士防人 兵士ハ國ニアルヲ云衛  
士ハ在京スルヲ云防人ハ鎮東鎮西ニ向ヲ云

(廿) 襖狩衣 襖狩衣ト云名目愚童訓ニ見ユ襖ノ製今  
ハ絶タリ昔ハ表中倍裏ナド具シテ製シ防人ナドニ賜  
ハリシモノ也今ハ素襖ノ名アレド舊製ニハアラザル  
ベシ

(廿一) 大衣は波江とよむ 延喜式ニ大衣ノ華人白丁  
ノ華人アリ大衣ハ白丁ノ頭分ノモノト見エテ其名ハ  
衣ノ製ニ据タルナルベシコレヲ「ハエ」とよむ百寮訓  
要別注三丁ウ 願圖 儀式ハ八丁ウ元正受朝賀儀に華人司官人  
白丁華人一百廿二人一分  
陣<sub>ニ</sub>應<sub>ニ</sub>天門外之左右

(廿二) 褐衣 隨身ノ裝束ニ褐衣アリ左右ニ依テ  
替リ目アリ鴛鴦獅子ハ隨身ノ紋也疊繪ハ鶴ノ舞タル  
ヤウナルカタ也篋形ハダキミヤウガ杏葉牡丹ナドノ  
類ヲ云褐ハ紺色也裁縫ハ狩衣ニ身ハ二幅ナルモノ也  
外ハ狩衣ニカハル「無當時公家隨從ノモノ、著用ハ  
布ニテ製ス關東隨身ハ寛永行幸ノ一日晴ノ例ニテ金  
入ニテ製スル也

(廿三) 狩袴 狩袴ハ奴袴ニ少シ違ヒタル由イヒ雛形  
ナドヲモ示サズシテ公家ニテ秘スル物也願圖 扶桑略記  
恒武紀卅  
九丁

(廿四) 十徳掛素襖 關東ニテハ掛素襖ト云也御轅ノ  
者御貸<sub>カ</sub>目ヲ著用也袴ヲ著當腰有リ宗五大尊子上七十二  
丁ウ同下十九丁ウ

願圖 東寺文書抄ニ「廿六丁ウ舊の十と云々」退律抄に「十徳とい  
用せし事奇異雜談にありし云々」○撤入記類聚四百十四卷卅一丁ウに  
御<sub>ニ</sub>こ<sub>ニ</sub>し<sub>カ</sub>き<sub>ノ</sub>いで<sub>テ</sub>立<sub>テ</sub>や<sub>ウ</sub>同御物もち候人夫いづれも十徳をうへに著  
候て其上に白きゆの帯にする也御<sub>ニ</sub>こ<sub>ニ</sub>し<sub>カ</sub>き<sub>ノ</sub>御  
物もちい<sub>ハ</sub>か<sub>ハ</sub>ほ<sub>シ</sub>も<sub>候</sub>へ<sub>此</sub>分<sub>ニ</sub>出<sub>立</sub>候<sub>べ</sub>し<sub>云</sub>々

(廿五) 中啓 中啓當時ノ流例ハ妻紅四品以上持<sub>レ</sub>之  
云々金地銀地共ニ五位年始大紋ニ持<sub>レ</sub>之事也人ニヨ  
リ年始大紋ノ時墨繪ノ蓬萊ナド白地ヲ持モアリ金銀  
隨分用テヨシ尤衣冠ノ時金地ヲ持也

(廿六) 小諸眉烏帽子 御童直衣ノ内召サル、也御十  
六歳ヨリ内ノ「也大モロマユノ烏帽子ト云ハナシ

(廿七) 色紙疊紙 疊紙ニ鳥子ノ五色ヲ用ルヲ色紙ト  
云ソメ紙トハイハズ染紙ハ齋宮ノ忌詞ニ佛經ヲイヘ  
バ也疊紙ハ松重朽葉ソノ外四季通用ノ色宜シ衣文ノ  
色ニテ調進スベシ紙ハ鳥子也又檀紙ニ箔ナドチラシ  
テ用フルモアリ

(廿八) 内侍宣 内侍宣下ハ法中ニナイシセンゲトイ  
ヘリ此ハ女官ノ内侍ノ宣ニハアラズ藏人ノ宣也藏人  
ノ唐名内侍也大政官ヲ經ズシテ直ニ藏人方ノ奉行ス



ルユエノ名也タイシセンハ「タ」ヲ濁リ「シ」ヲ清テ唱  
 ベシナイジセントハ云ベカラズ  
 (廿九)上卿目下薦 職事 上卿ハ事ヲ執行フ日ノ上  
 席ノ者ヲイヘリ日下薦ハ其日ノ一ノ下ノ者ヲ云六位  
 藏人ニ云「也職事ハ事ヲ執リ行ヒ役ヲツトムル者也  
 其日ノ役ヲトリ行フ義也藏人頭ノ事トノミ思フベカ  
 ラズ  
 (卅)砌下 砌下トモ「ミギリ」トモ云ハ大庇ノ下雨ダ  
 レ落ノ所切石アル階下ノ前是ヲ砌下ト云大外記ナド  
 地下ノ者圓産ニツキ地下ノ者ハ皆コ、ニ居ル也  
 (卅一)角赤 大角赤ハ馴小袖ヲ納レ里へ遣ス古實ナ  
 ドアリ小角赤ハ初紅葉ノ事合セ納ル藤原基俊ナドノ  
 古實アリ后宮名目抄ニ見ユ大角赤ハ棚餅リノ具ニア  
 ラズ小角赤ハ黒棚ニオク也厨子棚黒棚トモニ婚禮三  
 ツ目ノ傍也  
 (卅二)紅裏ノ事 單紅染ノ事古ノ遺風ニヤ今婦人紅  
 ノ裏ヲ著ル「長崎」ノ外科栗崎道宇が門人河野道靜ガ  
 物語ニ異國人ギヤマンノ如キ眼鏡アリテ人ヲ見ルニ  
 衣服ヲ上ヨリ能ク肌ヲ見ル「也コレニ日本ノ紅ヲ著  
 レバ見透ス「能ハズ故ニ長崎丸山ノ遊女必紅裏ヲ著

ルトイヘリ云々此說風説ト云書ニ見ユ  
 (卅三)細長 細長ハ半尻ノヤウナル物也三巾バリノ  
 物也袖括リ半尻ノ如キ毛抜形ヲ結ブウシロニ背縫ニ  
 毛抜形結ヒテアリ小兒ノ脊縫ノ如シ地白ク若松ニ舞  
 鶴松ハ横ニハヘタリ臺ハ高サ三尺八九寸ト見エタリ  
 雲足角八折入クリタリ白磨キ胡粉繪扇ノ摸樣アリ平  
 包ハモ白ク紋小葵ノ綾也ト風記ニ見ユ  
 (卅四)鬼瓦 『風記云河泊面水神ノ名也世人軒ノ鬼  
 瓦ト云ハ此事也守武千句ニ「ウ」第一に「せちぶんや寺にも物を  
 がめつ」  
 (卅五)家作ニ「ウシ」ト云物 土倉ヲ作ルニ棟木ヲ  
 「ウシ」ト云ハ雨師ニテ雨神名火災ヲ鎮護スルヨシノ  
 ワザ也  
 (卅六)女官裝束 女官裝束ハ裳唐衣ハ束帶ニ准ズ小  
 掛姿ハ衣冠ニ准ズ大掛ハ今イフ時服ニ准ズ小掛ハ今  
 ノ小袖ノ類ニテ古ヘ女官ノ常服也纏頭ノ時ハ必小掛  
 ヲ用ラル「也  
 (卅七)鈍色 鈍色ハ淺黄ニ鼠色ノマジリタル也心裏

ノ服也八雲御抄に見ゆ  
 (卅八)引直衣 風記云御引直衣長サノ事内々御厨子  
 所ノ預高橋若狹守ニ尋シニ是ハ御内ノ「ユエアカラ  
 サマニ申難シシカシ常袍ハ襦マデ壹寸長ナレド御引  
 直衣ハ五六寸モ長クイウニ有ベシト申サレキ云々  
 (卅九)亂聲振舞 亂聲ト云ハ壹越調ニアリ物ノ始ニ  
 用フ笛バカリニアル曲也太鼓ヲアヒシラフ事アリ樂  
 ヲ始ムルニモ用ル也榮花物語ノ音樂ノ卷ニモ治安三  
 年十月十四日御堂供養ノ時亂聲ヲ吹「ヲノス然レバ  
 此曲ヲ用ル「久シキ「也行道ノ出タチニコレヲ吹也  
 云々  
 (四十)左方右方ノ事 樂ニ左方右方あり樂說紀聞下  
 卷地下樂人家業事條に左方トハ南都ノ樂人右方トハ  
 天王寺ノ樂人ヲ云ナリ云々  
 (四十一)樂器當時用不用の差別 樂說紀聞下卷に  
 和琴ノ事琵琶ノ事三之鼓ノ事  
 鼓右方ハ三之鼓ヲ用ル也

太鼓ノ事笙ノ事篳篥ノ事横笛ノ事篳篥ノ事  
 ノ事 拍子ト 琴ノ事祝故ノ事ニ種ナリ  
 舞樂器並服ノ事條に一鼓二鼓奚妻鼓劔鉞面雞冠白  
 杖蛇 運城樂ニ此ヲ挿頭カサシノ花ト云櫻或ハ秋冬ノ作り花  
 アリ夏ニゴモト云竹敷桐ノ文 摺袴濃袴下襪半臂打衣 仁安三年  
 伊輔通打シカキ舞童コレヲ狩衣 衣ハ單ニテ裏ナシ 云々また  
 衣ヲ著ス絲鞋ヲハク也 狩衣 衣ハ單ニテ裏ナシ 云々また  
 本朝用ザル樂器事ノ條に 瑟篋篋阮咸新羅琴 類ナリ  
 磬筑是ハウチ 埴篋簫長笛鐵笛 類ナリ 此等ノ類ハ名ノミ  
 ニテ本朝イマダコレヲ用ヒズ云々  
 (四十二)樂器ノ袋事 樂說紀聞下卷樂器ヲ入ル袋ノ  
 事ノ條ニ總ジテ樂器ノ袋ハ表ハ錦ノ赤地ニ浮線綾ヲ  
 用ヒ裏ハ唐綾ヲ用フ色ハ定ラズ等ノ袋ハ錦二幅ナリ  
 和琴袋モ同ジ也唐錦ハ 琵琶袋モ同事也琴ノ袋ハ紺地金  
 襦ヲ用ル「本式也云々  
 (四十三)清少納言 ○清原系圖 群書類從卷  
 天武帝 舍人親王 貞代王 有雄  
 通雄 賜清原姓 海雄 筑前守 房則 豊前守  
 深養父 内藏允藏人 顯忠 下野守 元輔 肥後守  
 從五下雜色



女子 清少納言 按二十四卷系圖の本には清少納言を漏したり○作者部類庶女に清少納言清原元輔女一條院皇后宮女房後二詞二千二續一今一玉三載一云云○枕草子卷廿五丁左にいさゝかなる御文をかきてたまはせたりあけて見れば「もとすけか後といはる君にもよこよひの歌にはつれてはをる」とあるを見るにおかしき事ぞたぐひなきや云々按后宮定子の御歌也今宵庚申にて女房たちに歌よませられたるに清少納言一人よまざりければかく御戯の歌を書てとらせたまへる也此歌に元輔が後といはる君と有此外枕草子中に元輔の女カメのよし書たる所見ゆ又皇后宮定子につかへ奉り上臈の次にたまじらひたるを内侍になすべき沙汰などの事も此草子に見えたり榮花物語には定子の御妹淑景シヨクキョウ舎の女御の御もとに宮づかへせしよしも有淑景舎女御は三條院の女御なり○新古今上に元輔がむかしすみける家のかたはらに清少納言すみける比雪いみじうなりてへだての垣もたふれ侍ければ申つかはしける赤染衛門「あともなく雪ふる里はあれにけりいつれ昔の垣ねなるらん」按

赤染家集にも出て「荒にけり」を「荒たるを」につくり「なるらん」を「とか見る」に作れり續千載中に老の後こもりゐて侍りけるを人の尋てまうできたりければ清少納言「とふ人に有とはえこそいひ出ね我やはわれとおとろかれつ」按契沖が百人一首改觀抄清少納言歌注安藤爲章が年山紀聞卷二などに此詞書によれば都のかたほとりにこもりゐける成べしといへり○古事談卷二に清少納言零落之後若殿上人アマタ同車渡彼宅宅前之間體破壊シタルヲ見テ少納言無下ニコソ成ニケレト車ノ中ニ云テ本自棧敷ニ立タリケルガ籬ヲ搔揚如鬼形之之女法師頼ヲ指出シテ駿馬之骨ヲバ不買ヤアリシト云々房注に燕王好馬買骨事也云々○また頼光朝臣遣四天王等令打清監之時清少納言同宿ニテアリケルガ依カガ似ニ法師欲殺之間爲「尼之由」エントテ忽出カガ開云々清監旁注清原元輔男云々按清少納言老の後零落して尼になり都下の廢屋に住たるよし也かく古書に明證あれば四國へさすらへけん事いかにぞや鬼形のごとく老さらばへる女法師はるかに海原をしのぎてわたりゆくべくもおもほえず○新拾遺後に法華經序品清少納言女「白妙の光

にまがふ花見てや紐とく花をかねてしるらん」按續作者部類庶女に清少納言女新拾一首云々改觀抄に此むすめの父は行成卿にや云々○倭漢三才圖會七十二の本に清少納言古跡萬里小路通中御門與春日通之交今爲民家清少納言一條院皇后宮女房也舍人親王之曾孫通雄始賜清原姓通雄五世之孫元輔之女故以清字長德長保年中著述號枕草紙與紫氏之源氏物語相並行于世皇后薨後移四國尋於洛誓願寺出家往生即彼寺有古墳或曰老後死于阿波撫養郡登村有墓云々○速水見聞私記卷三に清少納言墳の事讚岐國金毘羅の前に塚あり所の人は是を清塚イヅカと云よし實に清少納言塚也二十年以前此墳をあばかんとせしに所の人夢想に「うつつなき跡のかたちをたれにかもとはれし事のありてしもかな」と此事領主へも申入其儘おかれしよしと云々此說明音寺了因讚州へ下向見聞之云々○白虎隨筆卷下に清少納言墳墓讚岐國金毘羅山ノ麓ニアリ正徳初年中此處ニ時の太鼓ヲ建ベシトテ件ノ古墳ヲ掘崩シケルニ其夜奉行シ侍ル者ノ夢ニ何方トモナク女來リテ「現なき後のしるしを涙にかとはれて跡のありてしもかな」ト云歌ヲヨ

ミテ悲歎シ侍リシ夢覺テ後領主へ訴へモトノ如ク石塔ヲ建テ太鼓堂ヲトリ外ノ地へ移シケルトゾ丸龜ノ玄安寺長老大年ノ物語也云々○結駝錄卷上に清墓ノ事讚岐金毘羅山ニ「清墓アリ相傳フ清少納言ノ墓也ト寺僧祐覺曾テ清少納言ノ歌ヲ夢ムト云「ウツ、ナキアトノシルシヲタレニカハトハレシナレトアカテシモカナ」或人云是金毘羅山ニハ非ズ安藝一士人ノ家ノ事也ト」○小窓雜事卷五に近頃讚岐國加茂ト云所ノ土民ノ夢ニ美女一人來リテ自ハ清少納言ト云者也昔都ヨリ此地ニ下リテ終ニ空シクナリケレドモ人其所を知ルコナシ汝シルシヲ立テ我終レル地ヲ世ニ知ラセヨトテヨメル歌「ウツ、ナキ跡ノシルシヲ誰ニカハトハレテ後ノアリテシモカナ」墓ナド築侍リケルニヤ云々○閑田耕筆卷一に讚岐象頭山の鐘樓の傍に石の誌有テ「清少納言の古墳と傳ふいつの比とかや此墳を他へ移さんせしに金光院と云坊の住侶の夢に一婦人來りて云々とみてさめぬさてはまことに清女の墓なるべしとおもひてもとのまゝにさし置たりとぞ又同國白鳥といふ所の鏡が峯云々といふにも京の女郎といふ墓有テ清女也といへどもたしかならず又



阿波の里の海士にも清女入水せるを埋めたると云墓あれどもますく信じがたしとなん云々おのれおもふに讃岐には清女の所縁ある歟象頭山より一里餘の所にて道隆寺と云寺に古墓ありて道隆親王と札を建たり親王は必誤にて中關白道隆公なるべし此寺の造立の主故に即寺の號に呼ならん此關白の莊園この國にありて其女定子皇后に仕へまつりし清女なれば皇后かくれさせ給ひ關白の御系も衰給ひて後清女も此ゆかりにつきて此國にさすらへけんはことわり成べし云々○春曙抄一に玄旨法印御説に清少納言は一條院の皇后宮の女房と云々此皇后宮と申侍るは「中關白道隆公の御むすめ定子と申侍し此草紙の所々に宮のおまへと侍る是也云々しかるに中關白殿かくれさせ給ひて云々伊周公隆家卿など遠流の事ありき云々清少納言もさるあれたる所にすみ四國にもさまよひ給ひしにこそ云々或説に清少納言誓願寺にて出家して帝の御かへりみをかうふりいみじき往生を遂て彼寺に墓も有と縁起に見ゆ時代にあはで一旦はおちぶれしかども終焉の」さまはいみじかりけん事才有し人のしるしめでたく侍るにや○與清按清少納言

阿波の撫養にて死たるよしは倭漢三才圖會の説にて阿波名所圖會にそこに今も五輪の石塔ありといへりされど古書の趣によれば京都にてうせたるにや誓願寺に墓ありといふも古書にたしかなる證なければいかゝあらん○右所答阿波少將君之問也  
(四十四)里の海士 阿波國名所に里之海人あり夫木抄夏二水鶏歌に家集海邊水鶏源仲正「里のあまはなるとの浪に耳なれてたゞくひなにおとろかすと」か「此歌歌枕名寄南海部 阿波國條にも載て果の句「おごろかぬかな」と有後拾遺二にかたらひ侍ける女の」と人に物いふと聞てつかはしける藤原實方朝臣「うら風になひきにけりな里の養のたくものけふり心よわさは」狭衣活字本三下卷に「漢かり舟なほにこり江にこきかへりうら見まほしの里のあまかな」此外里のあまとよめる歌舉盡すべからずされど必阿波の地名なるべくおもはるゝは源仲正の歌一首のみその外はいづれの里の養ならんもはかりがたしことに狭衣の歌は鳴門わたりの地名とも聞えず後世題詠の歌も仲正が歌によりて鳴門水鶏などよみ合せたるは阿波の名所とすべしさて里の海人といふ地名もいかゝあら

んもとは「さ」とてふ所の海人なればさはよみ出けん和名抄卷六常陸久慈郡の郷名に佐都あり今本には佐の字を脱したり神名式續日本後紀三代實録などには薩都神社と見え今も里宮とて社も村名も存れりまた和名抄卷九に豊前仲津郡の郷名に狹度ともありかく佐都といふ地名の例これかれ見え佐渡の國も狹門の義にて海門の狹きによれるを思ふに鳴門近邊の狹門なりければ佐都とは地名におへるにやそこにすむ海人をば里の養ともいふべきなりさて里の海人は阿波國板野郡撫養の浦にて鳴門の邊なりこゝに柿本社清少納言の石塔などあるは後人のしわざなるべし○右所答於阿波少將君之問也  
(四十五)應宣 古簡雜纂七の卷に應宣あり其寫  
應宣 留守所  
可早以金倉郷内下村爲東大寺便補保事  
右於當寺御封者令便補原郷所當先了而彼郷之  
所當令不足彼寺御封然問依且領主宿願以  
當郷下村所令加補也以尼淨覺爲領主以  
所當者令便補彼寺之御封内可停止勅事院事  
國役狀所宣如件留守所宜承知不可違失以宣

仁安三年八月 日  
左兵衛佐兼大介藤原朝臣花押  
與清按此舊文にて古代の應宣の體裁を推量べし  
(四十六)公方吉書初の案 古簡雜纂六の卷に公方吉書初の案を載たりそは  
公方吉書初案  
下武藏國 仰三箇條  
神事  
一 右神之爲神以人之祭祀 人之爲人以神之加被因 茲守式日 專如在之禮尊限 永代爲不朽之勤行焉  
農桑事  
一 國者以民爲基民者以農爲天各勵池溝堰堤 勉宜致稻穀細絹之矣  
乃貢  
一 右諸國之濟物任土之貢 早守每年之所當可致合期之進納焉  
以前三箇條所仰如件 以下  
文安三年正月二日  
與清曰此古文にて公方吉書初の案文の體裁を知べし



(四十七)制札書法并甲乙八 菊亭家書禮上卷に制札之書様

禁制 國所ヲ書

一軍勢甲乙人濫妨狼藉之事

一伐採山林竹木之事

一非分之課役申懸事

右條々堅令停止訖若於違犯之輩在之者速可處嚴科者也如件

年號月日

官受領在判

官ハ位名字ハ異名有之故不書也

幾人ニテモ有之

右制札に禁制ト書ハ主將の御詞也然ルニ禁ノ字ヨリ一文字ヲ上テ書ハ主上御言ヲ爲可闕也闕トハ無ニ比類儀也故禁裏ニテ大臣ヲ即闕ノ臣ト云モ無ニ比類臣ト云儀也

軍勢トハ拾万ノ餘ヲ云也將軍御動座ノ陣ヲ四軍ト云也軍勢ノ事也甲乙人トハ甲ハ軍兵也乙ハ雜人也強弩弱ヲ先懸スル也濫妨トハ防護ヲ亂リ破ルヲ云也狼藉トハ國衙在所ノ垣壁破却スルヲ云伐採竹木トハ非軍用良材ヲ切取ルヲ云也切ニ伐ノ字

ヲ書ハ制伐ノ義ヲ以テ書也伐トハ破ル義也取ニ採ヲ書ハ落ト云也爲下掠上科ト云義也非分ノ課役トハ非上意事ヲ號公義私曲ヲ云也課ハ仰セ也惡名ヲ課君重罪ト云義也右ノ字ヲ禁ノ字ノ通リニ書ハ制ノ御言ヲ號令ニ仕ルト云儀也停止トハ奇廢ノ言也違犯トハ事ヲ寄左右背擬儀也可處嚴科トハ死罪ニ可准矢庭ニハ非殺擄捕ヲ爲見懲置也當平軍勢トハ將帥陣也一軍トハ二万五千ヲ云也四軍ハ十万起レハ軍神モ不軍守護也謂當平トハ一軍ノ將ヨリ其組ニテ自分ノ法度也云々

○古簡雜纂五の卷に羽柴筑前守の制札あり

禁制

一當手軍勢甲乙人亂入狼藉事

一剪採竹木事

一喧嘩口論事

右條々堅令停止訖若於違犯之族者速可處嚴科者也仍下知如件

永祿二年七月日

筑前守(花押)

與清曰菊亭書札の古簡雜纂五の卷に載たる制札にて當時の體裁想像すべしまた甲乙人の甲は兵士にいひ

乙は雜人にいへる事知べし願書尺素往來

(四十八)優名 今世相撲歌舞舞妓役者淨瑠璃太夫など實名の外に大野松稻妻松本幸四郎市川團十郎染太夫春太夫などいふ名ありこは優名と稱べし五代史卷卅 伶官傳一丁に莊宗既好俳優又知音能度曲云云其小字亞子當時人或謂之亞次又別爲優名以自目曰李天下自爲王至於爲天子常身與俳優雜戲于庭云々又五丁 郭門高名從謙門高其優名也云々など見えたるをおもふべし

(四十九)同行一行 今俗同行幾許人など云一行ともいふべし五代史卅八卷三丁 宦者傳張居翰が條に魏王破蜀王衍朝京都一行至秦川而明宗軍變于魏莊宗東征慮衍有變遣人馳詔魏王殺之詔書已印畫而居翰發視之詔書曰誅衍一行居翰以謂殺降不詳乃以詔傳柱摺去行字改爲一家一時蜀降人與衍俱東者千餘人皆獲免云々この衍一行とあるは王衍が同行の者をいへる也

(五十)脊負板木薦 武和の賤民田草を採時しよいたと云物もて雨をも照日のかげをも拒ぐ事ありそは蕤やうの物に細紐をつけて左右の手に徹し脊に負也

セオヒ板といふべきを約て「シヨイタ」といへりと見ゆもとは板もて作りけん軍用の物の名の殘れるなるべし漢書晁錯が傳八丁に匈奴之革箭木薦弗能支也といへる注に孟康曰革箭以皮作如鐙者被之木薦以木板作如楯一曰革箭若楯木薦之以當人心也師古曰一說非也とある木薦は脊負板の類也

(五十一)塙遊地 漢書晁錯傳十七 內史府居太上廟塙中云々注に師古曰塙者內垣之外游地也音人緣反云々

(五十二)儒生は寡人の子 漢書霍光傳十三 諸儒生多寡人子云々注に師古曰寡貧而無禮音其羽反云々按万葉五の卷六丁に山上憶良が令反感情歌序に或有人知敬父母忘於侍養不顧妻子輕於脫履自稱畏俗先生意氣雖揚青雲之上身體猶有塵俗之中未驗修行得道之聖蓋是亡命山澤之民所以指示三綱更開五教遺之以歌令反其惑云々歌に「比佐迦多能阿麻遲波等保斯奈保爾伊幣爾可弊利提奈利乎斯麻佐禰」空穂物語藤原の君廿一にせまりしれたる大學のすのいふやう云々源氏物語少女湖月抄木にせまりたる大かくのすゆうとてわらひ







云々天野信景が鹽尻一の にふげんざうと呼櫻花實は  
 普賢堂といふべき歟宣胤卿文龜二年記詣千本念佛并  
 普賢堂櫻盛也云々普賢堂むかし千本堂に在し但般若熙  
 百首櫻川の詩叙に此櫻の事を云て或曰普賢象和訓鼻與  
 花音同花之白且大者如菩薩所乘白象之鼻也云々  
 然ればふげんざうといふもいにしへよりの名也白し  
の長きゆゑ山城名勝志二の卷五十九に普賢堂櫻在關西  
くいふにや宣胤卿記云文龜二年三月九日詣千本念佛并普  
 賢堂櫻盛也親長卿記曰明應四年二月十三日參詣千  
 本釋迦堂遺教經聽開次千本櫻一覽了般若熙百首謝人  
花詩并序櫻之於我國也云々謝之云「七年不見普賢  
 堂蝶亦東西難過墻亂後逢花春似夢一枝晴雪滿  
 衣香」小補絕句暮春看花  
賢堂花櫻川杜宇聲中春欲闌城西櫻雪  
 一株殘人生易逐落花變暗想明年子細看云々與清按  
 横川が櫻花詩并序翰林五鳳集七の卷春部にも載たり  
 横川は足利義政將軍などの比の人此序に丁亥之亂  
 といへるは應仁元年丁亥也甲午は文明六年甲午なり  
 (六十二)水向鹽尻一の卷に或人云凡そ亡者の靈に  
 水を手向るは佛法に效へるなりと予按に是我國上古  
 の習俗歟日本紀六に鮪臣が死せし時影媛哀傷の倭歌

を詠じて「玉筥に飯盛玉椀に水盛」なごいひ其葬の時  
 「水喰ごもりみな酒」の詞ありこれ我國佛法來らざる  
 以前の事也佛氏といへども餓鬼の外佛菩薩等に水  
 手向る事なし今の俗は我祖先の靈を以ていやしき餓  
 鬼として祭るもの多し思はざるの甚しきにあらずや  
 釋子云凡そ餓鬼ハ佛座に近づくべからず幽林の野處  
 を掃ひ昏時に水食を薦る事なり今佛殿の裏殊に朝晝  
 の間施鬼の祭をなす事其理なし鳩槃陀等の鬼類すら  
 祭らざる也桃樹柳樹なき清  
淨の地に祭る也況や餓鬼をや法なき僧は人の  
 祖先修行めでたくして終り且知識火下せし神靈をも  
 みなはかなく罪深き者と同じ様に施食すあさましさ  
 れば追善の法事に施食をなすは寒林の餓鬼迷鬼を祭  
 り拔苦與樂の大慈悲心に住しその福力を以て今日聖  
 靈の増進佛果を祈ることなりいやしく其靈を直に鬼  
 類にして侍するにあらずといへり施食の法は密家殊  
 に深き傳あり禪者の施食も亦理に近しとかや云々空  
 華談叢一のに亡靈薦水條六則あり可考合  
 (六十三)烏帽子鹽尻一の卷に烏帽子は唐の烏紗帽  
 の變染紙にて制するももとよりもろこしの風あり  
 國圖烏帽子ノ故事元服曾我草子十丁  
オウツ 以永式目追加廿四丁

(六十四)馬に將軍の號 五代史七十卷東漢世家に東  
 漢主劉晏周の世宗と戰て敗し晏獨乘契丹黃驢自  
 鵬窠嶺間道馳去夜失道山谷間得村民爲鄉導  
 誤趨平陽得化道以歸云々晏歸爲黃驢治旃飾  
 以金銀食以三品料號自在將軍云々與清按松を  
 大夫に任じ鷲を五位に叙し鶴を軒に乗せ馬を重葬せ  
 まくせし類いとおほかり  
 (六十五)漢土の治術不及北狄 五代史七十三卷四夷  
ウ東丹傳に契丹謂胡嶠曰夷狄之人豈能勝中國然  
 晋所以敗者主暗而臣不忠云々按に漢土の人情不  
 忠不孝の者多しそは詐譎を本として聖賢の教も人情  
 をため前後打合ざる事少からねば也  
 (六十六)總髮 五代史七十四卷夷附回鶻傳に婦人總髮  
 爲髻高五六寸以紅絹纏之既嫁則加髻帽云々文  
 選六臣注本七卷廿四丁左潘安仁藉田賦に垂髻總髮注に善作髮云  
 云此外唐書南蠻傳瘦信蕩子賦などにも總髮の字面見  
 ぬ南史廿一ノ七丁オ王融傳に髮自總髮  
列傳六十八桓温傳に桓温既而撫枕起曰既不能流芳  
 大善惡暴著於世者不能紀其始終云々晋書九卷  
 列傳六十八桓温傳に桓温既而撫枕起曰既不能流芳

後世不足復遺臭萬載邪云々  
 (六十八)厚葬之弊自秦漢以來率多聰明英偉之主雖  
 贊以厚葬之弊自秦漢以來率多聰明英偉之主雖  
 有高談善說之士極陳其禍福有不能開其惑  
 者矣豈非富貴之欲溺其所自私自私者篤而未然之  
 禍禍難述于無形不足以動其心歟然而聞温韜  
 之事者可以少戒也云々莫能原其旨也云々與清  
 曰荀子に墨子が薄葬を誹りたれど遂に秦皇燕昭の厚  
 葬の基を開りといふべし其宅兆を卜してこれを安措  
 するにしかずと知べし  
 (六十九)易土森報 江戸谷中に笠森稻荷の祠あり  
 笠森はもとの森のさま笠に似たるよりいひそめけ  
 んは笠松三笠山などいふ類なるべしさて笠森の音瘡  
 守と通へば瘡を治する事を守る神として世俗あゆみ  
 をはこぶものおほかり又はじめ土の團子を奉りて平  
 愈を祈り賽報の時は米の團子を供するならばし也五  
 代史四十二卷雜傳朱瑾傳に瑾名重江淮人畏之其死  
 也尸之廣陵北門路人私共瘞之是時民多病瘡皆  
 取其墳上土以水服人云病瘡愈更易新土漸成  
 高墳とあるは同日の談といふべし



(七十)櫻繩シユロハ 五代史四十四卷雜傳 劉知俊傳に乃於里巷一搆シユロハ爲謠言一曰黑牛出シユロハ園櫻繩斷云々櫻繩は今のシユロハ也

(七十一)釜鳴怪并金錢鳴ウツナル 釜鳴怪の事は口遊袋草子拾芥抄などに誦歌あり吉備津宮の釜鳴は吉凶を定むる兆といへり燈籠佛などの類にこそ五代史四十五卷雜傳 袁象先傳に象先子正辭積錢盈室室中嘗有聲如牛人以爲妖勸其散積以禳之正辭曰吾聞物之有聲求其同類爾爾宜益以錢聲必止聞者傳以爲笑云々(七十二)五六鏡 本朝軍器考十二卷十八に武藏鏡ト云シ物ハ木鏡ニテ今ノ世ニ五六ナド云フ物其遺制也トハ云ナリ佐々木三郎盛綱が藤戸渡セシ時ノ物也トイフ物其片方今モ世ニアリソレモ今ノ世ニ用フル所ノ如クナル木鏡ノ黒ク塗タル也西南諸蕃ノ鏡ハ木ヲ刻メル狀小籠ノ如クニテ足指ヲ其中ニカクスシユロハ棘ニ入テモ足ヲ傷ラザランタメ也トイフ事異朝ノ書ニモ見エタリ海國志 足利殿ノ比ニ伊勢ノ家ニテ鞍ト同ジク作レル木鏡世ニ猶多シ世ニコレヲノ制ヲ五六ナドイフハ五寸六寸ニ作ルベキ定レル法量アレバナルベシ云々按有職備考十三卷鞍具足部鏡の條にも此説

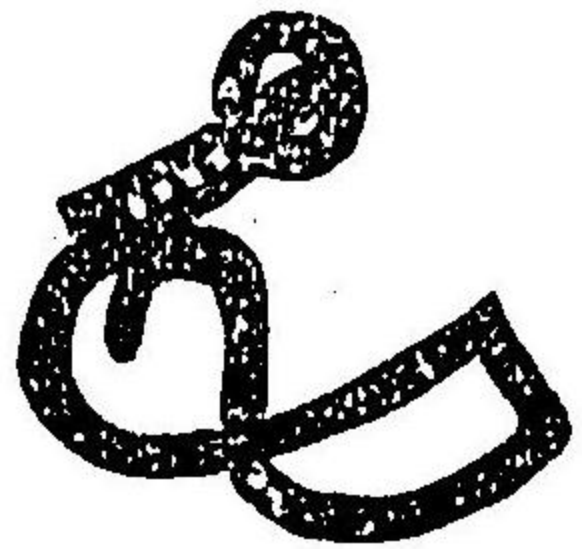
を引たり○武馬必用三卷十五 禮馬部に鏡は五六のあぶみもよくかなあぶみもよしされども當流のあぶみは拵やうに傳授あり云々按金錢鏡に對へて五六鏡といひたれば五六鏡は木鏡にいふよし也當流とは大坪流を指せる也こは大坪流の馭術家齋藤定易が撰なれば也○船艦訓二百に五六鏡鐵ニテ骨ヲ作テ木ヲ入タルヲ五六ト云何故五六ト云フ詳ナラズ或説ニ五六三十貫ノ重リヲ柳葉ニ掛テ伸サル故五六ト云トイヘリ伊勢淨齋ガ談ニ鏡ヲタメヌニハ三十貫ノ重リヲ掛ルトイヘリ右ノ説ハ二貫目タラズ用ガタシ又或説ニ五六三石ノ米ヲ重リニ掛テ伸サル鏡ヲ五六ト云トイヘリ此説モ如何又或説ニ昔甲州ノ五六ト云里ニテ作り出シタル鏡ナル故五六ト云トイヘリ甲州ノ御代官ニ尋シニ五六ト云地名ナシ右ノ説モ用ガタシ或説ニ五六ノカチト云フアルユエノ名也ト云伊勢淨齋ニ五六ノカチノ事ヲ問シニ答テ云鏡ノ蝟頭ノ付根ヨリ舌先ノ外カドマデ五寸六分ニ作ル是定法也トイヘリ此五六ノカチハ木ヲ入ル鏡ノミニモ限ラズ鐵鏡眞鍮鏡モ皆五六ノカチ也或ハ一分或五厘許僅ノ伸縮ハアレ共大度五六ノカチ也サレバ木ヲ入タル鏡ノミヲ五六ト云

ベカラズ貞丈按上古ノ鏡様々ノ形アリ唐鏡アリ唐鞍ニ用之其形輪也又靈鏡アリ其形脊ノ如シ又舌長鏡アリ鋸抄ニ圖アリ又舌短鏡アリ今ノ鏡ハ木ヲ入タル鏡モ鐵鏡モ大抵相同ジ皆五六ノカチヲ用ルユエ今ノ鏡ノ惣名ヲ五六ト云ナルベシ然ルニ後代木ヲ入タルノミヲ五六ト云鐵鏡モ五六ノカチヲ用レ五六トイハズシテ鐵鏡ト云ナラハセルニ依テ別ノ物ノヤツニ思ナルベシ古書ニハ五六鏡ト云名ハ見エズ然ル今ノ鏡モ近世ノ物ニハ非ズ後三年合戰繪前九年合戰繪一谷合戰繪保元合戰繪年中行事繪西行物語繪法然上人御傳記繪其外古畫ニ専ラ多ク五六鏡ヲ畫ケリ延喜式左馬寮式ニ木鏡見エタリ諸鞍日記ニ前駟ノ鞍ノ事形ハ移ノ如シ鏡ハカナ鏡モアリ木鏡モアリ云々古畫ノ前駟ノ體ヲ見ルニ鏡ノ形今ノ鏡也然レバカナ鏡トアルハ今ノ鐵鏡ニテ木鏡トアルハ今ノ木ヲ入タル鏡也古ハ如此カナ鏡木鏡ト稱シタルヲ兩品共ニ五六ノ矩ヲ以テ作ル故惣名ヲ五六掛ト云然ルニ鐵鏡ヲバカナ鏡ト稱シテ五六掛トイハザル故ニ五六掛ト云名ハ木ヲ入タル鏡ノ名ニ片付タル也按五六鏡の說并圖赤鳥下小車錦などにも見ゆ五六知によりて五六鏡とい

ひ鐵鏡木鏡の總名といへる説いかにぞや後には必木鏡にいふ事なれば古もさぞいひけん武藏鏡は木鏡にてこれを五六ともいふは武藏の五六の里といふ所より作り出けんも知べからず五六の里今はしらねど小六神社といふは胡祿神社にや今の赤坂の氷川社ふるくは小六の社といひけるよしものに見ゆ又六郷の里といへるも胡祿の郷の省にや美濃國にろくの渡りもあればかたろくは胡祿の省語をれより六郷とはあやまれるにても有るべし神名帳に武藏國荏原郡磐井神社あり今の鈴森の八幡宮といへるは正しき證もなければむべなひがたしつらく思ふに今の赤坂の溜池は古代よりの池と見ゆるにその近邊の氷川の神社なれば磐井神社といふべくやとおほゆ此里より胡祿に鏡に武器を製り出しけんより胡祿の里ともいひ後には磐井の社を胡祿の社とよぶことゝはなれる成べし赤坂氷川社を小六の社といふよしは總國風土記を出所にて江戸の地誌どもに記したり胡祿は神名帳に對馬上縣郡に胡祿神社胡祿御子神社あり續日本後記には胡祿と書たりこは和名抄十三 征戰具部に籠周禮注云籠音和名盛音矢器也唐令用音胡祿二字唐韻

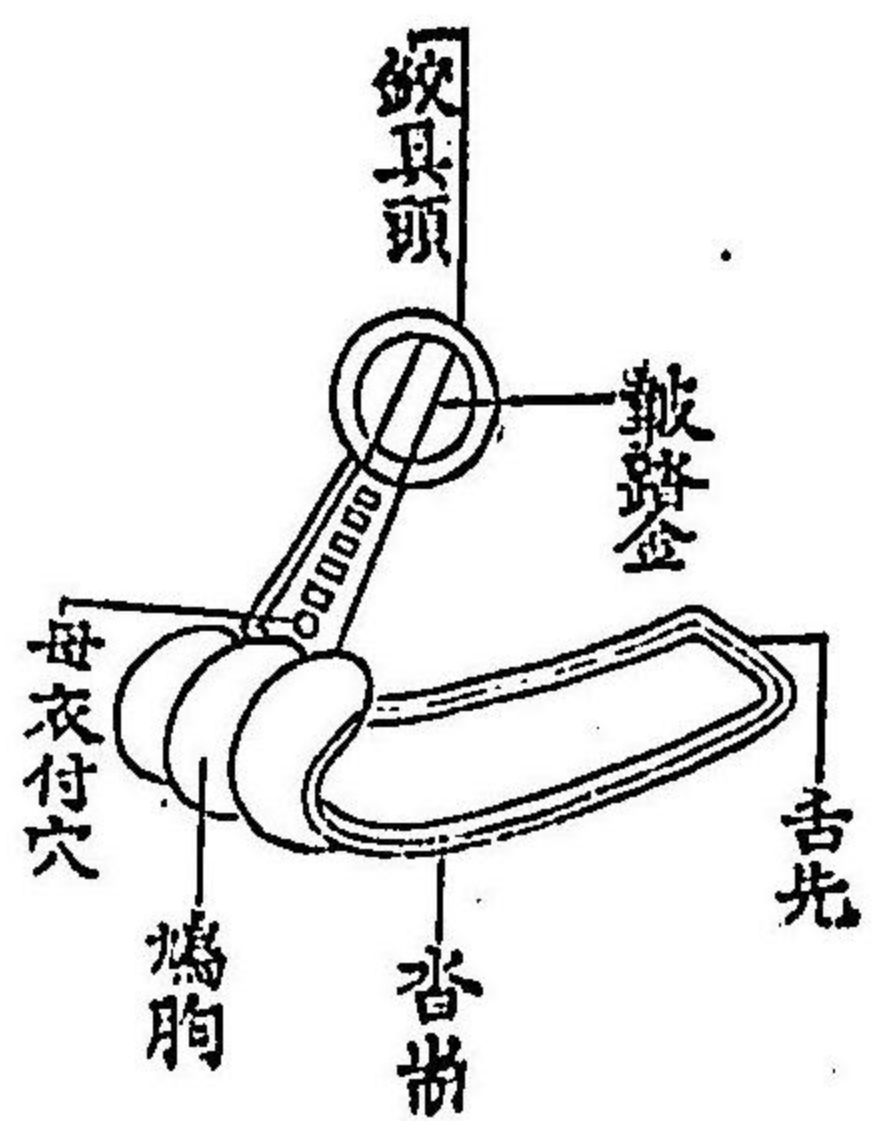


云箭籠<sup>カサ</sup>二音<sup>ニ</sup> 箭室<sup>ヤシ</sup>也<sup>ト</sup> 見えてやなくひを祭れる神社を  
 胡祿<sup>コロク</sup>といひそれを作り出す里をも胡祿<sup>コロク</sup>といふべし小  
 六は借字にて普通す小六といへる人名におこれるよ  
 しいへるはさとりざる説也○赤鳥<sup>カキ</sup>卷<sup>マ</sup>に五六鏡ノ名明  
 解ナシ諸説多ケレ共推量ノ説取ルニ足ラズ貞丈モ亦  
 推量ノ説ナリ鏡ノ骨ヲ作り其骨ニ木ヲ挟ミ入レテ作  
 リタル者ナレバ鏡ト木トチカラヲ合スル意ニテ合力  
 ノアブミナルベシソレヲ五六ト書タルユエ知レヌ事  
 ニナリシナルベシチカラト云字漢音ニテハリヨク吳  
 音ニテハロクトヨムナリ云々按此説いさうけがたし  
 合力を五六とあやまるべくもなく又方の字漢音ハリ  
 キ吳音ハリヨクにてロクといふ音ある事なし○又云  
 五六鏡骨ノ圖

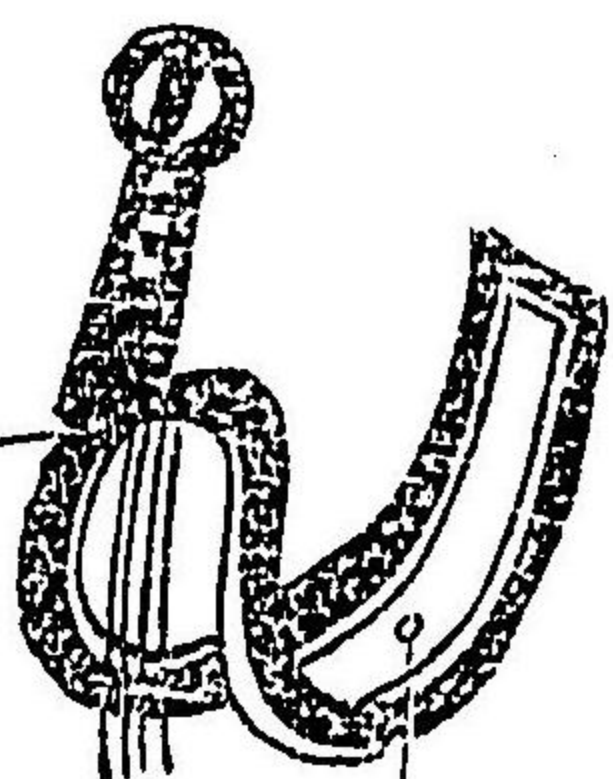


此骨ノ内ノ方二三分アリ  
 其ウチニ木ヲ入ル、ナリ  
 鳩胸モヤナイバモ皆木ナ  
 リ五六ハ合力ナルベシト  
 云「前ニ記ス按和漢三才  
 圖會卅三卷車駕之用部に

按赤鳥下卷に出せる圖に大同小異なり○武藏鏡に天  
 明元年辛丑十二月四日予古キ鐵鏡ヲ求メ得タリ甚古  
 クシテ地肌荒タリ鐵色紫ニテ鍛甚堅シ全體ハ作ノ木  
 鏡ニ似テ小形ナリカマクピアフムカズ大ニ反ズ鳩胸  
 中少シ高シ大ニ突出ズ肩ヨリ柳葉ノ通リノ外ノ端ニ  
 キテウメンアリサスガハ佐々木掛ノ如シ無左右也サ  
 スガノ出入ノ穴ハヘウタン形ニスカシタリカコ頭ノ  
 下ヨリ舌先ノ外稜マデ五六ノ矩ニ分タリ惣體無文ノ  
 鐵地ニテ内ハ朱ニテヌリカコクビノ正面ニ金澤ノ住  
 ト銘アリ今片方ノ鏡ニモ銘同ジク金澤ノ住トアリ金  
 澤ハ武藏國ノ地名也是古所謂武藏鏡也加州金澤掛ノ  
 鏡アリカコクビノ正面ニ加州金澤ノ住ト銘アリテ象  
 眼ヲ入タリ惣體サマノノ文ヲ象眼ニシタリ全體大  
 形ニシテカコクピアフムキ反リテ鳩胸ノ中大ニ突出  
 テ見惡シサスガ無左右ニアラズ武藏ノ金澤掛トハ大  
 ニ違タリ云々按に武藏鏡赤鳥小車錦いづれも伊勢貞  
 丈が隨筆也こゝに古色の鏡に金澤住とあるのみを證  
 にて武藏の金澤にて作りたらんといへるは信がたし  
 加州金澤作の古鏡に象眼なきも形の異なるもなしと  
 いふべからず○與清曰五六鏡はもと武藏國より作り

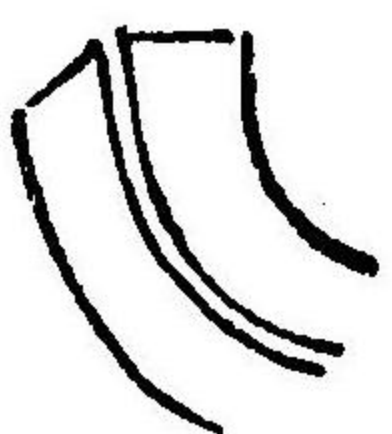


按鏡頭環以承<sup>チカラガ</sup>逆<sup>サカ</sup>處俗曰<sup>コガシラ</sup>鏡具頭<sup>ニ</sup>一名<sup>ト</sup> 其環中有<sup>ニ</sup>  
 搖旋者<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>鞍踏金<sup>ト</sup>凡<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>兩<sup>ツ</sup>鏡<sup>ニ</sup>稱<sup>ス</sup>一<sup>ト</sup>足<sup>ト</sup> 武州作出  
 者爲<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>謂<sup>フ</sup>武藏鏡<sup>ト</sup>云々<sup>ト</sup>見<sup>ル</sup>ゆ<sup>ニ</sup>○小車錦に五六  
 鏡のほね



鳩胸の骨木をはさみ入

此間へ板をはさみいるゝ也



出せる木鏡にて今の江戸の赤坂氷川明神の社邊の里  
 ふかく胡祿<sup>コロク</sup>または鏡などの武器を作り出けんより胡  
 祿<sup>コロク</sup>の里といひ社の名も小六神社などよべりし也これ  
 神名帳の荏原郡の磐井神社なるべし磐井といふよし  
 は石井の義にて井池などありしゆゑの名也さて胡祿  
 の郷といふは和名抄に洩たれど和名抄の郷名の部は  
 郷司ある里のみを擧られたりと見ゆれば古書に和名  
 抄に載られざる郷里の名おほく散見せり郷も里も通  
 はし稱て郷司はた里長ともいへり六郷といふ地名も  
 この小六の里を省て六郷といひこゝの住人の稱號を  
 六郷といひその六郷氏が領せし村々を六郷領といひ  
 けんは下總の印東庄を省て東庄といひその領主を  
 東氏と稱せるがごとし又美濃國に呂久の渡ありこれ  
 も胡祿の里を省てさいふにても有べしさて武藏の赤  
 坂邊古の胡祿の里にてそこより作り出せる鏡を五六  
 鏡といへりと見ゆ胡祿とも小六とも五六とも通用し  
 て書ると古の例なれば文字に泥ておもふべからずか  
 られば武藏鏡は木鏡の事にて五六鏡ともいへる也五  
 六の寸法によれる名といふもその寸法正しく五寸六  
 寸に當れるにもあらねば従ひがたし



(七十三)壺碑 顯昭法橋が袖中抄十九の卷丁右いしふみの條に「いしふみやけふのせはぬのはつゝ」にあひ見てもなほあかぬけさかな」顯昭云いしふみとは陸奥のおくにつものいしふみあり日本の東のはてといへり但田村將軍征夷之時弓のはずにて石の面に日本の中央のよしをかきつけたれば石文イシブキといふといへり信家侍従の申しは石の面ながさ四五丈ばかりなるに文字をよりつけたりその所をばつばといふ云々それをつもとはいふ也私云みちのくには東のはてと思へぞえぞの島はおほくて千島ともいへば陸地をいはんに日本の中央にても侍るにこそ云々按「いしふみやけふのせは布」云々は堀川百首後朝戀の條に出て藤原仲實が歌也夫木抄布部には初句「いしふみの」と有新撰歌枕奥部には果句「あはぬ君かな」に作りたれど誤也さて此袖中抄の文和語連珠集卷四にも引たりき○西行山家集下卷丁右題しらす歌に「むつのおくつほのいしふみありとさきくいつれかみひのさかひなるらん」按みひのさかひ寫本にはこひのさかひと有和歌名所追考卷八に引たるには字にて戀のさかひと書たり寂蓮家集には見えず○同書同部に家集述懷百首歌清輔朝臣「いしふみやつかろのをちにありとさきくえそ世中を思ひはなれぬ」按清輔家集に述懷百首のうちさて此歌を載たり津輕のをちとよめるにても多賀城の所ならぬを知べし○背栢春夢草卷下雜下に靈の石文の人愚が草菴に數年ありし俄にわづらひてうせにしかばかなしびにたへず「おきふしになれし人故みちのくや名さへうらめしつほのいしふみ」○歌枕名寄山部下陸奥下に壺石文或新古十八前右大將賴朝「みちのくのはてしのふは云々」良玉懷圓法師「日數へてかくふりつもる雪なればつほのいしふみ跡やならん」法橋顯昭「おもひこそちしまのおくをへたつともなごかよはさぬつほのいしふみ」按賴朝卿の歌は拾玉新古今に異なる事なし懷圓

れば多賀城とは所殊にて南部の北部坪村に有し成べし○慈鎮拾玉集五の卷左丁に建久六年に前右大將賴朝卿東大寺供養にあはんとて三月四日入浴の後地頭なにかのさだして五月迄在京の間内裏にて對面したりき又六波羅の家にもあひつゝちぎりなど淺からず其後又つかはしたりしかば殊にもものゝたごへに人の心の我身ならねばと歌にも又かゝるてにて御返事こそなにはの事もとおほゆれなご申たりしかば返事に消息の中に何とほなき様にかきませ申遣したりし云々副遺歌「おもふ事いなみちのくのかえそいはぬつほのいしふみかきつくさねは」たちかへり又返事に「みちのくのはてしのふはえそしらぬかきつくしてよつほのいしふみ」按新古今雜に前大僧正慈圓文にては思ふ程の事も申つくし難きよし申つかはして侍ける返事に前右大將賴朝「みちのくのはてしのふはえそしらぬ」云々と有また和歌名所追考卷八陸奥宮城郡に拾玉集を引て「陸奥の靈の碑行て見んそれにもかくしたゝまとへとは」といふ歌を載たり契沖法師が新古今の書入にも此歌を引たれど拾玉集の印本には見えず○六百番歌合六の卷十遠戀に顯昭

「思ひこそ千しまの奥をへたてねとえそかよはさぬつほのいしふみ」按此歌夫木抄雜部五鳥部にも出せり○夫木抄卷二雜十四文部に百首歌寂蓮法師「みちのおくつほのいしふみありとさきくいつれかみひのさかひなるらん」按みひのさかひ寫本にはこひのさかひと有和歌名所追考卷八に引たるには字にて戀のさかひと書たり寂蓮家集には見えず○同書同部に家集述懷百首歌清輔朝臣「いしふみやつかろのをちにありとさきくえそ世中を思ひはなれぬ」按清輔家集に述懷百首のうちさて此歌を載たり津輕のをちとよめるにても多賀城の所ならぬを知べし○背栢春夢草卷下雜下に靈の石文の人愚が草菴に數年ありし俄にわづらひてうせにしかばかなしびにたへず「おきふしになれし人故みちのくや名さへうらめしつほのいしふみ」○歌枕名寄山部下陸奥下に壺石文或新古十八前右大將賴朝「みちのくのはてしのふは云々」良玉懷圓法師「日數へてかくふりつもる雪なればつほのいしふみ跡やならん」法橋顯昭「おもひこそちしまのおくをへたつともなごかよはさぬつほのいしふみ」按賴朝卿の歌は拾玉新古今に異なる事なし懷圓

法師が歌は和歌名所追考卷八に引てこれはた違なし歌枕名寄印本に懷圓異本に懷圓に作るよし記したれど懷圓は誤なるべし顯昭の歌六百番歌合夫木抄などに三四の句「へだてねとえぞかよはさぬ」とありてこゝと異也新撰歌枕奥部にも三四の句「へだつと」などかよはさぬ」に作り○阿佛轉寐記群書類從三六丁におなじ世とおほえぬまでにへだつりはてにければちかの鹽がまもいとかひなき心ちして「みちのくのはてしのいしふみかききたえてはるけき中と成にけるかな」○長明發心集七の卷丁右心戒上人跡をどごめざる事の條にみやこあたりはすみにくしとてえびすがあくろつがるつほのいしふみなどいふかたにすまれけるとかや云々按此文にても陸奥のはてにて津輕わたりにありとさきこゆえびすがあくろつとあるあくろの三もじ寫誤あるべし○西行物語中卷廿にかくつほの石ぶみぬまたちなごいふ所々を過てある野中を過るにことありがほの墓の見えけるを草かりけるをのこにあればいかなるはかぞととひければこれなん實方の中將と聞えし人の御はかといふをききて云々按此説によれば壺碑のあり所實方中將の墓より



もこなたときこゆれどは後に筆記して西行物語と名づけたる畫卷の詞なればたしかなる證にはしがたし○速水房常が見聞私記前編六の卷は坪碑何ノ比ヨリカ土中ニ埋レテ知人ナシ中比ノ詠歌夫木集ニ「陸奥のつほのいしぶみありときくいつれか戀のさかひなるらん」寂蓮○寛延三年七月上旬南部遠江守殿ノ家臣舟越上藏入魂ナリ其後物語云南部森岡領七戸ニ壺村ト云所アリ石文ト云ハ是歟千引ノ石文ト云此石ハ年久ク見エザル由也古歌モ有之由也千引明神ト云社有之云々歌ニ詠ズルハ右ノ石文ナルベシ云々ツボ村ニハ美女ノ出ル所ノ由也云々○高野直重が和歌名所追考百八卷陸奥宮城郡部に雲葉抄に壺の碑を千引の石と同事に其故事をかゝれたり當時南部領七戸の内に坪村とてありそこに千引の石とてあり云々同書百十一卷陸奥津輕部千引石の條に雲葉和歌抄に忍誓と申連歌師くだりて坪の石文昔むしたるをあらはして文字書うつし給ふその後見しほごに我等もうつして所持す後碑の在所宮城郡岡邊にあり高森殿守護にて石に魂ありて人にたゞりして他所へ引捨んとて人夫をあつめ家々男女老若をふれしに小家もち

たる若き女の明日の千引に出よといひしにやもめ女の事いかで人夫にならんと申さらばあすより此家にはかなうまじとあれば此女のこのほごゆくへもしらぬ男の時々かよひけるにあはれこよひいとま乞ていづ方へもゆかんと思ひてまぢけるに風は昨夜より聲いよ／＼うらむと詠じてきたりぬ女盃をとりてすゝめ涙をながししか／＼の事かたりて此屋にて見え奉らん事こよひばかりといひしに男云やうたどへ千引の石なりとも精魂入なば一人人が力も及ばじた／＼出て見よ人夫にはまじらでひげざらん後われ一人してひげ其時ふしぎの者と思ひて財をあたへば富貴の身と成べしゆめ／＼ことばあだならじとてかくよめる「千引ともまひきともいへ引れしよ君し獨のなさけならずは」とてなく／＼立わかれぬさて役所に出けるに人々數万人あつまりて此石をさま／＼と引どもうごかす二千三人三千人までひけどもひかれず時に此女一人してひかんと申守護き／＼て狂人か我をあざむくかどありしにたゞ今日に見えん事成べしひかれずばつみに沈めたまへとて人夫を拂ひ一人綱に手をかけしに車輪のめぐるがごとくさら／＼と走りければ神か佛かとして守護あがめて財をあたへ所知するほど

に富貴の身と成し也ちぎりし男の精なるべし巴猿樂謠に千引甲斐守何某知行とあり如本文北郡少西に有千引村追考此所盛岡領の内七戸に坪村といふに其名あり其石當時は土中に埋れて不見其上に社あり號千引明神石ぶみの御山ともいふ其下に壺川とて流あり但壺碑と千引の石と同事のやうの雲葉抄の説又此所にもいひ傳ふる俗説也云々津輕領の内野邊路と横濱と云七里の間に千引明神の社あり云々按雲葉抄に彼碑の在所宮城郡岡邊にありとも文字を書うつしたりともいへるは多賀城の碑の事と聞ゆされど千引石の物語は北郡千引明神の地の事なれば彼此混雜せるものなるべし○古川辰が東遊雜記九の卷に南部北郡千引明神此所坪石文の眞跡也土人千引の森とも云別當を教岩坊と稱して妻帯の僧也津輕龍飛鼻より三十里の入海にて幅は僅二里三里廣所四里云々千引明神の社二間に三間檜皮の屋根にて其上に草葺の上屋をしてあり其地びやう／＼として云々鎮守府を置と云々これらの事を見る人考知べし云々按古川辰が説具眼といふべしされど取捨すべき事なきにあらず○伴蒿蹊が閑田耕筆一の卷<sub>下右</sub>に重厚なる人東奥行

脚の話に「壺碑は南部地に入て七戸より野邊地の間にあり壺川といふ大河に壺村といふ小村も有其傍に千曳の社といふものは壺碑を納めし所也といへるは謬にて是は千曳の石といふものを埋めて祭れるなり碑は百年あまりのさき大水に流れたり砂石に埋れしならんと傳ふるとぞ云々今仙臺城下市川多賀城の古跡に壺碑とよぶは鎮守府の碑とかや或人はいふ上に西字あるは是西の壺碑にて南部なるは東碑也と此は西の字に付て説をなす者なれども壺の名義壺川によるべければとりがたし「いしふみやけふのせは布はつ／＼に逢見ても猶あかぬけさかな」是は袖中抄に出たる歌也また「みちのくは奥ゆかしくそおもほゆるつほの石ふみ外の濱風」といふもとも「南部にてよくあへり云々○舊跡遺聞四の卷<sub>下右</sub>壺碑千引明神宮條につほの碑は「北郡七戸と野邊地との間に壺村石ぶみ村といふところありこの所にむかし碑ありしゆゑに壺碑と名づけしといひ傳ふ今はその碑なし云々さてこの碑を土中に埋めたるはいかなるよし有けるか今しるべきよしなし千引明神と申せしものつゝの頃よりとたしかにはしらねど古くよりしかいひ



けるならん云々げにもつぶらの大臣といふ人名つぶら江などいふ地名も圓の字をよめりつぼつお通べれば石碑の形丸かりしより圓碑なるを古へ借字にて壺と書しより女の名なりといひて傳へたるにやこはいとくしひたる説」なめれどいさゝかいひおくになむ○興清按壺碑の在所説々おほかれど盛岡領北郡七戸と野邊地との間なる壺村石文村其古跡なるを疑なしそは古歌に津輕の遠にありとさくともみ歌のいしふみそとの濱風とよみ合せたるなどにも宮城郡多賀城ならぬ事明也又日本中央としるしたりといふも多賀城碑に叶はず壺石たえけんはやゝふるき世にてそは缺崩たりとも土中に埋たりとも戦國の比打碎てものに用たりとも今は知べきやうなし雲葉抄などの物語は碑の失たる後に作り出たるものなるべければとり用べくもあらず壺村石文村の名存れるは正しき證にて千引明神は石の縁あればかたゞ疑なし千引は神代紀卷上に千人所引磐石とありて千人して引ばかりの大石の名なり碑石長四五丈ばかりといへば千引石ともいふべき也坪といふよしは石の形楕圓なるまゝを碑にしためれば圓の碑の義にて坪も壺も借字

なるべしさて此碑を建けんはいづれの代とも知べからず田村將軍書つたりとも神代よりありともいへるなどは正しき説ともきこえず○右所答於阿波少將君之間也」  
 (七十四)『多賀城碑 日本總國風土記第百六卷陸奥國宮城郡部に坪浦在松山之右出温湯坪碑有鴻之池今廢爲故鎮守府門碑惠美朝獨立之見雲真人清書也記異域本邦之行程令旅人不爲迷塗按一本朝猶を押勝に作り真人を道人に作れり總國風土記は寛永以後の偽書にて信用すべきにあらず坪浦といふ地名末松山邊にあるとなく見雲真人といへるも姓氏録に所見なし多賀城碑と坪碑ととりちかひて書たるなどいづれも笑ふにたえぬひがと也○安藤爲章が年山紀開一の卷十四に壺碑奥州宮城郡市川村にあり佐々介三郎宗淳先年西山公の命をかうふりて一覽のためにかの所にいたりてこれをうつし侍りぬ今加點高六尺三寸横三尺一寸厚二尺多賀城  
 去京一千五百里  
 去蝦夷國界一百廿里

去常陸國界四百十二里

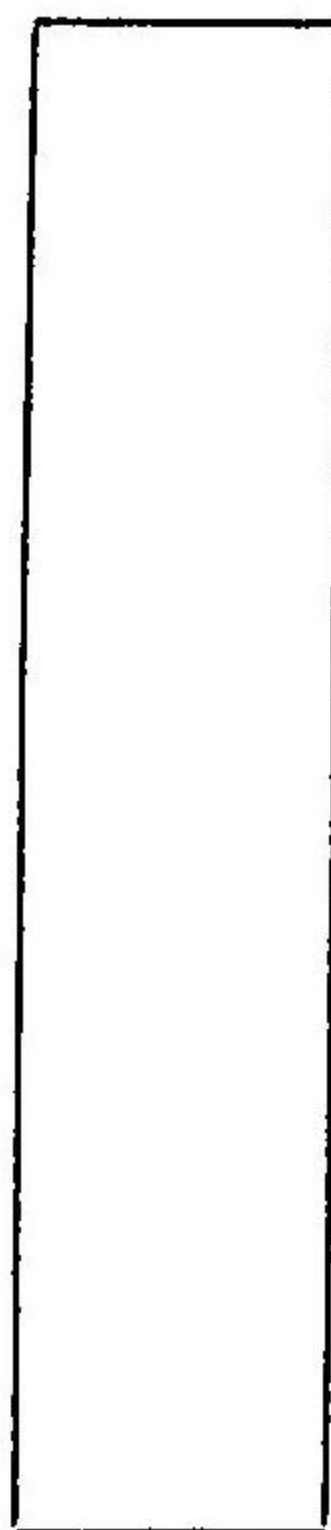
去下野國界二百七十四里

去秣鞮國界二千里

此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝瀨修造也  
 天平寶字六年十二月一日

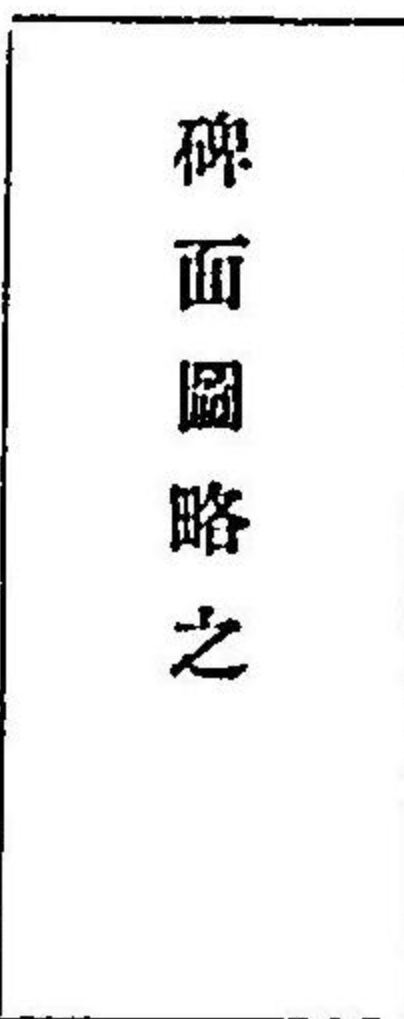
按するに大野東人は「糺職大夫果安の子なり云々」碑もその類とみえたり○按此も壺碑と多賀城碑とを辨別せざる説なりまた碑額に西の字あるをいはず○源義和が奥羽觀迹聞老志六の卷宮城郡部に多賀城或曰末藤高藤多賀國府相同且高多賀訓同國府則其總名秣指其地實同也在市川村南云々仍稱國府者不可疑按右に引たる續日本紀吾妻鏡などの文要をとれるにて本文のまゝにはあらず又云壺碑在市川村中多賀城址云々

〔壺碑圖〕



按神龜元年甲子(延丁)聖武帝元年(天平寶字六年壬寅)廢帝四年云々藤原惠美朝臣朝瀨云々爲陸奥按察使兼鎮守將軍云々同六年十一月丁酉爲東海東山節度使十二月己巳爲參議云々○按義和が觀迹聞老志の説はた壺多賀混誤をまぬかれず○高野直重が和歌名所追考百八の卷陸奥宮城郡部に此所は仙臺より二里計東市川村といふ少東の岡の上に石碑立ちり西向なり此邊上古城の跡にて大石ども所々に残りたり國の府中也國府の池とて今は田地の名になりたり和名抄郷名の内に多賀あり則是也寛文九年壺の類也いしふみは石碑そこにあればなり多賀國府云々今成し按これも壺と多賀をわいだめざる説なり○伊藤長胤が蓋簪錄四の卷雜載籍に壺碑高六尺五寸濶三尺一寸界方内縱三尺八寸五分横二尺六寸碑背類長鬚

碑面圖略之



此碑在奥州宮城縣市川村北岡上云々三百之説云々

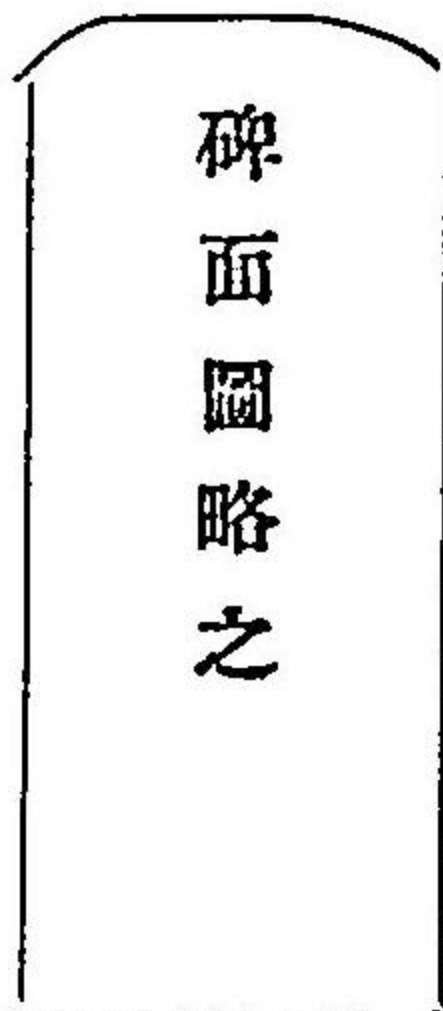


○興清曰多賀碑の事を記せし書に引出し外にも倭漢三才圖會六十五卷千賀屋草卷十東國旅行談卷四東海談坪碑考などいとおほくて枚擧に違あらずされどいづれも坪多賀を混合せし伯仲の説也そもく多賀城碑の在所は仙臺の東北方市川村高森にて多賀城の舊蹟なり碑額には西の字を題せるに就てこれを西碑とし南部領の坪村なるを東碑ぞといへるは碑文の趣を辨ワキざるひがごと也こは多賀城のありしむかし都の方面なればそなたを面にして立たるよし也外に意義ありとおもふべからず○右所答於阿波少將君之間也○伊藤長胤が轡軒小録第一に靈碑之事中華ニテ金石ノ究メテ古キハ周ノ鼎河ニ沈ミ秦ノ璽夷ニ没シ云々本朝ニテ碑碣ノキハメテ古キハ奥州靈ノ碑ニシクハナシ昔頼朝公ノ和歌ニ詠ゼラレシニ因リテ人々記憶スルコトナリ其時ヨリモ世ニ故事ト成リテ古今ノ間ニ名高キコトナリ其碑自然石ニテ其背馬鬣ノ如シ高六尺五寸濶三尺一寸其中ニ界アリソノ堅三尺八寸五分横二尺六寸奥州宮城郡市川村ノ北岡ニアリ上代ニ多賀城ト云フ城地ノ舊蹟ナリ其時ノシルシナリ筆者何人タルヲシラズ云々藤原朝猶ト云フハ孝

謙ノ寵臣大師惠美朝臣押勝ノ子也云々其歴官ノ次第續日本紀ニ詳也碑ニ記ス處ト相違ナシ頼朝公ノ和歌新古今雜下ニアリ云々○桃青が奥細道十九に靈碑市川村多賀城に有つぼの石ぶみは「高さ六尺餘横三尺計歟苔を穿ちて文字幽なり云々」洞も落るばかり也云々○本朝奇跡談三の卷八丁に陸奥國市川村多賀城の跡也「本丸の邊には礎の跡今に所々に有往古此城の大手に壺の石碑を立ると云天平寶字六年惠美朝猶の作り置ける也享保六年迄星霜九百八拾八年に及べり多賀城より京師及四方の行程異國までの道法を記す此碑顯然として今尙存せる誠に皇和無雙の舊跡也諸國よりの旅客何れも此所に尋來る由元祿の頃國主より雨露霜雪を凌なんために覆をつくる雙面四方形」此所古歌多し云々○多田義俊が秋齋閑語四の卷百七十につぼの石踏は奥州鎮守府の門に有たる立石也諸方への道法をかきし物也大野東人云人神護景雲年中に立之續日本紀に見えたり其後蝦夷朝猶と云人再興すと也云々伊勢貞丈が評に踏の字を用ひしは誤也いしぶみは石文にて碑銘の「事也靈碑はじめには多賀城と題して其下に諸方の行程里數を記して

次に此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣猶修造也天平寶字六年十二月一日と見えたり右の文首に多賀城と題し次に此城神龜云々とあれば多賀城は大野東人の置し城也其後朝猶此城を修造したる也かの惠美朝猶此城修造の時靈碑を立し也多賀城の事續日本紀聖武天皇九年夏四月の紀に始て見えたり神護景雲といへるは違へり又蝦夷の字誤り也「蝦夷は「エミシ」とよむ惠美にあらず云々○伊勢貞丈が麻久奈岐廿に壺ノ石文奥州ニ遊覽セシ人ノ云市川村ニ壺ノ石文アリ土ノカタマリタル如クナル脆キ石ニテ後ノ方處ニ新ニカケタルアトアリ文字ノ彫ヤウ甚淺シトゾ此碑文打タルヲ家藏セリ云々○橋南翁が東遊記後篇一の卷一丁に名におふ壺の石ぶみは「奥州仙臺の東北多賀城の古跡にあり云々」是等も東の壺碑にやとおもはる云々按多賀城碑に西と題せるは西の方に向けてたてし碑にて京都の方を面にしたるゆるなり東西の二碑あるよしにはあらず○藤井貞幹が好古小録上卷十七に陸奥國多賀城

碑石高六尺餘  
濶三尺四寸許

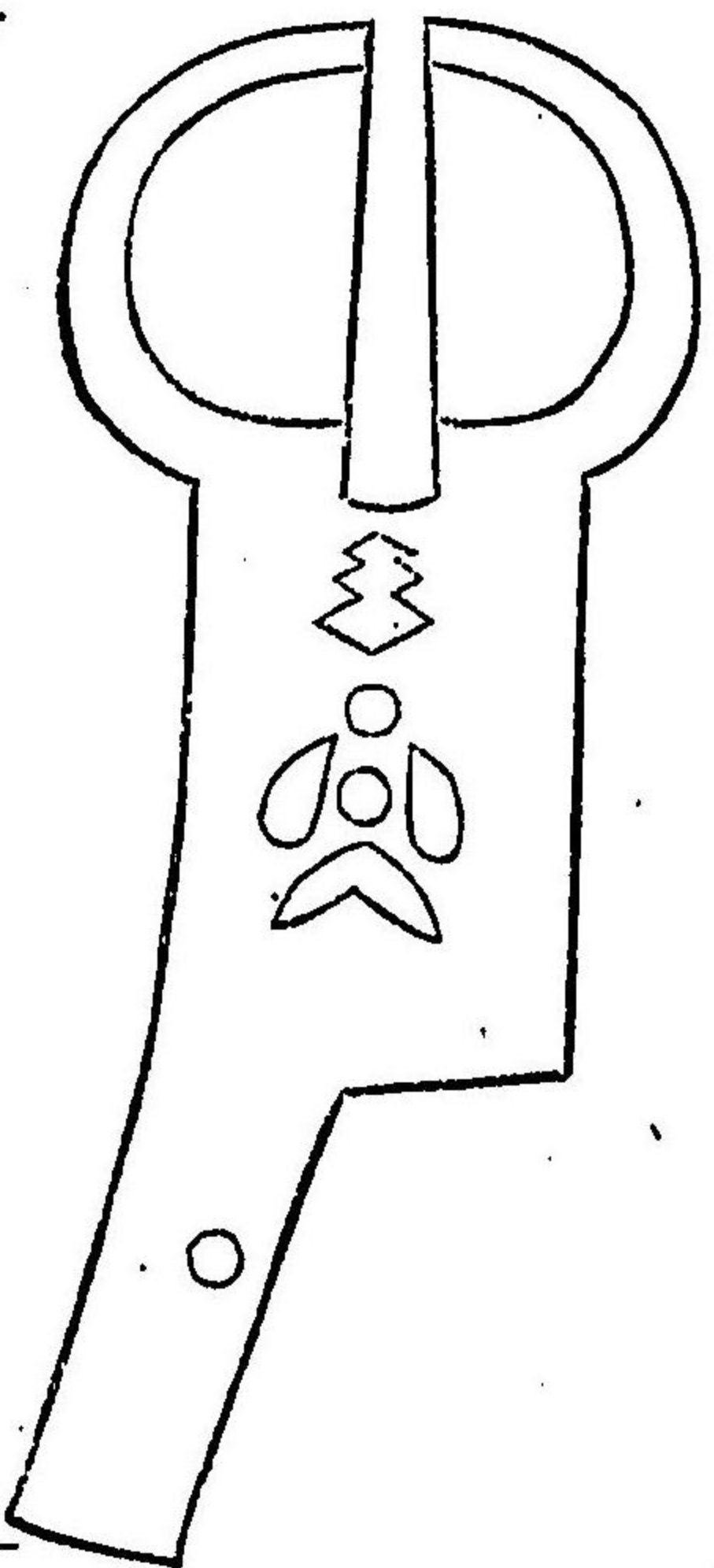


碑面圖略之

此碑往年宮城郡「市川邑ノ土中ヨリ掘出ス多賀城ノ廢址ナラン云々」按こゝに濶三尺四寸許とあるを集古十種第一には三尺餘とあり年山紀聞に高六尺三寸横三尺一寸厚一尺云々奥羽觀迹聞老志に自「碑首」至「石根」六尺五分濶九尺六寸八分石基九尺三寸七分碑後石形三稜界中上下四尺五分濶二尺六寸四分云々壺簪錄に高六尺五寸濶三尺一寸界方内縦三尺八寸五分横二尺六寸碑背類「長盤」云々など見ゆ」(七十五)鏡の紋の板の上方に三階菱を付る事「鏡の紋の板の上方に三階菱をすかしにしたるは鎌倉故實騎射に用といふしあるを近世はたゞ作のしるしに付ることゝなれりといへどこは小笠原家の騎射の時用たるゆる小笠原の家の紋を附ることをのちに他にて小笠原流の騎射する家にも此紋を用ひしな



るべし』



松屋筆記卷之八十八

平小山田與清稿

(一)不窮曲事 唐書七十六卷高宗廢后王氏傳七丁に陛下不窮其誅云々又高宗則天順聖皇后武氏傳八丁に詭變不窮云々また向性簡重不曲事上下云々五代史四十二卷趙巖傳十四丁に許州溫韜尤曲事巖云々按に不窮の字面佩文韻府に脱せり曲事の字面は本朝俗文常に所用也

(二)同居義居 『五代史六十二卷南唐世家に州縣言民孝悌五代同居者七家皆表門閭復其餘役其尤盛者江州陳氏宗族七口每食設廣席長幼以次坐而共食有畜犬百餘共一牢食一犬不至諸犬爲之不食云々吳會が能改齋漫錄四卷辨誤五世九世同居の條に王彥輔塵史載張全翁朝議爲子言潞州有一農夫五世同居太宗討并州過其舍召其長詢之曰若何道而至此其長對曰臣無他惟能忍耳此與唐張公藝事同按唐書張公藝九世同居高宗有書泰山臨幸其居問其本末書忍字百餘以對天子爲流涕云々羅大經

が鶴林玉露人集五卷陸氏義門の條に陸象山家子撫州金谿累世義居云々以上聞儀曹請爲褒別事關風教須議指揮云々謝肇淵が五雜俎十四卷事部に張公藝九世同居古今以爲口實近代則浦江鄭氏耳云々可以同居如浦江者絶無而僅有者也○張公藝書忍字以進云々雖百世可也○古今同居者又有漢樊重晉郎方貴俱三世博陵李幾七世河中姚氏十三世宋會稽裘承詢十九世而魏楊播百口共舉陸象山累世義居又不凡幾代也錄之○以媿惡婦劣子之欲析產者云々万姓統譜廿八卷陽韻張字唐部張公藝壽張人九世同居高宗封泰山還幸其宅問曰何爲九世不分藝書忍字百餘以對云々與清按張公藝が忍を守り鄭氏が婦言を用ずして累世義居せるは實に稱嘆すべし陸象山が家法は本朝の豪富家にも似たるものきこゆめり遺教經に忍之爲德持戒苦行不能及能行忍者可爲名有力大人苦其不能歡喜忍受惡罵之毒如飲甘露者不名入道智慧人也云々注に傳大士云忍心如幻夢辱境若龜毛常能作此觀逢難轉堅牢誠哉是言也云々周書牧誓に王曰古人有言牝雞無晨牝雞之晨惟家之索云々孔安國傳に言無晨

鳴之道索盡也喻婦人知外事雌代雄鳴則家盡婦奪夫政則國亡云々など古書の所見おほく毛詩にも婦之長舌維厲之階また哲婦傾國などもあり

(三)人名に神佛の名をつく 續日本紀に孔子釋迦などいふ人あり八幡太郎賀茂次郎新羅三郎八幡六郎舎那王觀音遊女の類いとおほし唐書七十九卷隱太子傳に隱太子建成字毗沙門とあり

(四)忌日菜食 忌日の事唐にも説あり唐書七十九卷霍王元軌傳に高祖崩去官毀瘠甚服除遂菜食布衣終身至忌日輒累書不食云々菜食は精進也物語にさうじものぞ見ゆ釋氏要覽下五十六に忌日の事有願國南史ノ四丁ウ糞穢傳に孝建元年文帝宋也諱日群臣並於中興寺八關齋中食竟懸孫別與黃門郎張淹更進魚肉食云々

(五)段物 今俗絹布を段物といへり唐書八十一卷章懷太子傳に帝優賜段物數萬と見ゆ

(六)酒令 唐書九十四卷李君羨傳に會内宴爲酒令各言小字云々張山來が酒令一卷あり五代史三十卷史弘肇傳に酒酣爲手勢令といへるも負人罰爵を吞事にておなじく酒戲也

(七)鳥を射て婚を定む葦屋の處女墓 唐書七十六卷后丁寶皇后傳に父毅在周爲上柱國尙武帝姊襄陽長



公主入隋云々殺常謂主曰此女有奇相且識不凡  
 何可妄與人因畫二孔雀屏間請婚者使射二矢  
 陰約中目則許之射者閱數十皆不合高祖最後射  
 中各一目遂歸於帝云々謂主曰とは父資殺が妻  
 の長公主に女の事を謂るよし也高祖は唐の高祖李淵  
 也此事大和物語にもばら男とちぬ男が生田の川の水  
 鳥を射たるとおなじ日のものがたりといふべしこれ  
 津國葦屋の處女墓の故事にて万葉集九の卷十九の卷  
 などに歌あれど水鳥を射たるよしは大和物語を出處  
 とす

(八)木生類などに人の官位號など授く 古事記に桃  
 を意富加牟豆美命と稱し史記に秦始皇松を五大夫に  
 封じ談錄に唐武后柏を大夫に封ず唐書七十六卷后妃  
 天傳に遂封嵩山禪少室冊山之神帝配爲后  
 封壇南有大柳樹赦日置雞其杪賜號金雞樹云々  
 爾雅號凡八十五位  
 (九)歌舞伎 歌舞伎の字面類聚國史に見ゆ唐書七  
 十丁 宗室列傳河間元王孝恭傳に性奢豪後房歌舞伎百  
 餘云々

(十)寒林林葬尸陀林野葬黃阮 野葬の事は舊本今昔

物語の類本朝の古書所見おほし所謂林葬也慈恩傳三  
 卷十七 數遭火災乃立嚴制有不謹慎先失火者  
 徒之寒林寒林即彼國乘屍惡處也云々翻譯名義  
 集三卷 林木篇に尸陀正云尸多婆那此翻寒林其  
 林幽邃而寒也僧祇云此林多死屍人入寒畏也法顯傳  
 名尸摩除那漢言乘死人墓田四分名恐畏林多論  
 名安陀林亦名晝暗林云々釋氏要覽下卷五十 送終篇  
 に葬法天竺有四焉一水葬謂投之江河以伺魚鼈  
 二火葬謂積薪焚之三土葬謂埋岸傍取速朽四林  
 葬謂露置寒林伺諸禽獸自注に寒林即西域葬尸處  
 僧祇律云謂多死尸凡入者可畏毛寒故名寒林今  
 云尸陀林訛也唐書列傳十六 李嵩傳に大原俗爲  
 浮屠法者死不葬以尸棄郊伺鳥獸號其地曰  
 黃阮有狗數百頭習食肉爲人患吏不敢禁  
 嵩至遣捕群狗殺之申厲禁條約不冉犯遂革其  
 風云々法苑珠林百十六卷 遣送部に依如西域  
 葬法有四一水漂二火焚三土埋四施林云々諸經要集  
 十九卷十七 遣送緣篇三藏法數十九卷十四 四葬の條大  
 藏法數廿二卷四 四葬の條などにも出てそは釋氏要  
 覽の説に異なる事なし

(十一)山新突出 唐書七十六卷后妃傳上十三 則天傳  
 に新豐有山因震突出大后以爲美祥赦其縣一更  
 名慶山荆人俞文俊上言人不和疣贅生地不和堆阜  
 出今陛下以女主處陽位山變爲災非慶也云々按  
 伊豆國新島出來し事三代實錄に見ゆ八丈の富士も近  
 代突出せり寶永山は富士の疣贅なり伊豆の田代にて  
 も近比山突出せり晉書惠帝紀永熙四年夏五月蜀郡山移云々梁  
武帝紀上廿八丁 是以谷滿川枯山飛鬼哭  
七廟已 續古事談一卷群書類從本上卷廿二丁左 一條院御時  
 危云々大和國添上ノ郡に檜山ノ峰二三町ばかり未申ニアタリ  
テ小山ノ高サ八九尺バカリナルニ生タルウエ木モハタラカズテ移  
シオキタリケリ其峰ノ上ニ藏アリケリ藏ノ中ニ佛像アリケリ五ヶ日  
ヲ經テ風吹タフシテケリ何ノ故トシラズ不  
思議ノ事也云々此事百練抄四ノ十一丁オ

(十二)晝分夜分 五代史五十八卷 司天考一に晝夜刻  
 置日入分以日出分減之爲晝分用減統法爲  
 夜分云々五夜辰刻置昏分以辰則除爲辰數云  
 云倍晨分五約之爲更用分又五約之爲籌用  
 分云々

かれ見えたれど今のありさまをもて考ればいかにぞ  
 や五代史司天考二右 丁に春秋雖書日食星變之類  
 孔子未嘗道其所以然者故其弟子之徒莫得有  
 所述於後世也然則天果與於人乎果不與於人  
 乎云々考者可以知焉とあるをおもへばかしこに  
 ても秦漢以來の學者災異に惑て天文五行の繁説をお  
 こせし也

(十四)漢土の州名を某軍といへる始 五代史六十卷  
 職方考に自唐有方鎮而史官不錄於地理之書以  
 謂方鎮兵戎之事非職方所掌故也然而後世因習以  
 軍目地而沒其州名今又置軍者徒以虛名升建  
 爲州府之重此不可以不書也自注に若今永興  
 本節度軍名而今命守臣遂曰知永興軍府事而不  
 言雍州京兆是也とあるをおもふに州名を軍に換た  
 るは唐の藩鎮に起れる也○本朝にも河内職攝津職は  
 京職に据り和泉監芳野監は匠作監に据れる國名也き  
 後にはことごとく州國に改られたり

(十五)背を拊て悦 五代史六十九卷 南平世家に莊宗大  
 悅以手拊其背季興因命工繡其手跡於衣歸以  
 爲榮耀云々季興は高季興也



(十六)天永寺國分寺安國寺大成寺 鹽尻八上卷に鳥羽院ノ天永年中ニ六十餘州被<sub>レ</sub>定<sub>ニ</sub>天永寺ニ尾張ノ天永寺ハ春日井郡味鏡村ノ護國院也美濃ノ天永寺ハ加茂郡細目村ノ東光寺也東光寺今在大梁村云々波佐末垂仁紀以<sub>ニ</sub>鏡字<sub>ニ</sub>訓<sub>レ</sub>之云々按國分寺安國寺大成寺などの類にて天下に建られし也

(十七)書物を本といふ事 書籍を本といふは仁王經の二諦品に修多を翻して法本といふこれ佛の言教諸法の本なるが故とあるよし鹽尻八中卷にいへり

(十八)主上御疱瘡の時坂本山王の猿も疱瘡す 鹽尻九上卷に主上御疱瘡の御事ある時は坂本山王の社に養へる猿必疱瘡すと云又云帝王のもがさ輕ければ猿の病重く皇家重らせましませば猿やがて快くなると云傳たり實に一奇事といふべし云々

(十九)衝重三方四方 鹽尻九上卷に衝重（實重）道長公の記に賜<sub>ニ</sub>公卿衝重<sub>ニ</sub>兩三献云々ついがさねを折敷の事と云は盡さるるにや永記除目の條に衝重高さ七寸計り也と有且其圖今俗に云三方也但是に公卿と殿上人との異あり大三方をば公卿ともいふ（公卿の食盤なる故なり）殿上人は今堂上家に用小四方なり（田舎には楮代者代なり然れど居る輩とのみいふ）

ば三方も足打もとは皆衝重也云々伊勢貞丈雪隠之說（廿七）に衝重ハ上三方四方ト同下九ク仕タル物ト云說アリ如何衝重ハ三方四方ノ惣名ニテ候上ノ盤ト下ノ足ト衝重キ重キタル故也下ヲ九クスルト云ハ非也三方四方ノ外ニ別ニツイガサチト云モノ無<sub>レ</sub>之云々按衝重は三方四方の總名也上の盤と下の足と衝重ねたるゆゑの名也三方一名公卿ともいふは公卿の供膳に用れば也衝重三方四方公卿殿上人などいふ事所見おほし他日引出て定むべし賀茂眞淵古器考にいへる説はいかにぞや

(廿)鹽繪 鹽繪の事物具裝束抄に見ゆ梅窓筆記後附に其圖あり大成錄廿五上卷鹽尻九中卷など考べし

(廿一)改元次第條事定 改元の事元秘抄江家次第第十八などに見ゆ條事定といへるも改元の時也鹽尻九下卷にくはし同十二上にも（實重）傳（實重）十三丁ウ

(廿二)居士 居士の事鹽尻十中卷（實重）に禮玉藻能改齋漫錄韓非子輟耕錄などを引ていへり

(廿三)名古屋三左衛門出雲みこ國 鹽尻十中卷（實重）名古屋三左衛門が事見ゆまた尾州愛智郡古渡村の人にて氏は名古屋とのみいへり同十七（實重）卷にも（實重）山三

耶事武逸  
咄問書七

(廿四)だて者關東小六 同卷に按雍州府志以<sub>ニ</sub>名古屋氏<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>京師戲場男風之始<sub>ニ</sub>不知孰是因云關東小六者本伊達某僕在<sub>ニ</sub>東都<sub>ニ</sub>而游俠於曠當時呼<sub>ニ</sub>之伊達小六<sub>ニ</sub>今以<sub>ニ</sub>治容游俠者<sub>ニ</sub>曰<sub>ニ</sub>太天<sub>ニ</sub>似<sub>ニ</sub>彼風<sub>ニ</sub>也（甲陽軍十四品十九丁ウに隨分たてをす侍云々同十三卷四十四品廿七丁ウに二番にだてものと云は武道の役になつて候云々）

(廿五)日本三無 鹽尻十中卷（實重）に日本三不足とて鞍馬に無<sub>ニ</sub>福人<sub>ニ</sub>八幡に無<sub>ニ</sub>武勇<sub>ニ</sub>多賀無<sub>ニ</sub>長壽<sub>ニ</sub>といふ事を記せり

(廿六)前鬼後鬼 吉野前鬼後鬼の事鹽尻十下卷に見ゆ（武隱叢語四卷に廣島浪人所持覺書に云淺野但馬守長成大阪と申者山宮と申者大將にて候云々）

(廿七)津島午頭天王 祇園午頭天王の事鹽尻十一の上卷同（實重）十三卷十五卷に見ゆ

(廿八)居士號を賜 千利休に居士號を賜はれるよし鹽尻十二上卷に見ゆ

(廿九)茶の名所梅尾宇治などの始 鹽尻十二上卷に鹿園院義滿公はじめて宇治の里にうゑさせられし事七品の事梅尾の事など見ゆ肥前平戸うれし野山城梅

尾宇治尾張の内津駿河の安部肥前の相良（實重）同所にやなど（實重）きこゆ

(三十)戒名に院號つく事 戒名に院號を付る事鹽尻十二中卷にいへり（實重）戒名ハ漢土ノ私諱ノ類也制度通七ノ廿六ウ

(卅一)饗膳に七五三五本立七本立など云事 五本立七本立九本立七五三などいふ饗膳の事鹽尻十二下に見ゆ

(卅二)大黒といふかくし女 寺内にかくしおく淫婦を大黒といふよし狂歌もあり鹽尻十二下に見ゆ

(卅三)茶蘭 茶蘭實名は眞珠蘭とも魚子蘭ともいふよし鹽尻十四の上にいへり

(卅四)淨土宗四國師一禪師 鹽尻十四上卷（實重）に淨土宗國師號四人禪師號一人 通明國師（實重）法然 善惠國師（實重）佛立惠照國師（實重）普光觀智國師（實重）増上寺 記主禪師（實重）鎌倉光明 按通明國師後に圓光大師と贈號あり本朝高僧傳の類にくはし

(卅五)菩薩號七人 同書同卷に日本僧家菩薩七人菅原寺行基菩薩 大谷寺光照菩薩（實重）法然 招提寺大悲菩薩（實重）覺盛 西大寺興聖菩薩（實重）敬尊 光泉寺忍性菩薩 大經寺大乘菩薩（實重）日澄 立政寺興正菩薩（實重）知道 此外久遠寺



日蓮モ菩薩ト稱ス但不詳勅授之時云々

(卅六)尊者號 又云眞言密嚴尊者大師 天台天海尊者  
大師云々

(卅七)旁若無人 鹽尻十四中に文字の置處異なれど  
も其意同き事あり旁若無人 史記荆軻傳 若旁無人 左太冲  
これは旁を傍に作字同傍若無人とは俗には事の狼藉  
なるをいへど本意は肩をならぶる者なきといふ也云  
云

(卅八)大師粥 鹽尻十五卷實六四に或曰我俗十一月

天台大師講の紅粥を喫し今日も一歳を添すは何の謂  
ぞ予曰これ冬至の粥を誤傳へ大師忌の修齋に混じ賀  
す按に陸放翁が冬至一聯に家貧輕過節身老怯増  
年注云郷俗喫冬至飯即添一歳是を以知べし云々  
與清按武相の俗十一月四日に大師粥とて小豆粥に河  
漏をかて、喫事あり十四日廿四日同様にして三大師  
粥といへり

(卅九)秋葉山光明山 鹽尻十五卷實六四に遠州秋葉

山大登山秋葉寺本尊觀音三尺坊額 又同國光明山は大鏡  
山光明寺と號す本尊は虚空藏也此兩寺曹洞派の古禪  
刹なり秋葉寺は往昔天野家世々造進せり云々倭漢三

(四十四)道路の廣狹井並樹 道路の廣狹大中小路等

の事令式など所見おほし平信長諸國の驛路をひろく  
し横五六間に造り左右に柳櫻をうるさせけるよし鹽  
尻十五に見ゆ路傍に菓樹を植し事續紀三代極などに  
あり櫻を植しは義家朝臣の歌により松の並木松平  
の義にや

(四十五)六地藏疱瘡神 六地藏の事鹽尻十五に見ゆ

疱瘡神津島にあるよしもいへり願書 痘神及瘡瘡之始見  
于奇說雜篇八ノ卅  
一丁

(四十六)マチン マチンは番木鼈也異名馬伐子とい

へり馬伐子唐音マチン也と鹽尻十五に説あり

(四十七)褐の色かちん 褐色今かちんといふ鹽尻十

六實四にくはし

(四十八)大酒 大酒の事亭子院賜宴記に見ゆ鹽尻十  
六實四に清の左辨が大酒の事あり淳于髡一石を吞  
てんといひ廉頗肉一斤酒一斗を飲食すかゝる上戸か  
ぞふるにいとまなし

(四十九)城の多聞 鹽尻四十四卷に松永久秀多聞城  
を築て始て殿守を作り又長屋を作りて士卒を居らし  
む後世城を築き此多聞の城を摸して呼て多聞と云事

才剛會六十九 遠江國部に秋葉寺在秋葉山一禪宗寺領

二十石餘本尊觀音鎮守三尺坊大天狗麓有「人家一名」  
乾村有「末寺」號瑞雲院「自」此登五十町山風景最佳  
每群集特八九月晝夜數千人不絶就中鎮守靈驗異  
レ他云々

(四十)二階から落ての後はひまに成けり 鹽尻十五

卷實六四に近比俳林去來が狂歌「なとてかくいそが  
しいとて二階から落ての後はひまに成けり」とよみ  
し實にも浮世のすがた大梗かくのごとしそがすば  
ぬれまじ物をとといふ古歌の心にもかよひ侍らんや  
云々願書 二階樓集中央  
屋部屋具類部

(四十一)善光寺大勸進の系圖 信濃國善光寺の大勸

進は若麻績東人善光が孫也世に本田善光といふ三國  
傳記にも見ゆ其系圖鹽尻十五卷實六四に見えたり

(四十二)不忍池 下谷不忍池の事江戸の地志どもに

見ゆ總國風土記には篠輪津と書たり鹽尻十五卷にも  
見ゆ

(四十三)瀬戸物 磁器を瀬戸物といふは尾州瀬戸に

て製れるが専らなれば也鹽尻十五に見ゆ願書 尾州名所  
五十二丁ウ  
常滑燒の條

これに始めり云々願書 落穂五(四十七丁ウ)大和軍記云松永源

城ヲ築キ居住シ計策ヲ以テ大和國侍ヲ取入往々筒井順慶ヲ倒シ大和  
ヲ一取取テ覺悟ニテ南都東大寺ノ寺僧ヲカタク東大寺少乾方多  
門山ニ城ヲ取立少城ノ長屋多門ト云ハ松永始テ此城ニ長屋ヲ建タル  
故世以テ名トス大和柿申ヲ二三尺ニスルトモ松永城普請壁シタシノ  
爲ニテ付シト云々老談記卅一丁オに多聞とは  
長屋の事のよしくはし 小憲雜筆一ノ廿五丁ウ

(五十)紅毛船の來る由來 紅毛船の貢來るは濱田新

三が力也鹽尻十六の卷に委し武家感狀記にも有しや  
うにおぼゆ

(五十一)押板机オシイタ板床の間 鹽尻四十七卷に中比よ

り書院の粧におしいたのかざりといふあり前に人に  
傳聞侍りしも不詳事あり天正本の太平記京詮に六間  
の會所といへるは今所謂廣間なり懸物に本殿懸給 書院  
云々机板には王義之が草書云々といへるは書院床の  
事と見え侍る眠藏といへるは今の納戸がまへの内と  
見ゆ十二間の遠侍といふは後世燒火間ほどの事にや  
武家の家居古今同じからず云々按參考太平記卅七  
六丁に見えたる説也但おし板とはなし机板とあり後

の違棚床間などの事ときこゆ願書 甲陽平鑑十八卷四十八  
品十九丁ウにたとへば  
榎木にて水履を一足造りて人にやれば足にはきていかやうなる所を  
もありくぞ又其木のきれてて佛を作りて人にあたふれば押板の上へ  
あけ香花をもちて拜するぞ云々同十九卷五十一品廿四丁オに  
武田の御重代左文字の御腰物をおし板の上に立おき給ふ云々



(五十二)圓光大師の號 源空上人に圓光大師の號を  
たまはり又その名義の事など鹽尻十七卷に見ゆ  
(五十三)大神宮に私幣を奉らす東照宮を私宅に祭ら  
ず井紙幣 鹽尻十七卷實四十に社毎に紙幣を献する  
事大概定法歟紙を疊て切り重木に挿て立る也 只伊勢二所のみ此事なし  
天子より献せさせましくて勅幣といふは布帛の筐  
物等也されば大神宮には庶人の私幣まゐらせざる事  
是にて知べし諸社の幣も根本木綿疊の遺風也然るに  
是を參詣の諸人に出させ侍る事いつ比よりの誤にや  
と荒木田某いへり云々與清曰幣帛はもと玉串の遺愛  
也金銀幣帛などいふ事百練抄などに見ゆ大神宮に私  
幣を奉らすといへるも今世東照宮を私宅に祭事禁止  
せらるゝがごとし但日光より出す御札に東照宮と日  
光大権現と並書たるのみは庶人の家に祭りても苦し  
からずとなん

率の誤なるべし  
(五十五)了然尼 了然禪尼は東福門院の女房なりし  
が女院かくれさせ給ひて後出家せりくはしくは鹽尻  
十八に見ゆ  
(五十六)小野照崎明神 坂本に小野照明神ありもと  
忍岡に有しを寛永年間今の坂本三丁には移されし也  
こは横山黨の氏神なるべし横山黨は小野性にてその  
先祖小野篁を祭れるにやと鹽尻十八卷にいへり小野  
照は小野篁の訛にや  
(五十七)位牌井居士號 位牌の事法名の居士號の事  
鹽尻十八卷に見ゆ  
(五十八)始祖先祖高祖會祖大父などの稱 鹽尻十八  
に始祖先祖高祖會祖大父己子孫會支孫來孫昆孫仍  
孫雲孫耳孫後胤の圖を著して差別を記したり和名抄  
の父母類子孫類の部に引注すべし始祖始立根基一  
業之祖先祖非代々自始祖之子至高祖之父高  
祖最高在上會祖祖父之父大父祖父和名抄を考合す  
べし  
(五十九)道成寺鐘銘 紀州道成寺鐘は今京都妙滿寺  
日蓮にありその銘

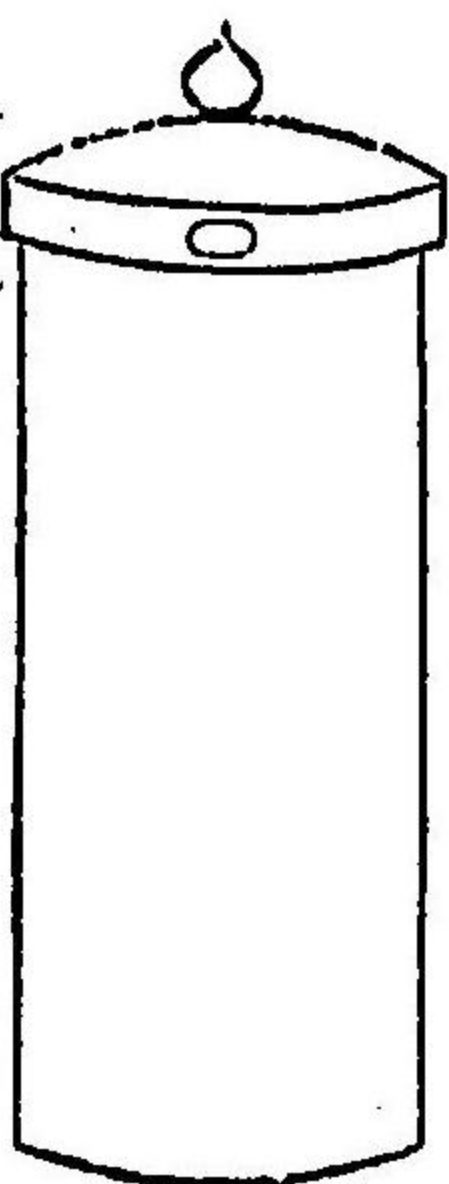
紀州日高郡矢田庄

文武天皇勅願所道成寺洪鐘勸進比丘別當法眼定秀  
檀那源滿壽丸并吉田源頼秀合山諸檀越男女大工山  
願道願小工大夫守長延曆十四年乙亥三月十一日  
與清此鐘銘甚不審也源滿壽丸吉田源頼秀などいへる  
名延暦の年號に不都合なりまた矢田庄といへるもそ  
の比にはいかにぞやこは後人の偽作にや鹽尻十八卷  
にも載たり  
(六十)建蓋胡蓋 鹽尻十八卷實五十に建蓋は建州よ  
り製し出せる茶蓋也高麗茶碗を胡蓋といふ蓋は大き  
に鐘は小き物也我國皿の蓋よりもとつき作れるさか  
づきを蓋と呼ゆる倭俗蓋といへば今の織部さかづき  
の事とのみ心得たり云々建蓋天日の事筆記百五ノ廿七  
(六十一)大木實百五ノ廿七 繁游餘録三編上卷十二に牧の郷村に  
祭れるうがのみたまの神の社にたてる楠は七むだき  
半ありてこと木はなくこのもにてめぐり三町あま  
りがほど月日をさへいとしげりて森なせり云々繁游  
餘録三編上下二卷あり吉田雨岡が伊豆に遊べるをり  
の道の記也牧郷村は田方郡にあり與清一見せる大木  
は伊豆國にては伊東の稻荷社に楠五六本あり二丈餘

めぐれる木ども也同國宇佐美の八幡に阿竹丸の舟木  
を切とりし跡の楠あり切杭のまはりより四方にさし  
出たる枝太きは七八尺もめぐるべし十二本も出たる  
枝にて一町四方許の森と見ゆ切口の所土際より五六  
尺餘も上りて其中に疊十二疊許敷べきほどの廣さ也  
又熱海の來宮の楠はた大樹也これも枯て枝のみ繁茂  
せり常陸木原の大杉二丈五尺許もめぐるべし松の大  
樹の事は已にいひたれば省く實百五ノ廿七  
二三町右の畑中に森一あり八面の宮といふ鎮守あり其神木とて根通  
りさし渡五六間の大木の楠木あり云々○益湯勾當信州飯田眞言宗普  
門院にシダレ櫻六抱半の木あり飯田近邊山本村近藤登之助陣屋に七  
かへシダレ櫻有高遠城に五かへへの櫻あり是はカバ櫻歟シダレ櫻  
歟不詳云々余が菰里上山田村の登  
樹院にイト櫻の五尺めぐり許なるが有  
(六十二)舍利瓶并鎌倉極樂寺 同書同卷十三大仁村  
の事をいへる條におなじむらに極樂寺はた地中と  
なへ來りし所ありて地中の畑ぬし源左衛門といへる  
もの天明五のとし乙巳にはたをうがちける時ねりが  
ねの筒をほり出し人にも見せけるその比より打つ  
き家によき事どもありていさゝかすぎはひのたづき  
をしも得たりければいとくめでたき寶もちをさづ  
かりぬとてあがまへつゝほこらにいたくひめおきい



まは人にも見せずとなん政直は此里にてかすまへらるゝものにしありければこそをさいだてゝかの家にゆきほうもちををがみまつらましとねもごろにこふあるじ手あらひくちすゝぎつゝほこらよりどうでつ簡のめぐりに百三十六字ありたりかたちおほきさこゝにゑがけるごとく文字のさまいとよし



極樂寺第三代長老善願上人令利瓶記

先師大徳法諱順忍俗姓藤原建久幕府士卒加藤判官景廉孫也父加藤五郎其母又藤氏文永二十一年廿七誕生弘安三十六歲隨忍性大徳出家受具值興正菩薩別受公家專崇敬將府大守仰戒師万人歸顯密之行化一朝貴濟生之悲願昔嘉曆元年八月十日辰尅端坐入寂俗年六十二夏曆四十二

すみもてすりたれど淺くゑりたればうつりがたしよりにて文字のならびさま盡などたがはざるやうにうつしとりぬ極樂寺忍性うちは伴やまどの國磯嶋の人に

して伽藍八十三所塔婆二十基大藏經一十四藏諸州河橋一百八十九所つくり西大寺寂尊は龜山の帝伏見の帝ふかくたふとばせ玉ひ興正ぼさちと諡を下させましよしとも元亨釋書にくはし極樂寺は平重時今の所にうつすとかの書に見ゆればもど此所にありしを後に相摸國の鎌倉にうつせしと思はる云々按極樂寺の事は元亨釋書鎌倉志など所見おほかれども伊豆國大仁村に極樂寺畑地中といふ字あればその舊跡なると推量すべしねりかねの筒といへるは練金の瓶をいへるにて銅鐵を合方し作りたる金也

(六十三)伊豆國大仁村の古文書并甲乙人一錢切 又云この村の大仁 石井五郎左衛門がとほつおやは村長

にて豊臣秀次のあそ秀吉のきみとともに小田原北條氏直をほろぼされし時木村常陸介ながしに筆さらせてたまはせし下文をもてりさいつとしおほやけのはかせ青木敦書字文藏 號昆陽おほせをうけて國々にあなるふるき文書どもたづねし時この村よりかの書をさづげたれば江戸へたづさへかへりほどへてかの下し文にいさゝかたがはざるやうにうつさせたまひもつ文にそへてかへしたまはりおろそかになせそとのた

まはせしといふかしこの家にもいたりて二くさともに見つもとつ文は堅一さかいつきよこふた尺ひと寸あまりあつどえしねある紙にていまより見ればいとおろそげなるもの也御うつしはその大きき大高檀紙にてもじのかたちかきさま露たがふ事なし

條々

伊豆國田中郷内大ひと村

- 一地下人百姓等急度可令還住事
  - 一軍勢甲乙人還住之百姓家不可陣取事
  - 一對士民百姓自然非分之儀申懸族有之者可爲一錢切并麥毛不可刈取事
- 右若於違犯之輩者速可被加御成敗者也

天正十八年卯月日

木のおしでと見えいとくおろそげにて文字分りがたし此村のみならで外の村にもおなじさまの下しぶみもち傳へしもありといへり云々與清按右の文書は制札の文におなじ甲乙人ハ甲ハ武士乙ハ雜人也一錢切は過料錢にて其所持の物一切限にありたけ取るをいふ安齋二上峰六十二考合すべし頭書一錢切ハ一錢ヲ盜ル一讀史餘論ノ數太閤ノ條ニ見ユ 世事百談四ノ十丁ウ

(六十四)政子尼の經文の跋并血書の經 槃遊餘錄三編上卷廿二 伊豆修禪寺の事をいへる條に心のとまりしは宋板一切經のうち放光般若波羅密經第三十三芥の卷のおくに爲征夷大將軍左金吾源賴家菩提云云尼置之とあるは文字のさまめでたく女の手と見え政子の筆に疑なかるべし 堅六寸五分許横四寸高さ五寸許の箱は松板にていとくおろそげにつかり鐵の釘もて打つけし蓋に奉納血書法華八軸不可開伊勢新九郎早雲とかいつけ花押をすゑしはその世のありさま思ひやらる云々頭書賢愚因緣經一ノ十三丁ウ

(六十五)馬蹄螺壳蹄子 したゞみは神武紀の御歌万葉集の能登國歌などにより槃遊餘錄三編上卷にこの貝を今しうとめどもいふそのよしはしうとめの物をしみるごとく殻ををしむに似てとかくしてもはなれざれば石もて打くだき身をいだす云々又云壳蹄子は和名抄にかたち犬のひづめに似て石の間になりいづると見ゆ味蟹に似てあまし云々

(六十六)願成就院 槃遊餘錄三編上卷五十二に北條村は四郎時政のすまひし跡或は庭の石なりとて田畑の内こゝかしこに立るはさもありぬべく政子のうぶ



湯の水はいとよき古井也此村の山にいます八幡の御やしらは延喜七のとし丁卯に筑紫宇佐の宮をこゝにうつしまつり中は田心姫命湍津姫命市杵島姫命左は氣長足姫尊右は足仲彦天皇譽田天皇にまします頼朝の卿ふかくたふとび給へりとぞふもとの願成就院は文治五のとしつちのとの酉の夏陸奥押領使藤原泰衝をほろぼさんいのりのため北條時政はじめて此寺を作り天津神の君をまもらせ給ひねぎどのかなひぬとて天守君山願成就院と名づけ棟札は時政の筆也とぞおなじ年此寺の傍に頼朝卿の館をつくらんとしける時古き額をほり出せしにその文字願成就院とありければあやしき事とてすなはちすりをくはへ此寺にかゝげしとなん棟札は近き北條美濃守のぬしより乞はれてつかはしたるにしろしふみなどそへてかへしおこされ額は六七十年さき此寺に住けるほうしぬすみとり三島の宿に持行あらたに寺を作り願成就院と名づけかの額を寶物にしてひめおき今この寺にはなしとあるじのほうしかたる三島は賀茂郡こゝは田方郡にて東鑑にいちじるきをぬすみとりし法師はさらにもいはすぬすみとられしもあり所たづねぬも

ともになほざりとやいふべき東鑑九日文治五年六月六日爲北條殿御願爲祈興州征伐事伊豆國北條内被企伽藍營作今日擇吉曜有事始立柱上棟則同被遂供養名號願成就院云々當所者田方郡内也所謂南條北條上條中條各置院云々十二月九日伊豆國願成就院北畔爲被構二品御宿館犯土忽掘出古額其文願成就院云々即加修傍可被用當寺之額云々北條氏直ほろびし時このあたりやきうちせられて願成就院をはじめ家々やきはらはれ此あたり持傳へしふるき書ども皆失ぬといへり云々(六十七)六十六部回國聖同書同卷(六十五)に藏春院にいたるかねて國人に聞しはむかし頼朝坊といへるほうし六十まり六のくにくをめぐりたふとき寺々を残りなくをがみはて此國にかへり木もてあみだほとけの御かたこゝらかすしれすつくりて田中村久昌寺といふ大寺にをさめおきつその功德によりて又の世にいくさのきみとなり平氏をほろぼし天の下の政をしらし頼朝卿はかの法師の後の身也といへり年月しれす久昌寺はすたれてあとのみのこり彼佛の御かたは此寺にをさまりこふものにはさづくといふ

よりて文無とともにおのれも一はしらづうけてさきつ夫より田中村頼朝坊のつかにいたる畑のうち古きつかのうへにしろしの石もたてりて年の號などもありげなれどいとふるくさらにわかりがたしやゆけば久昌寺のあととて六角の堂あり今六十六部とて國々の寺々めぐるものらは必ことと藏春院にいたりの御かたをこひうく年々に百まり或は二百はしらほどづいくとせしれすほどこし來りぬれどいまにつきすほどこすにしたがひて數まし給ふとぞところどころちて年經しものに疑なくまたく近年にさぎめるものにはあらじかしさいへど此事はわけいていとくあやしうけがたきものからおのれが心もてすつべきにしもあらねば聞けるまゝにするしとぞめつ云々按頼朝坊の事は北條九代記を考べし(六十八)豚魚同卷(六十九)に入鹿魚をかづきあぐるに鼻ぐきかけたるやうにて血おびたしくいではらわたなど人にたがふ事なしとぞ肉は肺にしまりはいと大なる鼎にいれて煮て油をざるにくさき事たとへなし唐土にては海豚江猪などいひ味水牛の肉にひ

としく雌雄ありて人に類しほじにしてくらへばよく虫をころし瘴瘧をいやすとあるどくほじはけもの香ありてくらふべからず魚とはふつにおもはれずして全くけもの肉にひとしこゝにてもよく雲霧をばらふとて箱根足柄のおくをははじめ山深くすむものらにひさぎぬといふこゝの古き書にも毀鼻之入鹿魚之血鼻とあるにむかへてとまれかくまれふりぬる代の書は實にさりけりと思ふ事のみぞおほかる(六十九)大場景親が住所 柴遊餘録三編下卷(七十)昔團子同書同卷(六十九)に平根尾といふ丹土の山ぎはをうがてばむかしだんごてふものいづちひさきは枇杷梅の實大なるは芋がしらばかりまろくましろにてくだけば火打石のどくま中に黄或は黒く砂のやうなるものこもれり長さ七八間巾二間ばかりのうちにもみありて外にふつになし土の上に白くあら



はれたるをとめてうがてば芋の子のつるになりたる  
どいくらもならびてありそのすぢへほりあてねばい  
でがたし土よりなりいづるとおもはれわかきはちひ  
さくいとかたく色白しねびたるは大きく黒くなりて  
木竹などのくちたるどくくだけやすし禹餘糧などの  
たぐひなるべくや云々

(七十二)阿之我利能湯 万葉十四に阿之我利能刀比  
能可布知爾伊豆流湯能云々祭遊餘録三編下卷十六に

この國と相摸の境に土肥の郷ありていま東土肥とい  
ひあしがりにや、近くかしこの湯河原てふいでゆの  
事なりといふはさもありぬべしをちつとし熱海にゆ  
あみせまくかのあたりをとほりしに石橋山をこえ根  
府川江浦川堀を過て門川といふありこゝは伊豆相摸  
の境なり川より東は相摸國あしがら郡川より西は伊  
豆國加茂郡土肥の郷にてぞあなる湯河原は土肥のう  
ちなるや云々按阿之我利は足柄郡也及比能可布知は  
土肥の河内也古代は伊豆の土肥も相摸の内なりしも  
のと見ゆ今の湯河原其地に疑なし

(七十二)基氏回文井城主 祭遊餘録三編下卷四月十  
に八つはたのみやしろにあなる文書はかくなんある

顯 城主附書一ノ十八丁ウ 城主日蓮内一ノ六丁ウ又廿四丁ウ  
蜀志十二ノ十五丁ウ 蜀周傳に都耶城民不背捐交母一昔二城  
主而千里送之云々 梁書一ノ十一丁  
ウ十二丁ウ十三丁ウ同二ノ十五丁ウ

回文文事

一 去秋新田武藏少將義宗脇屋右兵衛佐義治左兵衛佐  
義興越前之金澤ニ而義頭被討晝夜合意趣ニ武藏  
野搦出張幸之合戰豆州船手之面々不<sub>レ</sub>移時日潛ニ  
忍爲<sub>レ</sub>哀切<sub>一</sub>欺ニ右三軍大將<sub>一</sub>尊氏公見參可<sub>レ</sub>給<sub>一</sub>入ニ  
恩賞<sub>一</sub>者依<sub>レ</sub>請捧行者也  
延元丁丑八月

鎌倉管領左馬頭基氏(花押)

畠山道政印  
仁木頼重印

- 土肥高谷城主富永備前守
- 田子小松城主山本飛騨守
- 中立石坂城主小澤隼人正
- 松崎澤谷城主渡部伊與守
- 雲見上山城主高橋丹後守
- 青野摩原城主鈴木大和守
- 見佐堤坂城主進士美濃守
- 三根金原城主笹本豊後守

本郷氏島城主志水長門守

月崎池原城主御籠日向守

長津呂泉城主同名參河守

按義頭と書たるは顯字の草體なりさるを雨岡が考に  
義貞の貞の字を忘て頭か頭に書かへたるか草體ゆゑ  
かくあらんといへりこはひがとて顯の字を頭とは  
書たる也此回文に城主の字面見ゆ

(七十三)手石の彌陀 祭遊餘録三編下卷四月十  
石の浦につく此浦の沖にあなる大石に手のかたおし  
たる文ありよりて所の名によびその手がたを見しも  
のはほどなく身うせぬといへりなみのそこにかくれ  
ていづこにありともしもしれず世にいひさわぐあみだ  
ほどけををがみまつらまじとてこの浦の舟をかりの  
りいづ海にのぞみしいは山に高さ二丈ひろさ三つる  
ばかりの洞ありうちいる、波にゆられて廿丈あまり  
のりいれれば洞のうちくらし四丈あまりさきにはどけ  
の御かたちによさだかにはわかれず金いろにひかる  
もの見ゆしばらく舟をとめつばらに見ればはじめ  
に高さ尺あまり一ツ次に八九寸ばかり三ツ都て四ツ  
並たてり山の腹にあなあるにや彼ひかるものゝかた

はらへいさゝか日かげさしぬればそれにてらされて  
三ツ立るものゝ四ツに見なさるゝやおぼつかなし三  
尊にしおはしまさば中のみほとけは高く左右の脇士  
はひくかるべきをこははじめのひとつは高く次の三  
ツはひくし甲斐の國道入といふ法師正徳のどしはじ  
めて見いでつといへりなほいはまほしかる事おほけ  
れどおもふ事あれば書さしてやみぬ云々

(七十四)都女と云物 同書同卷十五丁 石中よりつ  
めといふ物まれく、いづ石よりもかねよりもかたく  
水晶などゑるにはいとよしといふ大きなは一寸許  
さき尖りて紺瑠璃の色つやゝか也石につきしまゝお  
きぬればいつまでもおなじさまなれど石をはなち年  
月ふれば色かはりて光もうせぬとぞ云々

(七十五)をふしまじりに生しげる 『永久次郎百首  
杵歌に皇后宮少進源朝臣兼昌「片岡のをふしましり  
に生しける杵の小枝初もみちせり」按此歌夫木抄十五  
左秋部五杵の條にも載たりをふしは小柴にて小は細  
小の「義也小枝に對してよめり小枝のさはた細小の  
義にてしがみさえた」などいふもしげみ小枝也片岡  
の小柴に雜りて生繁りたる杵が初紅葉せるよしによ



めり」

(七十六)霜をれ 『新撰六帖』 冬雨の歌に信實「けふは又山の朝けの霜をれに空かきくもり雨はふりつ」按言塵集四卷三三霜の條に霜くづれとは霜柱の折る也霜をれともいふと見ゆ漢鹽草一卷霜部にも霜くづれ霜をれ霜ばしら霜のたうち已上四と出したれど注釋をくはへず霜をれ霜くづれとも今の日かげどけのさまにて雨のふらんとするしるし也」

(七十七)草のかき葉 『拾遺集』神樂歌にひえの社にてよみ侍ける僧都實因「ねきかくる比叡のやしろのゆふたすき草のかき葉もことやめてきけ」按ねぎかくるは願を掛る也木綿手繰といはんとてかくると縁語もていひ出せり草のかき葉は草の片葉也延喜祝詞式龍田風神祭祝詞に天下乃公民乃作物草乃片葉爾至云々また天下乃公民乃作物者五穀平始氏草乃片葉爾至云々大殿祭詞に事問之磐根木根乃立知草能可岐葉言止氏云々六月晦大祓詞に語問志磐根樹立草之垣葉語止氏云々遷却果神

祭詞に語問志磐根樹立艸之片葉モ語止氏云々祝詞考上卷四に草之垣葉と書は訓を知らせ片葉と有は義を以て也さて片葉に至るまでといふにて云々大祓後釋上卷五に垣字朝野群載には破と書り此破字と又片とも書るとを合せて思ふにかき葉とはまづ凡て草は大かた三葉五葉づゝなど並びて生る物なるにそれを闕取てたゞ一葉など残りてあるさまを以ていふ詞にて意はたゞいさゝかの草の一葉までといふなるべし書紀にはたゞ草葉とあれどもそは例の漢文さまに約めてかゝれたる也云々などあるにて知べし歌の意は今日吉の御社に祈申事を草の片葉までも物いはでよくきゝ神も納受し給へかしと也」

(七十八)鹿の夏毛 夫木抄四雜十六神祇に春日社法樂御歌慈鎮和尚「神かきやてかひのしかのなつけよりしりぬひしりのあまの羽衣」按てがひのしかは手飼の鹿にて春日の鹿をいふなつげは夏毛にて鹿の毛を換るをりをいふ此歌故事ありげなれどいまだかうがへず春日驗記などはじめ社記の類にもをささ見及ねば後に考定むべし

權僧正公朝「おほ扇さしかくしてそおこなひのふかき事をはならひ傳へし」按漢鹽草七扇部おほ扇の條に此歌を出して二の句さしかざしてぞ四の句あふきことをばに作り二の句は藻に据り四の句は夫木に据べし歌林拾葉集三卷十二に此歌を釋して御即位の時の高御座の翳の事とし又唐明皇の時蕭嵩奏して羽扇を備たる事などいひたれどいづれも叶はずこの歌の大扇は別に佛道の故事あるべし義楚六帖廿二扇部に隋文所賜敬脫竹扇面長三尺とあるも大扇也加葉執扇も大扇といふまじきにもあらずされど此歌の大扇はさしかざして法を傳受せしよしに聞ゆ

石瀨の枕詞にて武士の屯聚とかゝれり神武紀に大軍集而滿於其地云々また屯聚居此云々怡波瀨委など見ゆ石瀨杜は大和の名所也鳴奴の下蓋香もじを脱せり鳴奴香はなけかしと願ふ意の詞也常影は賀茂眞淵説には木陰の義とし本居宣長は多乎陰の約にて多乎は多和ともいひて山の多和美たる所也といへり今熟按に常影は借字にて外蔭にや外山などいへる類にて山の麓などを指て山の外蔭といふべし和歌童蒙抄三杜部にも跡陰ト書テフモトモ又トカゲモヨメルバ麓ノ心ニヤといへり綺語抄上に「あし引の山のかかけになく鹿のこゑきこゆやは山田もるすこ」此歌の「とかげ」も麓などの心として聞ゆれば外蔭なべし和歌童蒙抄二冬夜歌に「ヤマ里ハ夜トコサエツ、明ニケリトカタツ鐘ノオトノスナルハ」山家冬夜ト云心ヲ經信卿ノ讀ル也イヅカタゾト云ベキヲ「トガタツ」トヨメルイカヤ云々玉勝間三の卷十九に今の世の言に「いづく」を「ごこ」といひ「いづれ」を「ざれ」といづち「又いづかた」を「どち」といふは此「とかげ」のとにやあらん云々按この「とかげ」ももとは外方といふよりうつりて「いづ方」といふ義になれる成べしさて







由部器財門に屏ユトリ舟の水汲器也云々これらにて  
も舟中の水を由といひそを汲取斗を由止利といふ事  
知べしまた安加といふも奇異雜談集三卷十 伊良麿の  
わたりにて獨女房船に乗て鰐にとられし事の條に波  
なほ高く打入ほごに船のあかをかゆる事たゞ手もお  
かすなど見えて古き詞也賴政歌にゆにかくとよめる  
もあかにかゆるといふ心なるよし雜談集の語をあぢ  
はへてもおもふべし』

(八十五)なすの湯 『拾遺集九卷 大中臣能宣長歌に  
「しほかまのうらさひしけになそもかく世をしもお  
もひなすの湯のたきるゆるをもかまへつゝわか身を  
人の身になして思ひくらへよ」云々能宣家集には「た  
ぎるゆるをもかまへつゝ」を「たきる胸をもさましつ  
つに作れり世をわびしきもの」に思ひなすに那須の  
湯」をよせたり那須は下野國那須郡にて今も高名の温  
泉あり平治物語三頼朝舉義兵條に九郎御曹司云々信  
夫ニ越給へバ佐藤三郎ハ公私取認テ參ラントテ留リ  
弟四郎ハ即御供ス早白河關固テケレバ那須湯詣ノ料  
トテ通り給フ云々參考京師本に白河關固テケレバ那  
須湯ト云山路ニカ、リテ通り給フ云々など見ゆる

を夫木抄六卷 温泉部に題不<sub>レ</sub>知<sub>ナ</sub>すの 湯信濃 湯信濃 湯信濃  
「しなのなるなすのみゆをもあむさはや人をはく、  
みやまひやむへく」とあるより物に信濃の名所とせ  
るおほかり和歌名所追考百四 下野部に此歌を擧て初  
句下野やに作り異本信濃なるとありげに信濃なるは  
寫誤にて下野やの方を正しとすべしたぎるゆるをも  
かまへつゝはたぎり湧湯坐を構るよしにゆるといふ  
詞をよせたる也湯坐は古事記中 垂仁の段に亦天皇  
命ニ詔其<sub>レ</sub>后<sub>ニ</sub>言<sub>ニ</sub>凡<sub>ニ</sub>子<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>必<sub>ニ</sub>母<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>何<sub>ニ</sub>稱<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>子<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>爾<sub>ニ</sub>  
答<sub>ニ</sub>白<sub>ニ</sub>今<sub>ニ</sub>當<sub>ニ</sub>火<sub>ニ</sub>燒<sub>ニ</sub>稻<sub>ニ</sub>城<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>火<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>所<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>  
名<sub>ニ</sub>宜<sub>ニ</sub>稱<sub>ニ</sub>本<sub>ニ</sub>牟<sub>ニ</sub>智<sub>ニ</sub>和<sub>ニ</sub>氣<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>子<sub>ニ</sub>又<sub>ニ</sub>命<sub>ニ</sub>詔<sub>ニ</sub>何<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>足<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>答<sub>ニ</sub>  
白<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>母<sub>ニ</sub>定<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>湯<sub>ニ</sub>坐<sub>ニ</sub>若<sub>ニ</sub>湯<sub>ニ</sub>坐<sub>ニ</sub>宣<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>足<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>ま  
た天皇因其御子定<sub>ニ</sub>鳥<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>部<sub>ニ</sub>鳥<sub>ニ</sub>甘<sub>ニ</sub>部<sub>ニ</sub>品<sub>ニ</sub>運<sub>ニ</sub>部<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>湯<sub>ニ</sub>坐<sub>ニ</sub>若<sub>ニ</sub>湯<sub>ニ</sub>坐<sub>ニ</sub>  
坐<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>古<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>記<sub>ニ</sub>傳<sub>ニ</sub>廿<sub>ニ</sub>四<sub>ニ</sub>卷<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>左<sub>ニ</sub>に大湯坐若湯坐湯坐は  
由惠と訓ひがとなり 書紀雄略卷に湯人此云<sub>ニ</sub>與<sub>ニ</sub>衛<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>あ  
る是也神代卷亦云<sub>ニ</sub>彦<sub>ニ</sub>火<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>尊<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>婦<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>乳<sub>ニ</sub>母<sub>ニ</sub>湯<sub>ニ</sub>  
母<sub>ニ</sub>及<sub>ニ</sub>飯<sub>ニ</sub>嚼<sub>ニ</sub>湯<sub>ニ</sub>坐<sub>ニ</sub>凡<sub>ニ</sub>諸<sub>ニ</sub>部<sub>ニ</sub>備<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>養<sub>ニ</sub>焉<sub>ニ</sub>子<sub>ニ</sub>レ<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>權<sub>ニ</sub>  
用<sub>ニ</sub>他<sub>ニ</sub>姬<sub>ニ</sub>婦<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>乳<sub>ニ</sub>養<sub>ニ</sub>皇<sub>ニ</sub>子<sub>ニ</sub>焉<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>世<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>乳<sub>ニ</sub>母<sub>ニ</sub>養<sub>ニ</sub>兒<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>緣<sub>ニ</sub>  
也と見ゆ湯坐は兒に湯を浴する婦と聞えたり 右の神代  
とある湯母は兒に湯を飲しむる婦なるべし飯嚼は飯を嚼て  
兒に食しむる者なるべければ湯を飲しむる者あるべきなり 其にと

りて惠と云義も坐の字を書るよしもいかならん未だ  
思得ず若くは由須惠なるを由須を切て由なれば由惠といふが若  
す 大若は大小といはんが如し云々同廿五卷下九 大  
湯坐若湯坐是も上に既に出づ 卅六葉 但上なるは此御  
子を治養奉れる時の役人をいひ此なるは其に因て又  
別に其名を負せて部を定られたりと見ゆ又書紀雄略  
卷に湯人廬城部連武人云々此とあるは當時に此役を  
仕奉<sub>ニ</sub>し人<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>こ<sub>ニ</sub>ゆ<sub>ニ</sub>又<sub>ニ</sub>孝<sub>ニ</sub>德<sub>ニ</sub>卷<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>湯<sub>ニ</sub>部<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>ある<sub>ニ</sub>十五<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>由  
惠<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>訓<sub>ニ</sub>べ<sub>ニ</sub>く<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>は<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>部<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>へ<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>聞<sub>ニ</sub>え<sub>ニ</sub>たり<sub>ニ</sub>又<sub>ニ</sub>姓<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>負<sub>ニ</sub>  
り天武紀に十三年十二月大湯人連若湯人連云々賜姓  
宿禰 續紀八に若湯坐連歌主 姓氏録に若湯坐宿禰石上同祖  
若湯坐連磨杵磯丹杵穂命之後也 磨杵磯丹杵穂ハ舊事記  
ありて大湯坐宿禰は無し 續紀卅一に遠江國人若湯 上總國  
周淮郡湯坐郷あり云々按古事記傳の説いまだいひつ  
くさず湯坐は湯居にて居は後世居風呂などいふごと  
く湯槽を構居たるをいふいはゆる湯殿風呂場也こゝ  
に奉仕する役人をやがて湯人といひその徒を湯部と  
も湯坐部ともいふ大湯坐少湯坐はそれに大小の品を  
別てるなり上總の地名に湯坐郷あるは湯坐部にゆか

りありて名におへるにや今きさら津の里より二里ば  
かりの所にさばかり温泉のいとぬるきがありときけ  
ど土人ならでは知ものなしといへばさるいさゝかな  
る温泉によりて郷名によぶべくもおぼえず』  
(八十六)大鷹狩小鷹狩 持明院基奉卿應書に鷹を使  
ふ時節は冬を本とす山野無爲の隙を用るなりそのよ  
し昌泰の記にも見えたり小鷹狩は秋のもの也されば  
歌の題にも鷹狩は冬のもの也小鷹狩は秋のもの也さ  
れど現在大鷹も小鷹も夏の外は三季にわたりてみな  
使ふ也云々按歌には小鷹狩は秋鷹狩野行幸などは冬  
の季によりて夫木抄の類すべて歌題の書にさやうに  
載たりされば小鷹狩は必秋と心得べく冬は小鷹も大  
鷹も使ふ事と心得て歌にもよむべきなりされば古今  
六帖二にも大鷹狩には冬の歌秋の歌をまじへてのせ  
小鷹狩には秋の歌のみを載たり  
(八十七)里見某にこたふ 現存六帖の題は假名に書  
て候へども假名題と申にては候はず常の題詠のやう  
によりてくるしからず候さうびきちかうぼうたんな  
どの類物名ならでもよみ候事常にて候尋<sub>ニ</sub>梅<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>知<sub>ニ</sub>  
花と申題は梅を尋れども花を見あたらすあるはか



ほりにおぼめきあるは人のいふに迷ひなどする心いづれにてもあるべし論戀はなにゆゑに人はつれなきぞさはなきはづなるものをなご一首の中に人の心を論じてうらみもしこひしたひもする也

(八十八)仕舞 物を爲はてたるを仕舞といふ俗語は舞樂の後舞を略して志麻比といへるなるべし

(八十九)あざなへる繩 太平記に吉凶はあざなへる繩のどしど見ゆあざなへるは合せ縛るにて阿波世の波を省たる語也

(九十)こめく 『夫木抄廿九卷に貞應二年百首木こめく民部卿爲家「秋深き山の夕霧しめく」におのれも色やまつかはるらん」按漢鹽草九卷六こめく條に此歌を出して下句まづかくるらんに作れり此方よろしかはるらんにてはきこえず契沖法師が夫木抄

首書に童の葉を手にこき入て金になれ米になれとやらんいふ木ありそれ歎云々○本草啓蒙廿二卷に柞木○イヌツゲ○ヤドメ加州○ヨメガサ州○ケズ州○カシラケツリ州○カシラケツラ州○ガニ州○コメ州○ハアツゲ州○ビンカ州○ビンカ州○メハリ州○ビンカ州○ズ信州○ビンカラ州○メハリ州

カシラツカミ同○チチノキ○一名直脚黃楊江陰縣志○柞木本草○鑿木子本草○山中ニ自生多シ小葉細長厚シテ細鋸齒アリ深綠色互生ス此木枝條繁茂シテ冬枯ズ故ニ人家庭院ニ多ク栽旅家殊ニ多ク植夏月葉間ニ小白花ヲ開キ圓子ヲ結ブ熟シテ色黒シ又實ヲ結バザル者アリ江戸ニテ「オホツゲ」ト云又一種枝ニ刺アルモノアリ凡ソ柞木ハ山中ニ小木多シ大ナル者ハ稀ナシ材堅シテ色白シ大ナルモノハ板木ニ用フ「ツゲバン」ト云楠ニ造ルツゲノ楠ト云或ハ印材トス一種小葉ノ者アリ「コツゲ」ト云葉長一二分江戸ニテ「ヤドメ」ト呼ブ庭ニ栽ルニハコレヲ上品トス一種尾張ツゲアリ一名「カラツゲ」大和アサマツゲ州ノ木勢州朝熊山ニ自生多シ人家ニモ多ク栽木ノ高サ五七尺播州深山ニハ丈餘ナル者アリ枝條繁茂スルヲ柞木ニ同ジ然レドモ柔軟ニシテ對生ス葉モ亦對生ス鋸齒ナクシテ柔厚末尖ラズコレヲ錦塾黃楊ト云江陰縣志ニ出云々按阿波國にては黒つげとよべり今紀伊國にてこめくといふ古名の存せる也歌にかしらげづらすこれにや○與清曰爲家卿歌にこめくとよまれしはつげの類にて本草啓蒙に柞木に當たるものなり大和本草十二上卷

松屋筆記卷之八十九

華頂殿侍倭學士平小山田與清稿

に笑靨花を「コメノハナ」と訓じたれど其名は近くして別物也笑靨花は遊生八卷花鏡首卷廣群芳譜五十三卷などに見えて草花なれば木のこめくにはあらしまた米櫻小米櫻大和本草附錄あれど夫木抄藻鹽草などの體裁山木の中に並出したれば黃楊の屬のこめくなる事疑べくもなし

(一)太刀契 日本紀略上天德四年九月條に廿三日庚申今夜亥三刻内裡燒亡云々廿四日辛酉廢務三箇日又昨夜鏡三和名加之古止古呂並太刀契不レ能レ取出今日依レ勅令レ授レ求餘燼之上レ已得レ其實レ但調度燒損其眞猶存形質不レ變甚爲神異即大藏省韓櫃令奉納之云々同十月條に三日己巳已絶殿大允藤文紀參中云去月廿四日依レ宣旨御坐内裡賢所三所遷御縫殿寮之間内侍奉レ納威所三一所鏡件鏡雖レ在猛火上而不レ破損即云伊勢御神一所眞形無レ破損長六寸許一所鏡已涌亂破損紀伊國御神云々太刀卅八柄之中四柄自清涼殿求出之卅四柄自溫明殿求出之有其中節刀契七十四枚皆眞形也自背中別兩各有銘併全不損長各二寸餘許八枚金十四枚銀五十枚銀塗物又有金銀涌亂一斗餘許也左近少將源伊勢將監藤原佐理右近少將藤原助信將監源時中藏人主殿助藤原爲光出納雀部有方女官等同以祇候云々



○帝王編年記十六 村上天皇天德三年條に九月廿三日庚申夜内裏焼亡云々宜陽殿累代寶物温明殿神鏡太刀節刀契即春興殿安福殿戒具内記所文書仁壽殿太一式盤皆爲灰燼一人代以後内裏焼亡三度難波宮攝津國藤原宮高市郡今平安宮也遷都以後百七十年始有此災遺左右中少將鑿求神鏡太刀契等重光奏云温明殿所破瓦上有鏡一面徑八寸許頭雖有小瑕專無損圓規并帶等以分明又求得太刀契又鈴印鎰辛概所取出也云々○中右記寛治八年十月條に廿四日云々亥刻大風頻吹忽聞西陣方雜人走叫之聲而大風盛吹程存成誼諱之由不驚之處彌以大叫三人出直廬見之西陣方小屋等燒亡火炎高熾飛燼滿天云云内侍所并大刀契又置陣廊鈴印辛概殿上御倚子時管絃具等皆和尋處各以取出云々同條裏書に天德四年九月廿三日庚申夜内裏初焼亡内侍所并大刀契鈴印累代寶物燒了但靈鏡不損從灰中取出也見御記云々○年中行事秘抄寶所雜事條に天慶元年七月十三日今日戊刻内侍所自温明殿遷御清凉殿齋辛概二合自往古號之神明在內侍所相傳云伊世大神令分身也每事靈驗也細櫃五合在此中云々また神鏡并大刀契事條に天德四年九月廿三日庚

中今夜亥三刻内裏焼亡廿四日大臣以下參職御曹司等又昨夜鏡三并大刀契不能取出今日依勅令搜求餘燼上已得其實但調度燒損其真猶存形質不變甚爲神異召大藏省韓櫃令納又御鎰韓櫃三口令納外記局十月三日已已縫殿大允藤文紀參向申云去月廿四日辛酉依宣旨御坐内裏賢所三所奉遷縫殿寮賢所三所一鏡件御鎰雖在猛火上而不損一眞形無損長一鏡已通亂紀即云伊世國御神若魚形也白青中別各有六寸許也伊國御神契七十四枚鎰併命不損長各二寸餘許八枚金十四枚銀五十枚後物云々また内侍所數日御他所例條に小野宮記云寛弘二年十一月十五日己未月食皆既于時内裏焼亡主上中宮御神嘉殿火起自温明殿神鏡所大刀契鈴不能被出云々少遷御式御曹司而破損殊甚又幸官朝所同月廿七日辛未黄昏參内左府云御在所舍板敷下朝所舍也忽有大產穢仍吉田祭并臨時祭停止内侍所穢間不可奉濟撰吉日後日可奉渡者天德燒亡時暫奉安置縫殿左右近衛并寮官奉護移御冷泉院之後撰吉日更奉渡仍彼例後日可奉渡又左右近衛并史一人可護候由被下宣旨戊二點自朝所幸東三條院大刀契鈴印等持候如例大刀契燒損納新韓櫃所持候也十二月九日癸未今日酉刻神

鏡自大政官奉移東三條云々○小右記寛弘二年十一月十五日條に子刻許隨身番長若倭部高範自第一來云内裏焼亡者乍驚馳參左大臣師相逢郁芳門内相共參入此間大勢太猛下人云主上御神嘉殿者仍參著中宮同御座云々人々云火起自温明殿神鏡大并大刀并契不能取出云々同十七日條に神鏡大并并契盡燒亡鏡僅有帶自餘燒損無圓規一失鏡形又有大刀刃但魚符等少々在云々村上御記云天德四季九月廿四日焼亡云々廿四日重光朝臣申云罷到温明殿所未見瓦上在鏡一面其鏡徑八寸許頭有一口無損圓上見之者又求得大刀刃等云々又以所求得令納魚形二隻女官等或備是亦神也大刀四柄室等並燒失只金銀銅魚符契合册九隻或鎰發兵解兵府其國或鎰其官契皆作魚有種占合不者形相合如木契之趣又有片々不合者又此燒損之所致云々廿五日清遠伊勢等令申又求得燒鏡一面銅魚契卅餘枚合前惣七十四枚雜劍册柄此中可有節刀又加云々故殿御日記云恐所雖在火灰金銀銅等小調度云々故殿御日記云恐所雖在火灰燼之中曾不燒損云々鏡三面申伊勢大神紀伊國日前國懸云々如件說似似三面云々同廿七日條に戊二點自朝所幸東三條院警侍衛如恒左大將於大刀契鈴印等持候如例但大刀契燒損納新韓櫃所持候也大刀只有刃契無殊損魚

符損或不損云々○禁秘抄上卷第大刀契事條に匡房記顯實云鋒劍三尺或二尺惣十其中一劍脊有銘北斗左青龍右白虎其外不見是自百濟所被渡之二劍之一歟日月護身之劍三公圖戰之劍歟但節刀可在此外注青龍之條似六典所稱之傳符若遣大將軍之時可用歟通俊曰長德連署之說以之爲大刀匡房曰長德連署不見歟已上鈴印同記俊實通俊曰件鈴太有興物也或六角或八角云々已上上古少納言伺見歟又節刀論天曆帝付寶劍帶取不離御身云々誠我國至極重寶物也云々○桃華藥葉可覺悟一條群書類從一卷四十に大刀契事大并四柄者累代之靈劍也國家殊被重之如天德記者雖燒損形質猶存仍或琢磨刀或造加飾其時更不被出宮城是貴重之至也契者親王大臣及諸衛契符也天德同以修補之魚符七十四候分入三張被加納太刀韓櫃中行幸時左右近衛將監持候是也以納内侍司稱契櫃以納兩種稱大并契櫃古典所載已以分明然則有二合也云々○參考太平記二卷六丁南都北嶺行幸條に毛利家天正本云元德二年三月二十七日比叡山行幸成テ大講堂供養アリ云々内記ニテ菅原長綱外記ニハ佐伯爲忠此



次ニ負鎰鈴ノ御馬ヲ引セラル其述ニハ少納言藤原國持朝臣此次ニ大刀契ヲ持セラル此後ハ公卿ナリ云々傳宣草下卷詳類從本臨時事部に内侍所申請大刀契覆一事云々○後圓融院永和元年大嘗會記に鈴の奏といふ事は天子累代の靈物たるゆゑに鈴大刀契などを行幸にはかならず供せらるゝ也鈴はすなはち騎使にたふ大刀はいにしへの寶劍也節刀太刀は皆百濟より奉れるつるぎどもなり日月護身の劍破敵將軍の劍などいふ物なりき是もみな或は度々の炎上にやけ或は紛失し侍るにや返すゝ無念の事也契は魚のかたちに似て諸司の契符也これも今は其名ばかり也但その器物をよめて如在の禮を用らるゝなるべし云々○愚管抄五平治元年條に尹明はしづかに長櫃をまうけて玄象鈴鹿御笛のはこだいどけいのから櫃畫の御座の御太刀殿上の御椅子なごさだし入て追さまに六波羅へ參れりければ云々内裏には信賴義朝師仲は南殿にて虫の目のぬけたる如くにて在けり後に師仲中納言申けるは義朝はその時信賴を日本第一の不覺人なりける人をたのみてかゝる事を仕出づると申けるをばすこしも物もえいはざりけり紫宸殿の大床に立

て鏡より著ける時だいといけいの唐櫃の小鈎を守刀に付たりけるを師仲は内侍所の御體を懐に入れて持たりけるたべその鈎これにぐしまるらせてもたんの刀につけて無益也といひければ誠にとて投おこせたりければ取て云々○百練抄四卷廿寛弘二年十一月十七日條に神鏡燒損事令諸卿定申之大刀契同燒損令諸道勘申云々同十三卷十安貞二年條に正月九日大刀契紛失之由有沙汰十四日藏人頭治部卿親長朝臣參向内侍所求大刀有鐵室握之物求出之如天曆御記者已爲大刀歟云々二月八日奉納大刀契左中辨有親朝臣左中將資季朝臣參内侍所云々西宮記正月朝拜條に辰刻天皇御南殿掃部司昇出大刀契等云部上朝拜條に辰刻天皇御南殿殿南殿子西四間云云○北山抄拾遺雜朝賀事條に時刻御腰興幸建禮門不候大刀云々同卷五大嘗會御祝事條に戌刻總興出自建禮門入自昭訓門於東廊壇上加腰興云云大刀契同候之清涼抄云候否未詳而天云々同射禮條に式幸建禮門行此議御腰興不候大刀契及鈴云々大嘗會條に行幸之間无警蹕等儀但候大刀契云々○江家次第十五卷大嘗會條に御廻立殿不奏鈴持候大刀契同候云々又同卷十同條に少納言並左

右將監自殿南庇進大刀契鈴等云々○與清曰大刀契は二物也大刀は百濟より奉れる靈劍四柄をいふそれに雜劍四十柄を加へるものに四十四柄とも記せる也契は魚の形に作りたる割符にて七十四候ありこれ諸司に用る證據の割符也大刀契幸櫃とはこの二種を納たる幸櫃をいへり後に一物と思ひひがめて「グイトケイ」とよみもと文字なるを假名に引直して「だいどけい」と寫しひがめたるも少からずさて大刀契は必「クチ」「ケイ」と讀て大刀と契との二物と心得べし(一)兩段再拜八開手 儀式一卷新年祭儀二に神祇官拍手兩段云々また春日祭儀八に神主著木綿襪一就祝詞座兩段再拜拍手四段訖各就直會殿座云々また大原野祭儀十一に神主著木綿襪就祝詞座兩段再拜大臣以下共拜讀祝詞二亦兩段再拜拍手四段云々また園井神祭儀十三に御巫先進再拜兩段神祇官共拜御巫微聲宣祝詞一再拜如初御巫拍手兩段云云また平野祭儀十七に神主讀祝詞二皇太子以下亦兩段再拜拍手四段云々また賀茂祭儀廿二に即使等兩段再拜各就座云々同書三卷踐祚大嘗祭儀中に宮主執祭文入南門内再拜兩段訖讀祝詞云々

延喜式伊勢大神宮式九に即使及宮司以下向多賀宮再拜兩段拍手短手兩段云々按此外式中にも古書にも所見おほかれござまではえうなければ引出す雨書拍手ノ上五丁見兩段再拜モ見ユ又五○北山抄月部雨書ノ廿七丁七ノ廿五丁松ノ落葉十ヲ考ベシ○北山抄月部四方拜條に每陵兩段再拜云々自注に或曰天地四方之神皆用再拜爰知向二陵兩段再拜於是每陵再拜惣謂兩段再拜也云々然而荷前或兩段再拜者非是拜二陵總拜十陵也又諸祭式多有此文本朝之風四度拜神謂之兩段再拜本是再拜也而爲異三寶及庶人四度拜之仍稱兩段也天地四方可依唐土風只用再拜陰陽家諸祭如之二陵任本朝例各兩段再拜也云々○江家次第卷十四方拜條に或云天地四方之神皆用再拜中二陵任本朝例各兩段再拜也按こゝは北山抄の文を引たるにて異同なければ省略す雨書又六卷卅四丁左平野祭條に以○中右記嘉承二年十月四日條に今朝子出河原相具下部兼俊向大神宮方聊以解除心中御神樂拍子執之間可無失禮之由祈申有拜八度先四度次打手次四度又次參詣吉田同祈申此事也○代始和抄詳類從に主上御拜の座にうつりつかせ給て右兩段再拜し給ふ之は神宮へ奉らるゝ御幣



を拜し給ふよしなり云々○桃花葉群書類本可レ覺悟條々に女房神拜兩段再拜年居四度禮之也云々兩段再拜兩段之間年居可レ小掛出家後モ兩云々○樋口秘記四十八に兩段再拜ハ天子ニカギル今關白ノ名代ヲ勤ラル、一ハナキ也云々伊勢貞丈書入に兩段再拜天子ニカギルトハ非ナラン是ハ神拜ノ禮也云々按樋口秘記一卷樋口宗氏が筆記にて享保十四年秋季十三日於粟田口白河亭書之定教といへる奥書あり安永二年三月十四日伊勢平藏貞丈これを寫得て頭書を加へたり○神道名目類聚抄五卷二祭祀部に兩段再拜神ヲ拜ル時先再拜シ祈念畢テ又再拜シテ退ク是ヲ兩段再拜ト云云々○梅窓筆記上卷廿二に皇朝ノ古禮ハ四拜拍手スルヲナリシカ日本紀略延曆十八年正月朔皇帝御大極殿受朝略減四拜爲再拜不拍手トアリ云々拍手ニモ八開手長拍手短拍手ナド云フアリ今時ノ神ヲ拜スルニ二ツ手ヲ拍ハ短手ニテ延喜式ノ假名ニシノビテトアルモノニテ拍聲ノ音ナキヤウニ拍ヲ云ナリ云々一條禪閣兼良公江次第抄新年今案上卿拍手作法不レ合有レ聲手のさきをあはせてやをらくと打合也トシルサセ玉フニテモ

不有レ聲一知ベシ○古事記傳四十二卷十二雄略下に手打は物をレ得賜ふを歡喜賜ふ能なり云々大嘗會儀式に拍手四度度別八遍神語所謂八開手是也と見え大神宮式に再拜兩段短拍手兩段膝退再拜兩段云々まづ八開手とは四度度別八遍とあるは八つ、四度にて合せて三十二拍を云如く聞ゆれども所謂八開手是也と云るは一度に八つ、拍ことを云るにて四度合せたるを云には非ず然れば八拍を八開手と云なり云々○與清曰兩段再拜は古の八開手の遺愛なりこれ神拜の禮式にて天子に限れる事にはあらずその作法は北山抄に見えたるがごとし八開手は儀式六踐祚大嘗祭儀中に跪拍手四度度別八遍神語所謂八開手是也云々同四踐祚大嘗祭儀下に拍手四度度別八度所謂八開手者也云々延喜大嘗會式五踐拍手四度度別八遍神語所謂八云々などあるにて明なるうへに本居宣長が古事記傳に委レいひたれば今は筆を費さずやみぬ

(三)ちよのうが戴く桶如大尼無著尼無外尼鎌倉底脫井京都景愛寺 東見記下卷廿二に如大尼ヲ千代女トイフ「チヨノウカ戴ク桶ノ底スケテ水タマラテハ月

モヤトラス」千代女ガ歌也云々○本朝語園九卷廿三無著尼俗姓條に如大禪師無著尼ハモト金澤越後守顯時ノ女ニテ足利讚岐守貞氏ノ後妻ナリ弘安八年十一月平貞時長崎頼綱ガ讒言シテ三浦泰盛其子宗景ノ族類ミナ難ニカ、ル顯時外家ノ陸アリトイヘドモ北條ノ親ミヲ以テノ故ニ答ナシ然レドモ快々トシテ光陰ヲ送り給ヘリ薨ゼラレテ後如大出家ノ志アリ、一日潜行シテ美濃國ニ至リ松見寺ノ老尼ニ附諸尼ノタメニ賤婢トナリテ薪ヲ採水ヲ汲勞スルコトヲカヘリミズ暇アル時ハ禪床ニ坐スソノチ八月十五夜月アキラカニシテ雲ナシ如大谷ニ下リ水ヲ汲ケルニ桶ノ底脱テ水ミナ盡ケレバ忽然トシテ大悟シ和歌ヲ詠ジテ云ク「トニカクニ巧シ桶ノ底スケテ水タマラテハ月モヤトラス」世々ツタヘテ口號トス後ニ洛北松木島ノ邊リニ一字ヲ建景愛寺ト名付テ此ニ住ス俗ニ千代能姫トイフ云々○鎌倉海鏡猿田彦四卷廿三海藏寺條に底脱井總門の外右の方にあり相傳昔上杉家の尼參禪して此井の水を汲て投機す歌あり「しつの女かいたく桶の底ぬけてひた身にかゝる有明の月」此因縁にて號すと無相相還眞相看應物現形福源水指頭明月影團々按に城陸奥守平泰盛が女金澤越後守

平顯時が室と成後に尼と成り無著と號し法名を如大といふ佛光禪師に參じて悟徹す投機の歌あり「千代能か戴く桶の底ぬけて水たまらねは月もやとらす」ちよのうは無著が雅名也此事を謬傳へたる歟上杉家の尼誰共難知云々按鎌倉海鏡猿田彦九卷あり印本也寛保元年辛酉林鐘松月堂自叙ありこゝに擧たる鎌倉志の説也○山州名勝志二卷五十三洛陽部一に景愛寺建長記云五景愛尼寺開基如大禪師小傳云師號如大別稱無外後又呼無著乳名千代野城奥州禪門女也幼而仕掖庭既笄配金澤越州守而誕一女後號長而爲足利讚岐守淨妙寺貞氏之夫人云々按山州名勝志に引たる如大禪師小傳は本寺に傳へしものによいと古書のさまにぞおもはるゝ○和漢三才圖會七十末卷五 山城國部に景愛寺在洛北開基如大禪師一名無外又名無著城奥州禪門之女也幼仕掖庭既笄配金澤越州守而生一女長而爲足利讚岐守淨妙寺貞氏之夫人建一字於洛北是也云々五十一寶鏡尼寺在等持院東相國寺如大尼禪師爲先師佛光國師所建寺號巫脈庵後夢窓國師勸高師直爲伽藍改號万年山眞如寺後水尾帝再興以第六皇女尼住







文可知行之由前々雖訴申如所帶證文者無道理之上關東御式條之狀廿年以後者不可有沙汰之由爲明白云彼云此爲長常勞無道理之間無向後違亂如元可令領知之狀如件  
延應元年三月日

目代前筑後守平朝臣(花押)

○留守所下

奉 上正月八日吉祥御願請僧御布施料稻伍仟玖佰貳拾肆束事

三寶御布施三百束

講讀師并請僧御布施伍仟六百二十四束

右依大政官天平神護二年五月十七日延曆廿四年三月廿五日任兩度符之旨奉上所如件

嘉吉二年正月十五日 稅所平(花押)

大掾平

○同國府中總社古文書に

○廳宣 留守所

可早任 宣旨狀除三社領外不論神社佛寺以下免給等平均宛催云建久以後新立庄園令進濟大嘗會用途料段別參升米事

副下

宣旨 院宣

右大嘗會者天下之重事諸國之課役是以所被宛召一段別三升米也早任 宣旨平均令宛催早速可進濟兼又新立庄園并公田員數等委可令注進言上之狀所宣如件國宣承知不可遲怠以宣  
文永十一年六月

○留守所下

可令早任先度國宣旨稻富名相大夫高家孫

成光進退領知田肆段事

右件田者依爲稻富名内先國司花山院大納言家之時可被返付本名之由有御下知被付畢但件

田四段者爲彼名内者也而洩先度御下知之間類地之上者同可蒙御下知之由依申如元所宛

給也仍可令進退領知之狀如件

弘安八年正月廿九日 稅所(花押)

國司代左近大夫將監橋朝臣(花押)

按相大夫は總社の神主職也當社の貞和四季三月大掾高幹が狀に以師家所被補相大夫とあり

○留守所下

可令早總社神主師幸進退領掌致御近忠當社御敷地内田島事

合

田參段屋敷壹所 買主とき

田參段 買主石崎彌二郎

屋敷壹所 買主山本

右買主等雖申子細質券買賣之地事關東御德政嚴密之上御祈禱之地爭可及非器之知行哉就中府中田島等者國衙一圓進止之條關東度々御成敗之留守所裁許何可有豫議哉早師幸如元令進退領掌可令勤仕御祈禱之狀如件  
永仁五年四月一日 稅所右衛門尉 大掾平

目代藤原(花押)

大介藤原(花押)

按此文中留守所裁許といふ事有

○廳宣 留守所

可早以留守所御館跡南半分并久松名云田内宮部高根青屋作及同池袋一巫本給田一段爲

總社二御子職令被募引給田島事

件給田島者宛給常陸國總社二巫處也二巫子々孫孫無相違令進退領掌彼給田島可令勤仕神事國役之狀所宣如件

正安二年五月二日

按此文中留守所御館跡とあり留守所は國司代目代などの事執行ふ役所なる事知るべし

○留守所下

可早以總社神主師幸令知行領掌森南北屋敷抽御祈禱忠勤事

右屋敷者國衙重止之地也而依敬神之儀以神主師幸可令知行領掌抽天長地久國吏安穩留守所奏平御祈禱忠勤之狀如件國宣承知敢勿違失

故以下

正安三年九月廿七日

目代前能登守平朝臣(花押)

按國吏安穩留守所奏平とあるにても留守所は國衙なること疑なし○與清曰留守所の名目ものに見えたるは枚舉に違なし今これかを考わすに國司の廳なるに國守は在國せずして國司代目代などを置て國政



を執行はしむるゆる留守所とはいへる也

(六)和與 右記群書類從四百四十四卷卅三丁左房官與修學者列座上下相論事條に此種々儀悉以相叶和與道存此旨一事穩便可遂交衆也云々○明月記寛喜元年十二月十日條に年來和與之間示付此兒事云々○源平盛衰記卅七卷丁左則綱討盛俊一條に則綱思ケルハ維廣ヲ待付テ盛俊ヲ討タラバ二人シテ討タリト人ノイハシモノ本意ナシ和與シテ命ハ生タレ共トテモ遁ルマジキ盛俊也鹽谷ニ取レテ云甲斐ナシ後ノ世ヲコソ吊ハメト思ヒ云々○貞永式目群書類從四百七十七丁右不親疎被養養輩違背本主子孫事條に憑人之輩被親愛者如子息不然者又如郎從歟爰彼輩令致忠勤之時本主感歎其志之餘或渡宛文或與讓狀之處稱和與之物對論本主子孫之條結構之趣甚不可然云々清原宣賢宗元也式目抄丁右に和與ハアマナヒアル也財寶ニテモアレ田地ニテモアレ眞箇發氣シテアルヲ和與ト云法意ニハ和與ノ物ハ親疎ヲ論ゼズ取返スマジキト云リ養養セラル者カ此法ヲモテ和與物ナレバ取返サレマジキト本主ノ子孫ニ對論スル也古法ニ違テ此式目ニハ和與ノ物ナリトモ取返セト

云リ云々シカラバ永代ノ文言アリトモ取返スベキ也云々丁右一兄弟姉妹和與物悔返否事右如法意者彼和與物難悔返歟但或依成父母之禮讓與所領或偏以恩顧之儀讓得所帶之輩等忽忘救命及敵對者猶可任本主意將又就證文可有子細歟追加一人和與領事文永九十一評以御恩之地和與他人之條兩方同心之趣非不審所詮被尋究其山緒之時或報累年之苦心或爲當時之懇志兼日契約之條無其隱者不及子細若親昵之儀無所據者可被召和與地也且存此趣可申沙汰之由可相觸五方引付頭人之旨可被仰城介歟一人和與領事文永十一評右閣子孫讓他人之條結構之趣非無符略不謂御恩私領向後可被召彼和與狀也但兄弟叔姪之近親者令取養者不及子細矣一和與他人物可悔返否事於相憑人之輩者不可對論本主子孫之由被載式目畢此外和與他人之物任法意不可悔返歟是又就證文可有斟酌歟一讓與兄弟叔姪所領事正應三稱和與之地本主不悔返之由雖有其沙汰自今以後宜任本主之意歟云々○常陸吉田社古文書に

和與

近衛北殿御領常陸國吉田社領雜常祐眞與同社神宮寺別當權少僧都成珍相論當寺別當職一再成珍知行分山本郷御年貢及檢注事

右當時者本所一圓爲御進止之處假御家人之號不隨領家所勤之間就訴申之依爲公家武家兼帶所職帶關東御教書等之上者非本所一圓進止之由成珍捧陳狀之間雖番一問答以和與之儀任先例向後奉轉讀每年四季大般若經可捧卷數之由依出狀止訴訟者也次山本郷内成珍知行分御年貢正和五年以來對捍雖訴申之致辨之之由令出帶年々請取罪及檢注事可依總郷側之旨令申之上者同止訴訟罪若背和與狀御祈禱不法懈怠候時者立還本所可申子細者也仍和與狀如件  
元德三年八月廿四日 雜掌阿闍梨祐眞

按これは吉田社領の雜掌祐眞と神宮寺別當成珍が相論の和與狀也和與は今俗の中直り又は内濟などいへる類也○尺素往來群書類從四百一十六丁左本領事狀に神明寄進佛陀施入他人和與庶子割分之地者不可有悔還改動之儀云々○節用集卷上和部言語門に和與云々

○運歩色葉集和部に和與ヲ云々○與清曰和與は環翠軒宗尤はあまなひあたふる也ともやはらぎあたふる也とも注し式目抄七丁右伊勢貞丈は相共に和談する事をいふ也といへり亦處今按に和して與る義なるも和談する義なるもありて古書のかひさま一様ならず所により分別すべし和與物とは和して與へたる物也和與狀は和談狀也

(七)稅所 常陸國府中總社古文書に  
留守所下  
可令早總社神主師幸進退領掌致御近忠當社御敷地内田島事

田參段屋敷壹所買主とき  
田參段買主石崎彌二郎  
屋敷壹所買主山本  
右買主等雖申子細質券賣買之地事關東御德政嚴密之上御祈禱之地爭可及非器之知行哉就中府中田島等者國衙一圓進止之條關東度々御成敗之留守所裁許何可有豫議哉早師幸如元令進退領掌可令勤仕御祈禱之狀如件



永仁五年四月一日

税所右衛門尉

大掾平

目代藤原(花押)

大介藤原(花押)

○留守所下

早可令勤仕五位職事

小三郎大夫清原師親

右以人五位職令補人之處也仍在廳官人等宜承知

不可違失以宣狀如件

正和四年六月廿一日

税所平(花押)

大掾平(花押)

目代

○留守所下

清原師貞

右以人所被補任五位職也仍任先例可令勤仕其役之狀如件

貞和三年十一月日

税所平(花押)

大掾平

目代

○同國吉田社古文書に

可令早税所新左衛門尉平廣幹領知上野國大

寶庄東神澤後園内田貳町參段在家貳宇武藏國賀

美郡長濱郷内赤洲村内田陸段在家壹宇事

右任亡母丹治氏實治二年十二月三日讓狀神澤内田山

良六郎經氏弘長三年七月和與狀赤洲田地并在家事可令領

掌之狀依仰下知如件

文永三年十二月十一日

相摸守平朝臣(花押)

左京權大夫平朝臣(花押)

按相摸守は北條時宗左京權大夫は北條政村也此文

中税所の領地の事并和與狀の名目等見ゆ和與狀は

和談中直りの狀也

○また

常陸國吉田社田所職半分税所式部事

右任由緒知行不可有相違次於社役者守先例不可有退轉之狀如件

應永廿八年十一月六日 平滿幹(花押)

税所殿

按平滿幹は常陸大掾也此文書を考れば税所式部二郎が吉田社の田所職を兼帶したる也

○また

切手御得分雖田數陸拾陸町壹段候此内貳拾町切手分として進之候相殘四十七町壹段之所者

室田筑後下方向之時可申談候也恐々謹言

正長二年八月十日

大使文世(花押)

税所殿

御宿所

按大使文世文安五五廿一の文書には一志文世とあり室田筑後方の方字は様といふに同義也これは伊勢神宮より下れる使にやとおぼゆ

○また

税所殿へ渡申候切手郷事

右常陸國北郡内上曾郷吉生郷柿岡郷治田郷高倉郷河俣郷彼六箇郷ヲ田數陸拾陸町壹段之分入野彈正殿御口承之間此在所ヲ任先例御所務とて可被召候仍爲後日如件

永享六年八月七日

文世

税所殿

按税所の所領の事此文にて推量べし

○また

就其方事委細承候感悅至候仍京都へ致注進候者定可有御感候哉彌被致忠節候者於恩賞者速可申沙汰候恐々謹言

嘉吉元年三月八日

清方(花押)

鹿島税所殿

按清方は上杉兵庫頭が事にて結城を攻る時の書狀也

○また

留守所下

奉正正月八日吉祥御願請御布施料稻伍仟玖佰

貳拾肆束事

三寶御布施三百束

講讀師并請僧御布施伍仟六百二十四束

右依大政官天平神護二年五月十七日延暦廿四年三月廿五日任兩度符之旨奉上所如件

嘉吉二年正月十五日

税所平(花押)

大掾平

按此文書に税所より大掾の方を掲て書たれば税所は大掾よりも下職なる事知べし

○また

税所殿へ進候切手可田數内雖所治田高倉十八町



二段右此内へ八町二段右依<sub>ニ</sub>稅所殿申談候<sub>ニ</sub>眞壁郡内竹來郷田數八町二段六十歩へ相換申候於<sub>ニ</sub>伊勢役者可有<sub>ニ</sub>御所務<sub>ニ</sub>仍爲<sub>ニ</sub>後日<sub>ニ</sub>相換申候狀如<sub>ニ</sub>件

文安五年五月廿一日 大使一志文世(花押)

稅所殿

按一志文世は伊勢大神宮より諸國へ下さるゝ使の内なるべし一志は伊勢の地名なればよし有<sub>ニ</sub>與清曰稅所は吉田社古文書に草假名にて「さいしよ」と書たれば「さいしよ」と訓べし「せいしよ」とは訓べからずこれいにしへの郡司の遺風にて賦稅の事を司る役人に見ゆそが中神社の田所職などを兼帶せるもありし也稅所の上席に大掾ありこは介の差次の官人なれど後には平國香の子孫常陸に住て代々大掾の官を相承せるよし府中總社古文書中安貞元年十二月廿六日北條武藏守同相摸守が常陸前司に下せる鎌倉殿仰執達の狀に見えたりさて介上にあり大掾其次にあり稅所其下に若干人ありし成べし

(八)雲「アマゴヒ」「アマビキ」雲は請雨祭也日本紀天武紀下卷十二丁左六に雲アマゴヒと訓その外もの然よみたるおほかり○日本紀廿九卷十丁左天武紀六年五

月條に是月旱之於<sub>ニ</sub>京及畿内<sub>ニ</sub>雲之云々また同十七年六月條に壬申雲云々また廿一丁右六月戊寅條に是日雲之云々また廿五丁右十年六月條に乙卯雲之云々また廿四丁右十二年七月條に庚子雲之云々また是月始至<sub>ニ</sub>八月<sub>ニ</sub>旱之百濟僧道藏雲之得<sub>ニ</sub>雨云々○持統紀右二年條に秋七月丁巳朔丁卯大雲旱也丙子命<sub>ニ</sub>百濟沙門道藏<sub>ニ</sub>請雨<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>崇<sub>ニ</sub>朝<sub>ニ</sub>遍<sub>ニ</sub>雨<sub>ニ</sub>天下<sub>ニ</sub>云々按此以下諸書の所見枚舉に違なければ省きつ請雨をアマビキと訓たるは類聚名義抄字鏡集などにも見えて雨引の義也○拾芥抄下本 諸社部に祈雨十一社應和三年七月五日火雷 水主 木島 乙訓山 平岡 恩智河内 廣田 生田 長田 坐摩 垂水 已上 按二十二社註式群書類從廿二卷二丁左にも祈雨十一社を載せてこゝとおなじ自注に人皇六十二代村上天皇治十七年應和三年癸亥七月十五日之例とあり○年中行事秘抄下 祈雨事條に月令云仲夏命<sub>ニ</sub>樂師<sub>ニ</sub>脩<sub>ニ</sub>鞀鼓<sub>ニ</sub>均<sub>ニ</sub>琴瑟管簫<sub>ニ</sub>執<sub>ニ</sub>干戚戈鞀鼓<sub>ニ</sub>均<sub>ニ</sub>琴瑟管簫<sub>ニ</sub>命<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>司<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>民祈<sub>ニ</sub>山川百源<sub>ニ</sub>大雲<sub>ニ</sub>旱<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>旱<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>陽<sub>ニ</sub>氣<sub>ニ</sub>盛<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>常<sub>ニ</sub>旱<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>山<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>水<sub>ニ</sub>源<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>また請雨經法事條に天長元年天下(大以<sub>ニ</sub>旱<sub>ニ</sub>魃<sub>ニ</sub>空<sub>ニ</sub>海<sub>ニ</sub>和<sub>ニ</sub>尙<sub>ニ</sub>可<sub>ニ</sub>修<sub>ニ</sub>請<sub>ニ</sub>雨<sub>ニ</sub>經<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>由<sub>ニ</sub>被<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>勅<sub>ニ</sub>宣<sub>ニ</sub>云々雖<sub>ニ</sub>經<sub>ニ</sub>七日<sub>ニ</sub>專<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>雨<sub>ニ</sub>氣<sub>ニ</sub>和<sub>ニ</sub>尙<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>定<sub>ニ</sub>思<sub>ニ</sub>惟<sub>ニ</sub>云々於<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>延<sub>ニ</sub>修<sub>ニ</sub>二<sub>ニ</sub>个<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>夜<sub>ニ</sub>和<sub>ニ</sub>尙<sub>ニ</sub>告<sub>ニ</sub>曰<sub>ニ</sub>池<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>龍<sub>ニ</sub>號<sub>ニ</sub>曰<sub>ニ</sub>善<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>無

熱達池之龍王之類可勸請也云々結願之日重雲覆<sub>ニ</sub>天<sub>ニ</sub>雷鳴四方急降<sub>ニ</sub>膏<sub>ニ</sub>雨<sub>ニ</sub>池水涌滿<sub>ニ</sub>至于<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>壇<sub>ニ</sub>之上<sub>ニ</sub>自<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>後<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>个<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>之間<sub>ニ</sub>普<sub>ニ</sub>雨<sub>ニ</sub>天下<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>賀<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>功<sub>ニ</sub>云々至此<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>令<sub>ニ</sub>知<sub>ニ</sub>公<sub>ニ</sub>家<sub>ニ</sub>末<sub>ニ</sub>代<sub>ニ</sub>弟<sub>ニ</sub>子<sub>ニ</sub>宜<sub>ニ</sub>加<sub>ニ</sub>祈<sub>ニ</sub>請<sub>ニ</sub>云々按性靈集抄本六 天長皇帝於<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>極<sub>ニ</sub>殿<sub>ニ</sub>囑<sub>ニ</sub>百<sub>ニ</sub>僧<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>願<sub>ニ</sub>文<sub>ニ</sub>あり<sub>ニ</sub>西<sub>ニ</sub>宮<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>卷<sub>ニ</sub> 江家次第卷十二 禁秘抄下などその外祈雨止雨の式作法を記せる書おほかれとさまではふようなれば引出す○字鏡集一雨部に雲孽同「アマビキ」「アマゴヒ」云々○類聚名義抄法下 雨部に雲雨于又云句反「アマゴヒス」「アマビキ」云々雲正云々○和玉篇下 雨部に「アマビキ」「アマゴヒ」云々按「アマゴヒ」は雨乞の義「アマビキ」は雨引の義にて此訓持統紀にも見ゆもじは雲とも祈雨とも請雨とも通用せり○爾雅釋訓注疏本三卷 舞號雲也註に雲之祭舞者吁嗟而請<sub>ニ</sub>雨<sub>ニ</sub>雲音于疏に孫炎云雲之祭(有舞有號云々)是同鄭說也云云○春秋桓公五年注疏本六に大雲註に傳例曰書<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>也失<sub>ニ</sub>龍<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>祭<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>云々左傳同卷十 秋大雲書<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>也註に十二公傳唯此年及襄二十六年有<sub>ニ</sub>雨<sub>ニ</sub>秋<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>發<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>祭<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>例<sub>ニ</sub>欲<sub>ニ</sub>顯<sub>ニ</sub>天<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>指<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>重<sub>ニ</sub>言<sub>ニ</sub>秋<sub>ニ</sub>異<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>凡<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>云々疏に正義曰下三句謂<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>嘗<sub>ニ</sub>蒸<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>祭<sub>ニ</sub>天<sub>ニ</sub>嘗

悉祭宗廟云々○禮記月令注疏本十六に仲夏之月云々是月也命<sub>ニ</sub>樂<sub>ニ</sub>師<sub>ニ</sub>脩<sub>ニ</sub>鞀<sub>ニ</sub>鼓<sub>ニ</sub>均<sub>ニ</sub>琴<sub>ニ</sub>瑟<sub>ニ</sub>管<sub>ニ</sub>簫<sub>ニ</sub>執<sub>ニ</sub>干<sub>ニ</sub>戚<sub>ニ</sub>戈<sub>ニ</sub>羽<sub>ニ</sub>調<sub>ニ</sub>笙<sub>ニ</sub>篳<sub>ニ</sub>篥<sub>ニ</sub>簧<sub>ニ</sub>飾<sub>ニ</sub>鍾<sub>ニ</sub>磬<sub>ニ</sub>祝<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>命<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>司<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>民<sub>ニ</sub>祈<sub>ニ</sub>山川<sub>ニ</sub>百<sub>ニ</sub>源<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>帝<sub>ニ</sub>用<sub>ニ</sub>盛<sub>ニ</sub>樂<sub>ニ</sub>乃<sub>ニ</sub>命<sub>ニ</sub>百<sub>ニ</sub>縣<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>祝<sub>ニ</sub>百<sub>ニ</sub>辟<sub>ニ</sub>卿<sub>ニ</sub>士<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>益<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>民<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>祈<sub>ニ</sub>殺<sub>ニ</sub>實<sub>ニ</sub>云々註に陽氣盛而常旱山川百源能興<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>雨<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>衆<sub>ニ</sub>水<sub>ニ</sub>始<sub>ニ</sub>所<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>百<sub>ニ</sub>源<sub>ニ</sub>必先祭<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>本<sub>ニ</sub>乃<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>呼<sub>ニ</sub>嗟<sub>ニ</sub>求<sub>ニ</sub>雨<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>祭<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>帝<sub>ニ</sub>謂<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>壇<sub>ニ</sub>南<sub>ニ</sub>郊<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>旁<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>五<sub>ニ</sub>精<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>帝<sub>ニ</sub>配<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>先<sub>ニ</sub>帝<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>云々天子<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>帝<sub>ニ</sub>諸<sub>ニ</sub>侯<sub>ニ</sub>以下<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>公<sub>ニ</sub>周<sub>ニ</sub>冬<sub>ニ</sub>及<sub>ニ</sub>春<sub>ニ</sub>夏<sub>ニ</sub>雖<sub>ニ</sub>旱<sub>ニ</sub>禮<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>禱<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>云々疏に命有<sub>ニ</sub>至<sub>ニ</sub>殺<sub>ニ</sub>實<sub>ニ</sub>正義曰云々非<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>月<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>云々○說文眞本十一下 雨部に雲夏祭<sub>ニ</sub>樂<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>赤<sub>ニ</sub>帝<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>祈<sub>ニ</sub>甘<sub>ニ</sub>雨<sub>ニ</sub>也从卷七丁右 雨部に雲夏祭<sub>ニ</sub>樂<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>赤<sub>ニ</sub>帝<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>祈<sub>ニ</sub>甘<sub>ニ</sub>雨<sub>ニ</sub>也从吉禮 大雲條に蕙田案月令曰大雲<sub>ニ</sub>帝<sub>ニ</sub>左<sub>ニ</sub>傳<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>啓<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>郊<sub>ニ</sub>龍<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>雲<sub>ニ</sub>云々○與清曰雲は天武紀にはじめて見えて雨請のために神を祭る事也請雨祈雨などいふはたおなじ和訓には「アマゴヒ」とも「アマビキ」ともいへりもと漢土の名目に据たなれど其祭の作法はと西宮記江家次第禁秘抄の類ものにおほく見えたるを考合せて知べし

(九)朽木形儿帳 住吉物語 群書類從本に紙びやうぶ



に大和繪かきたる一よりひ立て母屋のみすに朽木形の几丁かたびらかけていさあるべかしくしつらひたり云々○濱松中納言物語三卷十五に宮の御方にわたり給へれば夜目はさるかたにてよづかはしかりけり柴垣のはつかにあばれ残れるが露もたまるまじくあれわたれるなごいかでかかくて人のすごし給ふらんあはれに見ゆるがいまする所がらにだにあらずふりにたるけしきなるに朽木形の几帳のかたびらとしへにけるをしそへつゝたきかよふみすのうちなごなにかほり出て佛の御まへの名香のにはひもひとへにあひてさすがにあてはかなるうちのけしきも思ひやりあはれなり云々○紫式部日記十八丁左にこよひはおもて朽木形の木丁れいさまにて人々はこきうちものをうへに著たり云々○榮花物語わか枝右に御几帳みなくち木形のいみじうあをやかにめでたきもこの春にはうもれぎとなきにやと見ゆ云々同若水五丁にしんでんを見ればみすいと青やかなるに朽木形の青紫にほへるより女房のきぬのつま袖口かさなりなほ外よりはほひまさりて見ゆる云々按わか枝の巻若水の巻共に正月の事也○枕草子卷四丁左なま

めかしき物の段に青やかなる御簾のしたより木帳の朽木形いとつやゝかにてかゝりたるひもの風に吹なびかされたるいとをかし云々○舊本今昔物語廿四卷一延喜御屏風伊勢御息所讀和歌一語に三月許事云々籠ヲ搔上テ見レバ母屋簾ハ下シタリ朽木形ノ几帳ノ清氣ナル三間許ニ副テ立タリ云々同卅一卷第五大藏史生宗岡高助傳レ姫語に五間四面ノ寢殿ヲ造テ其レニ高助ガ娘二人ヲ令住ム其寢殿ヲ□タル事帳ヲ立テ冬ハ朽木形ノ几帳ノ帷ヲ懸テ夏ハ薄物ノ帷ヲ掛ク云々○長秋記長承三年十二月四日條に御出家御几帳帷用青鈍然而今度被用朽木形是下官之所申行也自餘所々鋪改裝束准例云々○左經紀萬壽五年四月一日條に御几帳帷六帖云々並御帖等青鈍令調獻宮形帷也云々○禁秘抄上卷七丁清涼殿條に帳四面有几帳帷夏生以胡粉畫花鳥冬朽木形疊三帖纏綱御座敷東上云々階梯八丁右に帷夏冬事雜要抄帷冬面練平絹縷文裏同白古者張已上疊之夏生平絹以白泥畫野筋秋艸等冬同前疊之按以縷縷畫朽木形文也其體見雜要抄云々○伊勢貞丈麻久奈岐隨筆丁右に朽木形ノ几帳古書ニ見タ

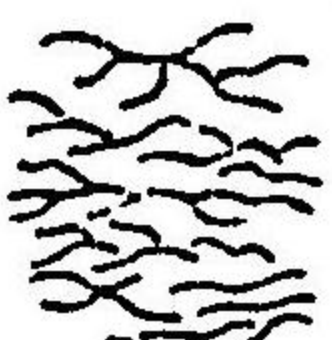
リ其文様左圖ノ如シ



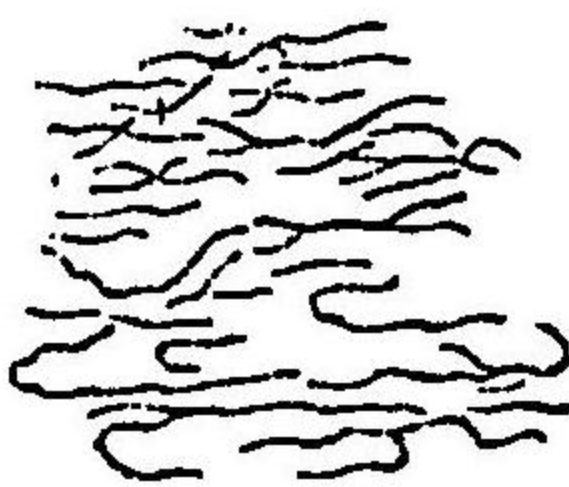
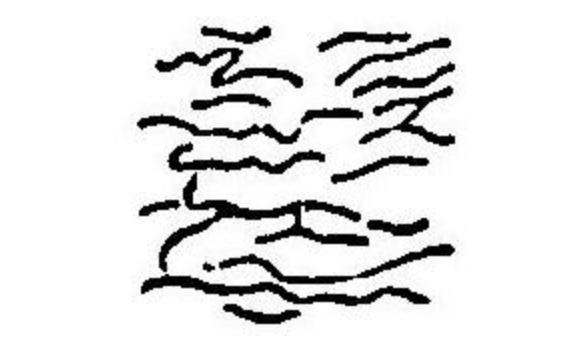
東寺ニテ灌頂ノ時ニ當時用ル帳如レ此也是也地白文濃蘇芳今云トビ一云地黃ニスハウトモ云又春日縁起十

卷アリ筆ニモ見エタリ滋野井家禁秘抄開書ノ内如レ此者不知桶嘉樹ガ説也古ノ朽木形然ルヤ否ヤ貞丈云禁秘抄清涼殿之簾帳下ノ御注ニ四面有几帳帷夏生以胡粉畫華鳥冬朽木形印本ニ華鳥ヲ茶雀ニ作ルハト誤也今古本ニ從テ改レ之アリ夏ハ華鳥ニ冬ハ朽木形ト相對スレバ枯木ヲ云ガ如シ葉ノ朽テ落タル木ヲ朽木ト云フニヤ身木ノ死タルヲ云ニアラズ古今集雜部ケンゲイ法師「形コソ深山カクレノ朽木ナレ心ハ花ニナサハナリナン」是死木ヲ云ニアラズ猶考ベシアラヌ物モ當時ハ公家衆ノ説トイヘバソレニ定マル事アリ歌ニ草木ノ枯ルト云ハ生云モ其准ナラ凡物ノ名ニ感テ實ニ違フコモアルモノ也可熟考云々○大塚嘉樹若梧隨筆二卷に朽木形文事云々滋野井權帥公魔卿ノ仰ニ東寺ニテ長者灌頂ノ度ニ懸ラル、所ノ帳ノ文朽木形ノ文ニテ古ノ物ナリ地ハ白縷ナル歟平絹ナル歟縷見ル玉ハザル由文ハ濃色ニテ其形狀大凡左ノ如ナル由又仰春日縁起畫物二十卷アリ其中ニモ朽木

形ノ帳アリ其文ノ圖モ亦其ニ同キ物ナルヨシ○權帥殿ノ仰趣ヲ圖ス



于時明和八年辛卯四月十四日於ニ都督御亭五松樓禁秘抄ノ御會アリ其度奉ニ于書之云々天明六丙午年三月ヨリ至ニ五月江府牛込護國寺ニテ本尊觀世音開帳アリ此節當寺什物數多令拜其中ニ白平絹ノ帳二條アリ其文濃色ト見ユ今見ル處ハ形狀左ノ如シ五月十一日田村氏靈寶場ノ苾芻ニ便リテ矢立ノ墨ヲ以テ摸寫シテ退ク嘉樹又其圖ヲ欲シテ同生ニ請テ爰ニ臨寫ス然シテ赫蹄本圖ヲ臨寫爲シガタシ仍テ小ニ切約ス



實ニ臨寫スルモノハ別ニアリテ聚頭假字面へ收ム云云○與清曰くち木形の名義伊勢貞丈が死木にはあら



で落葉したる木なめりといへるも一わたりさもおもはるれどなほいかによやこは朽木の枝の形なれば然いへりと見ゆ榮花若枝に此春にはうもれ木となきにやとあるをも思ふべし冬春の間は几帳の帷の文様朽木なれば朽木形の几帳といへりされど朽木形のみに限れるにあらず夏秋の間は生に胡粉もて華鳥をえがきたる帷を用ふ几帳の圖類聚雜要抄四几帳制度考など考て知べし

(十)海部の文 源氏物語 湖月抄本四 玉鬘にあさ花田のかいぶのおり物おりざまなまめきたれど匂ひやかならぬにいとこきかいねりぐして夏の御方に云々河海抄に海浦文大浪のかたをおれる也云々花鳥餘情に海賦は大なみにみるや貝やなどおりたる文なり云々岷江入楚に河かいぶは海浦また大浪のかたをおれるなり秘大海にみる貝也夏の御方は花散里也花海賦は大浪にみるやみなをこの貝をおりたる也云々○紫式部日記傍注本上卷 にからぎぬは松の實のもん裳はかいぶをおりて大海のすり目にかたどれり腰はうす物から草をぬひたり云々丁十八 白がねの御衣ばこかいぶをうちいで蓬萊など例の事なれどいまめかしう

こまかにをかしきを云々按ここの文榮花物語初花十四にも出たり初花の巻はすべて紫日記を取て書たる也○續世繼二卷廿 白河花宴に裳はえび染を地にてかいぶをむすびて月のやどりたるやうに鏡をしたにすかして花のかみとなる水はとせられたり云々按古本には「かいぶ」を「かへし」に作りたれど据用がたし○禁秘抄上卷八 清涼殿置物御厨子の條下に笛宮時海部云々注に海部藻類ヲ蒔也また海邊之體或貝類ヲ蒔トイヘリ云々○藻鹽草十七卷色部九十 淺花田のかいぶの文はなだに大波を織たる也源氏云々○興清曰かいぶの文は海浦の字音にて海賦とも海部とも書は借字也大波の打よせたるさまにもあれ藻に貝にもあれ海の浦邊の形なりと心得べし

(十一)三亡 戰國策三下卷廿 秦昭襄王條に張儀說秦王曰云々世有三亡一而天下得之其此之謂乎臣聞之以亂攻治者亡以邪攻正者亡以逆攻順者亡云々

(十二)夕一錢一文目 青木敦書が經濟纂要後集四に文人奇士多用古字官府文移通用今字市井下流則用省訛俗書如錢作示聖作至盡作尽是也續文獻通考鈔云々

○新白蛾が牛馬問三卷四 には泉の古字いにしへの錢の字也故に今に至て金銀兩目の事に通用す初學此義をしらず俗字偽字といふ事誤なり云々○大塚嘉樹が蒼梧隨筆卷一に或云俗中金銀の分量をいふは何夕と稱するに至て夕の字を以てするものは其字の義如何哉假令一夕といふ時は其秤の重は錢一文の重也爰を以て一錢を以て一夕といふより一文目と云事を合書して一文と云を一夕と稱するに似たり請ふそのより所ありやと答其考の如く一夕は其目の分量如何にも一文目也されども件の文字に夕と書事は文目の二字を合畫艸書して夕と稱するにあらずたま〜夕の字體文目を合畫せるに似たれども篇海類篇を考るに卷の廿冊中に夕字ありて注して曰夕は音錢與錢義同俗用也とありされば一文目は一錢目なる故に此字義ありと見えたり今倭俗草書して一夕と書き又二夕など書ては全く一錢目二錢目の事にて夕を草書したる也ぬなぬ共に草書の異體と見えたり然して事の序に新舊錢を秤目にて試るに寛永錢初鑄といへる錢と文の字ある錢と又大佛の像を廢して鑄たる錢等は其掛目各一夕あり近世鑄らるる所の鐵府錢は夕の字あり又事の序に開元

通寶永樂錢等を懸合するに大抵各一夕ほど也開元錢は一夕の所は希にして大凡九分ほど也是は年序を経たる故磨滅せるものと見えたり其餘の古錢は其徑りの廣き狹き又厚薄もさまざまあり況又度量の多寡もあれば尤不合勿論の事なるべし殊更漢の代の五銖半兩等は素より銘文にてもわかり又其世の度量も考あるべし今是を省く漢家通用の寶貨の記等にても辨へ知べし今爰に答る所は夕の字の證にして眼前通用する所の錢を以て申もの也但異邦の錢にても眼前の品たりといへども清朝康熙の錢は其大小又金銀銅等の甲乙ありて一概に比量し難し故に開元永樂等を以て眼前の理を申答るもの也云々○篇海類編廿卷 丁五部第五十三に夕音錢與錢義同俗用○示兒編廿一卷 中州金石記卷四淮源廟鐵鐘識曰慶歷三年二月立正書在桐柏云々捨人名云々曰畢院 錢字作示已見于此或云泉字草書云々○本草綱目一之上卷五 序例上に時珍曰蠶初吐レ絲曰レ忽十忽曰レ絲十絲曰レ鼈四鼈曰レ紫音十鼈曰レ分四紫曰レ字二分半也十紫曰レ銖四分也四字曰レ錢十分也六銖曰レ一分去二錢半也四分曰レ兩二十四銖也八兩曰レ鎰二鎰曰レ斤二十四兩曰レ鎰一斤半也



准官秤十二兩三十斤曰鈞四鈞曰石一百二十斤也方中有曰少許者些子也今古異制古之一兩今用一錢可也○與清曰糸は錢の俗字とも泉の草體とも兩說あり錢泉相通へばたゞ錢字と心得てあるべしこれを文目と訓は錢一文の目方によれる也明の洪武錢永樂錢など皆目方十分あり一文の錢の重さ十分なれば十分を一錢といふ所謂一文目也又を「モンメ」と訓めど實は「モン」と而已訓べきにて目はいひそへたる詞也目は秤の數目にて秤にもり付たる目の事と知べし

(十三)法隆寺中院護摩堂觀音像座緣銘 歲次丙寅正月生十八日記高屋大夫爲分韓夫人名阿麻古願南无頂禮作奏也以上三十二字 歲次丙寅は推古天皇十四年也高屋大夫は新撰姓氏錄中卷九十九十九卷河内國神別に高屋連饒速日命十世孫伊己止足尼大連之後也とあれば此族なるべし高屋は神名帳に河内國古市郡に高屋神社あり今譽田八幡宮の西方に高屋古城蹟もあればこゝに出たる氏なるべし伊己止足尼大連は舊事紀五卷廿三天孫本紀に天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊九世孫物部五十翠宿禰連公磨昨宿禰之子と見ゆ韓夫人名阿麻古は韓人氏か加羅氏なるべし姓氏錄下卷百四十三

七卷攝津國諸蕃任那條に韓人任那國人左李金亦名佐利己牟之後云々下卷百五十四左卅卷未定雜姓部に加羅氏百濟國人德率吳伎州之後也云々など見ゆまた韓矢田部造上卷四十韓國連下卷百韓海部首下卷百五加良姓下卷百六十などいへる姓もあり○與清曰法隆寺觀音像座緣銘は推古十四年の古文也頃寫本を得て一讀せるに寫誤ありけん通解しがたし生十八の三字爲分の分字作奏字共に心得がたし他日善本を得て訂正すべくん

(十四)法隆寺黃金佛四十八牀中釋迦佛背銘 戊子年十二月十五日朝風文將其零濟師慧燈爲嗽加大臣誓願敬造釋迦佛像以此願力七世四恩六道四生俱成正覺以上四十八字一行十二 戊子年推古天皇卅六年也風文は欠の誤寫歟吹字の編を省て風欠と書るなるべし濟師慧燈濟師は藥師如來をいふ藥師の燈明を濟師慧燈と書たるにや爲嗽釋迦像を造る法師が嗽て頂禮せるよし也大臣誓願大臣は蘇我馬子大臣也馬子が誓願を發願法師が志に加へて造佛の功を遂たるよし也

(十五)東大寺枚幡銘 東大寺枚幡鎮鐸天平勝寶九歲

五月二日按東大云々七字と天平云々十字と二行に書たり

(十六)東大寺銀靈銘 東大寺銀靈重大五十五斤甲蓋實并臺惣重大七十四斤十二兩天平神護三年二月四日

(十七)東大寺銅鉢銘 重大五斤五兩延喜十四年十二月十一日別當大律師智覺住時作入按以上三銘は東大寺三倉中に納たる古物の銘也

(十八)行義 俗言に行義がよい行義がわるいなごいへり戰國策六上卷廿趙武靈王篇に御道之以行義勿令溺苦於學と見ゆ

(十九)事君之道 事君の事孝經に事君章あり戰國策六上卷廿五趙武靈王篇に事君者順其意不逆其志云々また廿六趙燕後胡服王命讓之曰事主之行端意盡力微諫而不諱應對不怒不逆上以自伐不立私以爲名子道順而不拂臣行讓而不爭子用私道者家必亂臣用私義者國必危反親以爲行慈父不子逆主以自成惠主不臣也

(廿)改革不可妄行 戰國策六上卷廿七趙武靈王篇に利不百者不變俗功不什者不易器云々史記卷六十八商君傳に杜摯曰利不百不變法功不十不

易器法古無過循禮無邪云々

(廿一)封城 戰國策六上卷廿七趙武靈王篇に城境封之注に築城境上爲之封城云々封は境目の土手也土手を築き守屋を建たるを封城とはいへる也

(廿二)乘馬石 漢土のいにしへ馬に乗には石を臺にして乘たり戰國策六上卷廿四趙武靈王篇に踐石以上者注に踐石謂能騎乘者禮洗乘石注乘馬石云々

(廿三)帛衣白無垢 倭名類聚抄十二絹布類部に帛說文云帛波久乃岐奴薄縹也○喪葬令卷五左に凡天皇爲本服二等以上親喪服錫紵爲三以下及諸臣之喪除帛衣外通用雜色云々義解に謂白練衣也云云集解に釋云帛衣白練衣也除帛衣故者我朝以白色爲貴也天皇服也各以所好色爲貴故書云有客有客亦白其馬般禮以白爲貴故云然也古記云問除帛衣其意如何答當朝以帛色爲貴色天皇服間上品傍用之各以己所好色爲貴故書云有客有客亦白其馬般禮以白爲貴故然也穴云帛衣舊古之代屬意稱白衣一卷私但今可求帛字說○延喜式伊勢大神宮式丁左大神宮裝束條に帛被三條丈廣四幅納綿各二十條一條帛衣四領長三尺五寸廣一丈九尺廣四幅無綿云々帛衣四領上各納綿一條帛裳四腰











ひ後漢より天子の御衣に大裘また鷲冕より下はなく  
て袞冕十二章服もて通はし用られし也吾朝のいにし  
へは其六冕などはなくて帛衣をのみ通はし奉らしめ  
給へり是をたがへばかの大裘を袞冕より下に通はし  
用らるゝがごとし後漢袞冕十二章服のみを通はし用  
られたるにこゝろ相似たり抑十二章服は飾をもて皇  
の貴きを示すなれば是を用給ふ世には常の著御の服  
玩もまた飾をもてす帛衣を大祭大禮などに通はして  
奉れる世には常の著御も又帛衣也その中祀中儀より  
下の帛の御著のさだめはやがて朝服のさま成べし大  
祭大禮などの帛の御衣はいかでは是に同じからんしか  
るに後の世の人今見るさまをしていにしへ大祭大禮  
に奉りし帛の御衣も朝服のさだめならんとおもへる  
はいと誤れり考るに今の後大祭大禮などに奉りし帛  
の御衣は冕服のごとくなるべきなりかの西宮抄に行幸の  
間は帛の御衣にて大  
嘗宮の間は布の御衣也さもいしへは冠立殿に行幸までは朝服の  
定めなる帛の御衣なるべし御湯奉りて後禮服の製なる帛の御衣に奉  
りかへけるに後の世にはその御衣絶にたれば御湯の後も朝服のさま  
なる帛の御衣を川給はし御湯のまへと別なきにつきて朝服のさま  
ながら布の御衣を帛の御禮服にかへて奉りし也けりしへは製の中  
御時ならでは布の御衣奉る事なかりし也又同抄に御禮服を記せし中  
に女帝の御さうぞく帛白しといひ後の條には女帝白御衣とあるは天  
平四年より袞冕十二章服をならさせ給へし女帝の御禮服のいまだ改

らねに分てかくは載られしなるべしこれら古  
の帛の御衣といへる中に御禮服の有し證也そのよしは令によ  
るに大祭大禮などに皇太子また親王王臣の五位已上  
は禮服を著六位より下は朝服をきるめり然るに皇六  
位とひとしく朝服のさまなるを著御あらんやいにし  
へ大祭大禮などに奉りし帛の御衣は禮服よりおとれ  
るさまならざる事は明か也然るに弘仁十一年の詔の  
末文皇太子は祀にしたがひまたむつきの朝賀に袞  
冕九章を著給ふべしと見えたり日本紀略に弘仁十一年二  
月甲戌朔詔曰云々其服大  
小諸神事及冬季奉幣諸陵則用帛衣正受朝則用袞冕十二章朝  
日受朝日臨政受諸國使奉幣及大小諸會則用黃纁染衣皇后以  
帛衣爲助祭之服以帛衣爲元正受朝之服以細纁染衣爲大小  
諸會之服皇太子從祀及正朝賀可服袞冕九章朝賀入朝元正受  
群臣若宮臣賀及大小諸會可服黃丹衣並常所服不拘此例さあ  
り皇太子從祀は中祀以下にあれどは大祀の事なりまた皇后の  
帛衣は朝衣  
のことなりかく大祭に天皇の御冠よりして服飾皆親王  
王臣の祀服に同じ様ならんには皇太子いかで袞冕九  
章を服せさせ給ふべきやしかれば天皇の彼帛の御衣  
は必冕服の定めにて有ける也さて後の世の朝服の製  
なる帛の御衣は古の中祀中儀をはじめて常に奉らざ  
るは様の残れるものなるに下の御具まで皆白くして  
文なし唯しろからぬは白の御頭巾御帶の革と御履の  
したぬられたるのみ也是をもておもへば帛の御禮服

も御裳よりして下の御具白くて文なかるべし御帶は  
皇太子の如く紳を用ひさせ給ひ牙の笏白玉雙珮白き  
御禪禪の事は今已前白皮御寫白皮の寫を著る事は本朝の十二  
御禪服玩の辨に有赤皮也是かの帛の御禮服の白きを赤きに  
て補等の飾を加へられしなるべければなりにてぞ有べきさ  
て御冠はかの質を示し給ふよしなれば大裘によらせ  
給ひて無旒の冕にやと覺ゆれど大裘は天地をまつら  
るゝ時のみにて大祀には袞冕十二章服なればさても  
有なん此朝にては大祀大禮かねて奉るなれば飾なき  
にはあらじ飾あらば又皇太子の御冠にもなさるべき  
事しるきにこは皇太子の御冠といふは九旒の冕をいへり天皇の  
御冠九旒の冕にまさる時は十二旒の冕なる事知べし  
古事談に大嘗會之時代々令レ著給玉冠は應神天皇之  
御冠也相眞御禮服と有此玉冠は十二旒の冕にて御禮  
服とは帛の御禮服なる也冕の事は今已前服玩の辨にいへり  
又帛の御禮服とは大嘗祭に十二章  
服と川ひしめ給ひ  
し事なれば也さて冕服の定めなる帛の御禮服の絶た  
るは天平四年よりして大禮に冕服をもて帛の御禮服  
にかへ用られしより唯踐祚の大嘗祭の飾をこゝろく省  
ひしを其後天長に踐祚の大嘗祭の飾をこゝろく省  
かれ五位より上の禮服著事をもとめられしかば皇  
の冕服の定めなる帛の御禮服も此御時より全くこゝ  
め給ひし也けり○或人問弘仁十一年の詔に帛の御衣

を著御のよしのせられたれども其定めめの二品ある事  
をいはすさらば又おなじさま歟答帛の御衣といふは  
親王より諸王諸臣にいたりて一位の深紫の衣諸王の  
二位より五位まで諸臣の二位三位の淺紫の衣といふ  
がごとく彼深紫の衣淺紫の衣など名は同じくしてその  
さまには禮服有朝服用らるゝ式によりておもひは  
かるべき也帛の御衣も又名はおなじくして冕服のさ  
まあり朝服のさまありその式によりて別ちある事お  
もひはかるべきなりその上もろくの神事に帛の御  
衣を用ひさせ給ふはやがて古へのまゝ也しかれば更  
にその著御の式は記すまじきにやいかでは疑はんや  
又問天平四年天皇はじめて冕服して朝を受給ふ事史  
に見ゆ續日本紀天平四年春正月乙巳朔御大極  
殿受朝天皇始服冕服左京職職白雀是より前に大  
祭大禮などに著御の帛の御衣冕服の製ならば此時始  
て冕服を服させ給ふと載べからずと答しからず帛の  
御禮服は唯袞冕をかうぶらせ給ふのみにて御衣御裳  
無文なれば全く冕服とはさしいふべからず天平四年  
にいたりては袞冕十二章服をうつされしかばこゝに  
始て冕服を服給ふとは記されしなるべしかく見る時  
は何の疑ひかあらん○皇后の御衣は天皇の御衣に准



ふべししかれば大祀大禮などに奉る帛の御衣も則思ひはかるべし唐の制を考るに皇后の御衣の内に禪衣より上たるはなければ吾朝の皇后の帛の御禮服の御衣御禪裳御袴御帶御烏皆白きを奉るのみにて女の禮服に同じかるべし御帶は則天皇の同じき事令の秋孝皇御太子の妃の御帶もておしはかるべし首飾もやがて寶髻なるべし尤其式は異ならんのみ凡寶髻は内親王一品はこの飾二品以下にまされれば皇太子の服は一品にまされ皇太后皇太子禮服にまされらるなり此帛の御禮服も聖武天皇の御宇より大禮には用ひられずなりて聖武天皇の御宇より皇后の帛の御禮服は大禮には用ひられずなりての朝賀より天皇冕服を著御有し事は禮日本紀にあり見れど天平四年御といふ時は皇后の禪衣を著御あらん事はすばしてしるるればその文を略さ天長の大嘗祭より大祀に用ひらるゝ事もとごまりつればたえけるにぞ云々○與清曰帛は蠶の所吐糸もて織れる薄繒也凡絹の地太きを繒といひ薄きを帛といひ甚軽く薄きを紗といひ危惡にして布に似たるを紵といへり喪葬令義解に帛衣は白練衣也とあれど中比よりは練と生と二種に分れて冬は練衣夏は生衣を用られし也延喜式に様々の染色なるも見え又天皇皇后の著御に限れるにもあらねど後は皇の大祀大禮にのみ著給へる服とはなれる也近來の禮服に冬は白無垢夏は白帷を尙び用るも帛衣の遺風也白無垢

は白色にてむくむくと柔かなる衣なればさいへるにて無垢の字に泥ちて垢の無き由の名ぞと思へるは誤也(廿四)秩、任秩、秩限、秩滿、類聚三代格一卷貞觀十年六月廿八日太政官符に應任用神主事四箇右太政官弘仁十二年正月四日下大和國符備彼國解備部内名神其社有數或爲農禱歲或爲旱祈雨至排災害荐有微應假令大和大神廣瀨龍田賀茂穴師等大神是也云々今神主等一任終身侮黷不敬崇崇屢臻宜自今以後簡擇彼氏之中潔清廉貞堪神主者補任限以六年相替秩滿之代點定言上者云々○同書三卷貞觀十三年九月七日太政官符に應令諸寺三綱檀越禁止秩滿別當恣犯用寺家財物事云々莫不困斯尋其意況寔由任秩不立定限遷替無責解由也因茲秩以四年爲限任終可責解由之事已存式文云々同卷延曆廿四年十二月廿五日太政官符に應簡任諸國講讀師及相替六年爲限事云々伏望簡大智而任講師舉小識而補讀師限以六年爲秩滿期云々同卷仁和二年六月廿三日太政官符に應補安房國講師傳燈法師位增允年五十三眞言宗東大寺云々望請始以件僧任彼國講師令勤修御

願其秩滿後準諸國例簡定補任云々同書五卷元慶七年十二月廿五日太政官符に應停非受業人任當國博士醫師事云々件非受業博士醫師依度々格責解由沒公麻用四年秩限停受業師料等事一同史生云々同卷定秩限事部承和十五年三月廿二日太政官符に應自外官還任京官未預參入通計前歷事云々檢式云諸國司及史生博士醫師秩限未滿或秩滿之後未滿四年更任他國及遭喪之徒服闋復任者並通計前歷云々如此則秩限自分勞逸將均云々按此卷に鑄錢司秩限定六年云々秩滿解任云々秩歷之期云々權官秩滿云々なごあまた所見えて不違枚舉其外八卷十二卷なごにも所々見ゆおほかたは歴史に出たれど中に日本後紀時代または寛平以後の官符などは此書を出處とすべし○三善清行意見十二箇條に請停止依諸國少吏并百姓告言訴訟差遣朝使事云々縱雖免賦吏之名而猶成任中之意秩滿之日遂拘解由云々○三代實錄二卷廿五貞觀元年四月廿三日條に大納言正三位兼行民部卿陸奥出羽按察使安倍朝臣安仁薨云々安仁爲政強濟名聞朝廷秩限未滿授從五位下除信濃介云々同卅九

卷八丁元慶五年三月十三日條に秩滿解任之人王臣子孫之輩結黨群居同惡相濟云々按此外實錄中秩限秩滿の所見いとおほかれど省て引出す○小野宮年中行事詳書類從本正月元日條に式部省進國司秩滿帳事弘仁太政官式云國司秩滿者式部造簿正月一日進太政官外記覆勘訖進大臣奏聞拜除自餘解闕臨時奏補云云下卷廿四丁左十二月條に廿日以前式部省諸國主典已上并史生博士醫師秩滿帳進藏人所事年來廿云々○北山抄一卷年中正月元日條に同日式部省進諸國司秩滿帳事云々また九日始議外官除目事に大臣依召著御前圓座仰云依例行之大臣稱唯指笏取闕官帳入宮奏之九條大臣加奏秩滿帳者云々○江家次第四卷十五除目條に次任國替云々大隅國掾正六位上藤原朝臣篤孝自注に前太皇太后永祚二年御給伊豫掾越智隆盛不給任符秩滿代云々○政事要略廿八卷年中行事十二月條に廿日以前式部省諸國司主典上并史生博士醫師秩滿帳進藏人所進之云々○古今著聞集一卷九丁神祇部に北野宰相殿は天神四世の苗裔也云々秩滿の後都へ歸り給ひて長徳二年に參議に任じ云々○蟬冤翼抄詳書類從本卷十三丁左任符返上條に任符ヲ給テ不赴



任國一シテ空ク四ケ年ヲ過テ秩滿シタル第五年五ケ年ハ第六年ハ第六年ハ第六年任國ニ任ゼント中ヲハ是ヲ任符返上ノ更任ト謂云々丁右文章生散位條に文章生散位ト謂ハ文章生ノ勞ニテ諸國ノ掾ニ任ジタル者ノ伴國ノ秩滿ノ後ヲ文章生散位ト謂也云々○唐律釋文二卷四丁に秩直質反秩滿即任滿也謂任官簿秩年限當滿也云々○容齋隨筆一卷十年爲一秩一條に白公詩云已開第七秩飽食仍安眠又云年開第七秩屈指幾多人是時年六十二元日詩也又一篇云行開第八秩可謂盡天年注日時俗謂七十以上爲一秩蓋以十年爲一秩一秩云司馬溫公作慶文潞公八十會致語云歲歷行開九秩新亦用此也云々按此説は十年をもて一秩とせる也司馬溫公が九秩新と作れるは秩を秩に寫し誤れるなるべし秩とは任官の年をいへば致仕せずして年を積にいへりと見ゆ年數は十年にもあれ四年五年六年にもあれ一任のほどを秩限とすれば時世に隨てその定かはりあるべし一秩は一句と歎一任と歎いふ心の字面と知べきなり○性靈集卷十丁左贈野陸州歌に莫愁久住風塵聖主必封萬戶秩云々○周禮註三家宰治官之職宮伯條に掌其政令行其秩叙作

其徒役之事云々月終則均秩歲終則均叙云々註に秩祿稟也叙才等也作徒役之事天子所用云々疏に行其秩叙者秩謂依班秩受祿叙者才藝高下爲次第以作其徒役者士庶子屬天子隨其所用使役之也云々丁左均稍食亦一也歲終則均叙與宮正則異彼宮中官府故會其行事此其子弟故均叙叙即上註才等也云々○左傳三卷十莊十九年に收膳夫之秩云々註に秩祿也云々又八卷十文六年に委之常秩云々註に秩官司之常職云々疏註十九上に正義曰謂職掌位次故爲官司之常職云々按秩は在職の年内をいふ在職の者に給ふ祿なればやがて祿をも秩といへる也○荀子王霸七卷十篇四丁左に百官則將齊其制度重其官秩云々註に秩祿也云々同強國篇四丁左に士大夫益爵官人益秩庶人益祿云々註に爵謂若秦庶長不更之屬官人群吏也庶人土卒也秩祿皆謂稟食也云々○國語周語中二卷十に修執秩以爲晉法云々註に秩常也可奉執以爲常法者晉文公蒐於被廐作執秩之法云々又十五周之秩官有之云々註に秩官周常官篇名云々按字書に職也次也序也常也積也など注したれば職は

補職也次は在職中の位次也序は年序也常は平常也積は年月の積也と心得れば秩を職の事に取用たる義明也○與清曰秩は職也在職の間を任秩といひ其年限を秩限といひ任限滿てるを秩滿といふ秩祿は稟食の事にて在職中に所稟の食俗にいふ扶持切米の類と知べし

土地風俗爲立聲教之法云々疏註本十九上に正義曰漢書地理志云凡民性有剛柔緩急聲音不同繫水土之情欲故謂之俗王制云廣谷大川異制民生其間者異俗器械異制衣服異宜修其教不易其俗齊其政不易其宜故聖王爲政因其土地風俗爲立善聲教也聲教人之所立故言樹之今杜云因土地風俗爲立聲教之法杜此言惟樹以聲而傳云樹之風聲而風亦樹者其實風俗亦是人君教化故孝經云移風易俗孔註尙書云立其善風揚其善聲是也云云○史記百十七卷司馬相如傳に率邇者聽武聽者別淑慝表厥宅里彰善瘴惡樹之風聲云々註に言當識別頑民之善惡表異其居里明其爲善病其爲惡立其善風揚其善聲云々疏卷十一丁左に正義曰旌旗所以表識貴賤故傳以旌爲識淑善也惡也言當識別頑民之善惡知其善者表異其所居之里若今孝子順孫義夫節婦表其門閭者也表其善者見惡者自見明其爲善當褒賞之病其爲惡當罪罰之其有善人一立其善風令邑里使放傲之揚其善聲告之疎遠使聞知之云々○左傳八卷十文六年に樹之風聲分之采物云々註に因

(廿五)風聲 上令義解表義解本一註に漢書曰歷選列辟以迄乎秦率邇者聽武聽者風聲云々注文穎曰言循履近者之遺迹聽遠者之風聲云々按此語漢書司馬相如傳下に出たり○尙書卷十二畢命に旌別淑慝表厥宅里彰善瘴惡樹之風聲云々註に言當識別頑民之善惡表異其居里明其爲善病其爲惡立其善風揚其善聲云々疏卷十一丁左に正義曰旌旗所以表識貴賤故傳以旌爲識淑善也惡也言當識別頑民之善惡知其善者表異其所居之里若今孝子順孫義夫節婦表其門閭者也表其善者見惡者自見明其爲善當褒賞之病其爲惡當罪罰之其有善人一立其善風令邑里使放傲之揚其善聲告之疎遠使聞知之云々○左傳八卷十文六年に樹之風聲分之采物云々註に因

翰曰語言善言也○與清曰風聲の字面「ノコセル」テ



リ」と訓べし残れる風の義なり「てぶり」は風俗の事にて都のてぶりなど古歌により顯昭が袖中抄の説は捧腹にたへぬ辭説といふべし

(廿六)やまと歌 「やまとうた」は必「から歌」といふに對たる語のよし契沖いへり伊勢物語旁注本下卷に狩はねもごろにもせで酒をのみつゝやまとうたにかゝりけり云々

(廿七)祈といふ訓義 「いのる」といふ詞は佛神に祈るにいひて忌告の心なるべし不淨を忌懼りて身を潔齋し心願のむねを佛神に告よしの詞也

(廿八)魚符魚袋 唐律釋文卷十六丁に魚符符信也謂鑄銅魚於符之上然後分爲兩函左者收於内右者付所守之地如以敕旨發兵則使者執内之左邊以來勘所守之地右邊其文同其形合其驗是真敕旨也其文不同形不合則執其來使以聞上至如長短鱗虎之類具在下式云々三才圖會器用二卷に銅虎符の圖あり魚符の類なり金銀銅魚符の事外集十六卷大刀契の條に引たれば可考合頭圖通五

(廿九)不當 俗に不當者といへるは唐律の字面によりたる也唐律釋文廿六卷左丁に不當丁當反不當者猶

不中也と見ゆ道理に當らざる我意を立るよし也

(卅)白衣の體六月無禮 俗に略服を白衣の體といへり長門本平家物語二卷六十八丁左に入道のたまひけるは六月無禮とて紐とかせ給へ入道も白衣に候ぞとて白

かたばらに白大口ふみくゝみてすしの小袖打かけて左の手にうち刀ひさげて右の手にて蒲扇つかはる云々これに据れば古代よりの詞也頭圖平等供奉山を離れて異州に趣く條に白衣にておしださしほきをけりまゝに衣なきに着す 盛衰記十三ノ十九丁丁是ハ大將白衣ニテ長押ニ尻係タル事ヲ告メ申ナルベシ 和田酒盛草子に時宗きいてかしこまつて候へども御らんじせられ候ことくびやくえに候云々又時宗きいてかしこま

り入ては候へどもびやくえにさふらふとておとせす云々 (卅一)おゝそれながら 俗言におゝそれながらといふ御恐れながらの義也此詞論本にはおほく見えたるやうにおほゆ長門本平家物語二卷六十九丁におゝそれながら君もくやくしくこそわたらせ給はんすめら云々 同三廿六丁におゝそれながらしはらく申狀を云々 頭圖新撰大筑波秋部におゝそれながらいれてこそ見れ足洗ふたらひの水に月さして (卅二)無故して利を得るは禍 戰國策六之下卷十三丁趙孝成王篇に趙豹對曰聖人甚禍無故之利云々注無故得利聖人以爲禍

(卅三)言者異則人心變 同卷十六丁右同篇に言者異則人心變矣按俗言に柄をすげるといふ事ありたとへば丸盆にても柄のさし様にて團扇の形にも笠のさまにも見ゆめり

(卅四)紹介 戰國策六下卷廿丁趙孝成王篇に平原君遂見辛垣衍曰東國有魯連先生其人在此勝請爲紹介而見之於將軍云々注に郭璞曰紹介相佑助也補曰索隱曰禮賓至必因介以傳辭紹者繼也故禮曰介紹而傳命云々史記魯仲連傳にも見ゆ

(卅五)甲乙人 類聚二代格三卷元慶五年九月十六日太政官符に應天台眞言兩宗定次擬補諸國講讀師事云々縱雖國有甲乙一人有優劣然猶初之講讀以天台共補後之講讀以眞言同任云々按甲乙人の字見えたれど國有甲乙と句を切て人有優劣と訓べければ甲乙人の例には引がたし 頭圖参考保元物語下九十九ニ下り源治ヲ加ヘケルニガリ合タル甲乙二人火怖シ人間トハ見エズト怖ガノキ怪チナメリ云々○源平盛衰記廿二卷丁右俵藤太將門中違事條に平家重恩ノ者モシハ縁者境界サスガ東國ニモ多カリケレバ飛脚櫛ノ齒ヲ繼テ六波羅ヘ申ケルハ兵衛佐頼朝石橋ニシテ被討之由雖有披露其條無實也遁出杉山波安房國相

具北條佐々木三浦黨類越子上總下總召從弘經胤經已下之大名小名既及三万八千餘騎其外伊豆駿河甲斐信濃同心之間其勢如雲霞適有背逆忽依加誅罰上下甲乙皆以歸伏云々 頭圖盛衰記四ノ按上下甲乙といへるは所謂甲乙人の事にて武士といふがごとし○吾妻鏡卅四卷十二丁仁治二五廿九條に所處甲乙人號神人多令致煩之由依有共聞可被置本數之趣自當座被和觸宮寺云々又十三丁同年ノ六十八條に近年西國諸社神人權門寄人好寄沙汰致狼藉令煩甲乙人之由依有共聞云々同書卅六卷十五丁左寛元三正九條に所仰遣六波羅其狀云西國神人押使等或平氏或以甲乙人之所從令補神人動好寄沙汰大略令管領領家地頭之所務致噉々沙汰之由有共聞云々按吾妻鏡の中此外に甲乙人の所見あれど皆上下の武士といへる心なり○建武以來式目追加群書類從四百 曆應三四五御沙汰に近年武家被官人甲乙之輩令違背下知御教書刺對于守護使并使節等及合戰狼藉之由有共聞云々又廿二丁左應永廿九七廿六御成敗條々に諸國寺社安堵事或稱甲乙人等之寄進或號買得券契之由緒雖望申御判不



可有御許容但地頭御家人等於副渡御下文以下證  
 文者不<sub>レ</sub>及子細焉云々按甲乙人は御家人ならぬ上  
 下の武家をさしていふ名也貴賤雑々の武士といふが  
 ごとし○庭訓往來卯月十一日狀に凡御領豐饒而甲乙  
 人令<sub>ニ</sub>富有屋作家風尋常而上下已神妙也云々鈔<sub>中卷六</sub>  
 に甲乙人とは高きといやしきとの輩也云々諸抄大成  
 五<sub>二</sub>卷十<sub>一</sub>に甲乙は一二と云心也貴賦の民人を指す云々  
 太平記<sub>卷本十四卷</sub>長年歸洛條に長年遂ニ討レザレバ  
 八十八<sub>丁</sub>右<sub>左</sub>内裏ノ居石ノ邊ニテ馬ヨリ下兜ヲ脚南庭ニ跪ク主上  
 東坂本へ臨幸成テ數刻ノ事ナレバ四門悉閉テ宮殿正  
 ニ寂寞タリ然レバ早甲乙人共亂入ケリト覺エテ百官  
 禮儀ヲ調ヘシ紫宸殿ノ上ニハ賢聖ノ障子引破ラレテ  
 雲臺ノ畫圖此彼ニ亂レタリ云々又<sub>世九卷</sub>諸大名讒<sub>世左</sub>高  
 經入道道朝條に毛利家本云道朝長坂峠ニ馬ヲ控テ跡  
 ヲ願ケレバ早屋形ニ火懸リテ財寶ハ甲乙人亂入テ是  
 ヲ取云々按太平記に甲乙人とあるもみな武家上下の  
 雜人といへるよし也○尺素往來<sub>詳書類從本</sub>に洛中人々  
 之宿所武士并甲乙人等濫妨狼藉事云々○下學集<sub>下卷二</sub>  
 熊鷹門に甲乙人カフオツニン云々○長祿寛正記<sub>詳書類從本十</sub>  
 九<sub>丁</sub>に高野山之衆徒共大塔ノ庭ニ集リ評定シケルハ

抑此右衛門佐殿ハ上意ヲ背キ天下ニ責ラレ已ニ討手  
 トシテ白ノ御旗ヲ向ラル、上ハ朝敵タル事疑ナシ然  
 ルニ當山開闢ヨリ以來甲乙人亂入スル事ナシ公私共  
 許容不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然云々○應仁略記<sub>詳書類從三百七</sub>序に就<sub>中</sub>  
 折に隨ふ雜記のならひ甲乙人等競ひ後れ或は進み或  
 は退く弓箭の道事において定量なき歎云々○親長卿  
 記文明三年八月四日條に駕輿丁課役事雖<sub>仰</sub>師著朝  
 臣不可<sub>レ</sub>催促之由申<sub>レ</sub>之也仍奏<sub>駕輿丁</sub>等可<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>番  
 說云々一日申入候駕輿丁訴訟の事武家へ申され候  
 て御沙汰仕まつられ候はんするほごまづ使をひかせ  
 候へと申付候へども叶候まじきよし師著朝臣申候は  
 どにいかにも候やうにと駕輿丁に申付候へば此上は  
 がよちやうのよしをといめて一向甲乙人に成候べき  
 と申切候此ほども廣橋の大納言いろく<sub>だんかふ</sub>に  
 て入魂し候へども外記も承引候はぬにて候此うへは  
 いかんとせられ候べきやらん一たん御さだに及候は  
 ではこと行候はず甲乙人に成候てはしかるべからず  
 被<sub>レ</sub>申狀之よし御心にて御ひろう候へかしかしく云  
 云按寶石類書九卷人品附錄部にも此文を引いていへら  
 く宗直按に當時之浪人といふ者むかしの甲乙人なり

云々與清曰高橋宗直が甲乙人を今の浪人ぞといへる  
 はひがと也甲乙人は御家人ならぬ貴賤の雜武家の事  
 にてこの文は公家方の駕輿丁を止て武家の雜人に  
 成べきよし也○多門院日記文明十五、三十條に近日  
 依<sub>當</sub>國牢人出張<sub>惡黨</sub>一等再兩陣足輕於路次奪<sub>取</sub>  
 甲乙人之衣裳之間云々又永正三七廿四條制札に軍  
 勢甲乙人等亂入狼藉事云々按<sub>こ</sub>に牢人と甲乙人と  
 は別ていひたれば甲乙人を浪人の事といへる説はひ  
 がと也○吉見政義書札抄四卷制札高札定法之事條に  
 禁制軍勢甲乙人等亂入狼藉事云々自注に軍勢甲乙人  
 ト云ハ高下ノ人ト云心也云々○大内家壁書<sub>詳書類從四</sub>  
 左<sub>丁</sub>寛正二年十月廿五日麻布寸尺之事に豐前國中<sub>之</sub>甲  
 乙人にふれしむべきよし所被<sub>レ</sub>仰出也云々又<sub>上</sub>應仁  
 元年四月二日禁制周防國郡濃郡鷲頭庄妙見山右甲乙  
 人等於<sub>當</sub>山<sub>一</sub>狩の事<sub>並</sub>苗田狩等に至て永令<sub>禁制</sub>畢  
 云々○二水記大永六五三條に甲乙人頗狼藉無<sub>レ</sub>所<sub>于</sub>  
 列立云々○公武之沙汰禁制之事條に禁制軍勢甲乙  
 人濫妨狼藉事云々○節用集加部人倫門に甲乙人カフ  
 オツニン云々○運歩色葉集加部に甲乙人カフオツニ  
 ン云々○菊亭家書禮上卷制札書樣條に禁制軍勢甲乙

人濫妨狼藉事云々注に軍勢トハ拾萬ノ餘ノ兵ヲ云也  
 將軍御動座ノ陣ヲ四軍ト云也軍勢ノ事也甲乙人トハ  
 甲ハ軍兵也乙ハ雜人也云々按漢書刑法志<sub>左</sub>に甲士  
 あり卒あり士の甲を著たるがやがて甲士也士卒とい  
 ふ時も士ハ甲にて卒ハ雜人也また東寺文書抄二卷五  
 左<sub>丁</sub>寛正二年十一月十五日文書に三職地下人等の一ぞ  
 く打よらば甲四五百もあるべしと見えたるも士分の  
 者を指て甲といへりと見ゆさては菊亭家書禮の説の  
 甲は軍兵也乙は雜人也といへるが允當かとおもはる  
 れど他の古書を考合すれば甲乙人はたゞ上下の人と  
 いふより轉りて士と卒とに分ていふやうにもなれる  
 なるべし○類聚名物考稱號部十五卷に甲乙人中古の  
 禁札に甲乙人濫妨事など有此甲乙人近き事なれども  
 しらざるものおほし甲は尊貴の上藩を云乙は凡鄙の  
 下人を云貴賤上下といふが如し甲乙丙丁をかりてそ  
 の上下の位を分てる也西土の書には未<sub>レ</sub>見只上下と  
 云て貴賤の事とする事唐の顔師古が匡謬正俗に見え  
 たりよく似たる事なれば次に記す西土の書に某甲と  
 するせしは今此方の俗に何某といふがごとし法華經  
 五百弟子受記<sub>卷八</sub>にも見ゆ匡謬正俗<sub>卷八</sub>荷爽與<sub>李膺</sub>書云舍  
 品見塔品



館上下福祚日新此蓋古來人士致書相問之常辭耳凡言上下者猶稱尊卑也此類非一是以王逸少父子與人書每云上下數動靜上下成宜上者屬於尊親下者明謂子弟爲論及彼之尊上所以上字皆爲縣闕而江南士俗近相承與人言儀及書翰往復皆指父母爲上下深不違其意耳云々又云是はかりに甲乙をもて稱す上下貴賤といふがごとし甲人乙人といふを省て甲乙人といへる也此類西土の書にも見ゆ魏略云太祖與王修書曰孤之精誠足以達君之察孤足不以不疑但恐傍人淺見以爲測測海爲蛇畫足將言前後百選輒不用之而使此君沈滯治官張甲李乙尙猶先之此主人意待之不優之效也魏志の王脩傳の注に見えたり張甲李乙とは何の誰某といふが如くに張氏李氏は古より名高き盛姓ゆゑに假にかくいふ也俗語に張三李四といへるもこれらより出たるべし此方にて甲乙の座といひ甲姓乙氏といふもこの意なり云々○與清曰甲乙人とは御家人ならぬ上下の雜武士なりそれを甲は士乙は卒の事としたる説もあれど酒家もと然にはあらずまた高橋宗直が浪人の事とし寶石山岡明阿が貴賤上下ぞといへるも共に受がたき説なり東寺文書抄二ノ十五丁ウ〇漢書刑法志二丁ウ甲士あり甲卒あり甲乙人の類也

松屋筆記卷之九十

華頂殿侍倭學士平小山田與清稿

(一) 雞口牛後の喩 戰國策八卷八 韓昭侯篇に蘇秦爲趙合從說韓王曰云々臣聞鄙語曰寧爲雞口無爲牛後云々史記六十九卷 蘇秦傳に臣聞鄙語曰寧爲雞口無爲牛後云々註に索隱曰戰國策云寧爲雞口不爲牛後從之註云雞中主也從謂牛子也言寧爲雞中之主不爲牛子之後也正義曰雞口雖小猶進食牛後雖大乃出糞也云々顏氏家訓下卷十一書證篇に大史公記曰寧爲雞口無爲牛後此是剛戰國策耳按延篤戰國策音義曰雞中之主從牛子然則口當爲牛後當爲從俗寫誤也云々

(二) 陰德あれば陽報あり 俗に陰德あれば陽報ありといへるは淮南子人間訓を出處とす白氏長慶集二卷十丁讀史詩五首其四に「陰德既必報陰禍豈虛施人事雖可問天道終難欺」顏師古注云五ノ二丁ウ貴德篇に夫有陰德者必有陽報有陰行必有陰罰也及孫云々又復恩篇に夏侯勝曰臣聞之有陰德者必有陽報也及孫云々又七丁ウ楚莊王賜群臣酒云々此有陰德者必有陽報也云々魏志九ノ廿丁ウ

(三) 松皮疱瘡 俗に物の膚を松皮にたとへていふ事あり松皮疱瘡などの類是也白氏長慶集二丁ウある木詩八首の其六に彩翠色如柏鱗皴皮似松とある鱗皴の字をマツカハと訓べし

(四) 寺門金字の勅額 白氏文集四卷二丁兩朱閣詩に寺門勅榜金字書云々

(五) 雲泥の違 俗言に雲泥の違といふは白氏文集七卷九丁答崔侍郎錢舍人書問因繼以詩に泥泉樂者魚雲路遊者戀勿言雲泥異同在逍遙間と見えたるに出たり

(六) 君子の交は淡して水の如く小人の交は甘して醴の如し 壬生忠見集に「底にして深しといふはたのまれす浅くてかけのたえせすもかな」與清曰此歌友まじはりの龜鑑とすべし万葉集十七卷丁右大伴池主が報家持書に淡交促席得忘言と見えたる淡交はた同義也莊子山木篇に君子之交淡若水小人之交甘若醴君子淡以親小人甘以絶云々禮記表記に君子之接如水小人之接如醴君子淡以成小人甘以壞小雅曰盜言孔甘亂是用餽云々なごあるを出處とす

(七) 白屋の士 說苑八卷七丁尊賢篇に周公旦白屋之

士所下者七十人而天下之士皆至云々また九丁周公攝天子位七年布衣之士執贄所師見者十二人窮巷白屋所先見者四十九人時進善者百人教士者千人官朝者万人云々同十三丁權謀篇に白屋之士皆關其謀芻蕘之役咸盡其心云々○家語二十八賢君篇に周公居冢宰之尊制天下之政而猶下白屋之士二日見百七十人云々注に草屋也云々源平盛衰記八ノ十丁ウ廿四ノ十二丁ウ

(八) 禁裏御念佛 親長卿記文明十ノ十ノ十六條に元長依召參內有御念佛云々

(九) 公文所 同書文明十三ノ六ノ三條に今日公文所公春來閑談十一月會可開白之由講師申之然者可逗留云々得其意之由返答講師來無案內之間同道公文所云々卷一盡持來一權如恒予同可出座之由公文所申之由注雖令酌頻命之間出座云々○吾妻鏡三丁五元曆元八ノ廿四條に被新造公文所今日立柱上棟大夫屬入道主計允等奉行也云々又丁七十月六日條に新造公文所吉書始也安藝介中原廣元爲別當著座齋院次官中原親能主計允藤原行政足立右馬允藤内遠元中斐四郎大中臣秋家藤判官代邦通等爲寄人參上



云々又四十四公文所雜仕女香菱鏡要目集成  
久部人部ニ委ツ  
 (十)土一揆徳政 親長卿記文明十六十一四條同五條  
 同六條同延徳二ノ三十七同十八條○東寺文書抄二七  
同四廿丁同五卅八同七二丁又九丁

(十一)上委 下委 裏頭委かいらすがた  
 記文明四年七月十日條に上委可參之由有仰即令  
 退出改衣裳直參内有一獻云々按上委は直衣裳な  
 る事知べし○同年八月三日條に參内直人々申詞關白日  
府右大將中院隨身就先度申次以民部卿可申乞之  
新大廣又予由談廣予已爲上委云々按此文にて上委は直衣な  
 る事明白也廣は廣橋大納言予は親長自身の事也○同  
 月九日條に下委參内奏多田贈位事今日爲御取亂  
 明日御衰日也明後日予上委可參内云々同書文明五  
 年正月廿二日條に入夜參内下内侍所御神樂諸司注  
 進付新大納言丁云々同書文明十年正月九日條に  
 以勾當内侍被仰下云上委可參之由被思召之  
 處爲下委毎年佳例御扇被下之云々同書文明十一  
 年七月一日條に曉天寅刻有火災之事云々中餘煙  
 及皇居之間被召引與御引直表略令出御所入御  
 安禪寺殿主上出御上委予民部卿實隆下委人々群參相

交供奉路次之義言語道斷也末代義可愁之云々同書  
 文明十四年三月廿三日條に兩下依召參内下委可參  
 修寺大納言秀同依召祇候云々申參仕之由可參  
 黒戸之前云々仍兩人參仕源大納言行民部卿忠上委  
 候實子出御學問所東西勅大予在庭上仰云  
 一昨日事自民部卿許可遣下手人之山種々雖申  
 遣無承引云々同書長享二年七月十二日條に午刻  
 許自大覺寺被送御經云々次於番衆所下委番  
 衆等頂戴次可申勅封云々同書長享三年正月六日  
 條に自内裏有女房奉書内侍あきしげしようでん  
 の事御めん候べきよしせんしようも候つると候きう  
 へすがたにてつれてまゐり候は御たいめんも候は  
 んするものをとおぼせられ候へどもはやき事に候は  
 んいか候べきとの御事に候かしく云々按此女房奉  
 書に假名にて宇倍須我多と書たれば宇波須我多は  
 稱まじき也同書明應三年正月十三日條に下委可參  
 之由有勾當奉書中御門大納言宣胤山科中納言言國  
 同有此仰各午刻參内申入祇候之處可參黒戸南  
 面御庭云々仍參入端間被敷御茵出御予中大山中  
 各在庭上伯二位候實子云々依仰懸膝於實子次

被下天盃於簀子上拜領天盃勾當成中御門大納  
 言山科中納言自地上及手飲之云々同月十四日條に  
 有召參内委黒戸南面庭上云々○元長記永正十  
 一年正月十八日條に入夜三毬打見物下委云々○後  
 奈良院宸記天文四年正月廿二日條に今夜右大將年始  
 御禮被參上委不對面申次頭弁也珍重之由返答也  
 云々○寶石類書九十二卷衣服部に御したすがた實豊  
 卿口傳一に御ゆどのうへの日記中に御したすがた  
 とあり御冠も御袍もめさぬ事なり云々○興清曰上委  
 は親長卿記長享三年正月六日女房奉書に据て宇倍須  
 我多と訓べし宇波須我多とは訓べからずこれ直衣體  
 なる事も同記を考て知らる下委は志多須我多と御湯  
 殿上記に書たるに従ふべし御冠も御袍もめさぬ御體  
 のよし實豊卿口傳の説は主上の御上裏頭委和長記明應  
三正十六の  
條康富記かいどりがた徒然草なども似たる詞つき  
徳二八六條  
 の名目なり  
 (十二)鐘の龍首 洪鐘の龍首は和訓には「タツガシ  
 ラ」といふべきもの也これは印章の紐におなじ周禮  
 に鐘旒旋蟲同疏に鐘旒孟子註に鐘紐なご見えたる字  
 面を名物六帖器財箋三絲竹鐘鼓門に「リツツ」と訓を

施したり  
 (十三)天蓋竹格 僧家の飾に天蓋あり其貌鮎に似た  
 れば法師鮎を天蓋と異名して密に食ふよし義大夫院  
 本に見ゆ名物六帖器財箋三喪葬祭祀門に竹格テンガ  
 イ家禮儀節若仕官之家有餘力者予竹格上稍加  
 華飾似亦不爲過云々  
 (十四)六道錢 喪葬の時に六道錢とて棺にいろは  
 紙錢の遺風也名物六帖器財箋三喪葬祭祀門に糜錢ロ  
 クドウセン云々楮錠ロクドウセン云々と擧て其出所  
 を出せり倭名抄に紙錢の事見えたらば考合すべし  
雨  
 (十五)めのこ算 幕師畫詞一卷四丁にメノコタキト  
 カヤノ風情ニコ、ロエヤスキ加様ノ明文ヲ少々思ヒ  
 出スニ隨テ書載侍リ云々又十卷五丁に四十八願簡要  
 ノ願々ヲ選テメノコタキニ註釋セリ云々按に今俗メ  
 ノコ勘定なごいふはこのメノコタキに起れる詞な  
 るべし雅亮裝束抄三卷御幣を取事條にふさのゆひや  
 うかはる也ふさを三ツに分て小元結二ツして別々に  
 二ツにゆふ也其ゆひやうはうらうへながら片盞にゆ  
 ふ也其盞の手を左右にむすべは左のは雌の子結ひに



せよそれがよきなりと見えたる「めこのむすび」も同義にや可考「メノコタキ」は目子彈基歎女の子抱歎今一證を得て定むべし國紀行

(十六)山臥筒 幕歸畫詞九卷六丁に丹後國天の橋立の事成相の麓の大谷の迎講所の事などいひて次にいへらくコ、ヲ通テ鳥崎ニ程ナクツキシバラク遣遙シテ三酌ニ及ビ万年ヲ延ルニ後ロヲハルトト願レバ過ツル大谷ニ當テカスミタル江路ニ船一二艘アリトミル處ニ酒盛ノ砌申ノ戸ニ漕付ケリ誰ナルラント思ヘバ昨日ノ朝扇ヲオクリ遣シ侍シ遠律師トゾ見ナシケル同宿五六人相伴テ玉樽ヲ隨身シ銀觴ヲ懷中スルモノアリ或僧ハ山臥筒ヲスキイダシ或族ハ田樂節ヲウタヒカケツ、垂髮ヲ賞翫シケレバ思ノ外ナル當座ノ遊宴ヲソヘテ面白トモイフバカリナシ云々寫本に山臥筒を山臥筒に作れるを宜とすべし然て山臥筒は大江山畫卷に山臥姿にて青竹の筒に酒をいれて持たるかたあり所謂竹筒の類もこれをいへるにや

(十七)會良と云詞 思ふそら戀るそらなどいへる會良は空虛より轉りて間の義也心そらなりなどは心空虚なを也足をそらにしてなども又空虚の義にて足の

踏事もおほえざる也萬十五ノ廿五丁ウに美能蘇良治トアリ道ノ間道ニテ中途チイヘル也

(十八)みこと 尊命の字を美許等とよむは御事の義也後にも人をさしておとなどいへり母の御こと妻のみと汝夫乃美許等万十七ノ廿三丁ウ同上

にあらす今昔十六ノ十八講同廿ノ九講同廿七ノ廿七講同廿八ノ六ノ六ノ講 御事太平記十二ノ十二丁ウ

(十九)すべなし 「すべ」といふ詞は爲方の義也センカタと云もおなじせんすべなみなごいふは將爲爲方無さの義也

(廿)宇良夫禮くづほれくたびれ うらぶれと云詞は心恍惚にて心の恍惚として正體なくよわりたるにいふ「くたびれ」といふも「クツボレ」の通音にて恍惚の義也又恍惚の義として聞ゆくたかけも腐雞の義なるを思ふべし萬川集久部言門ニ勞倦クダビル疲同云云太平記五ノ十七丁ウキタビレ云々同廿四ノ廿六丁ウキタビレ

(廿一)安利加與比安利多々志 万葉集に安利加與不アノリカヨフといふ詞おほかり古事記にも阿理加婆勢など見ゆこは在々而通義なれど馴通よしに心得ればいづれ所にも遠なし在立之三丁ウなごも又馴立しと心得て聞ゆ

(廿二)とこなつ 万葉十七四十丁ウに「曾能多知夜麻爾等

許奈都爾雪布理之伎底云々また丁ウ十一「多知夜麻爾布里於家流由伎能等許奈都爾氣受底和多流波」云々此等の等許奈都は常如の義にて常住の如く雪の降たるさまをいへる也粟麥をトコナツノ花といふも常住咲てあるとさき花の義それを省てトコナツとののみもいへる也豆と須は常に通音にて例おほし

(廿三)神祇齋場所 吉田の齋場所はもと大嘗會の齋場所によりたる名也十訓抄二卷第に今大嘗會の時黒木の屋とて北野の齋場所につくる云々源平盛衰記四廿丁右大嘗會儀式條に大嘗會ハ十月ノ末ニ東河ニ御幸シテ御禊アリ大内ノ北野ニ齋場所ヲ造テ神服神供ヲ調ヘ云々など見え儀式延喜式なごやうの古書には卜定齋場ニ事おほかりこれ由爾波と訓也太平記には齋廿一所廿一後村廿一とも齋廳場所廿五卷崇光廿一とも書たりこれらに限らず齋場所の所見枚舉に追なければごこにえうなければ引出す然て吉田齋場所のゆゑよし左にいふべし○親長卿記文明五年五月一日條に吉田三位兼來齋場所事申入被成下勅裁自然可得其意云々以幽玄之例申入歎自今日依中山番代祇候下云々同書文明六年正月十六日條に早且行水參詣

齋場所直云々同書文明十六年四月二日條に早且詣吉田社直頭于今無造營可參齋場所云々場所自御近日再興造營仍依雨於門下奉幣社司敷薦持來幣兩段再拜之後返歸幣於社司參神前六角神殿也勸請神此外神宮內外宮別御座又諸國神社在列出合行向齋屋閑談歸了云々按御臺は慈照義政公の室にて從一位當子也○宣秀御教書案に文明十一年兼俱卿當時齋場所再興神道吉田社未造立云々○宣胤卿記文明十二年正月四日條に浴湯著衣冠與先詣下五靈社次參吉田社當社未被造兩段再拜齋場所分又兩段再拜云々同書文明十三年十二月二日條に早且行水參詣吉田社社頭亂後未營兼俱卿宿所尺尺之間立寄云々同書文明十三年正月四日條に早朝行水著衣冠與先參下御靈社次參吉田社當社未被造兩段再拜了又齋場所分拜之次立寄侍從二位所內兩段再拜了又齋場所分拜之次立寄侍從二位兼云々同書永正三年正月四日條に於齋場所傍著齋服借用參詣齋場所自事也先奉拜吉田大明神內奉幣大元宮兩段再拜咒文等有之先讀次八神殿次南宮次六十餘州巡禮次改齋服行神靈寺所也携杉原一束扇樽等至去年三箇年居住之所也次



向兼俱卿宿所女房衆三獻後入風呂門内亦於兼滿方有孟酌次歸寺住持兼俱出逢有一獻云々○吉田兼致記文明十六年十月五日條に今日勅額事以民部卿申入給額數六分也

日本國中三千餘座 天神地祇八百萬神 外宮宗內宮源 大元宮 宗源殿

此分書之進上額紙形用唐紙打只今齋場根元大概如注進

齋場根元大概御注進

神祇齋場の事

このさいじやうしよは人王の第一神武天皇この國土にてはじめて神を御まつりありしこんげんなり父の御神までは神代なればべちに神でんをたてまつり申さるゝ事もなしこの御代より神明と人王とのしやべち出きにけるにや天下のあく神おそひ申せしによりてやまごの國いこま山にてさいじやう所をたてゝ天神地神を御まつりありしぞはじめなるこれよりやうやくあしき神々もしづまりたまへば又同國にふの河上にこのさいじやうをたてゝみづから神道を行おはしますしかあるに天下のあ

ら神ことくしづまりければはじめて王城を榎原といふ所にさだめられてすなはち鳥見の山にさいじやうをたてゝ天照大神をはじめ奉り日本國中大小のしよ神さうじて八百萬神をいはひ申されしより今に皇城ちかき所にたておかるゝはこのゆらいごかやおよそ天地の諸神くわんじやうのこんげんたるによりて日本最上神祇のさいじやうといふがくを下されけりこの後伊勢内宮は六百五十七年をへて人王十代垂仁天皇のひめ御子やまご姫の御くわんじやうたり外宮は廿二代め雄略天皇の御宇にするじやくありこれは千百卅年の後なり兩宮共に姫宮の御くわんじやうのおこりたるによりて代々の御門のひめ御子をもて齋宮とがうし申されかの兩宮につかへ申さるゝとこのらんじやうにや大神宮するじやくの事は伊勢内侍所齋場所この三ヶ所のほかは上古よりちやうじのせいだんをなされたるものなり

家君被遣御狀於民部卿

神祇齋場額内六分申請宸翰一度々此額事被染神武天皇勅筆以降嗟峨天皇被改漢字之代々勅

額之段勿論候就中當場由來事自御臺御方被尋仰候間此一巻令注進申候以手次内々被備叙覽候者可畏存候恐惶謹言

十月五日

兼俱

民部卿殿

追啓

天萬宮遷座雖爲當月中不可苦候伊勢内宮垂跡當月候間神道殊用之候可御意候哉

按兼致は兼俱の子にて從二位神祇權大副也神祇齋場所注進狀のむね孟浪ごとにて笑にたへされど中に考證にすべき事なきにしもあらずこれに民部卿とあるは忠富卿也○諸神記卷上天神地祇惣三千一百卅二座大神四百九十二座小神二千六百四十座定日本國中大小神社鎮座延喜五年十二月二十六日宣下於山城國愛宕郡如意峰神祇齋場所奉安鎮三千一百三十二座之神祇大神四百九十二座小神二千六百四十座同月廿八日奉渡神祇於六十餘州矣天下諸神奉授神號之時於齋場所以神代正印被定神宣事延喜以來之聖斷也云々○諸社根元記地神五に定日本國中大小神社鎮座事延喜五年十二月廿六日宣下於山城國愛宕郡如意峰

神祇齋場所奉安鎮三千一百三十二座之神體大神九十二座小神二千六百四十座同月廿八日奉渡神體於六十餘州天下諸神奉授神號之時於齋場所以神代正印被定神宣事延喜以來之聖斷也云々按神社鎮座歲代考全くこの文を引たるにて一字の異もなければ再費引せず○神社考二卷四丁吉田條に卜部家説云吉田地主者本是雷神也及一條院時卜部兼延始爲社務職勸請春日明神以藤氏崇敬也日神之居天岩戸時諸神奏神樂其處降爲山故號曰神樂岡又此地有齋場所大元宮日降坂龍澤等之名皆卜部之所秘崇也云々○倭漢三才圖會七十二山城國神社部に吉田社在愛宕郡神樂岡社領五百九十石其殿名宗源殿神祇首領唯一政所神道受業明堂天下祭場也吉田藏人頭卜部神祇領七百社家大隅氏給鹿氏以上八人齋場所非號大元殿天照皇宗外宮豐受皇源小社日本國中諸國各記額數第一高皇彥靈尊二神皇產靈尊三魂留產靈尊四生産魂尊五足産靈尊六太宮賣神七御食津神八事代主神以上號元本八神殿日本國天神地祇三千百三十二座大神四百九十二座小神二千六百四十座延喜五年十二月廿六日宣下同二十八日奉渡神體於六十餘州矣各神號於齋場所



云々○山州名勝志十三下卷五に齋場所所在吉田社南樓門額日本最上兩大神宮中門額日本最上神祇齋場本宮額日本最上日高宮大元宮日本國中三千餘座天神地祇八百万神云々○内外宮坐齋場所後八神殿東西鳥居額外宮宗內宮源云々此二額從一位富子筆富子慈照院義政公御臺也社家説云兼俱依靈夢勸請云々○八神殿在齋場所後鳥居額元本八神殿按八神殿中御門宣胤卿記載延德元年十月從二位兼俱卿奏狀云々○雍州府志二卷八丁神社門上愛宕郡部に齋場所所在吉田山始在神祇館樓門額有日本最上一日高日宮之字云々又日本最上南大神宮額并日本最上神祇齋場額及日本國中三千餘座云々清九四世曰平九一又改姓下部依之吉田家爲神道長○山州名跡志四卷下右愛宕郡部に齋場所田宮也在神樂岡樓門額兩大神宮中門額日本最上同額神祇齋場已上清水谷實秋卿筆○本殿南造八角堂葺棟行東西南面破風內大額日本最上日高宮大元宮後土軒內中央額日本國中三千餘座已上堅額清水谷實秋卿筆○八神殿在本殿後向鳥居南額元本八神殿後所祭御食津神神皇產靈尊魂留產靈尊生產靈尊足產靈尊道反魂神大宮賣車代主尊已右八柱神八洲守護驗神八齋靈

神八心府神坐故式爲皇帝之鎮魂神矣神系此神殿古在神祇官舊地今二條所司館北也秀吉公聚樂城郭造營時依命所移也○外宮在八神殿西南鳥居同本額外宮宗額○內宮在同東南鳥居同本額內宮源額已上義政公室藤富子筆○日本國中總攝社在本殿東方北始山城西方北至對馬額山城中百每社如此云々○與清曰神祇齋場所は後土御門院文明五年五月吉田兼俱三位勅許を蒙りて神祇官八神殿の跡を建立せる也其比東山慈照院殿義政の北方藤富子の一位信力を出して助成されたりと見ゆ嵯峨天皇の樓門の額字は後世の鳩集なるべければ古代の證にはしがたし又社家の傳説その外後の書の説ごもは荒唐無稽の言にて取用べくもあらず

(廿四)國姓爺 鄭成功を國姓爺といへるよしは臺灣鄭氏紀事上卷十に隆武偉而撫其背曰惜無一女配卿卿當盡忠吾家無相忘賜姓朱改今名拜御營中軍都督賜尙方劍儀同鮪馬自是中外稱國姓不名云々これ明史鄭成功傳を引ていひたる也

(廿五)反故を啖ふ 同書中卷二に成功圍漳州城凡六閱月城中食盡人相食枕藉死者七十餘万人間存者

氣息僅屬雖悲泣無淚有二人餓死鄰舍兒竊食其肉腸中皆故紙字畫隱々可辨周亮工作詩紀實酸楚凄痛云々

(廿六)白牌 喜定屠城紀略八丁閏六月十八日條に景耀復大書一白牌立馬橋南論成棟降云々按景耀は明の唐秀才景耀也成棟は清將李成棟也

(廿七)徒手空手「むなで」すで 西行集に空手をむなでとよめり空手の字面韻府などにも擧たり嘉定屠城紀略十八に至是徒手應敵而已云々徒手はスデと訓べし白氏文集十二空手無金行路難

(廿八)水竇 今俗に城または第宅等の下水口を水門といふこは水竇と書べし嘉定屠城紀略十八に欲從水竇入と見ゆ

(廿九)ねなし言 ねなし言は不根語と書べし嘉定屠城紀略二十三に爾時人心惶々聽不根語莫敢寧居と見ゆ

(卅)濤山浪屋 同書廿五に濤水如濤山浪屋云々

(卅一)承明門 承明門の名は説苑十九右竹文篇に承明織杼守文之君之寢曰左右之路寢謂之承明何曰承乎門堂之後者也と見ゆ

(卅二)門守犬 詩經召南篇に無使也吠と見え説苑十五指武籍に如龍之守戶云々

(卅三)影の形に従ふ 説苑十五指武籍に如影與響如雁之守戶如輪之逐馬響之應聲影之像也

(卅四)蘆葉の雁 説苑十六說義篇に銜蘆而翔以備之矰弋云々杜甫遠遊詩杜律集解に雁矯銜蘆內云々

(卅五)媒口 俗に媒口といふは彼此に譽飾りの詞を盡して其事を遂んとするをいふ戰國策九上卷燕昭王篇に蘇代對曰周地賤媒爲其兩譽也之男家曰女美之女家曰男美然而周之俗不自爲取妻且夫處女無媒老且不嫁舍媒而自銜敵而不售順而無敗售而不敵者唯媒而已矣と見ゆ

(卅六)尸祿素殮 説苑十四至公篇に楚令尹虞丘子復於莊王曰云々久踐高位妨群賢路尸祿素殮貪欲無厭云々久固祿位者貪也不進賢達能者誣也不讓以位者不廉也不能三者不忠也云々莊王曰夫子之賜也已爾爾十訓抄五ノ十二丁爾祿似也

(卅七)仁をもて國を亡す 徐の偃王仁德をもて國を











問堂蓮花有二献及大飲及晚還御宮御方御與御共就北北面祜祜織織男男侍侍源大納言青侍備後守實名等兩人也云々同明應四三七條に於粟田口青侍可尋守差差益云々園太磨一之下七十二又九十八

(五十九)紫衣香衣事 同記文明十八十九條に五山僧紫衣御祈願僧香衣の事見ゆ

(六十)一昔 源平盛衰記廿卷十丁佐藤大場勢汰條に情事ノ心ヲ案ズルニ廿一年ヲ一昔トスソレ過ヌレバ淵ハ瀬トナリ瀬ハ淵トナル云々

(六十一)佛の訓義 源平盛衰記廿卷八丁小兒讀諷誦條の歌に「法ノ花終ニヒラクル八枚ニハ心ホトケノ身トゾ成ヌル」此歌にてホトケはホドケにて物理の解釋たる義也と日本釋名にいへる説を助べし

(六十二)雜事并雜事錢 雜事とは今俗に小遣雜用なごいふにおなじ源平盛衰記十七卷三丁祇王祇女佛前事條に衣裳絹布ノ類ヲ送遺スノミニ非ズ毎月ニ時料雜事を運入云々同卅三十五康定關東下向條に京上リノ雜事トテ鎌倉ヨリ宿々ニ五石五石糖菓ニ至マデ鏡ノ宿マデ送積テ侍ツル云々十訓抄二丁宗長手記に雜事錢の歌あり今の小遣錢也吾妻鏡五丁宿次雜事

以下云々

(六十三)厚顔鐵面皮つらの皮千枚張 俗に耻を知らざるをツラノ皮ガアツイ又は千枚張の顔又は厚顔鐵面皮なごもいへり源平盛衰記十八卷四丁文覺頼朝勅進謀反一條に面張牛皮ノ童ニテ心シブトク聲高ニシテ云々

(六十四)定使 俗に定使といふものあり常使とかけり盛衰記十八十三丁に定使と書たり

(六十五)親代 源平盛衰記廿卷十六丁石橋合戰條に家安親代ト成テ夜ハ胸ニカ、ヘ奉テ通夜勞ハリ晝ハ肩ニノセ終日ニ奉テ育云々按に母代といふも似たる事なるべしこは佐奈田與一を郎等文三家安がはごくみそだてしよしをいへる所也

(六十六)藝は身を助る 同書四卷廿八丁師高流罪宣事條に陳思王ハ七歩ノ詩ヲ作テ一生ノ命ヲ助ケ時忠卿ハ兩句ノ筆ニ依テ三千ノ耻ヲ遁レタリ誠ニ時ノ災ヲマヌカル、事藝能ニ過タルハナカリケリ

(六十七)一字を賜ふ片名を賜ふ 名乗の一字を賜ふ事今も御一字拜領などいへり源平盛衰記卅八廿三丁重衛京入の條に此重國ト云ハ重衛卿ノ少クヨリ不便ノ

者ニ思ハレテ白鳥帽子著セ給テ片名ヲタビテ重國ト呼レケリと見ゆ 源平盛衰記卅六廿一丁ウ鷲尾一谷案内條に名乗ハ我片名ニ交ガ片名ヲ取テ經錄介年申行事上廿二丁下十丁下

(六十八)人の疵をいふまじき事 一柳盛物は無雙の勇士なり生得兎口なりしが人傍にて兎口の物語をすれば殊外立腹せりとなんげに人の失人の疵は知れたる事ながらいふまじき也源平盛衰記五廿七小松殿教訓條に新大納言成親卿が坊門中納言親信に戲言いひて耻しめられたる事をいひて人ハ聊戲言ニモ人ノ疵ヲバ云マジキ事也ケリと見ゆ

(六十九)文明三年四月十二日一禪御説筆記中陰の御佛謚號追號諒開の服

一御中陰御佛凡人相違事初七日藥師如來二七日彌勒三七日千手四七日地藏五七日普賢六七日不動盡七日釋迦百ヶ日阿彌陀文明三四五九後花園院御百ヶ日之時被用御釋云々後小松院百ヶ日御思又如此被注之  
一依或人間大閻所答條文明三ノ四ノ十二寫了  
一謚號追號のかはりめは 謚をばおくりなとよみて生時の行跡によりて没後の號として仁德まし〜候へば仁德天皇と申武德おはしまし候へば桓武天皇と申候くはしくあひたる事は候はねども本説此ふんに

て候是は德により可レ申候所名にはよらず候追號と申はたふん御在所の號又山陵の號などを用ひられ候嵯峨淳和陽成などは御在所の名を御追號にもちひられ宇多醍醐村上などはみさゞきの號にて候光嚴光明崇光などは御庵室の額にて候遺勅によりて被用候これも御在所にじゆんじすべておぼしめし候崇德顯德後鳥羽順德等三代は遠島の御事にて候ほごに院號を撰られて送り申され候近ごろ稱光院などは此例たるべく候かにて候しかとしたる御在所は候はねども院號にもちひられ候安徳天皇などは謚號の准たるべく候謚號は其人の德によりたる號にて候ほごに後の字をくはへて用られたる事はいまに其例なく候又出家の後には謚號なきにて候是によりて寛平法皇の後は天子の謚號たえたる事にて候

一諒開の服は心喪と表したる事にて候それに若年人ころもがへけしやうなどはかざりにて候ほどに事心と相違したるとおぼして候さりながら神事などにしたかひて吉服を著し候へばそれ一日などの事はくるしからじとおぼしめし候いのはじめより卷纏にて候其後つるばみの宣下候は、何とも候へふさきにとも



垂纓にあらしたるべき事はおぼつかなく候ははじめよ  
り垂纓にて其後つるばみを著事も巻纓にさきし候へ  
きにて候

一大中納言以下巻纓の鈍色の諒闇の直衣束帯を著し  
候關白三公いしノもみな巻纓たるべく候公事にて  
したがひ候はずは内々ぶさたのふんにて候素服にて  
候は垂纓も子細候まじなどおぼしめし候さりな  
がら家々の所存さためてかはり候べきぶさは近例  
本ノマ、  
たて候右兼良公言談云々○與清曰右の古書筆記せし  
人未詳一條禪閣の御説にて御中陰の佛名諡號追號  
諒闇の服巻纓垂纓の事なごあれば珍重すべし

(七十)酒令觴政酒勢令搏拳 說苑善説篇八丁右に魏文  
侯與大夫飲酒使公乘不仁爲觴政曰飲不嚼者  
浮以大白文侯飲而不盡嚼公乘不仁舉白浮君君  
視而不應侍者曰不仁退君已醉矣公乘不仁曰周書曰  
前車覆後車戒蓋言其危爲人臣者不易爲君亦不  
易今君已設令令不行可乎君曰善舉白飲飲畢曰  
以公乘不仁爲上客云々この觴政すなはち酒令也  
唐書九十四卷李君羨傳に會内宴爲酒令各言小字  
云々近來張山來が酒令世に行はる五代史丁左 史弘

擊傳に酒酣爲手勢令とあるも負人爵杯を吞事也ま  
た酒席にて拳を打て勝負を論するはいつばかりには  
じまりけん虫拳狐拳虎拳などの類おほかり事文類聚  
續集十五卷宴飲部爵飲條に東臯雜錄を引て孔常甫言  
唐人詩有云城頭推鼓傳花板一席上搏拳握松子  
乃知酒席藏闖爲戲其來久といへるは拳を搏て松子  
を握り其負數に据て勝敗を分てるにや橋泰が筆のす  
さび上卷四丁に拳を打事を漢土にては搏陣と云又  
ぎりこぶしにてする「けんねち」なん「こ」といふ  
戲を猜拳と云猜はうたがふ事也故にはんじものを書  
し燈籠を猜燈といふ明皇雜記に見ゆと云々

(七十一)瑠璃 瑠璃は佛教におほく見えて吹瑠璃な  
ごもいへり扶桑畧記三卷丁敏達十四年條に蘇我大  
臣佛舍利を瑠璃壺に納たる事見ゆ

(七十二)修身の金言井柔能制剛 說苑十卷三丁敬慎  
篇に孔子曰高而能下滿而能虛富而能儉貴而能卑智而  
能愚勇而能怯辨而能訥博而能淺明而能闇是謂損而  
不極云々又四丁同篇に老聃有言曰天下之至柔馳騁乎  
天下之至堅又曰人之生也柔弱其死也剛強万物草木  
之生也柔脆其死也枯槁因此觀之柔弱者生之後也剛

強者死之徒也○列子黃帝篇九丁上に天下有常勝之道

有非常勝之道常勝之道曰柔常不勝之道曰強云々

(七十三)衆口回人意衆口銷金 說苑十卷十五丁敬慎  
篇に讒諛亂正心衆口使意回云々戰國策七丁六魏

哀王條に張儀爲秦連橫説魏王曰云々臣聞積羽沈

舟群輕折軸衆口銷金云々注に補曰周語衆口銷

金註衆口所毀雖金石不可銷云々史記八丁卷維陽傳

に衆口鑠金積毀銷骨云々注に索隱曰國語云衆心成

城衆口銷金云々國語野客叢書六ノ廿六丁上 隋書二ノ十八

丁上 高祖紀下仁壽三年の條に衆口鑠

云々

(七十四)怨生於不報禍生於多福 說苑十卷十五丁

敬慎篇に去微幸務忠信節嗜欲無取慮於人

則稱爲君子名聲常存怨生於不報禍生於多福安

危存於自處

(七十五)氣にいらぬ 國語七卷十丁晉語一に與其勤而

不入不如逃之云々注に不入不入君意也云々

(七十六)同出 同十卷八丁晉語四に同出九人唯重耳在

注に同出同父也

(七十七)無徳にして人に用らるるは罪也 國語十三卷

丁晉語四に無徳於人而求用於人罪也注に言不

先施徳於人而求人爲己用者罪也

(七十八)田樂侏儒 又卅丁侏儒扶盧云々注に扶縁也

盧矛戟之秘縁之以爲戲云々按に侏儒は田樂法師ま

たはカルワザの類也 國太府一之下 頭書田樂ノコト榮花御裳

昔廿八ノ七卅百 練抄五ノ廿八丁上

(七十九)使酒 唐書八十一卷三宗諸子列傳景儉傳に

性矜誕使酒縱氣云々南史卷四丁魯爽傳に爽少有武

藝魏太武知之常置左右及軼死爽代爲荆州刺

史襄陽公鎮長社廳中使酒數有過失云々

(八十)琴宵 唐書八十一卷三宗諸子列傳惠文太

子範傳に長安初張易之奏天下善工漢治乃密使琴

宵殆不可辨稱其真藏于家云々

(八十一)蜘蛛のいに荒たる駒をつなぐ井二道かくる跡

云草虫部蜘蛛條によみ人しらす「蜘蛛のいにあれたる

駒はつなくとも二道かくる人はたのまし」漢鹽草

十二 獸部馬條にあれたる駒くものいにあれたるこま

はつなくともいへりあれたるこまはあらしなり云々

二道かくるは狭衣四上卷四十五 狭衣大將歌に「かた

になりなはさてもやむへきをなど二道に思ひなやま

す」増基法師が庵主 群書類從三百三に「君はおもふ都は











(四上)歌數おほくよみたる人 非蛙抄六卷卅 雜談部に國助神主云々稽古も名譽も無雙なりきしかるに家隆の詠歌六萬首ありける事をうらやみて己達の後歌をおほくよみけり云々正徹書記草根集詞書に永享四年卯月二日夜中務大輔の家にこまり侍るに夜半ばかりに今熊野の草庵本坊の類火にやけ侍るよし曉告來りしかどもかひなき事にてぞ侍りし愚老廿歳のとしよりよみおきし歌二萬六七千首三十餘帖に書おきしもひとつものこらすすべて和歌抄物自筆秘口傳等數を盡して空しき烟となし侍れば云々

(四下)如法如法者 古書に如法くらき夜如法正きなどいふ類の如法といへる字面いとおほかり非蛙抄六の卷雜談部異本後宇多院龜山殿千首時といへる條に吉田僧正參會の時あはれ霞のたち所かなを被稱美由侍從中納言被語とて中御門如法自愛のよし被語きと有如法ハコトノホカ又はコヨナク又はイミジクなどよむべきなり俗に如法者といふも殊の外よき者の義なるべし

(五)はづすと云假名 絃をはづす物をきくはづすなどいふはづすははなつとかよひて聞ゆ

(六)藪にかうのもの 十訓抄三卷十 第三不悔人倫一條に二條より南京極よりは東は菅三位の亭也三位うせて後年比へて月のあかき夜さるべき人々古き跡をしのびてかしこにあつまりて月をもてあそぶ事有けりをはり方に或人月はのぼる百尺樓と誦しけるに人々聲をくはへてたびく成にあればたる中門のかくれなる蓬の中に老たる尼のよにあやしげなるが露にそぼちつ終夜聞をりけるが今夜の御遊いといとめでたくて涙もどまり侍らぬに此詩こそ及ばぬ耳にも僻事を詠じおはしますかなどき侍れといふ人々人わらひて興ある尼かないづくのわろきぞといへばさらなりさぞおぼすらんされと思給ふは月はなじかは樓にはのぼるべき月にはのぼるとぞ故三位殿は詠じ給ひしおのれは御物はりにておのづから承りし也といひければ耻てみな立にけり是はすみて人をあなづるにはあらねども思はぬ外の事なりこれらまでに心すべにきや藪にかうの物といへる兒女子がたとへむねをたがへざりけり云々按おもひかけぬ數の中に積郁たる香物のありしたとへ也香物は今の食料の清物にも限らずすべて香ばしき物といふ義なるべし

野語述説前編三卷九丁に藪香物愚曰藪竹林也香物

醜諸菜也皆俗語非正訓也尾陽城外二里許西有阿波提社建保百首作相傳此社中有菅君祠古人經過此地則無不以菓菜漿鹽之類其他一切之雜物等薦之而投於祠前竹林之小池而后池中菓菜等自然爲香物也爾來物可無而反有之謂藪香物也

嗚呼神靈之所爲乎是亦一大怪事也何計較論量知得之耶近世僅存其遺意而已蓋考之歷代和歌諸書此森中無菅廟等之事唯其所咏吟之森下之幽景及海濱之豪興也而今杜外皆田圃也何時海潮退縮於六七里許南如是爲平地而已雖未知事實之詳姑書之以俟知者一也云々千加屋草五卷に藪に香物といふ事藪醫にも功者ありと云諺とのみ思ひしに予尾張に在し時名古屋より海東郡を通り津島へ往に阿波手ノ森と云所に藪の中に壺をふせて往來の瓜蒴鹽の買人その我がうる物を納置香の物自然となる瓜蒴子に蓼穂を少し加へて毎年極月廿五日熱田の社の煤拂と二月初午の神供に献す兩所より献じて其數も委く記し置たれども無用の事なれば略しぬ此香の物よりいひ弘めたる事にかゝる事もあれば私の考のみにて

は齟齬の事多し云々千賀屋草は多田後が著作也刊本南嶺子二卷五丁左に此説あり 三卷右に或人の曰藪に香のものといふ事見證有や曰是は尾張名護屋に有草葉に此事を記といへども近年出たる板本にあらまじ見えたる間今略之又西國海邊にも有といふ是も其趣名古屋の説に似たり云々安齋長島帽子にヤブニカウノモノト云藪古キ事也十訓抄ニ二條殿ヨリ南京極ヨリハ東ハ云々諸國獨吟集下卷四十四元隣か句に藪に剛の者といはるうきふしに

(七)堅固の田舎人 十訓抄三卷十 第三不悔人倫一條に教經云爰に老翁や一人あひ奉りて候つらんあれは愚父平五大夫にて候堅固の田舎人にて子細をしらすさだめて無禮をあらはし候つらんといひけり云云盛長記廿三ノ十六丁オ同廿四ノ一丁ウ 古事談五ノ十三丁ウ 候堅固ノ田舎人ニテ不知子細定令ノ現ニ無禮一歎云々

(八)異名 見あれの宣旨小世繼五丁ウ十 在中十訓二ノ平中同二ノ九丁安樂鹽同二ノ十天變の少將同二ノ廿山送りの弁同二ノ廿長而進士同二ノ廿勅撰の異名非蛙抄三卷六丁オ 酒を九献同 餅をカチン同 味噌をムシ同 鹽をシロモノ同 豆腐をカベ同 索麴をホンモノ同 松茸



をマツ上同鯉をコモジ同鮒をフモジ同鰯をツモジ同土筆をツク上同炭をワラ上同葱をウツホ同菜をホメグリ常にオマハリと云はわろし上同相原紙をばスイハ同引合紙をヒキ上同墓目をしねくる三議一統上七十○樂の異名耕餘十六ノ 鬮婦人養草五ノ下五十二段四十五丁ウまつよひの小侍十四丁オ 鬮從下もえの少將と浦の丹後浦はの内侍沖の讃岐ふし柴の加賀○車を流水 建曆宣旨馬を淨雲同上

(九)かきたて杖 燈のかき立杖十訓抄二六丁 にかきあびの木と見ゆ

(十)こびたるもの 俗にこびたるものといふは媚の義にはあらずかどびたる者といふを約ていへる也そは才あるものをかどあるものといへり十訓抄二卷二丁に才こびたるもの也けりと有○武邊咄聞書七卷關原御陣前に福島正則池田輝政其外大名十二頭にて岐阜の城を攻ると云段に高虎又兵衛はこびたる者にて候として扇にて被招候へば云々

(十一)雜訴決斷所 鎮西古文書一卷阿蘇宮文書に雜訴決斷所肥後國守護所

當國阿蘇社大宮司惟直申社領阿蘇社四至堺事 右任承曆國宣可打渡彼界一者以牒

元弘三年十一月四日 右衛門大尉大宿禰判

左中辨藤原朝臣判

雜訴決斷所肥後國衛

當國阿蘇大宮司惟直申社領阿蘇社四至堺事

右任承曆國宣可打渡彼界一者以牒

元弘三年十一月四日 右衛門大尉大宿禰判

左中辨藤原朝臣判

按建武年間記にも雜訴決斷所見ゆ松屋外集二編二の卷を考合すべし鬮同十二ノ五丁

(十二)權守武家不任 二判問答詳書類從四百七に權守事於武家之所望者不可有勅許之由有其沙汰云々是又勝定院殿御代有其例爲其以後被停止云々以上二階堂判此條未觸耳凡儀可有何事哉以上派長公御答也

(十三)簡衆 二判問答詳書類從四百七に諸大夫并醫陰兩道侍等中號將軍家御簡衆者可奉行何様事哉普光園院御簡衆有之然者至大臣及幕下等可有件衆哉按已上は二階堂判官政行が問也○攝關大臣家宿中簡書家司名簡衆者若其事歟冬其勘建久二ノ十宮御佛名也以內藏人範高和簡衆令勤雜役之云々

(十四)記錄所 二判問答詳書類從四百七記錄所文殿條に記錄所被置禁中一有上卿弁開闔寄人等被行天下政務一所也自後三條院御代被始之至後光嚴院時分有其沙汰一歟文殿被置仙洞一歟冬其勘文殿執別當三道備以下等爲所衆書下知也見于文治二年玉葉記錄之類所後白河院保元元年十月廿一日始被置之依延久例也云々按大内裡考證廿九の卷に委し

(十五)若君姫君 二判問答後附に大臣子孫稱君事中右記曰元水内大臣殿渡給民部卿姫君許民部卿宗通者右大臣俊家公男也薩戒記曰元水若君被著圓座若君者花山院持忠公也持忠公父忠定右大將也祖父通定者右大臣也云々按二判問答は二階堂判官政行が問に後成恩寺禪閣の答たまひし也それに一條冬良公密勘を添られたり此後附も冬良公の勘考なるべし

(十六)内侍宣 西宮記正月補藏人事條に所別當公卿依召候御前數藏人置紙筆依仰書之某々爲藏人不顯本官書宣旨某々人々聽昇殿書了奏覽上卿退出下頭若藏人藏人下出納令書宣旨給宣旨左近衛頭藏人別云々應和二正七可補藏人某々等大臣仰頭以內侍宣下延長六正十九例云々同書部諸宣旨條に下檢非違使宣旨禁色雜袍帶劔

上卿下若摺衣排鞞一事赦免事上卿召聞亂殺害事或内侍宣旨宣旨是依六位藏人直地不可承也云々また凡下宣旨之時事理頗重者藏人必稱内侍宣云々同七卷雷鳴解陣事條に上卿若中障者以內侍宣行者云々同卷解陣事條に若上卿不候之時以內侍宣中將解之云々同書十卷諸司官人代事條に依神祇官解以內侍宣令仰下神祇官云々また交野檢校事條に以本司奏下給藏人召本所官人下之稱內侍宣云々○古事談卷一に入道殿賀茂祭見物棧敷間俄花山院亂事アリ以職事被仰可遣檢非使之由奏者申云上卿誰人哉仰云如此急速大事只稱内侍宣也云々



○禁秘抄下卷六 采女事條に節折藏人依ニ神祇官中ニ内侍宣也云々階梯下卷十四に御記應和元ノ藏人守仁奏神祇官申以ニ大中臣清子一令供ニ奉御節折藏人一同異子死闕文仰以ニ内侍宣仰ニ神祇官而今日不候仍令藏人以其宣傳仰之云々註卷下に内侍宣藏人頭より五位の職事に申て是より出るを云也頭書に内侍宣者上卿不奉勅藏人奉勅語直宣下スル也藏人謂内侍故也云云○職原抄下卷廿 非藏人條に藏人者頭以下非ニ上卿奉勅之宣所謂内侍宣也管領職事承仰召ニ仰出納一令告ニ其人一也云々按壺井義知が假名抄に上卿奉勅之宣トハ藏人ノ外ノ諸官ハ上卿奉勅外記ニ仰テ宣旨ヲ書シメ任ニ其官之人々ニ給ハル也上卿ハ陣ノ上卿ニシテ大中納言ノ人被勅之蓋藏人ハ上卿奉勅ノ宣ニアラズシテ内侍宣ト云フニテ補セラル其内侍宣ハ管領ノ職事トテ頭二人ノ中上首ノ人承仰仰ニ出納ニ出納又小舍人ニ仰テ小舍人其藏人ニ補スル人ニ令告ニ知之ヲ内侍宣ト云上卿大臣勅ルト大中納言勅ルニ少替リアリ云々○三内口訣一名三光院内府記又曰故實清談 女房奉書事條に是ハ内侍宣ノ准據候天子ノ御口ツカラノ仰ヲ内侍奉テ其旨ヲ傳ヘラレ候是ヲ内侍宣ト

申候以ニ此准據ニ諸事被ニ書出ニ候ヲ女房ノ奉書ト申候云々按内侍は藏人の唐名にて女官の内侍とは別也ダインシ漢音に訓べし○有職問答二卷六丁 出納事條に内侍宣とて使宣旨を申觸事此役の沙汰也云々按壺井義知が書入に本朝使宣旨ト内宣旨ト別也云々此書入いぶかし寫誤あるべし内侍宣は藏人の宣旨使宣旨は檢非違使の宣旨なれば使宣旨ト内侍宣トハ別也といふべき事也○同書三卷十八 藏人非ニ司た々宣旨にて參者也といへる條の答に内侍宣ニテ口ツカラ殿上ノ出納ニ仰候テ其人ニ告知ス也云々○官職難義群書類從本廿五丁右 内侍宣とは官位職を宣下するは外記史内記必それぞれにつきて知る也是は職事承りて上卿に下知して次第の宣下あり内侍宣と申は職事上卿へ申さずして直に藏人方にて出納小舍人など申者まで次第に下知し侍ると申候藏人頭五位藏人六位藏人以下藏人のぎ又昇殿をゆるゝ時は皆内侍宣也彼物語に源氏元服の時御前への召を内侍宣旨つたへて侍るやらん昇殿は内侍宣にておればかやうにかき侍る也云々○按源氏物語桐壺湖月抄廿 におまへより内侍宣旨承り傳へておとまわり給ふべきめしあればとあるは西宮記臨時部十

親王元服條に加冠依ニ召著ニ御前座内侍於御前召引入傳へて大臣を召なるよし職員令に見ゆこれを藏人の宣下の内侍宣とおもへるは誤也○與清曰内侍宣は藏人を補せらるゝ時管領職事とて藏人頭の上首が勅を奉りて藏人所出納におほせ出納また下役の小舍人に命せて其本人に告知するをいへる也又ふるくは典侍の傳宣にて六位藏人が直に奉行せし事もありと見ゆ内侍は藏人の唐名にて實は藏人宣なるを内侍宣といへば漢音に「ダイシセン」と訓べし女官の内侍を吳音に「ナイシ」といふにおもひまがふべからず然て藏人所の官人を補せらるゝにも限らず雷鳴陣の事交野檢校の事檢非違使が近所追捕の事五節舞妓師の事法中の事急速の事なども内侍宣にて命せられし例ありその外にも便宜によりて内侍宣を用らるゝ事ありしにや

(十八) 健兒は中間男小者 下學集家屋門に健兒所中間之所居也源平盛衰記に牛ゴテイなどもあり古くは健兒チカラヒトとよめり中間は三内口決四十七 中間法師著問集五ノ六十三丁古事談四ノ八丁 中間小者實石十九 花登三代記上卅九丁參天台記四ノ廿二丁 雜色ノ差別宗五大神子廿五丁中間

(十九) みそさい 俗に鶴鶴の事をミソサといへりサバイはサッキの通音にて此鳥溝中などに栖ゆる溝鶴鶴といへりと見ゆ下學集氣形門に鶴鶴小鳥也莊子鶴鶴巢林不過一枝云々此鳥栖溝三歲故日本呼溝三歲者是鶴鶴也○諸國獨吟集上四丁 元隣句に「羽づかひは自由自在なみぞさい」

(二十) 鯨 鯨にカイラギ又花カイラギなどいふあり下學集上十八 氣形門に鯨刀鞘用之日本俗所作也又云ニ海華皮也云々節用集にも見ゆ

(廿一) 勘當 下學集下卷二丁 熊鷹門に勘當爲ニ君父之所擯之義云々また不孝の注に日本俗以ニ不孝二字爲ニ勘當之義似無ニ其理一歎云々

(廿二) 不孝 又不孝者其子不隨ニ順父母之命也然日本俗以ニ不孝二字爲ニ勘當之義似無ニ其理一歎

(廿三) 折檻 下學集下卷二丁 熊鷹門に折檻セツカン



折檻諫人義也前漢朱雲請上方斬馬劍斷佞臣一人頭上問爲誰曰張禹上怒將雲下斬之雲攀檻折云云

(廿四) 連署 下學集下卷左 熊藝門に連署レンジヨ即連書之義也

(廿五) 放埒 下學集下卷四 熊藝門に放埒人不順法度如生馬放埒也

(廿六) 狼藉 下學集下卷四 熊藝門に狼藉人之狂亂如狼所藉草散亂也云々野客叢書十八 物性喻人條に狼之喻尤多云々言其不檢則曰狼藉云々

(廿七) 左禮 新猿樂記に「京童の虛左禮とみえ」下學集下卷四 熊藝門に左禮戲義云々

(廿八) 相伴 下學集下卷六 熊藝門に相伴對座也云云室町の代に相伴衆あり

(廿九) 豫參 下學集下卷六 熊藝門に豫參ヨサン列參之義云々

(卅) 不當 同六 熊藝門に不當フクウ云々

(卅一) 周章 同六 同門に周章一驚怖意也日本書狀愁傷者不知本說一說作悵云々

(卅二) 白狀 白狀ハ申狀也下學集下卷七 熊藝門に

白狀ハクシヤウ云々吾妻鏡六四十九丁 貞永式目二丁

(卅三) 支度 下學集下卷七 熊藝門に支度用意義也

(卅四) 箕裘之業 下學集下卷七 熊藝門に箕裘之業不墜父祖之舊業謂箕裘之業禮記良治之子必學爲裘良弓之子必學爲箕注補器者其金柔弱有似於爲裘撓角翰者其材宜調有似爲楊柳之箕也

(卅五) 下火 下學集下卷八 熊藝門に下火アコ二字共唐音也禪家葬禮之法事也火字或作炬字

(卅六) 屈請 下學集下卷八 熊藝門に屈請クツシヤク強招人也日本俗扇字作窟幡皆大誤也

(卅七) 士は己を知者の爲に死す 枕草紙春曙抄二卷十七 女はおのれをよろこぶものゝためにかほつくり士はおのれをしれる人のためにしぬといひたる云云史記刺客豫讓傳蒙求の豫讓吞炭の條などに見ゆ說苑六卷 復恩篇に管仲曰云々生我者鮑子也士爲知己者死而況爲之哀乎云々晏子春秋三上卷 雜上に越石父對之曰臣聞士者詘乎不知己而申乎知己云々魏志 王粲傳注琳瑯歌に士爲知己死女爲悅者一玩云々

(卅八) 習成性 晏子春秋三上卷十 雜上に嬰聞汨常移質習俗移性云々晋書五十二 虞溥傳の虞溥が移告に中人之性隨教而移善積則習與性成云々

(卅九) 納袈裟 下學集下卷九 絹布門に納袈裟納綴集義納衣亦同意納通作也

(四十) 練步遅練早遅練アラ練 五條大納言爲學抄拾芥記明應五正十六條に踏歌節會有之内弁二條内府練奉行職事頭左中弁宣秀朝臣少納言和長朝臣云々練歩の事遅練事早遅練の事作法故實に見ゆ

(四十一) 頭巾 下學集下卷十 絹布門に頭巾トキヤン或山臥頭服謂之頭巾也云々惠慧大師傳には杜嶽と書たり

(四十二) 篠懸 同書十 同門に篠懸スカケ云々謠本に旅の衣はすいかけやといへる詞安達原をはじめ多く見ゆ

(四十三) 南鏡 下學集下卷十二 器財門に南鏡爾雅云銀美者謂之鏡說文曰白金也鏡刀彫反也云々源平盛衰記十四卷 木下馬條に南鏡ト云馬ヲ賜タリケリ極テ白馬也ケレバ南鏡トハ呼ケリ云々

(四十四) 屏風 下學集下卷十三 器財門に屏風屏退也即退風之義也

(四十五) 鶴燈臺燭臺 同十三 同門に鶴燈臺燈臺也云

(四十六) 行器 同十三 同門に外居ホカ井或作行器也

(四十七) 御器引入合子 饒器饒州碗 同十三 庭訓往來五月九日狀 引入合子云々扶翼上 職人歌合にもあり合子は碗也ひきれ合子は組碗也

(四十八) 鷹秤 竹尺 今世の竹のものさしを鯨尺といへりされ竹にて製れば實は竹尺也下學集下卷十四 器財門に鷹秤鷹猛惡之鳥也生子在巢其子生長則有食親之義父畏之居去自巢一尺枝而養子故呼一尺量鷹秤云傳也云々按竹秤なるべきを借字に鷹秤と書るよりかゝる説は設しにや以呂波字類抄四卷太部に尺タカバカリ竹量也云々

(四十九) 泥鏡 下學集下卷十四 器財門に泥鏡コテ壁塗之具也



(五十)引板鳴子 下學集下十八  
 (五十一)蘆に雁の畫 同下十八  
 (五十二)宿紙薄墨の紙紙屋紙 同下十八  
 (五十三)乳木護摩木白膠木 同下十九又廿三  
 (五十四)竹篋 今俗にシツペイヲクラハセルなどいふシツペイハ竹篋の通音也下學集下卷十九 器財門に竹篋シツペイ打ノ杖也と見ゆ  
 (五十五)物相 今下人の食に物相をもて別與る事あり下學集下卷十九 器財門に物相モツサウ香飯分量之器也と見ゆ多門院日記一文  
 (五十六)欸冬山吹の説仙翁花 下學集下卷廿四  
 (五十七)鼈甲に菟の葉を覆へば爲龜 下學集下卷廿一 草木門に胡麻菟ゴマビユ候洞反菟與鼈不可合食 菟葉裹鼈甲以上覆之一夜變爲鼈也云々蛙を殺して車前子の葉に裹めば忽に蘇生する類也  
 (五十八)濃 同下廿四 彩色門に濃繪ダミエ云々  
 (五十九)穴賢 同下廿九  
 (六十)勿體なし 同下廿九  
 (六十一)如在不在 同下廿九  
 (六十二)傍若無人 同下廿九

(六十三)會下 同下廿三  
 (六十四)折角 同下廿一  
 (六十五)庭弱 下學集下卷廿一 ○以呂波字類抄三和部疊字門に庭弱ワウシヤク運歩色葉和部庭弱ワウシヤク又証著法華經又枉著云々節用和部言語門庭弱ワウシヤク徒然戀草七廿二古今著聞五五十五同十六十七  
 (六十六)分野 下學集下卷廿一 言辭門に分野アリサマ有様義也日本天台宗之讀習也  
 (六十七)難澁 同下廿三  
 (六十八)反問禹步 同下廿一  
 (六十九)堅議 同下廿五  
 (七十)公卿臺器 同下廿三  
 (七十一)笏手板 同下廿四  
 (七十二)殺類を降らす 同下廿二 ○百練抄四廿筆記九十三  
 (七十三)檜の木 同下廿三  
 (七十四)馬醉木 同下廿四 ○志田草子十四  
 (七十五)一夜松 同下廿四 釋書十八廿九  
 (七十六)二王 同下廿五 ○俗說辨四

(七十七)五山ノ寺院 同下廿七  
 (七十八)篠蟹 同下十九 ○釋日本記  
 (七十九)大音の人 佛に大音響流十方とあり吾妻鏡に足利又太郎が聲一里にきこゆ靜安法師が比良の山にて念佛の聲京都に聞え源平盛衰記十五八 寺法師法輪院荒土佐鏡鏡が聲卅六丁の外に聞ゆ  
 (八十)公界 公界とは表向といへる義也三内口決群書類從四百七に御所是は大臣家以上之家執某主人之故家僕等稱之候公界へ不出事候云々と見ゆ  
 (八十一)白板の天子 趙の劉聰晋の懷帝を執へ傳國璽を奪し後北方の人東晋を指て司馬家白板天子といへり本朝南山より神器歸らざる間は白板の天子といふべし制度通五卷を考へし  
 (八十二)扶持役料 制度通五卷廿四 俸祿條  
 (八十三)二千石井石高 制度通五廿七  
 (八十四)笏 同五六  
 (八十五)事力 同五廿二 俸祿條に事力ト云者ハカリキ者也太宰帥ニ二十人諸國ノ守ヨリ以外コレヲ給フシナアリ軍防令ニ見ユ政事要略五十九  
 (八十六)綱符 制度通九十七 意見十二事十五十六十八

(八十七)勝て冑の緒をしめる 俗言に勝て兜の緒を縮ろといへり説苑廿卷十 反質篇に傳曰周公位尊愈卑勝敵愈懼家富愈儉云々頭書甲九上  
 (八十八)仁山智水 仁山智水は論語を出處にて其委きゆるよしは説苑十七卷十七 雜言篇に見ゆ  
 (八十九)散官ノ唐ニオコル制度通四卷四 曹魏ニ始リ散官ノ唐ニオコル制度通四卷五  
 (九十)ありかす記數 歌にありかすとよめるは今いふカズトトリの事也名物六帖器財三醫ト算候部に記數カズトトリ僧祇律少年比丘不レ解ニ時事一日月黑白聽用ニ算子記數等一云々江次第などに算指あり頭書  
 (九十一)拍子木柝時の大鼓 名物六帖器財三十九 唐書百五十三三 擊柝術之同四 時鼓〇易廿三五 重門擊柝以待暴客  
 (九十二)京童 新猿樂記の類すべて世の評判する者を京童がしかくいへりなごいへり今世にては若い者といふほどの事也盛衰記十六卷廿一 遷都の條に此御所ヲバ童部ハ樓御所トゾ中ケルとあるは京童にも



かざらしたる童部とのみいへり  
(九十三)屋形 源平盛衰記廿二卷十七 大塲早馬立事  
條に上總介弘經云々屋形ニ歸テ云ヒケルハ此佐殿ハ  
一定日本ノ大將ニ成リ給フベシ云々會我物語に井手  
の屋形有

(九十四)定木粘板 裁板 名物六帖器財箋三卅丁 界  
枋ヤウキ同卅一 粘板ノリイタ裁板モノヲナイタ同 卅三 木  
尺キノヤウキヤ

(九十五)花瓶 同三卅二丁ウ

(九十六)錢幕 史記百廿三 大宛列傳安息國の條に以  
銀爲錢錢如王面王死輒更錢效王面焉云々  
注に索隱曰漢書云文獨爲王面幕爲夫人面荀悅云  
幕音漫無文面也張晏云錢之文面作人乘馬錢之幕  
作人面形韋昭云幕錢背也包愷音慢云々漢書九十六  
西域傳上鬲賓國條に以金銀爲錢文爲騎馬幕爲  
人面云々注に張晏曰錢文面作騎馬形漫面作人面  
目也如淳曰幕音漫師古曰幕即漫耳無勞借音今  
所呼幕皮者亦謂其平而無文也云々また烏弋山離  
國條に其錢獨文爲人頭幕爲騎馬云々また安息國  
條に亦以銀爲錢文獨爲王面幕爲夫人面王死輒

更錢錢云々大月氏國條にも民俗錢品字箋 佐諸第四十一  
幕又音漫錢背也今俗擲錢爲博戲以爲其陰爲幕安  
息國以銀爲錢錢如王面錢之幕爲夫人面漢西  
域傳鬲賓國錢文爲騎馬幕爲人面師古曰幕即慢也  
云々字彙に幕又莫半切音漫錢背也安息國以銀爲錢  
錢如其王面錢之幕爲夫人面云々五音集韻に幕又  
莫半切音漫平而無文曰幕前漢西域傳鬲賓國錢爲  
騎馬幕爲人面二註韋昭曰幕錢背也云々古今韻會舉  
要卅一の卷十に慢說文幕也从巾曼聲廣韻帷幔或作幕  
又背也前鬲賓國錢文幕爲人面云々 小和卅一の卷去聲  
與清按に幕幔通じて錢背をいふ共に翰去聲音漫也今  
俗これを奈女とよび擲錢博戲を奈女加多といへり奈  
女はなめらかにて文のなきよしの名平而無文曰幕  
説にかなへり加多は形也文字なごの形あればなるべ  
しまた今の寛永四文錢の背に波文あれば奈美を訛て  
奈女といふともすべけれどさにはあらず四文錢背の  
波は泉志の卷に太平百錢の圖を舉て云右水波紋錢顧  
烜曰太平四文錢背有波紋者三種並徑一寸重六銖  
文曰太平百錢大體類前條太平四文但製作微爲  
瓌壯而背有波紋耳今世往々有之莫知其始也

譜曰水波紋錢大篆小篆書三種云々三才圖會 珍寶部  
天下太平錢二品の圖を舉て云李孝美曰此二錢大小不  
等而文皆曰天下太平背文並隱起大者徑寸重六銖爲  
持挺人傍有躍龍之狀而平地作水文小者徑八分  
重五銖爲五男二女戲弄之象而平地作毬路文疑亦  
厭勝之流也云々などの説に据て作れる物なるべし錢  
面に水波あるは萬國錢也泉志の卷に萬國錢余按此錢  
徑寸六分重十三銖面文平地作水文一字類梵書不  
可識或云日字背文爲星官月兔雲鶴龜形慶善郎中  
守儀眞得之郡圃土中云々三才圖會 珍寶部 萬國  
錢此錢徑寸六分重十三銖面文平地作水文一字類  
梵書不可識或云日字背文爲星官月兔雲鶴龜形と  
見えたるこれ類聚名物考 調度部 錢の幔幕面文の條  
に常陸國郡名行方を引たれど同語別意也行方のナメ  
は行列の義を取てよめるにて駒なめてなごのため  
おなじ郡の名義は常陸風土記に見ゆ

(九十七)西洋人利瑪竇が輩 明史 三百廿六の卷列傳  
大里亞國の條に意大利亞居大西洋中自古不通  
中國萬曆時其國人利瑪竇至京師爲萬國全圖言  
天下有五大洲第一曰亞細亞洲中凡百餘國而中國

居其一第二曰歐羅巴洲中凡七十餘國而意大利亞  
居其一第三曰利未亞洲亦百餘國第四曰亞墨利  
加洲地更大以境土相連分爲南北二洲最後得墨  
瓦臘泥加洲爲第五而域中大地盡矣其說荒渺莫考  
然其國人充斥中土則其地固有之不可誣也大都  
歐羅巴諸國悉奉天主耶穌教而耶穌生於如德亞其  
國在亞細亞洲之中西行教於歐羅巴其始生在漢  
哀帝元壽二年庚申閏一千五百八十一年至萬曆九  
年利瑪竇始汎海九萬里抵廣州之香山澳其教遂  
沾染中土至二十九年入京師中官馬堂以其方  
物進獻自稱大西人禮部言會典止有西洋瑣里  
國無大西人其真僞不可知又寄居二十年方行進  
貢則與遠方幕義特來獻琛者不同且其所貢天主  
及天主母圖既屬不經而所攜又有神仙骨諸物夫  
既稱神仙自能飛昇安得有骨則唐韓愈所謂凶穢之  
餘不宜入宮禁者也況此等方物未經臣部譯驗  
徑行進獻則內臣混進之非與臣等溺職之罪俱有  
不容辭者及奉旨送部乃不赴部審譯而私寓  
僧舍臣等不知其何意但諸番朝貢例有回賜其使  
臣必有宴賞乞給賜冠帶還國勿潛居兩京與中



人交往往別生事端不報八月又言臣等議令利瑪竇還國候命五月未賜倫音母怪乎遠人之醫病而思歸也察其情詞懇切真有願向方錫予惟欲山棲野宿之意營之禽鹿久羈愈思長林豐草人情固然乞速為頒賜遣赴江西諸處聽其深山遠谷寄跡怡老亦不報已而帝嘉其遠來假館授祭給賜優厚公卿以下重其人咸與晉接瑪竇安之遂留居不去以三十八年四月卒於京賜葬西郭外其年十一月朔日食曆官推算多謬朝議將修改明年五官正周子愚言大西洋歸化人龐迪峨熊三拔等深明曆法其所撰曆書有中國載籍所未及者當令譯生以資採擇禮部侍郎翁正春等因請做洪武初設回曆科之例令迪我等同測驗從之自瑪竇入中國後其徒來益衆有王豐肅者居南京專以天主教惑衆士大夫暨里巷小民間為所誘禮部郎中徐如珂惡之其徒又自誇風土人物遠勝中華如珂乃召兩人授以筆筒令各書所記憶悉舛謬不相合乃倡議罷斥四十四年與侍郎沈淮給事中晏文輝等合疏斥其邪說惑衆且疑其為佛郎機假託乞急行驅逐禮科給事中余懋華亦言自利瑪竇東來而中國復有天主教之教乃

留都王豐肅陽瑪諾等煽惑群衆不下萬人朔望朝拜動以千計夫通番左道並有禁令公然夜聚曉散一如白蓮無為諸教且往來煤鏡與澳中諸番通謀而所司不為遣斥國家禁令安在帝納其言至十二月令豐肅及迪我等俱遣赴廣東聽還本國命下久之遷延不行所司亦不為督發四十六年四月迪我等奏臣與先臣利瑪竇等十餘人涉海九萬里觀光上國叨食大官十有七年近南北參劾議行屏仆竊念臣等焚修學道尊奉天主豈有邪謀敢墮惡業惟聖明垂憐候風便還國若寄居海嶼愈滋猜疑乞并南都諸處陪臣一體寬假不報乃快去而豐肅等尋變姓名復入南京行教如故朝士莫能察也其國善製礮視西洋更巨既傳入內地華人多效之而不能用天啓崇禎間東北用兵數召澳中人入都令將士學習其人亦為盡力崇禎時曆法益疏外禮部尚書徐光啓請令其徒羅雅谷湯若望等以其國新法相參較開局纂修報可久之書成即以崇禎元年戊辰為曆元名之曰崇禎曆書雖未頒行其法視大統曆為密識者有取焉其國人東來者大都聰明特達之士意專行教不求祿利其所著書多華人所

未道故一時好異者咸尚之而士大夫如徐光啓李之藻輩首好其說且為潤色其文詞故其教驟興時著聲中土者更有龍華民畢方濟艾如略鄧玉函諸人華民方濟如略及熊三拔皆意大里亞國人玉函熱而瑪尼國人龐迪峨依西把尼亞國人陽瑪諾波而都瓦爾國人皆歐羅巴洲之國也其所言風俗物產多夸且有職方外紀諸書在不具述以上全文按同書廿五卷天文志一萬曆中西洋人利瑪竇制渾儀地球地球等器仁和李之藻撰渾天儀說發明製造施用之法文多不載云々廿一曆志一萬曆三十八年監推十一月壬寅朔日食分秒及曆圓之候職方郎范守已疏駁其誤禮官因請博求知曆學者令與監官晝夜推測庶幾曆法靡差於是五官正周子愚言大西洋歸化遠臣龐迪峨熊三拔等攜有彼國曆法多中國典籍所未備者乞視洪武中譯西域曆法一例取知曆儒臣率同監官將諸書盡譯以補典籍之缺先是大西洋人利瑪竇進貢土物而迪峨三拔及龍華民鄧玉函湯若望等先後至俱精究天文曆法禮部因奏精通曆法如雲路守已為時所推請改授京卿共理曆事翰林院檢討徐光啓南京工部員外郎李之藻亦皆精心曆理可與迪峨三拔等同

譯西洋法俾雲路等參訂修改然曆法疎密莫顯於交食欲議修曆必重測驗乞敕所司修治儀器以便從事疏入留中未幾雲路之藻皆召至京參預曆事雲路據其所學之藻則以西法為宗云々又二百五十一の卷徐光啓傳以徐光啓字子先上海人萬曆二十五年舉鄉試第一又七年成進士由庶吉士歷贊善從西洋人利瑪竇學天文曆算火器盡其術云々崇禎元年云々光啓言臺官測候本郭守敬元時嘗當食不食守敬且爾無怪臺官之失占臣聞曆久必差宜及時修正帝從其言詔西洋人龍華民鄧玉函羅雅谷等推算曆法光啓為監督云々廿見〇廿二史劄記廿四天主教の條に意大理亞國在大西洋中萬曆中其國人利瑪竇至京師為萬國全圖言天下有大洲五第一曰亞細亞洲凡七十餘國而中國居其一第二曰歐羅巴洲凡七十餘國而意大利居其一第三曰利未亞洲亦百餘國第四曰亞墨利加洲第五曰墨瓦蠟泥洲而域中大地盡矣大抵歐羅巴諸國悉奉天主教天主耶穌生於如德亞即古大秦國也其在亞細亞洲之中西行教于歐羅巴其始生在漢哀帝元壽二年庚申閏一千五百八十一年至萬曆九



年利瑪竇始泛海九萬里抵廣州之香山澳其教漸行二十九年入京師以方物獻并貢天主及天主母圖禮部以會典不載大西洋名目駁之帝嘉其遠來假館授餐公卿以下重其人咸與交利瑪竇安之遂留居不去三十八年卒其年以曆官推算日食多謬五官正周子愚言大西洋人龐迪俄熊三拔等深明曆法其書有中國所不及者當令採擇遂令迪俄等同測驗自利瑪竇來後其徒來者益衆有王豐肅陽瑪諾等居南京以其教倡行官民多從之禮部郎中徐如珂惡之奏議逐回四十六年迪我等奏臣與利瑪竇等泛海九萬里觀光上國臣等焚修行道尊奉天主豈有邪謀敢墮惡業乞賜寬假帝亦不報而居中國如故崇禎時曆法益舛禮部尙書徐光啓請令其徒羅雅谷湯若望等以其國新法相參較書成即以崇禎元年戊辰爲曆元其法視大統曆爲審焉其國人東來者大都聰明特達之士等專行教不求利所著書多華人所未道故一時好異者咸尙之其徒又有龍華民畢方濟艾如略鄧玉函諸人皆歐羅巴國之人也統而論之天下大教四孔教佛教回教天主教也皆生于亞細亞洲而佛教最廣亞細亞洲內如前後藏準噶爾喀爾

喀蒙古等部悉奉佛教中國亦佛教盛行亞細亞洲外如西洋之古里國錫蘭國榜葛刺國沼納朴兒國南洋之白葛達國占城國寶童龍國暹羅國真臘國東洋之日本國琉球國皆奉佛教俱見前史又僧迦刺國馬八兒國俱有佛鉢舍利見元史亦其餘海外諸番則皆奉天主教矣回教亞細亞洲內惟烏什葉爾羌喀什噶爾和闐郭爾巴達克山塔爾喀爾米爾退木爾沙等國奉之見前史外洋則祖法兒國阿丹國忽魯謨斯諸國奉之亦見前史孔教僅中國之地南至交趾東至琉球日本朝鮮而已是佛敎所及最廣天主教次之孔教回教又次之孔子集大成立人極凡三綱五常之道無不該備乃其教反不如佛敎天主教所及之廣蓋精者惟中州清淑之區始能行習粗者則殊俗異性皆得而範之故教之所被允遠也試觀古帝王所制禮樂刑政亦只就倫常大端導之禁之至于儒者所言身心性命之學原不以概責之庸衆然則天道之包舉無遺固在人々共見之粗迹而不必深求也哉按趙翼劄記の説大概明史におなじくそれに四大教の事をそへたる也清人張潮が昭代叢書廿七に泰西の利類思安文思南懷仁が西方要記を收てその卷首の張潮が小引に夫泰西之說誠

勝于諸教惜乎以天主爲言則其辭不雅訓流于荒誕指紳先生難言之苟能置而不談則去吾儒不遠矣ともいへり○拾遺卷四仙幻部利瑪竇傳に利瑪竇大西國人遊於中華十五年矣衣服語言飲食禮樂無不中華但不娶耳彼國無佛亦不通儒教第奉天主爲尊其像是一婦人手中所抱者即天主也婦人像若西王母而繪彩之色絢爛非常望若七寶莊嚴者然既以其像進聖母張壁瀛々便救收藏於庫其所進自鳴琴自鳴鐘皆按刻漏而鳴若吾中華有自鳴更鼓之屬天子甚異之賜資無數日給殮錢因養之京師瑪竇他所製自鳴鼓吹未進上者尤奇一撥關振衆樂皆鳴今京師市中有製成出賣者所携經籍皆梵字其印裝之巧紙筆之精中華所不及也瑪竇慧性絕倫雖數萬億言一覽而得人謂其胸有成案故能然據云學識字如造屋然疑即吾儒以一貫萬之義矣往嘗刻廣輿地圖於金陵用五色以別五方中華幅員大如彈丸黑子庚戌年夏中疫臥病服參而死始知其無他道術是外夷中一異人也按拾遺十六卷明吳會士人錢希言が撰にて萬曆四十一年癸丑冬の自序あり○谷響續集六の卷廿七丁右に客問前集有西僧喇瑪竇名携

自鳴鐘來者爲釋氏不答不然耶蘇會者也謝氏雜組云西南海外諸蕃有天主國更在佛國之西其人通文理儒雅與中國無別有喇瑪竇者自其國來經佛國而東四年方至廣東界其教宗奉天主亦猶儒之孔子釋之釋迦也其書有天主實義往々與儒教互相發而於佛老一切虛無若空之說皆深詆之是亦逃楊之類耳喇瑪竇嘗言彼佛敎者竊吾天主之教而加以輪廻報應之說以惑世者也吾教一無所事只是欲人爲善而已善則登天堂惡則墮地獄永無懺度永無輪廻亦不須而壁苦行離人出家日用所行莫非修善也余甚喜其說爲近於儒而勸世較爲親切不似釋氏動以恍惚支離之語愚駭庸俗也其天主像乃一女身形狀甚異若古所稱人首龍身者與人言恂々有禮詞辨扣之不竭異域中亦可謂有入也已後竟卒於京師其徒曰龐迪俄○謝翁記喇瑪竇之爲人詳則詳矣然亦足見此翁識見之短於佛敎也按前集有西僧喇瑪竇名とは谷響集一の卷九丁自鳴鐘の條を指す谷響集は沙門蓮傲の隨筆にて前編續編二集ありこゝに五雜俎の文を引たれど今流布の印本には耶蘇の事を憚て除たり五雜俎二



の卷<sub>丁左</sub>五の卷<sub>丁右</sub>五などに喇瑪寶自鳴鐘の事ある而  
 巳○羅山文集五十六の卷排耶蘇文に慶長丙午六月十  
 有五日道春及信澄依<sub>カクシ</sub>頌遊<sub>カクシ</sub>价<sub>カクシ</sub>不<sub>カクシ</sub>意到<sub>カクシ</sub>耶蘇會者不  
 于氏許<sub>カクシ</sub>不<sub>カクシ</sub>于<sub>カクシ</sub>令<sub>カクシ</sub>守長<sub>カクシ</sub>侍者<sub>カクシ</sub>招<sub>カクシ</sub>三<sub>カクシ</sub>人<sub>カクシ</sub>入<sub>カクシ</sub>室<sub>カクシ</sub>彼徒滿<sub>カクシ</sub>席坐  
 定寒温已而後春問云々春問曰利瑪竇<sub>カクシ</sub>耶蘇<sub>カクシ</sub>天地鬼神及  
 人靈魂有<sub>カクシ</sub>始無<sub>カクシ</sub>終吾不<sub>カクシ</sub>信焉有<sub>カクシ</sub>始則有<sub>カクシ</sub>終無<sub>カクシ</sub>始無<sub>カクシ</sub>  
 終可也<sub>カクシ</sub>有<sub>カクシ</sub>始無<sub>カクシ</sub>終不可也<sub>カクシ</sub>然又殊有<sub>カクシ</sub>可<sub>カクシ</sub>證者<sub>カクシ</sub>乎<sub>カクシ</sub>于不  
 能<sub>カクシ</sub>答<sub>カクシ</sub>云々

(九十八)鼠祠 源平盛衰記十の卷<sub>七丁</sub>頼家祈<sub>カクシ</sub>出王  
 子<sub>カクシ</sub>事條に白川院御位ノ時(后腹ノ皇子波セ給ハザリ  
 ケレバ主上御心ナク思召貴僧ト聞召ケレバ三井寺ノ  
 實相房ノ頼家阿闍梨ヲ召シテ汝皇子ヲ祈出シテナヤ  
 効驗アラバ勸賞ハ乞ニヨルベシト被<sub>カクシ</sub>仰<sub>カクシ</sub>含<sub>カクシ</sub>云々月滿  
 御坐シテ承保元年十二月十六日最安ラカニ皇子御誕  
 生アリ主上斜ナラズ御威有テ頼家ヲ召テ効驗神妙々々  
 勸賞何事ヲカ可<sub>カクシ</sub>申請<sub>カクシ</sub>ト御氣色アリ頼家ハ園城寺  
 ニ戒壇ヲ立寺門年來ノ遂<sub>カクシ</sub>本意<sub>カクシ</sub>トゾ奏シケル云々種  
 種申上ケレ共遂ニ御許ナカリケレバ頼家大惡心ヲ起  
 シ眼ノ色替リ今ハ思死ントテ雙眼ヨリ涙ヲハラ<sub>カクシ</sub>  
 トコボシ御前ヲ立様ニ頼家思死ニ死失ナバ皇子ハ我

進タル物ナレバ即可<sub>カクシ</sub>奉<sub>カクシ</sub>取返<sub>カクシ</sub>トテ三井寺へ罷歸ル  
 云々主上ユ、シク歎思召レケレバ當時ノ關白太政大  
 臣師實卿御痛敷思ヒ進テ暫ク頼家ガ怨ヲ被<sub>カクシ</sub>宥<sub>カクシ</sub>程戒  
 壇ヲ可<sub>カクシ</sub>被<sub>カクシ</sub>許<sub>カクシ</sub>歟ト被<sub>カクシ</sub>申<sub>カクシ</sub>ケレバ<sub>カクシ</sub>寂慮<sub>カクシ</sub>モ思<sub>カクシ</sub>食<sub>カクシ</sub>煩<sub>カクシ</sub>セ給<sub>カクシ</sub>ケ  
 ルニ御夢想アリ云々又<sub>カクシ</sub>十一<sub>カクシ</sub>良真<sub>カクシ</sub>祈<sub>カクシ</sub>出<sub>カクシ</sub>王子<sub>カクシ</sub>事條に西  
 京座主大僧正良真其時ハ四融坊ノ大僧都ニテ「山門  
 ニハ無<sub>カクシ</sub>止<sub>カクシ</sub>事<sub>カクシ</sub>貴人<sub>カクシ</sub>ニテ御坐ケルヲ被<sub>カクシ</sub>召<sub>カクシ</sub>山門ノ寂信  
 不<sub>カクシ</sub>淺<sub>カクシ</sub>衆徒ノ憤兼テ依<sub>カクシ</sub>思<sub>カクシ</sub>召<sub>カクシ</sub>而寺門ノ戒壇ヲ免サレ  
 ヌ故頼家成<sub>カクシ</sub>怨<sub>カクシ</sub>奉<sub>カクシ</sub>失<sub>カクシ</sub>皇子<sub>カクシ</sub>早ク山門ニ繼體ノ君ヲ祈  
 出シ奉<sub>カクシ</sub>ナヤト被<sub>カクシ</sub>仰<sub>カクシ</sub>下<sub>カクシ</sub>ケリ僧都被<sub>カクシ</sub>申<sub>カクシ</sub>ケレハ云々  
 本山ニ還上テ山王三聖王子眷屬滿山三寶護法聖衆ニ  
 被<sub>カクシ</sub>祈<sub>カクシ</sub>申<sub>カクシ</sub>シカバ中宮賢子承曆二年ノ冬ノ比ヨリタ  
 ナラヌ御事也ケルガ同三年七月九日皇子御誕生ア  
 リ云々堀河院ト申ハ是也云々又<sub>カクシ</sub>十二<sub>カクシ</sub>頼家成<sub>カクシ</sub>鼠<sub>カクシ</sub>事條  
 に頼家ハカラキ骨ヲ碎テ「皇子ヲバ祈出シ進セタル  
 ドモ戒壇ハ御免ナシ大惡心ヲ起<sub>カクシ</sub>早死<sub>カクシ</sub>シケルゾ無<sub>カクシ</sub>慙  
 ナル去程ニ山門又皇子ヲ奉<sub>カクシ</sub>祈<sub>カクシ</sub>出<sub>カクシ</sub>御位ニ即セ給タリ  
 ケレバ頼家ガ死靈モイト<sub>カクシ</sub>成<sub>カクシ</sub>怨<sub>カクシ</sub>靈<sub>カクシ</sub>山門ト云處ガア  
 レバコソ我ガ寺ニ戒壇ヲバ免サレテサレバ山門ノ佛  
 法ヲ亡サント思テ大鼠ト成谷々坊々充滿テ聖教ヲゾ

カブリ食ケル是ハ頼家ガ怨靈也トテ上下是彼ニテ打  
 殺踏殺ケレ共彌鼠多出來テ夥<sub>カクシ</sub>ナンドハ云計ナシ此事  
 只事ニ非ズ可<sub>カクシ</sub>宥<sub>カクシ</sub>怨<sub>カクシ</sub>靈<sub>カクシ</sub>トテ鼠ノ寶倉ヲ造テ神ト奉  
 レ祝サテコソ鼠モ鎮ケレ圓宗ノ教ヲ學ノ可<sub>カクシ</sub>成佛<sub>カクシ</sub>頼  
 家ガ由ナキ戒壇ダテユヘニ鼠トナルコソヲカシケ  
 レ云々長門本平家物語六の卷に后腹の皇子はもとも  
 あらまほし事なり白河院御在位の時云々「さて頼家  
 は山門のさへにてこそ我宿願は遂ざりしかとて大  
 なる鼠となりて山の聖教をくひける間この鼠を神と  
 いはふべしとせんぎありければ社を作りて祝ひて後  
 かの鼠静りにけり」東坂本にねずみのほこらとて當  
 時あるは則是也今も山には大なる鼠をばらいがうと  
 ぞ申ける頼家ゆゑなきまうしふに引れて多年の行ご  
 ふをすて畜趣の報をぞかんじけるかなしかりける事  
 なりつゝしむべし云々太平記十五の卷園城寺戒  
 壇事條に白河院ノ御宇ニ江師匡房ノ兄ニ三井寺ノ頼  
 家僧都トテ「貴キ人有ケルヲ云々其後頼家ガ亡靈忽  
 ニ鐵ノ牙石ノ身ナル八萬四千ノ鼠ト成テ比叡山ニ登  
 リ佛像經卷ヲ嚼破ケル間是ヲ防ニ無<sub>カクシ</sub>術<sub>カクシ</sub>シテ頼家ヲ  
 一社ノ神ニ崇メテ其怨念ヲ鎮ム」鼠ノ禿倉是ナリ云

云西域記十二の卷<sub>十八</sub>瞿薩且那國の條に王城西百五  
 六十里大沙磧正路中有<sub>カクシ</sub>堆阜<sub>カクシ</sub>並<sub>カクシ</sub>鼠<sub>カクシ</sub>墳<sub>カクシ</sub>也(聞<sub>カクシ</sub>之<sub>カクシ</sub>土  
 俗<sub>カクシ</sub>曰<sub>カクシ</sub>此沙磧中鼠大如<sub>カクシ</sub>蟬<sub>カクシ</sub>其毛則金銀異<sub>カクシ</sub>色<sub>カクシ</sub>爲<sub>カクシ</sub>其群<sub>カクシ</sub>之  
 首長<sub>カクシ</sub>每出<sub>カクシ</sub>穴遊<sub>カクシ</sub>止<sub>カクシ</sub>則群鼠爲<sub>カクシ</sub>從<sub>カクシ</sub>昔者<sub>カクシ</sub>匈奴率<sub>カクシ</sub>數十萬衆<sub>カクシ</sub>  
 寇<sub>カクシ</sub>掠<sub>カクシ</sub>邊城<sub>カクシ</sub>至<sub>カクシ</sub>鼠<sub>カクシ</sub>墳<sub>カクシ</sub>側<sub>カクシ</sub>屯<sub>カクシ</sub>軍<sub>カクシ</sub>時<sub>カクシ</sub>瞿薩且那王<sub>カクシ</sub>率<sub>カクシ</sub>數萬  
 兵<sub>カクシ</sub>恐<sub>カクシ</sub>力<sub>カクシ</sub>不<sub>カクシ</sub>敵<sub>カクシ</sub>素知<sub>カクシ</sub>磧中鼠<sub>カクシ</sub>奇<sub>カクシ</sub>而<sub>カクシ</sub>未<sub>カクシ</sub>神也<sub>カクシ</sub>泊<sub>カクシ</sub>乎<sub>カクシ</sub>寇<sub>カクシ</sub>至<sub>カクシ</sub>  
 無<sub>カクシ</sub>所<sub>カクシ</sub>求<sub>カクシ</sub>救<sub>カクシ</sub>君<sub>カクシ</sub>臣<sub>カクシ</sub>震<sub>カクシ</sub>恐<sub>カクシ</sub>莫<sub>カクシ</sub>知<sub>カクシ</sub>國<sub>カクシ</sub>計<sub>カクシ</sub>苟<sub>カクシ</sub>復<sub>カクシ</sub>設<sub>カクシ</sub>祭<sub>カクシ</sub>焚<sub>カクシ</sub>香<sub>カクシ</sub>請  
 鼠<sub>カクシ</sub>冀<sub>カクシ</sub>其<sub>カクシ</sub>有<sub>カクシ</sub>靈<sub>カクシ</sub>少<sub>カクシ</sub>加<sub>カクシ</sub>軍<sub>カクシ</sub>力<sub>カクシ</sub>其<sub>カクシ</sub>夜<sub>カクシ</sub>瞿薩且那王<sub>カクシ</sub>夢<sub>カクシ</sub>見<sub>カクシ</sub>大鼠<sub>カクシ</sub>曰  
 敬<sub>カクシ</sub>欲<sub>カクシ</sub>相<sub>カクシ</sub>助<sub>カクシ</sub>願<sub>カクシ</sub>早<sub>カクシ</sub>治<sub>カクシ</sub>兵<sub>カクシ</sub>且<sub>カクシ</sub>日<sub>カクシ</sub>合<sub>カクシ</sub>戰<sub>カクシ</sub>必<sub>カクシ</sub>當<sub>カクシ</sub>克<sub>カクシ</sub>勝<sub>カクシ</sub>瞿薩且那王  
 知<sub>カクシ</sub>有<sub>カクシ</sub>靈<sub>カクシ</sub>祐<sub>カクシ</sub>遂<sub>カクシ</sub>整<sub>カクシ</sub>戎<sub>カクシ</sub>馬<sub>カクシ</sub>甲<sub>カクシ</sub>令<sub>カクシ</sub>將<sub>カクシ</sub>士<sub>カクシ</sub>未<sub>カクシ</sub>明<sub>カクシ</sub>而<sub>カクシ</sub>行<sub>カクシ</sub>長<sub>カクシ</sub>驅<sub>カクシ</sub>掩  
 襲<sub>カクシ</sub>匈奴<sub>カクシ</sub>聞<sub>カクシ</sub>之<sub>カクシ</sub>而<sub>カクシ</sub>莫<sub>カクシ</sub>不<sub>カクシ</sub>懼<sub>カクシ</sub>焉<sub>カクシ</sub>方<sub>カクシ</sub>欲<sub>カクシ</sub>駕<sub>カクシ</sub>乘<sub>カクシ</sub>被<sub>カクシ</sub>鎧<sub>カクシ</sub>而<sub>カクシ</sub>諸<sub>カクシ</sub>馬<sub>カクシ</sub>鞍<sub>カクシ</sub>人  
 服<sub>カクシ</sub>弓<sub>カクシ</sub>弦<sub>カクシ</sub>甲<sub>カクシ</sub>縫<sub>カクシ</sub>凡<sub>カクシ</sub>厥<sub>カクシ</sub>帶<sub>カクシ</sub>糸<sub>カクシ</sub>鼠<sub>カクシ</sub>皆<sub>カクシ</sub>嚼<sub>カクシ</sub>斷<sub>カクシ</sub>兵<sub>カクシ</sub>寇<sub>カクシ</sub>既<sub>カクシ</sub>臨<sub>カクシ</sub>而<sub>カクシ</sub>縛<sub>カクシ</sub>受<sub>カクシ</sub>戮<sub>カクシ</sub>於<sub>カクシ</sub>  
 是<sub>カクシ</sub>殺<sub>カクシ</sub>其<sub>カクシ</sub>壯<sub>カクシ</sub>虜<sub>カクシ</sub>其<sub>カクシ</sub>兵<sub>カクシ</sub>匈奴<sub>カクシ</sub>震<sub>カクシ</sub>懾<sub>カクシ</sub>以<sub>カクシ</sub>爲<sub>カクシ</sub>神<sub>カクシ</sub>靈<sub>カクシ</sub>所<sub>カクシ</sub>祐<sub>カクシ</sub>也<sub>カクシ</sub>瞿薩且  
 那王<sub>カクシ</sub>感<sub>カクシ</sub>鼠<sub>カクシ</sub>厚<sub>カクシ</sub>恩<sub>カクシ</sub>建<sub>カクシ</sub>祠<sub>カクシ</sub>設<sub>カクシ</sub>祭<sub>カクシ</sub>奕<sub>カクシ</sub>世<sub>カクシ</sub>尊<sub>カクシ</sub>敬<sub>カクシ</sub>特<sub>カクシ</sub>深<sub>カクシ</sub>珍<sub>カクシ</sub>異<sub>カクシ</sub>故<sub>カクシ</sub>上  
 自<sub>カクシ</sub>君<sub>カクシ</sub>王<sub>カクシ</sub>下<sub>カクシ</sub>至<sub>カクシ</sub>黎<sub>カクシ</sub>庶<sub>カクシ</sub>咸<sub>カクシ</sub>修<sub>カクシ</sub>禮<sub>カクシ</sub>祭<sub>カクシ</sub>以<sub>カクシ</sub>求<sub>カクシ</sub>福<sub>カクシ</sub>祐<sub>カクシ</sub>行<sub>カクシ</sub>次<sub>カクシ</sub>其  
 穴<sub>カクシ</sub>下<sub>カクシ</sub>乘<sub>カクシ</sub>而<sub>カクシ</sub>趨<sub>カクシ</sub>拜<sub>カクシ</sub>以<sub>カクシ</sub>致<sub>カクシ</sub>敬<sub>カクシ</sub>祭<sub>カクシ</sub>以<sub>カクシ</sub>祈<sub>カクシ</sub>福<sub>カクシ</sub>或<sub>カクシ</sub>衣<sub>カクシ</sub>服<sub>カクシ</sub>弓<sub>カクシ</sub>矢<sub>カクシ</sub>或<sub>カクシ</sub>香<sub>カクシ</sub>華  
 肴<sub>カクシ</sub>膳<sub>カクシ</sub>亦<sub>カクシ</sub>既<sub>カクシ</sub>輸<sub>カクシ</sub>誠<sub>カクシ</sub>多<sub>カクシ</sub>蒙<sub>カクシ</sub>福<sub>カクシ</sub>利<sub>カクシ</sub>若<sub>カクシ</sub>無<sub>カクシ</sub>享<sub>カクシ</sub>祭<sub>カクシ</sub>則<sub>カクシ</sub>逢<sub>カクシ</sub>災<sub>カクシ</sub>變<sub>カクシ</sub>云  
 云按<sub>カクシ</sub>に鼠<sub>カクシ</sub>の<sub>カクシ</sub>ため<sub>カクシ</sub>に祠<sub>カクシ</sub>を<sub>カクシ</sub>建<sub>カクシ</sub>たる<sub>カクシ</sub>は<sub>カクシ</sub>本<sub>カクシ</sub>朝<sub>カクシ</sub>西<sub>カクシ</sub>域<sub>カクシ</sub>同<sub>カクシ</sub>日<sub>カクシ</sub>の<sub>カクシ</sub>談<sub>カクシ</sub>な  
 れど<sub>カクシ</sub>その<sub>カクシ</sub>事實<sub>カクシ</sub>を<sub>カクシ</sub>論<sub>カクシ</sub>ず<sub>カクシ</sub>れば<sub>カクシ</sub>天<sub>カクシ</sub>地<sub>カクシ</sub>懸<sub>カクシ</sub>隔<sub>カクシ</sub>せ<sub>カクシ</sub>り<sub>カクシ</sub>また<sub>カクシ</sub>鼠<sub>カクシ</sub>の<sub>カクシ</sub>弓<sub>カクシ</sub>弦<sub>カクシ</sub>  
 を<sub>カクシ</sub>齧<sub>カクシ</sub>斷<sub>カクシ</sub>たる<sub>カクシ</sub>は<sub>カクシ</sub>吾<sub>カクシ</sub>妻<sub>カクシ</sub>鏡<sub>カクシ</sub>一<sub>カクシ</sub>の<sub>カクシ</sub>卷<sub>カクシ</sub>右<sub>カクシ</sub>に<sub>カクシ</sub>俟<sub>カクシ</sub>野<sub>カクシ</sub>五<sub>カクシ</sub>郎<sub>カクシ</sub>景<sub>カクシ</sub>久<sub>カクシ</sub>相<sub>カクシ</sub>具



駿河國目代橋邊茂軍勢<sup>二</sup>爲<sup>レ</sup>襲<sup>二</sup>武田一條等源氏<sup>一</sup>赴<sup>二</sup>甲斐國<sup>一</sup>而昨日及<sup>二</sup>昏黑<sup>一</sup>之間宿<sup>二</sup>富士北麓<sup>一</sup>之處景久并郎從所<sup>レ</sup>帶百餘張弓弦爲<sup>レ</sup>鼠被<sup>二</sup>冷切<sup>一</sup>畢とあるにおなじ<sup>〇</sup>舊本今昔物語六の卷不空三藏誦<sup>二</sup>仁王咒<sup>一</sup>現<sup>レ</sup>驗語第九

(九十九)木石 撰集抄<sup>七</sup>の伊勢のあまの條に人は木石にあらざればこのめは發心するに侍り云々舊本今昔物語廿六の卷陸奥國府官大夫介子語第五に木石心ヲ發シテ馬ニ鞍置テ曳將來ツ云々源平盛衰記卅四の卷木曾内裏守護の條に木曾モ流石木石ナラチバ理ト思テ云々長門本平家物語八の卷山門心變條實語教の翻案に師にあふといへどもおそれず弟子に逢といへどもはぢず師君には孝なし木石にことならず云々漢書<sup>六十二</sup>の卷<sup>六十二</sup>司馬遷傳報<sup>二</sup>任安<sup>一</sup>書に身非<sup>二</sup>木石<sup>一</sup>獨與<sup>二</sup>法吏<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>伍云々文選<sup>六</sup>臣注<sup>四</sup>にも此文を載たり晉書夏統傳に此吳兒是木人石心也云々遊仙窟<sup>廿四</sup>右<sup>二</sup>卷<sup>一</sup>に心非<sup>二</sup>木石<sup>一</sup>豈忘<sup>二</sup>深恩<sup>一</sup>云々白氏長慶集<sup>〇</sup>漢書傳<sup>十二</sup>右<sup>二</sup>卷<sup>一</sup>贊に周昌木強人也注に顔師古曰言其強質如<sup>二</sup>木石<sup>一</sup>然云々<sup>〇</sup>文選鮑昭行路難に心非<sup>二</sup>木石<sup>一</sup>豈無<sup>レ</sup>感<sup>〇</sup>長門本平家物語四卷<sup>卅七</sup>康賴二首歌條にいはんや大政入

道も木石にあらざればいかでか此歌をあはれと思はざるべき云々<sup>源氏蜻蛉十八丁</sup>東屋には木ならねは<sup>おもしろし</sup>や思ひけん<sup>伊物にいば木にしあらねは</sup>  
(百)武藏鎧 源平盛衰記廿一卷<sup>十七</sup>小坪合戦條に畠山重忠云々泥草毛ノ馬ニ中ハ金覆輪耳ハ白覆輪ノ鞍ヲ置燃立ツバカリノ厚總ノ鞆カケ武藏鎧ニ重藤ノ真中取テ歩セ出ツ云々<sup>〇</sup>庭訓往來<sup>〇</sup>伊勢物語

松屋筆記卷之九十二

(一)押領使 源平盛衰記廿三卷<sup>七</sup>丁貞盛將門合戦條に藤原秀郷ハ從四位下ニ叙シテ武藏下野兩國ノ押領使ヲ給リ云々同卅六卷<sup>二</sup>丁<sup>一</sup>一谷城構條に出雲國ニハ福田押領使云々同卅九卷<sup>八</sup>丁<sup>一</sup>重衡請<sup>二</sup>法然房<sup>一</sup>條に此法然上人ト申ハ本美作國久米南條稻岡庄ノ人也父ハ押領使染氏母ハ秦氏云々<sup>源平盛衰記廿三卷</sup>元慶<sup>二</sup>二十<sup>一</sup>條<sup>實石</sup>朝野群載<sup>廿三</sup>雜言集<sup>二</sup>引<sup>一</sup>四宮記<sup>臨時</sup>廿<sup>二</sup>丁<sup>一</sup>扶桑略記<sup>廿</sup>二<sup>三</sup>丁<sup>一</sup>一冊<sup>一</sup>丁<sup>ウ</sup>貞丈雜記<sup>四</sup>香妻鏡<sup>六</sup>四十九<sup>丁</sup>又五十三<sup>丁</sup>東寺文書抄<sup>三</sup>廿三<sup>丁</sup>ウ

シテ守護スル義也<sup>源平盛衰記廿三卷</sup>七<sup>丁</sup>貞盛將門合戦條に藤原秀郷ハ從四位下ニ叙シテ武藏下野兩國ノ押領使ヲ給リ云々同卅六卷<sup>二</sup>丁<sup>一</sup>一谷城構條に出雲國ニハ福田押領使云々同卅九卷<sup>八</sup>丁<sup>一</sup>重衡請<sup>二</sup>法然房<sup>一</sup>條に此法然上人ト申ハ本美作國久米南條稻岡庄ノ人也父ハ押領使染氏母ハ秦氏云々<sup>源平盛衰記廿三卷</sup>元慶<sup>二</sup>二十<sup>一</sup>條<sup>實石</sup>朝野群載<sup>廿三</sup>雜言集<sup>二</sup>引<sup>一</sup>四宮記<sup>臨時</sup>廿<sup>二</sup>丁<sup>一</sup>扶桑略記<sup>廿</sup>二<sup>三</sup>丁<sup>一</sup>一冊<sup>一</sup>丁<sup>ウ</sup>貞丈雜記<sup>四</sup>香妻鏡<sup>六</sup>四十九<sup>丁</sup>又五十三<sup>丁</sup>東寺文書抄<sup>三</sup>廿三<sup>丁</sup>ウ



れど歌意は全く同じされど桐壺になくてぞといふが肝要の所に引たれば此歌とは別にてぞあるらん又蜘蛛のいに荒たる駒は云々の歌は跡云草虫部蜘蛛條による人しらすくものいにあれたる駒はつなくとも二道かくる人はたのまし「藻蘆草」卷十二 獸部馬條にあれたる駒「くものいに荒たるこまはつなくとも」といへりあれたるは荒き也云々築嶋草子に「春の野にぬしも見えざるはなれ駒くものいにてもつなきとめはや」蜘蛛のいは蜘蛛の糸にて万葉集五 貧窮問答歌には許之伎爾波久毛能須可伎豆とよめり源順集天地の歌冬に「いつこともいさやしら波立ぬればしたなる草にかけるくものい」これは初終に「い」もじを置てよみたるなれば蜘蛛乃伊と書べき證也また賀茂保憲女集群書類本二七四卷 丁右冬に「なみならはよも山ことにふきかへす蜘蛛のいほりそいかしつらん」和泉式部集二 群書類本二七四卷に「軒はたに見えすすかけけるわかやとは蜘蛛のいたくそあれはてにける」などあるもあかしとすべし又「さゝかにのいかに」後拾遺集二「さゝかにのいかに」和泉式部「さゝかにのいかに」後拾遺集四などよみかけたるも見ゆ此外蜘蛛のいかに蜘蛛のいとすぢなどよ

める歌は曾根好忠集齋宮女御集小大君集赤染衛門集後撰集拾遺集後拾遺集金葉集次郎百首夫木抄四 秋一同の類をはじめ所見枚擧すべくもなし二道かくるは狭衣四上卷四十五 狭衣大將歌に「ひとかたになりなはさてもやむへきをなと二道に思ひなやます」増基法師が庵主群書類本三十三 卷五十一丁左に「君は思ふ都はこひし人しれすふた道かけてなけくころかな」源氏物語若菜下卷湖月抄本 五十丁左にいとよくふたすぢに心づかひはしたまひけれどもとも見ゆ同夕貌五十二 源氏歌に「過にしもけふわかるゝも二道に行かたしらぬ秋のくれかな」孟津抄に齋宮女御集に「過にしも今行するも二道になへて別れのなき世なりせば」此歌同心也物語歌古歌に相似たる例多し之或又古歌をとりていまよみたるやうにかける事も有伊勢物語などにも見えたり云

(六) いくぢなし 承久物語上卷廿 右に知康といふいくぢなしが云々今俗にもいふ詞也「イキヂガアル」「イキヂガナイ」「イヂガアル」「イヂガナイ」などいふも同詞にや

(七) ふくら 同書上卷廿 丁左にふくらといふ詞あり真中

の義にいへり今俗も「ドウブクラ」などいふめり

(八) きら きらをみかくと云詞盛衰記に見ゆ承久物語上十八 に時のきら後のおぼえゆゝしかりけるありさま也頭書 甲陽四ノ

(九) 大物射追物射 承久物語中四十六 に大物射とあり大なる物を射るにはおほかたにねらひて射ればそれになすらへてねらはずして放つを大物射といふ也盛衰記には追物射と書たり

(十) 御事尊 尊は御事の義也承久物語下十五 に御事を誅し奉るべきよし云々太平記廿九廿九 同卅三卅七 今昔十六卷十八語に尊二十九卷三語に尊同卷九語に尊同卷卅五語に尊達廿卷八語に此尊は同卷卅六語に尊ハ物故コソ知タリケル云々また抑尊可成キ官物其員有リ云々廿五卷三語に三處廿八卷卅語鳥帽子折六丁 元服會我七丁 空穂菊宴上五丁 に昔おほん事を思ひそめ云々おほん事は御事也御主などいふ同じ義也御僧の御も同じ

(十一) 似せ繪 承久物語下廿二 園大曆十二 下九 小世繼十丁

(十二) 番匠 同下廿六 丁ウ

(十三) 手具足 同下廿七 丁ガ

(十四) 小間物見世 清水物語上十五 にこま物見せとてたな一ツに色々さまゝの物を取あつめておき人の用次第にうるものゝ候云々

(十五) 牛は牛づれ 清水物語上十八 甲陽軍鑑三 三丁

(十六) 寂山の不實柿下總相馬郡辛嶋野の花不咲桔梗 元亨釋書五卷六丁 釋皇慶傳に登寂山近山下有柿樹一絶不結子俗名其地曰不實柿云々下總相馬郡將門の舊跡にがうしう原といふ野あり辛島を訛てカウシウとはよぶ也その道をガウシウ街道といふそこは將門の妾桔梗といへる女の怨によりて桔梗生れども花さかずといへり頭書 ミナラズ柿今昔十九ノ三今昔廿八ノ四十語 五條ノ天神ニモ有宇治拾遺二ノ卅四丁ガ

(十七) 雉子焼豆腐 雉焼豆腐は豆腐を廣二寸四方許厚五六分許に切て焼きそれを薄醬油にて味をつけ茶漬茶碗やうのものに盛てその上より燗酒をつぎいれて呑をいふこは禁中又は宮の御所などにて正月の佳例也一献に一ツもりて酒をつぎ二献には二ツ三献には三ツだんぐに豆腐をもり上て酒をもる也豆腐は食事なし宗鑑が新撰犬筑波集廿六 女房私記四丁 御齒



固の御祝の條に二献きじやき云々又十二物の呼名を記せる條にきじやきとは豆腐に鹽付やく也云々

(十八)火柱 火柱法華驗記下卷丁ウ 立山地獄原奥有火柱云々

(十九)地獄と云地名 法華驗記下卷丁ウ 越中立山有地獄原有二百千出湯云々また帝釋地獄云々又四十三 立山地獄云々義堂空華集五卷丁ウ

(廿)六十万人と云遊行の札 運歩色葉集路部に六十万人決定往生六字名號一返法十界依止一返休万行離念一返證人中上々妙□花取此四句之頭也

(廿一)初卯初子中子弟子 同集葉部に八幡御歌云衣更著也初卯ノ神樂面白也今人モキ子モアケンマデセヨ云々今世正月の初卯に江戸人妙見詣せり初子の事は散木集に見ゆ中の子後拾遺 弟子 空磯彌婆初子中子弟子ノ

(廿二)今木 以呂波字類抄雜物門に今木イマキ御湯殿時著衣名也

(廿三)稻城稻機 以呂波字類抄伊部雜に稻機イナキ懸稻木也云々類聚三代格ニモ見ユ稻城も稻をめぐりにかけて城のさまにかこへるにや

(廿四)隱相を造て神前に懸 源平盛衰記七卷丁ウ 笠

鳥道祖神事條に奥州名取郡笠嶋ノ道祖神ニ被蹴殺ニケリ實方馬ニ乗ナガラ彼道祖神ノ前ヲ通ラントシケルニ人諫テ云ケルハ此神ハ効驗無雙ノ靈神賞罰分明也下馬ノ再拜ノ過給ヘト云實方問テ云何ナル神ゾト答ヘケルハコレハ都ノ賀茂ノ河原ノ西一條ノ北ノ邊ニオハスル出雲路ノ道祖神ノ女也ケルヲイツキカシヅキテヨキ夫ニ合セントシケルヲ商人ニ嫁テ勘當セラレテ此國へ被追下給ヘリケルヲ國人是ヲ崇敬テ神事再拜ス上下男女所願アル時ハ隱相ヲ造テ神前ニ懸莊リテ奉テ是ヲ祈申ニ叶ハズト云コトナシ云々觀迹聞老志五三才剛會七十二本卷丁ウ和歌名所追考山城三丁ウ會我物語二十九 今川貞世道行振四丁和歌名所追考陸奥百六

(廿五)八草 春七草秋七草は人の知所也運歩色葉集波部に八草あり菖蒲蓬胡麻蘘蓂羊負木結柄芥子荷葉又者荷葉枸杞菖蒲白木芍藥石菖車前草云々

(廿六)坂の人宿り峠の人宿 源平盛衰記卅六卷丁ウ熊谷向ニ大手一條に小峠坂ノ人宿リニ人アマタ音シケリ忍聞ケレバ平山ト成田ト也云々今の峠坂に休處とて搦たる所あり相摸筑井縣の三増峠にては「ヤスン

ド」とよべり  
(廿七)名簿 源平盛衰記卅三卷丁左 康定關東下向條に色代仕リテ康定事更ニ名簿ヲシテ可進ナレドモ今度ハ宣旨ノ御使トシテ私ナラズ候ヘバ追テ申ベシ舍弟ニテ侍ル史ノ大夫重良モ同心ニ申シカバ定テ左様ニコソ侍ランズラメト色代仕リシカバ當時頼朝ガ身トシテ爭名簿ヲバ給ルベキサナシトテモ努々オホシノ儀アルベカラズトユ、シゲニコソ被返答候シカ云々比叡山護國緣起下卷其書法見ゆ體源抄三末卷丁同四丁ウ同十末丁廿七舊本今昔廿四ノ十六語に偏ニ御弟子ニテ候ハント云テ忽ニ名符ヲ書テナン取セタリケル云々

ニイヘリ體源抄十二上丁八大頸四尺三寸袖三尺四寸云々女房私記一丁 御とのゝふさの付所の條に兩の袖口下かた兩のえりさき兩の御おくびつまさき以上六所云々  
(卅)成功の人年給 成功の人といふは除目の時の給にたまはる者をいふ年給也盛衰記廿五卷丁十二  
(卅一)笛をエウヂヤウと云事 笛をエウヂヤウといふ事義經記七八丁廿四丁ウ廿廿北國落の條に見ゆ盛衰記廿五丁廿七體源抄五丁三笛の條續教訓抄十一丁四丁ウ  
(卅二)俵藤太秀郷 俵藤太秀郷は龍宮より米俵を得たる故の名のよしものにいひたれど源平盛衰記廿七卷九丁 秀衡系圖條に下野國住人俵藤太秀郷とあり下野に田原といふ地名ありてそこに住たるゆゑの稱號なるべし田原ハタハラ俵ハタワラにて假名違たれど通音なるべし  
(卅三)すべし髪すべし髪 女の髪をすべし髪とすべし髪とすべし髪ともいふは背後に垂るゝをいふ髪はよほろばかりなご物にいへるこれ也海東諸國記國俗部に婦人披其眉而黛其額背垂其髮而結之カミヲシ其長曳地とあるは女の眉毛を剃て額にホウク眉



をつくりすべらしの髪にせし體也結之の結は續の誤寫にやあらん按に異稱日本傳下四卷八丁に引たるには續之に作れり女の容飾の事庭の訓乳母草子など考合すべし

(卅四)傾城 遊女を傾城といふ事庭訓往來に見ゆ海東諸國記國俗部に富人取女子之無歸者給衣食容飾之號爲傾城引過客留宿饋酒食而收其錢故行者不齋糧と見ゆ百練抄十四丁に舊傾城云云

(卅五)かふる 俗語に笠をかふる頭巾をかふるなどいふはかふるの略也源平盛衰記四十四卷十二癩人法師口説言の條に辱ノ名カクニ爪ツビズ勘當カブルニ齒カケズとあり此かふるは物をくらふ事にいへり中國邊の人物を食をカブルと今もいへり○盛衰記四十五卷廿丁重衡向南都被切條に香ノ鼻ヲカカヘテカブリ居タル犬アリ立廻リ後戸ヲ見レバ首モナキ死人ウツブシニ臥タリ犬二三疋ソバニテ評之居タリ云々俗にカジルト云ニ同

(卅六)荒ミサキ 源平盛衰記四十三卷五丁住吉嶺の條に仲哀天皇の后神功皇后御宇新羅ノ西戎我國ヲ背

ク由聞エケレバ皇后可責異賊旨天照大神ニ被中謹無懈トテ二人ノ荒ミサキヲ差副給ヘリ云々二人荒ミサキ艦舳ニ立テ守リ奉シカバ云云五丁二人ノ荒ミサキ一人ハ攝津國住吉郡ニ留給フ今ノ住吉大明神是也巨海ノ浪ニ交テハ水畜ヲ利益シ禁闕ノ窓ニ臨テハ玉體ヲ守護セリ云々一人ハ信濃國諏訪郡ニ跡ヲ垂ル即諏訪明神是也云々按に荒御魂和御魂の荒にて武といはんがごとしミサキは御先鋒の義なるべし荒御魂和御魂は武魂文魂の義にて其神の武き時は武魂和げる時は文魂なるをいふ

(卅七)杉形 俗に杉形といへる詞あり倭を杉形に積などの類也源平盛衰記三十五卷十八東使戰木曾段に木曾十餘騎馬ノ鼻ヲ引返シ杉ノサキニサト立テ宣ケルハ云々此杉の先といへるは兵士を杉形に立テ其真先に義仲が颯と立出たる貌也

(卅八)影迹 源平盛衰記卅六卷廿三鷲尾一谷案内者條にサテ其下ニハ落堀ヒシナド植タリヤト問バ去事承ラズ御影迹候ヘカシ馬モ人モ通ルベキ所ナラテバ爭其用意侍ルベキト答云々三にては推量といふ義に影迹の字を用たり南齋書廿三左王儉傳に夫移心

疾於股肱非良醫之美畏影迹而馳驚豈靜處之方と見えて影と迹とを見て畏る義の字面也色葉字類抄八幾部學字門に流迹キヤウジヤク云々節用集下幾部言辭門に流迹キヤウジヤク云々

(卅九)遊藝の席にて實藝を施すこと 南齋書廿三傳第四王儉傳に上曲宴群臣數人各々使効伎藝八丁左淵彈琵琶王僧虔彈琴沈文季歌子夜張敬兒舞王敬則拍張儉曰臣無所解唯知誦書因跪上前誦相如封禪書上笑曰此盛德之事吾何以堪之云々

(四十)ぬくめ鳥 運歩色葉集奴部に温鳥スクメトリ鷹取生鳥寒夜握之暖足翌日放之其方不取鳥報恩也云々陸佃埤雅八卷釋鳥鴉條に冬撮鳥之盈握者一夜以煖其爪掌左右易之且即縱之令去其往東矣則是日也不東嚮搏物南北亦然蓋其義性有擒有縱如此李益鴉賦所謂營全鳩以自暖乃詰朝而見釋是也云々抑文に有鴉曰鴉者穴於長安薦福浮圖冬日之夕必取鳥之盈握者完而致之以煖其爪掌左右而易之且則執而上浮圖之殿焉縱之延其首以望極其所行往必背而去焉荷東則是日不東逐云々三才圖會鳥獸部一卷鴉條に舊言鴉有義性

冬撮鳥之盈握者一夜以煖其爪左右易之且即縱之令去其往東矣則是日不東嚮搏物南北亦然蓋其義性有擒有縱如此云々張九齡應鸛圖序に鸛擊鳩鴿及小鳥以煖足且則縱之此鳥東行則不東往擊物西南北亦然此天性義也云々後京極殿鷹三百首各部に「鷹のとるこふしの内のぬくめ鳥氷る爪根のなまけををしる」

(四十一)親には一日に三度笑て見せよ 日蓮録外書九卷十九本門取要抄に三世ノ諸佛ノ世ニ出サセ給モ皆々四恩ヲ報ゼヨト説キ三皇五帝孔子老子顔回等ノ古ノ賢人ハ四得ヲ修セヨト也四得者一ニハ父母ニ孝アルベシ二ニハ主ニ忠アルベシ三ニハ友ニ合テ禮アルベシ四ニハ劣レルニ逢テ慈悲アレト也一ニ父母ニ孝アルトハタトヒ親ハモノニ覺エズトモ惡サマナル事ヲ云トモイサカモ腹モ立ズ誤ル顔ヲ見セズ親ノ云事ニ一分モ違ヘズ親ニヨキ物ヲ與ヘント思テセメテタルナクバ一日ニ三度エミテ向ヘト也二ニ主ニ合テ忠アルベシトハイサカモ主ニウシロメタナキ心アルベカラズタトヒ我身ハ失ハルトモ主ニハカマハテヨカレト思ベシカクレテノ信アレバアラハレテノ



得也ト云々以下

(四十二)鳩に三枝の禮 日蓮録外書四卷十九新池書に傳教大師ノ御釋ニ云川瀬祭魚ノコ、ロザシ林鳥父祖ノ食ヲ通ズ鳩三枝ノ禮アリ行雁連ヲ亂ラズ羔羊踞テ飲乳賤キ畜生スラ禮ヲ知ルコト如是何ゾ人倫ニ於テ其禮ナカラシヤトアソバサレタリ取云々見

(四十三)伸針絹張 絹布の類に皺シワなからしむる具に「しんし」「きぬばり」といふ物あり「しんし」は竹を細く削りそれにつめを付て絹布の横幅を伸すために張申をいふ絹張は木にて丸き棒を絹布の幅に合せて作りそれを段匹の兩端に附て縦タテ様に引張る具也日蓮録外書三卷十四八大地獄書に大熱鐵ノ山ニノボラシメ其口ノ中ヨリ其舌を拔出シテ百千ノ鐵針ヲ以テコレヲ張皺シワナカラシムルコト牛ノ皮ヲ張ガ如シ云々とある鐵針は「しんし」の事也「しんし」は伸針と書べししんしと云べきを省て「しんし」とはいへる也

(四十四)細男ほそをこ 細男はセイノヲと呼べり齋男の義歟又は細はクハシと訓て細馬などにおなじくよろしき男といふ義歟春日祭の時の細男は「セイ

ノヲ」と呼よし也その圖ものに見えたれば考べし後院下四十九  
(四十五)丸木船 丸木を二ツに割り中をほりくぼめて造りたる船今も木曾川の棧の邊より上手に川向の一ツ屋へ通ふ渡舟ありまた蝦夷人が船の圖東遊雜記に見ゆ天保九戌年閏四月ばかり尾張國海東郡諸桑村の田ノ中よりほり出し舟長拾三間貳尺餘ありて割木をほりくぼめたる船也といへり

(四十六)春日猿祭の體の土器 春日社猿祭の時直相殿にて上卿辨二人に神體を給ふ事あり其一夜酒の土器は直曲尺六寸五分許にて少も窪なく圓丸き土器也厚さは二三分許に見ゆ

(四十七)奈良田樂井四座の猿樂 南都の田樂は本座新座とてあり本座は法師也新座は總髮也因に云猿樂四座の内觀世は公儀の御用にて奈良をば離れたり今春は奈良が本家にて江戸は出張也金剛保昌は江戸にありても奈良の薪の能には必出勤する事也猿樂の長といふ者一人ありて能の事を指揮すといへりこは神樂の人長などの類なるべし圖圖長田樂トナラベ出セリ

(四十八)北條義時が供人數 日蓮録内書卅九卷卅一四條金吾書に圓教房ノ來テ候シガ申セシハ江馬殿御出仕ニ御供ノ侍ニ二十四五人也云々按に鎌倉比の質素なる風おもひやるべし

(四十九)京童鎌倉童部 新猿樂記に京童の空ソウサレ左禮とあり盛衰記平家物語やうの書どもに物の評判するに京童がしかくいふとことおほく見ゆ日蓮録内書卅九卷卅一四條金吾書にアハレ男ヤ男ト鎌倉童部ノ辻ニテ申アヒテ候ナリとも見ゆ京童部今昔十九ノ四十四遠七九丁ッ

(五十)喉もと過れば熱さ忘るゝ 俗に喉もと過れば熱さ忘るゝといへり日蓮録外書十一卷十二諸宗問答抄に世俗者ノ譬ニ喉過ヌレバアツサワスレ病愈ヌレバ醫師ヲワスルト云ラン譬少モ不レ違相似タリ云々

(五十一)犬と猿 長門本平家物語八卷四丁猿眼赤鬚男條にさるまなこの赤ひげのさうにはよらざりけりといひあひければ誠にかなしげなる貌をもちあげて申けるはまさる犬まなこにあひぬればかなはぬぞかしと申けるぞをかしかりける云々宇治拾遺物語十卷十一吾婦人止ニ生贄ニ語にかゝるほどにとしご山に

つかひならはしたる犬のいみじきなにかしこきをふたつえりてそれにいきたる猿丸をどられて明くれやくくゝとくひころさせてならはすにさらぬだに猿丸と犬とはかたきなるにいとかうのみならはせば猿を見てはをざりかゝりてくひころす事かぎりなし云云舊本今昔物語廿六卷美作國神依猿師謀止ニ生贄語に年來飼付タル犬山ノ犬ヲ二ツ撰リ勝リテ汝ヨ我ニ代レト云ヒ聞セテ勲ニ飼ケルニ山ヨリ密ニ猿ヲ乍レ生捕ヘ持來テ人モ無所ニテ役ト犬ニ教ヘテ噉セ習ハス本ヨリ犬ト猿トハ中不レ言者ヲ然カ教ヘ習ハスレバ猿ガニ見レバ數懸テハ噉致ス云々

(五十二)額窓 長門本平家十卷四十五伊豆國目代兼隆被レ討條に内へせめ入て見れば額窓の前に火おこし燈火しろくかきたてたり云々  
(五十三)一昔 同十卷四十九石橋合戰事條に三浦介義明云々申けるは昔は三十三年をもて一昔としき今は廿一年をもて一昔とす廿一年過ぬれば淵は瀬になり云々額窓元服會我草  
(五十四)てんとくじ紙袋 今世紙のふとんを「テントクジ」といへり江戸西窪天徳寺前にてひさぎたる



ゆるの名也節用集加部食服門に紙衾カミフスマとある物これ也

(五十五)六指十六六指指我利擲石 今世六指また十六六指などいふは運歩色葉集牟部に六指ムサシと見ゆ六方かけて指ゆるの名なるべしさがりは和名抄四卷五 雜藝類部に八道行成内典云拍毬擲石投壘牽道八道行成一切戲笑悉不観作八道行成説と見えて八指駒の義なるべし六指も六指駒にて其方を驅駒の心カシゴにや擲石は石なごりともいふ歌物語の書に所見おほし○新撰犬筑波集雜に「むさしを指てとんでこそゆけ」辨慶がつぶりも蜂やおぢさらん」守武千句廿七「むさしをさすと見ゆる也けり」守武千句廿七何力第七に「波すさまじく何を取けん」川原とはいへどいしなごなきものを」節用集伊部言語門投石イシナドリ云々擲石イシナゴ云々和漢三才圖會十

(五十六)上總雪の浦九十九里 長門本平家物語十一卷一丁に常胤三千餘騎の軍兵を率して雪の浦に參會し則兵衛佐殿を相具して下總の府に入奉てもてなしまいらせけり云々曾我物語一丁廿八人々君へ參りて兄弟を乞申さるゝ事條に石橋山のかつせんに打まけて

只七騎になりて楢山を出てゆきのうらにつきすでにじがい及し時云々按雪の浦四國の阿波にも有よし盛衰記廿九長門本平家一丁などに見ゆ太平記九丁には阿波の雪湊と云浦と有頼朝卿の落付給ひし雪浦は今の九十九里にて「シラサト」といふよし十九は百の字の一を省ば白なれば九十九を「シラ」とよむとなんさて雪浦とは濱の沙の白きゆるの名白里といふはた同義也とぞ

(五十七)板橋といふ地名 今の板橋宿はもと瀧野川の板橋ありけるより所の名となれる也長門本平家物語十一卷三丁に武藏國豊豊の上瀧の川の板橋といふ所に陣を取と有盛衰記亦同板橋の宿中を流るゝが王子の瀧野川の川上也

(五十八)中坊小者 奇異雜談集一卷四丁廿に御坊ただ中方小者一人ばかりにて御出あり云々中方は中間法師の事を中坊といへる也貴賤の中間の義也眞丈雜記四

(五十九)地獄の沙汰も錢次第 俗に地獄の沙汰も金次第といへり新撰犬筑波集雜部に「きけばたゞ地獄のさたも錢なれや」「立山りやうをしゆごぞをさむ

る」○後太平記四十一丁廿五難波船軍條に地獄ノ沙汰モ極樂モ皆是錢ノ態カ云々

(六十)鮒の子給 今京近江邊に鮒給に子をあゆる事有舊本今昔十五卷四に鮒ノ子給と見ゆこれ也節用集古部食服門に子交コアへとあるは鮒給などの子付給の事也爾雅鰯ノ腹ノ中ニコナマスフエコモチナリヒツニイレテ納ラレタリ云々子給ヲ通ス也よし也フエとヒエハ通音也

(六十一)よしばみは俗に見えはうと云に同じ 砂石集三丁二にヨシバミテ物モクハズとあり俗言に見えはうとも又はいろけを作るなどいふに同じ

(六十二)平文 江家次第一卷九丁 四方拜事條に或書云書司立平文高机二脚云々一條禪閣抄一卷四方拜に平文高机謂平文者以白藤彫唐花也云々江次第考亦此説を引注せり按永仁御即位記十八に平文師あり紀河原猿樂記五丁にヒヤウ紋二重織物の上下あり花御所行幸記五丁にひやうもの直垂ありまた平文鞍平文車平文野劔平文鉢黒漆平文厨子などの類木器にも布帛にも平文の名ありてそは箔文の事也金銀箔を文様にしたるはみな平文也「ハク」を「ヒヤウ」と云は拍子を「ヒヤウシ」といふにおなじこれを金貝の類を平に文様

にしたる也とも又狂文にて文様を狂ハセ塗こめたるにてとぎ出し塗也ともいへる説いづれも叶はず○江家次第二卷四十二 七日節會裝束條に立左近衛次將胡床注に以黃布豹文覆之云々○扶桑略記廿四丁延長七年三月條に「平文經櫃及平文華机あり」○公方様正月御事始記十一に平文の事色をつくして染たるを平文と申候御禁制にて候只二色を以ていろえ候事可然候也○御供古實十七にひやうもの事素襖袴何にても候へ三色にて候へばひやうものにて候云々尙委しく見ゆ爾雅鰯ノ腹ノ中ニコナマスフエコモチナリヒツニイレテ納ラレタリ云々子給ヲ通ス也よし也フエとヒエハ通音也

(六十三)師子身中の虫 砂石集三卷廿二に師子死テ他獸オソルレド身中ノ虫ニ喰ハル云々下學集下八丁(六十四)入麩 今世にふめんといふは索麵を醬油の鹽梅汁にて煮それに加天を加へたる也此名目節用集仁部食服門に入麩ニフメンと見ゆ

(六十五)手傀儡テクノバウ 傀儡子記をはじめ古書に見えたる傀儡が今のごとく人形を舞す事をさくきこえず節用集天部人倫門に傀儡テクバウとあるは手してわさすめれば人形仕の事とおぼゆ手猿樂などの類なるべし○テクノ坊ト云モ手クバウ坊ニヤ恩地



左近太郎開書には出狂房と有

(六十六) 急々如律令 急々如律令の事拾芥抄に見ゆ  
節用集幾部言辭門にくはし

(六十七) 小兒の前髪すししろ 節用集寸部支體門に  
鬢スッショ小兒之前殘髪也云々和名抄三毛髮類部に  
文字集略云鬢須々之鬢 小兒剪髮所餘也

(六十八) 庚申日鐵漿を著事を忌 俗に庚申の日鐵漿  
を染事を忌といふは誤也庚辛の干に當れる日に忌也  
箒篋内傳二庚辛條に庚辛金神本地彌陀大威德夜叉西  
方妙觀察智精魂肺臟大腸腑魂迹成金銀銅鐵輪之故  
此日不<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>六畜不<sub>レ</sub>買<sub>レ</sub>眷屬不<sub>レ</sub>賣<sub>レ</sub>刀不<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>兵具  
不<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>經緯不<sub>レ</sub>裁<sub>レ</sub>衣裳不<sub>レ</sub>造<sub>レ</sub>酒不<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>藥不<sub>レ</sub>致<sub>レ</sub>針  
灸不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>濕不<sub>レ</sub>出行不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>陣不<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>養子不<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>折  
檻とあり不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>濕を冠注本二卷六には不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>金に作  
れり其説云群忌云庚日出<sub>レ</sub>金錢一則家不<sub>レ</sub>祥又云辛日上  
棟則大凶又云庚辛日作<sub>レ</sub>車同乘始則主人不<sub>レ</sub>吉或作<sub>レ</sub>濕  
職韻呼得切水名也私云女中所<sub>レ</sub>用可<sub>レ</sub>齒黒水一歟と見  
ゆ

(六十九) 師子舞 義堂空華集一十九庭訓往來年中行  
事畫職人歌合文獻通考砂石集五十一鳥帽折草子下六丁

宇治拾遺古事談五八丁に師子頭同六三丁に祇園師子  
頭體源抄一丁太平記卅廿四

(七十) ほしいたう 鳥帽折草子下卷十六に山伏は十人  
にあつまつて候こんや一夜のほしいたうたへやつとよ  
はつて内のけごをしづかに見てとほる云々按ホイ  
タウは陪堂と書く禪家僧職の名にて飯米を司る僧の  
事也されば米の事をホイタウといへる也頭體源二ノ七丁  
云句にほしいたうの僧はよ川へ行戻り

(七十一) 針の耳 俗に針めどといふは和田酒盛草子  
に人の子の種をおろすはかりごとは上梵天よりも糸  
をおろし下大海の底なる針の耳をとほすよりもうけ  
がたくて云々那須與一扇的草子五丁に針をさげて  
はみずを射かうがい立てはまちを射る云々

(七十二) 車座 和田酒盛草子に義盛をはじめさらも  
長者一門九十三騎車座にはらりと居なけれ云々

(七十三) 懸命の地一所懸命の地一生懸命 十番切草  
子にたとへばおほち伊藤こそ謀逆人にて候とも名に  
あるものゝ子孫をいかでかたやしはてんと二人が中  
に一人をもめし出され申けんめいのかたはしをも安  
堵をなし給はらばたとへ祐經うちたくともおもひこ

らへて本領になぐさみても過ぬべし云々又二の宮の  
むこはよになきこじうとにくみし一所懸命失はじと  
よも申さじと存じしらすることも候はず云々 頭體源  
日記七ノ十丁太平記十一ノ三丁又十四丁又廿丁同廿三ノ廿  
五丁同廿六ノ廿四丁 大開記八ノ十二丁 北條五代記三ノ  
廿二丁同四ノ十八丁同八ノ十三丁 古事談一巻六條修理大夫  
顯季卿與<sub>レ</sub>刑部丞義光<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>論所領一條に彼は只一所懸命之由限<sub>レ</sub>食  
之云

(七十四) せんの綱かねの緒 十番切草子に神の前に  
てみしめなは佛の前にてせんのつなの經のひもいひつ  
べし云々秘密眞言觀行要覽十一に線索の事見ゆ可<sub>レ</sub>考  
合<sub>レ</sub>○築島草子にかん崎にきこえたる釋迦堂のかね  
の緒にむすびてたべと書とめておくに一首の歌を云

云○古事談三丁に良辨僧正重行者ニテ草庵ヲ結テ  
土ニテ造タル執金剛神ノ像ヲ安置シテ其本尊ノ足ニ  
付<sub>レ</sub>綱ヲ毎<sub>レ</sub>禮拜ニ引動テ云々 頭體源今昔十五ノ十二語同卷四  
十  
(七十五) 「ラシヤウ」「マイス」「バウズ」「ボンサマ」  
出家をいやしめてラシヤウといふは御僧とも心得べ  
けれごさにあちず和僧の義也和は和法師和御前和御  
料和先生など古書に所見おほくて吾の義也人を指て  
「オレ」とも「オノレ」とも「ワ」とも「ワレ」ともいふ詞

古くいへり賣僧は賣師の義也不徳の身に徳ありが  
ほに佛法を賣法師をいふ「バウズ」坊主也尊て平僧を  
も坊主といふより移りてすべて頭に毛なき者をバウ  
ズといへる也ボンサマといふも坊主様といふを略し  
て坊様といひさて轉じて「ばんさま」とはいへる也  
(七十六) もじといふをそふる詞 女房詞に某もじと  
いふ事おほかり莖をくもじ御推察を御するもじそな  
たをそもじ御氣の毒を御きもじなどいふ類枚擧すべ  
からず鉢かづき草子に今日の御客もじにてましませ  
ばとあり

(七十七) 私と云詞 俗に自身の事を「わたくし」とも  
略て「わたし」とも「わし」とも説て「ワツチ」ともいへ  
り猿源氏草子にわたくし不慮にこひといふやまひに  
おかされてと有

(七十八) 和泉式部編をくひし歌 和泉式部が「ひの  
もとにいはいはれ給ふいはし水まゐらぬ人はあらしと  
そ思ふ」といふ歌のゆゑよし猿源氏草子に見ゆ

(七十九) 木葉猿 次郎百首部雜猿歌に皇后宮女房常陸  
「あし引の山へにあそぶ木のは猿思ふ心そありてな  
くなる」貞徳肝要抄下卷十六丁左に祇注云木の葉猿さ



わがしきをいふ也むかし或神悪日に旅立ちて山にてあしをくじきて足を引給ひしより申さへり足引とも書又悪日忌とも書と云々以上祇公の御注なれば見る人信すべけれども是等は歌道の秘するゆゑにつかひ太刀とてあらぬ説を書おかれける也云々按宗祇の説捧腹にたへぬ愚説なり貞徳その道の祖なれば補助していひまぎらはせる也○丹後守爲忠家百首部雜梢猿歌に爲忠「この山に木のみりはむ木のは猿梢こつたふ聲きこゆなり」加賀守藤原顯廣「あきはて嵐にたへぬ木の葉猿梢を傳ふこゑのみぞする」○拾玉集一卷卅雜廿首中慈鎮和尚「しはくりの色つく秋の山風に梢をちらぬ木のは猿かな」新撰六帖第二猿歌に爲家「時雨行秋の木末のこのはさる我色かほにをしてみてそなく」○藻鹽草十一卷六に木のは猿云々○能勢猿草子に御むかひに馬のりもの木葉猿ぞもおびたしくつかはし給ふ云々○興清曰木葉猿は小猿などいふほどの事にてその軽き躰をいへる也木葉天狗諸國里木葉杳夫木抄雜木葉大安寺私財帳群木葉十四香歌木葉香類從本九丁右などの類或はその輕小なるにより或は其形に据て木葉とおほせしなり

(八十)「世にあるもの」世にあり顔「世になしもの」  
 「世さまもわびしからず」築島草子にかく淺ましき修行の身にて世にありがほに古里を申べきには候はねど云々○横笛草子に世になし者にあひなれ身をいたづらになす事こそ口をしけれ云々○さかき草子は此女房は世にある人にて禁中さまへもだい／＼さんらうかんと參らせ給ひけるほごに云々○十番切草子に二の宮のむこは世になきこじうとにくみし一所懸命失はじとよも申さじと存じしらす事も候はず云云○堀川夜打草子にはよになきものうつ太刀がよにある人の御身にたつやたぬや云々○古今著聞集十六卷卅四世さまもわびしからずぞ侍ける云々○和田酒盛草子に世になしもの十郎とちぎりをこめ云々○鳥帽子折草子上一丁きち次世にありがほなるふせいにてすゆんの杯くだしぎやくの杯とらせければ云々又十二吉次世にあり顔なるふせいにて云々○元服會我草子九丁に我々兄弟が世になしものにてあるあひだ北條がいやしめてゑほしをさせしそのために扱は扱はおそく見ゆるか云々○高館草子卅七に世になき主のかたうどしてうたれぬこそむざんな

れ云々○切かね會我草子十五に助近が世になしものをむこにとり孫をまうくる物ならば老のくげんに細か／＼りうき目を見んこそ悲しけれ  
 (八十一)人の上に吹風わが身にあたる 築島草子に淨海つく／＼と御らんじて不便とやおぼしめされけん祇王をめして仰けるはやあ人のうへに吹風わが身にあたらぬ事やあるいかに心づよくともなどあの女があはれをとふて得させぬぞと仰出されたりければ云々  
 (八十二)大願むなしからず 築島草子に傳へきくにしへの大せ太子はかたじけなくも如意の玉をさらんとてゑいしのかひをもつてきよつかいをはかりつくし終にほうしゆ得たまへり大願としては又終に空しき事あらじ云々按に目足の行とて目に見て行るべき所は足もて行到ユキイカガべし願望も道理にあたれる願は必空からず邪なる願はいかに心をくだくともかひはあらじ  
 (八十三)たくらた 武相の方言に愚人を大ばかのたくらたといへりばかはばけ也ばけ／＼しき義也たくらたは語意未詳物草太郎草子にこれほどのたくらた

はなしと思ひて云々○西明寺百首「たくらたと人を思ひてあなつれば猶たくらたと我を成ぬる」中明寺百首「道すからばかたくらたを見ぬのみそ佛詣をせぬ利生なりける」此卷百卅一段にし右  
 (八十四)紙一帖をひとかさねといふ 物草太郎草子に紙一かさねを竹にはさみ云々又かみを十かさねばかり出されたり云々  
 (八十五)ちくらが沖 鎌足草子に日本と唐土のしほざかひちくらが沖にちんをとるまんこが舟をぞまちなたり云々百合若草子八丁に唐と日本のしほざかひちくらがおきにちんをさる云々  
 (八十六)そろり 大職冠草子にるすの間をうかつてそろりと入てぬすみとつてやあたへかしとぞおほせける云々  
 (八十七)福酒 靜草子に酒をあいする人をばふくしゆと是を名づけのむ事をゆるしうりかふ事をいまいめり云々  
 (八十八)かほに紅葉をちらす 景清草子上卷十八にあこわうあまりのふしぎさにいやさもないものど申てかほにもみちをひきちらす云々伏見常盤草子に和



泉の國の女房としを申せば十八歳にまかりなるかほにもみぢをちらしてうたひかねつゝ打うつぶいてゐたりけり云々

(八十九) 黨と高家の差別 景清草子上卷廿二にたうかかうけか名字を承て打死を仕らん云々太平記十一丁長崎次郎高重最後合戦の條に武藏國ノ住人横山太郎重真云々同國ノ住人庄三郎爲久是ヲ見テヨキ敵也ト思ケレバ續テ是ニ組ントス大手ヲハダケテ馳懸ル長崎遙ニ見テカラノト打笑テ黨ノ者共ニ可レ組ハ横山ヲモ何カハ可レ嫌云々國書黨ノ字ノ義論諸君子亦トイヘル注ニ見ユ

(九十) 大がしら 田村草子下十八におほたけ丸が首をば末代のつたへにとて宇治の寶藏にをさめ千もとのおほがしらと申て今の世までもみこしのさきに渡るは此大たけ丸がくびなり云々

(九十一) 小しやくと云詞 俗にえうなきさし出どするを「コシヤク」といへり「コシヤク」は小ザカにてござかしきといふを略したる訛語也古語にござかしともさかしらするともいへる皆今の「コシヤク」にあたり

(九十二) ヒエテふえて 神武紀の御歌にコキダヒエ道「蜀書八卷秦密傳の密報ニ李權一書に天地貞觀日月貞明其直如矢五丁といへる語引注すべし

(九十五) 「來經」氣長く「長きけ」こよみ「日」古事記中卷に美夜受比賣歌に新玉の年が來ふればあら玉の月は來經ゆく云々万葉十五にあら玉の月日も來經ぬ云々こは年月の來つゝ經行よし也万葉にけながくおもほゆるなごよめるも年月日の長きよしにて來經を約て氣といへる也長きけといふも年月日の長きといふ心也曆を古余美といひ又日敷をよみて幾加といふ古も加も氣の通音也眞曆考を閱て知べし

(九十六) 朔 望 晦 朔を「ツイタチ」といふは月の立昇よりいへり天智紀十年十一月癸卯條に月立二日沙門道文從唐來曰云々万葉六に月立而直三日月之云々また同六に正月立云々ついたらちごろなど月の立初る日より十日までの間をばついたらちといへり十五日を望といふは月の満たるよしにて持の義にあらす伊勢物語に其比みな月のもちばかりなりければとあるは六月中旬といへるほどの心也万葉三に六月十五日に消ぬればとよめるは十五日に限れる詞也つごもりは月隠にて下旬の月のやうく隠ゆく比をいふつ

キとある注に古事記傳に禮記の語ヒエナといへるなごこれ彼引ていへり續古事談二卷群書類從本上卷四十八丁左に閑院ノ大將ハ銀ノ鯉ノ腹ノ中ニコナマスフエコミヲリヒツニ入テ納ラレタリ云々此は鯉の子あえ給を作り籠たるをいへるにて子給コナマスフエ籠の義也フエとヒエは通音也肉を作りてさし身給やうにするをヒエともフエともいへる也

(九十三) くつめきの病 小兒の咳病を俗に「クツメキ」といへり宇治拾遺物語十卷十六丁左藏人頓死語に臺盤に額をあてゝのどをくつゝとくつめくやうにならせば云々とあり痰咳にて喉のクツゝと鳴病なれば「クツメキ」とはよべる也けり砂石集三上卷右一丁癲狂人之利口事條に或里ニ癲狂ノ病有ル男アリケリ此病ハ火ノ邊水ノ邊人ノ多カル中ニシテ發ル心ツキ病也俗ハ「クツチ」ト云ヘリ云々とある「クツチ」も近くかよひてきこゆ蛸蟻くつゝとくつめかして聲を立ればなり其鳴始るをりくつゝとくつめかして聲を立ればなり

(九十四) 直如矢 余がはやくよめる歌に「そりま月おしてはるかに放つ矢の矢すち正しきものゝふの

ごもりがたなごもいへりさてついたらちのひつごもりのひといへば朔日晦日の事なれどたつついたらちもちつごもりとのみいへば上旬中旬下旬の事と知べし古今春下業平歌詞書にやよひのつごもりと有て歌には「春はいくかもあらじと思へば」とよみ蜻蛉日記につごもりになりぬれど人はうの花のかげにも見えず廿八日にぞ云々榮花物語若水の巻についたらちもすぎゆけば云々十日のひるつかた云々鳥部野の巻に十二月廿二日の事をつごもりに成ぬれば云々狹衣につごもりに成ぬれば云々霧ふたがりて月もさやかならず云云これらもつごもりは卅日にかざらぬ證也眞曆考に見ゆ

(九十七) 三正 般の正月は今の十二月也周の正月は今の十一月也伏羲の太昊甲子曆より夏の末までは今の正月におなじこれを三正といふ秦の代改て今の十月を正月とし漢の武帝の代までこれを改めず

(九十八) 制の詞 制の詞の事は何くれの所見おほし戸田茂暉が梨下集に論破せりこは井蛙抄三の卷一丁に代々宗匠不庶幾之由被申たる詞ども有或は優美ならざるにより或は義理のたがひたるにより或は